

桑原地区の遺跡Ⅲ

経石山古墳 2次・枝松 5次
樽味高木 4次・桑原田中 3次・畑寺 6号墳

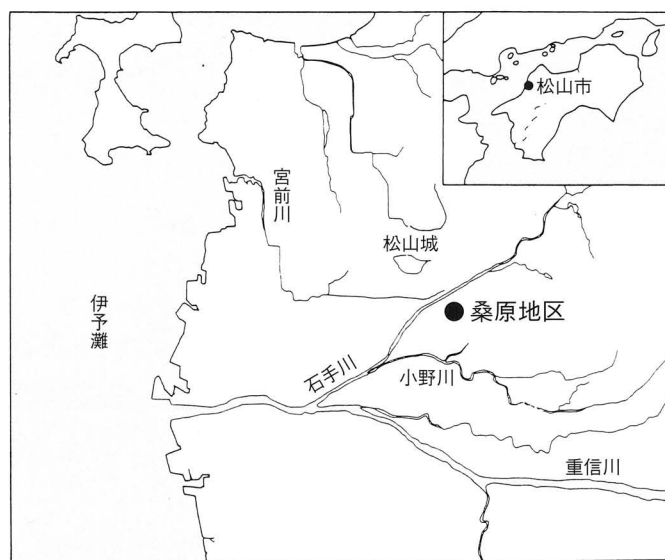
1997

松山市教育委員会
財団法人松山市生涯学習振興財団
埋蔵文化財センター

クワ バラ

桑原地区の遺跡Ⅲ

経石山古墳 2次・枝松 5次
樽味高木 4次・桑原田中 3次・畑寺 6号墳

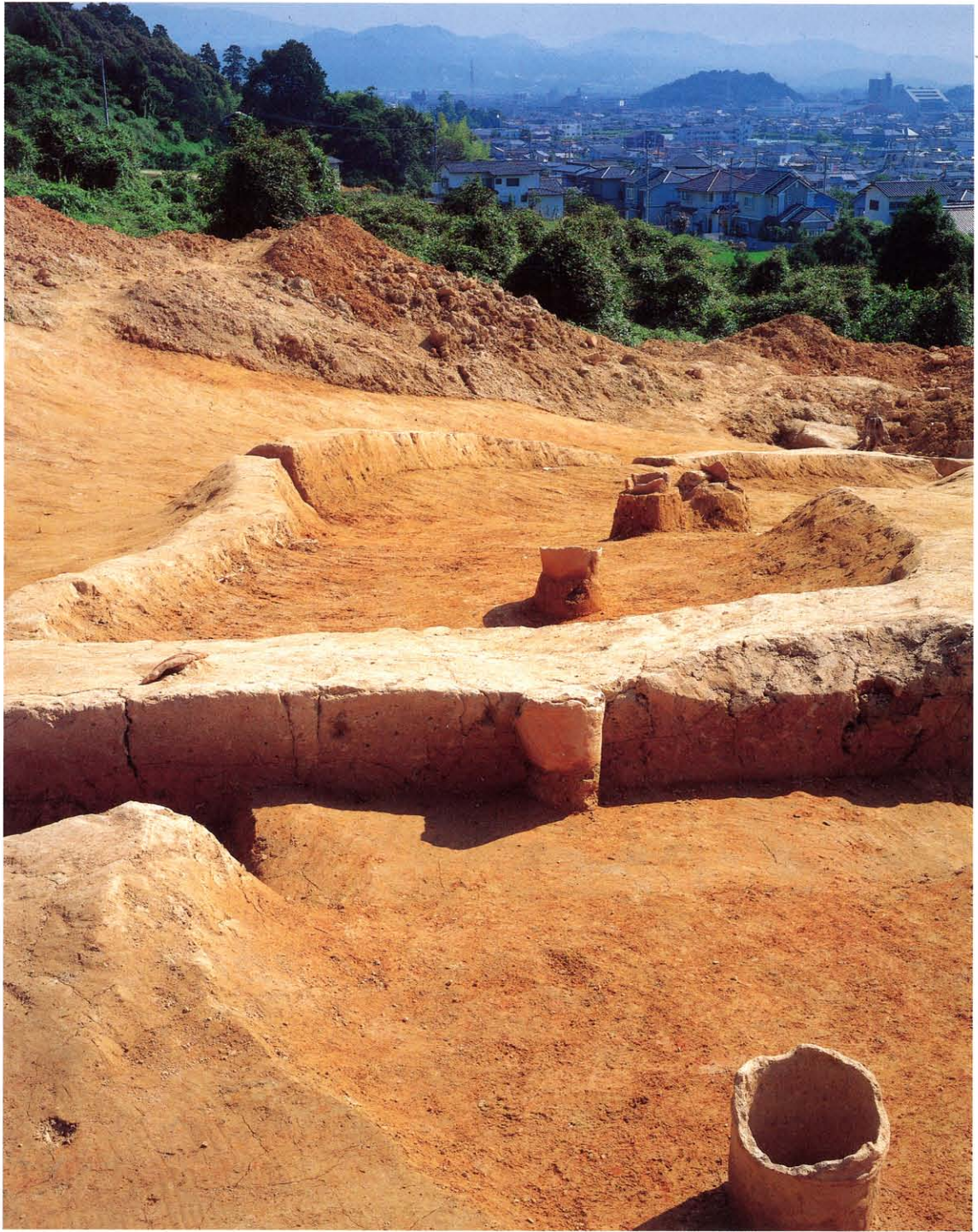


1997

松山市教育委員会

財団法人松山市生涯学習振興財団

埋蔵文化財センター



巻頭図版 畑寺6号墳埴輪出土状況（北より）

序

松山平野の中央を西流する石手川の南岸に位置する桑原地区の遺跡群は、近年の急増する宅地開発に伴う事前調査によって、古代における当地域の特性が次第に明らかになってきました。

本報告書は、平成6年度から同8年度にかけて松山市教育委員会文化教育課と財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターが桑原地区において緊急発掘調査した5遺跡についての調査報告書です。

今回報告します経石山古墳2次調査では、県指定有形文化財として周知の経石山古墳（前方後円墳）の周溝を検出し、枝松遺跡5次調査からは弥生時代から近世にかけての集落関連遺構や、23,000年前の火山灰の堆積層を確認しました。また、樽味高木4次調査では、弥生時代後期に線刻された土器片を出土、畑寺6号墳からは円形に配された埴輪列を検出する等、数多くの遺構・遺物を記録にとめることができ、後世に伝える新たな資料を作成することができました。

こうした成果をあげることができましたのも、市民の皆さまの埋蔵文化財に対する深いご理解とご協力のお陰と感謝いたしております。今後ともなお一層のご指導、ご助言を賜われますようよろしくお願い申し上げます。

また、本書が埋蔵文化財調査研究の一助となり、ひいては文化財保護、教育文化の向上に寄与できることと願っております。

平成9年3月21日

財団法人 松山市生涯学習振興財団
理事長 田 中 誠 一

例 言

1. 本書は、松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターが平成6年5月～平成8年7月の間に松山市桑原4丁目410-3、松山市枝松4丁目242番1・2、松山市樽味2丁目278-1・5、松山市桑原5丁目559-2・4、松山市畑寺丙1-1他8筆で実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 遺物の実測・製図および遺構の製図は、担当調査員の指導のもと、山邊進也、篠崎正記、向井大作、藤本数夫、渡部大介、永木俊彦、森脇信介、村上真由美、木下奈緒美、岩本美保、岡本邦栄、金子育代、高尾久子、仙波千秋、仙波ミリ子、宮田里美、猪野美喜子、乗松和枝、藤田美恵子、真木雅子が行った。
3. 遺構は呼称を略号で記述した。竪穴式住居址：SB、溝：SD、土坑：SK、自然流路：SR、柵列：SA、柱穴：SP、井戸：SE、性格不明遺構：SXとし、近世の遺構は番号の頭に0を付け01、02とした。
4. 遺構図・遺物図の縮尺は、縮分値をスケール下に記した。
5. 本書に使用した方位は磁北と真北である。
6. 報告中の土層名には、一部に『新版 標準土色帖』（日本色研事業株式会社発行）を使用したものがある。
7. 本書にかかわる遺物・記録類は、松山市立埋蔵文化財センターで保管している。
8. 本書の執筆は、河野史知、武正良浩、水本完児、梅木謙一が分担執筆し、田城武志、大西朋子、水口あをいの協力を得た。
9. 報告書作成においては、愛媛大学法文学部村上恭通先生から御指導と御教示を賜った。記して感謝申し上げます。
10. 写真図版は、担当調査員の指示のもと、遺物の撮影及び図版作成は大西朋子が行った。
11. 編集は河野史知が行った。

本文目次

第1章	はじめに	〔河野〕	1	
	1. 調査に至る経緯	2. 調査・刊行組織	3. 環境	
第2章	経石山古墳2次調査地	〔河野〕	9	
	1. 調査の経過	2. 層位	3. 遺構と遺物	4. 小結
第3章	枝松遺跡5次調査地	〔河野〕	25	
	1. 調査の経過	2. 層位	3. 遺構と遺物	4. 小結
第4章	樽味高木遺跡4次調査地	〔河野〕	49	
	1. 調査の経過	2. 層位	3. 遺構と遺物	4. 小結
第5章	桑原田中3次調査地	〔武正〕	81	
	1. 調査の経過	2. 層位	3. 遺構と遺物	4. 小結
第6章	畑寺6号墳	〔水本〕	99	
	1. 調査の経過	2. 層位	3. 遺構と遺物	4. 小結
第7章	考察：伊予における弥生時代の周溝状遺構	〔梅木〕	121	
第8章	調査の成果と課題	〔河野〕	127	

挿 図 目 次

第1章 はじめに

第1図	松山平野の地質図（縮尺1/100,000）	3
第2図	松山平野の主要遺跡分布図（縮尺1/100,000）	5
第3図	桑原地区の主要遺跡分布図（縮尺1/25,000）	6

第2章 経石山古墳2次調査地

第4図	調査地位置図（1）（縮尺1/2,500）	10
第5図	調査地位置図（2）（縮尺1/500）	11
第6図	基本土層図（縮尺1/30）	13
第7図	遺構配置図（縮尺1/50）	15
第8図	周溝内出土遺物実測図（縮尺1/3）	16
第9図	第IV層出土遺物実測図（縮尺1/3）	16
第10図	S D 1 測量図（縮尺1/20）	17
第11図	S D 1 出土遺物実測図（縮尺1/3）	17
第12図	S K 1 測量図（縮尺1/20）	18
第13図	S K 1 出土遺物実測図（縮尺1/4・1/3）	19
第14図	S P 1・2 測量図（縮尺1/20）	19

第3章 枝松遺跡5次調査地

第15図	調査地位置図（1）（縮尺1/2,500）	26
第16図	調査地位置図（2）（縮尺1/500）	27
第17図	調査地区割図（縮尺1/300）	28
第18図	西・北壁土層図（縮尺1/60）	29
第19図	遺構配置図（縮尺1/100）	31
第20図	S B 1 測量図（縮尺1/50）	33
第21図	S B 1 出土遺物実測図（縮尺1/4）	34
第22図	円形周溝状遺構測量図（縮尺1/50）	35
第23図	円形周溝状遺構出土遺物実測図（縮尺1/4）	36
第24図	S E 0 1 測量図（縮尺1/20）	37
第25図	S E 0 1 出土遺物実測図（縮尺1/4・1/3）	38
第26図	S D 0 1. 0 2 出土遺物実測図（縮尺1/3）	38
第27図	S K 0 4 測量図（縮尺1/20）	39
第28図	S K 0 4 出土遺物実測図（縮尺1/3）	39
第29図	S K 0 1 0 測量図（縮尺1/30）	40
第30図	採掘坑1出土遺物実測図（縮尺1/3）	40
第31図	採掘坑3. 4出土遺物実測図（縮尺1/3）	42

第4章 樽味高木遺跡4次調査地

第32図	調査地位置図 (縮尺1/2,500)	50
第33図	調査地区割図 (縮尺1/200)	51
第34図	深掘りトレンチ層位図 (1) (縮尺1/30)	52
第35図	東・西壁層位図 (2) (縮尺1/30)	53
第36図	北壁層位図 (3) (縮尺1/30)	55
第37図	古墳時代の遺構配置図 (縮尺1/120)	57
第38図	古代遺構配置図 (縮尺1/120)	58
第39図	近世遺構配置図 (縮尺1/120)	59
第40図	S K 1 測量図 (縮尺1/30)	60
第41図	S K 1 出土遺物実測図 (縮尺1/4)	60
第42図	S K 2 測量図 (縮尺1/30)	61
第43図	S K 2 出土遺物実測図 (縮尺1/2)	62
第44図	S K 3 測量図 (縮尺1/40)	63
第45図	S K 3 出土遺物実測図 (縮尺1/3・1/1)	64
第46図	S R 1・2 礫出土状況 (縮尺1/100)	64
第47図	S R 1 出土遺物実測図 (縮尺1/3)	65
第48図	S R 2 出土遺物実測図 (縮尺1/4・1/3)	66
第49図	S R 3 測量図 (縮尺1/100)	68
第50図	S R 3 出土遺物実測図 (縮尺1/3・1/2)	69
第51図	S A 0 1・S D 0 1 測量図 (縮尺1/80)	70
第52図	S X 0 1 緋銭出土状況 (縮尺1/1)	70
第53図	S X 0 1 測量図 (縮尺1/40)	71
第54図	S X 0 1 出土遺物実測図 (縮尺1/4・1/3)	71
第55図	S X 0 1 出土銭拓本 (縮尺1/1)	72

第5章 桑原田中遺跡3次調査地

第56図	調査地位置図 (縮尺1/2,000)	82
第57図	調査地測量図 (縮尺1/600)	83
第58図	調査区南・東壁土層図 (縮尺1/40)	84
第59図	遺構配置図 (縮尺1/150)	85
第60図	1号掘立出土銭拓影 (縮尺1/1)	86
第61図	1号掘立測量図 (縮尺1/50)	87
第62図	S K 7 測量図 (縮尺1/20)	88
第63図	S K 7 出土遺物実測図 (縮尺1/3)	89
第64図	S K 8・9 測量図 (縮尺1/20)	89
第65図	S K 8・9 出土遺物実測図 (縮尺1/3)	90
第66図	S K 1 0 測量図 (縮尺1/20)	90
第67図	S K 1 0 出土遺物実測図 (縮尺1/3)	90

第68図	柱穴出土遺物実測図（縮尺1/3）	91
第69図	層不明出土遺物実測図（縮尺1/3）	92
第6章 畑寺6号墳		
第70図	調査地位置図（縮尺1/2,500）	100
第71図	調査地測量図・試掘トレンチ位置図（縮尺1/1,000）	101
第72図	調査前地形測量図（縮尺1/300）	102
第73図	墳丘測量図（縮尺1/300）	103
第74図	遺構配置図（縮尺1/200）	104
第75図	東西トレンチ土層図（縮尺1/40）	105
第76図	南北トレンチ土層図（縮尺1/40）	107
第77図	円筒埴輪配置図（縮尺1/200）	109
第78図	盛土出土遺物実測図(1)（縮尺1/4）	113
第79図	盛土出土遺物実測図(2)（縮尺1/4）	114
第80図	S X 1 測量図（縮尺1/20）	115
第81図	出土遺物実測図（縮尺1/3）	116
第82図	試掘トレンチ出土遺物実測図（縮尺1/2）	117
第7章 考察：伊予における弥生時代の周溝状遺構		
第83図	文京3次S X 1・10次S X 1 4 遺物出土状況（縮尺1/10・1/80）	123
第84図	伊予の弥生時代の周溝状遺構（縮尺1/200）	124

表 目 次

第1章 はじめに		
表1	調査地一覧	1
第2章 経石山古墳2次調査地		
表2	土坑一覧	21
表3	周溝内出土遺物観察表（土製品）	21
表4	第IV層出土遺物観察表（土製品）	22
表5	S D 1 出土遺物観察表（土製品）	22
表6	S K 1 出土遺物観察表（土製品）	22
表7	S K 1 出土遺物観察表（石製品）	22
第3章 枝松遺跡5次調査地		
表8	竪穴式住居址一覧	44
表9	土坑一覧	44
表10	溝一覧	44
表11	S B 1 出土遺物観察表（土製品）	44
表12	円形周溝状遺構出土遺物観察表（土製品）	45

表13	S E 0 1 出土遺物観察表 (軒丸瓦)	45
表14	S E 0 1 出土遺物観察表 (土製品)	45
表15	S D 0 1・0 2 出土遺物観察表 (土製品)	45
表16	S K 0 4 出土遺物観察表 (土製品)	46
表17	採掘坑1・3・4 出土遺物観察表 (土製品)	46

第4章 樽味高木遺跡4次調査地

表18	土坑一覧	74
表19	溝一覧	74
表20	S K 1 出土遺物観察表 (土製品)	74
表21	S K 2 出土遺物観察表 (石製品)	74
表22	S K 3 出土遺物観察表 (土製品)	75
表23	S K 3 出土遺物観察表 (ガラス製品)	75
表24	S R 1 出土遺物観察表 (土製品)	75
表25	S R 2 出土遺物観察表 (土製品)	76
表26	S R 3 出土遺物観察表 (土製品)	77
表27	S R 3 出土遺物観察表 (鉄製品)	78
表28	S X 01 出土遺物観察表 (土製品)	78
表29	S X 01 出土遺物観察表 (銭貨)	78

第5章 桑原田中3次調査地

表30	掘立柱建物址一覧	94
表31	土坑一覧	94
表32	溝一覧	95
表33	1号掘立出土遺物観察表 (銭貨)	95
表34	S K 7 出土遺物観察表 (土製品)	95
表35	S K 8 出土遺物観察表 (土製品)	95
表36	S K 9 出土遺物観察表 (土製品)	95
表37	S K 1 0 出土遺物観察表 (土製品)	95
表38	柱穴出土遺物観察表 (土製品)	96
表39	層不明出土遺物観察表 (土製品)	96

第6章 畑寺6号墳

表40	盛土出土遺物観察表 (土製品)	119
表41	周溝出土遺物観察表 (土製品)	119
表42	東西トレンチ出土遺物観察表 (土製品)	120
表43	試掘トレンチ出土遺物観察表 (石製品)	120

第7章 考察：伊予における弥生時代の周溝状遺構

表44	伊予の弥生時代周溝状遺構一覧	126
-----	----------------	-----

図版目次

- 図版1 1. 調査前の状況(西より)
2. SD1 検出状況(東より)
- 図版2 1. SD1 (北より)
2. 周溝検出状況・南壁土層(北東より)
- 図版3 1. 遺構完掘状況(北東より)
- 図版4 1. 遺構完掘状況(東より)
2. 南壁土層(北東より)
- 図版5 1. SK1 (東より)
2. SP1・2 (北より)
- 図版6 1. 調査地遠景(南西より)
2. 調査前全景(南西より)
- 図版7 1. 南部遺構検出状況(南西より)
2. 南部遺構完掘状況(北より)
- 図版8 1. 北西部遺構検出状況(南より)
2. 北西部遺構完掘状況(南より)
- 図版9 1. 北東部遺構検出状況(西より)
2. 北西部遺構完掘状況(南より)
- 図版10 1. SB1・円形周溝状遺構(真上より)
2. SB1・周溝1(西より)
- 図版11 1. SB1 (南より)
2. 円形周溝状遺構遺物出土状況(東より)
- 図版12 1. SE01 礫埋没状況(西より)
2. SE01 完掘状況(南東より)
- 図版13 1. SK04 礫出土状況(北東より)
2. SK010 (北より)
- 図版14 1. SK010 (東より)
2. 作業風景(南東より)
- 図版15 1. SB1 出土遺物
2. 周溝1 出土遺物
- 図版16 1. SE01 出土遺物
2. SK04 出土遺物
- 図版17 1. SD01 出土遺物
2. 採掘坑1 出土遺物
3. 採掘坑3・4 出土遺物
- 図版18 1. 調査前の状況(南より)
2. 重機による表土剥ぎ取り状況(北西より)
- 図版19 1. 近世の遺構検出状況(南より)
2. 近世の遺構完掘状況(南より)
- 図版20 1. SX01 礫出土状況(東より)
2. SX01 縹銭出土状況(西より)
- 図版21 1. SA01 (東より)
2. SE01 (北東より)
- 図版22 1. SR1・2 礫出土状況(南より)
2. SR1 礫出土状況(北東より)
- 図版23 1. 古墳～古代の遺構完掘状況(東より)
2. 古墳～古代の遺構完掘状況(北東より)
- 図版24 1. 古墳～古代の遺構完掘状況(南東より)
2. SK1 (南東より)
- 図版25 1. SK2 礫出土状況(東より)
2. SK7 (東より)
- 図版26 1. SX1 (東より)
2. 作業風景(南より)
- 図版27 1. SK1 出土遺物
2. SK2 出土遺物
3. SK3 出土遺物
4. SR1 出土遺物
- 図版28 1. SR2 出土遺物
2. SR3 出土遺物
- 図版29 1. SX01 出土遺物
- 図版30 1. 完掘状況(北より)
- 図版31 1. 調査区南側完掘状況(北より)
2. 1号掘立(西より)
- 図版32 1. SK出土遺物(SK7・8・9・10)
- 図版33 1. 調査地遠景(西より)
2. 墳丘検出状況(北より)
- 図版34 1. 埴輪出土状況(南より)
- 図版35 1. 墳丘完掘・盛土掘り下げ状況(北より)
2. 東西トレンチ土層(東より)
- 図版36 1. 南北トレンチ土層(北東より)
2. 南北トレンチ土層(南東より)
- 図版37 1. 盛土上遺物出土状況(南西より)
2. SX1 検出状況(南西より)
- 図版38 1. SX1 礫出土状況(南より)
2. SX1 (南より)
- 図版39 1. 盛土上出土遺物
- 図版40 1. 盛土・周溝・トレンチ出土遺物

第1章 はじめに

1. 調査に至る経緯

平成6～8年に、松山市桑原4・5丁目、松山市枝松4丁目、松山市樽味2丁目、松山市畑寺町の5ヶ所について埋蔵文化財の確認願いが松山市教育委員会文化教育課（以下、文化教育課）に提出された（表1）。

確認願いが申請された桑原4丁目410-3は松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地『84 経石山古墳』、枝松4丁目242番1・2は『83 枝松遺物包含地』、樽味2丁目278-1・5は『81 樽味遺物包含地』、桑原5丁目559-2・4は『82 東本遺物包含地』、畑寺町丙1－1他8筆は『87 畑寺古墳群』にある。

『84 経石山古墳』内には、経石山古墳がある。平成2年の1次調査では、後円部の北東部にあたる周溝が検出され、本墳との関連を窺わせる鉄器類も出土している。

『83 枝松遺物包含地』内には東本遺跡があり、A T火山灰やアカホヤ火山灰の堆積が確認されている。また、弥生時代後期の集落関連遺構と遺物を検出している。

『81 樽味遺物包含地』内には、樽味立添遺跡、樽味高木遺跡、樽味四反地遺跡があり、弥生時代から中世までの集落が明らかになっている（梅木謙一1992）。

『87 畑寺古墳群』内では畑寺竹ヶ谷古墳群があり、周溝内より須恵器や直刀が出土している。

文化教育課では、確認願いが申請された5地点について埋蔵文化財の有無と、遺跡の範囲やその性格を確認するために、順次試掘調査を実施した。試掘調査の結果、各地で弥生時代から近世までの遺構、遺物、包含層を確認した。

試掘調査の結果を受け、文化教育課と申請者及び関係者は、遺跡の取扱いについて協議を行った。協議の結果、遺跡が消失する地点に対し、桑原地区における弥生時代及び古墳時代の集落構造解明と、経石山古墳の範囲確認を主目的とした緊急調査を実施するものとした。

調査は文化教育課の指導のもと、(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターが主体となり、申請者ならびに関係各位の協力のもと、平成6年度から平成8年度の間に行われた。

表1 調査地一覧

遺 跡 名	所 在	面 積 (㎡)	期 間
経石山古墳 (2次)	桑原4丁目410-3	364	平成6年5月17日～同年6月2日
枝松遺跡 (5次)	枝松4丁目242番1・2	546	平成6年11月22日～平成7年1月19日
樽味高木遺跡 (4次)	樽味2丁目278番1・5	462	平成7年10月11日～同年12月11日
桑原田中遺跡 (3次)	桑原5丁目559番2・4	896	平成7年11月10日～平成8年1月12日
畑寺6号墳	畑寺町丙1－1他8筆	9,717	平成8年6月3日～平成8年7月15日

2. 刊行組織〔平成9年3月21日現在〕

松山市教育委員会	教 育 長	池田 尚郷
生涯教育部	部 長	三好 俊彦
	次 長	丹下 正勝
文化教育課	課 長	松平 泰定
(財)松山市生涯学習振興財団	理 事 長	田中 誠一
	事務局長	池田 秀雄
	事務局長次長	丹下 正勝
埋蔵文化財センター	所 長	河口 雄三
	次 長	田所 延行
	調査係長	田城 武志
	調査主任	栗田 正芳 (文化教育課職員)
	調 査 員	河野 史知
		相原 浩二
		水本 完児
		武正 良浩

3. 環 境

(1) 遺跡の立地

松山平野は、愛媛県のほぼ中央部に位置し、伊予灘と斎灘に面し、南東部には石鎚山系、北部には高縄山系が聳える。松山平野中央部から東部には、一級河川の重信川とその支流である石手川が流れている。二つの河川は、高縄山地と石鎚山に水源を発し、開析谷を形成しながら平野を流れ、平野西部で石手川が重信川に合流した後、西方の伊予灘に流出する。よって、平野西部で扇状地堆積物や氾濫源堆積物、三角州堆積物等から形成されている。

本遺跡群の所在する松山市桑原地区は、石手川がつくる扇状地の扇央、標高20～50mに立地しており、樽味遺跡(愛媛大学農学部)をはじめとして弥生時代から中世に至る遺跡が数多く存在している。

(2) 歴史的環境 (第2図)

本遺跡周辺には、樽味遺跡をはじめとして数多くの遺跡が存在している。主な遺跡についてその概要を時代別にまとめる。

旧石器時代

松山平野においては、旧石器時代の明確な遺構は確認されてない。ただし、樽味遺跡、樽味四反地遺跡には、ポケット状に堆積したA T火山灰(23,000年前)が確認され、東本遺跡(4次)にはA T火山灰一次堆積層が確認されている。

縄文時代

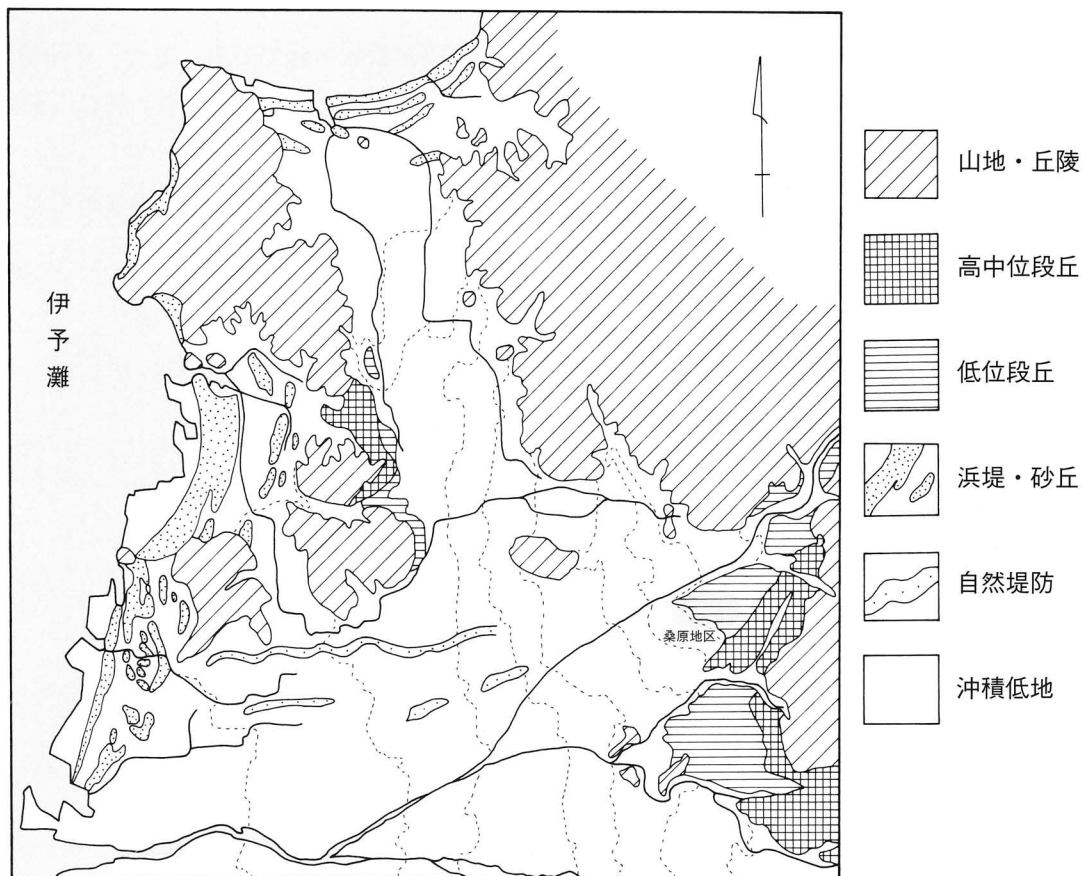
東本遺跡（4次）からは、アカホヤ火山灰（6,300年前）の堆積が確認され、堆積層直上からは槍先形石器、石鏃、スクレイパーなどの石器類が出土している。

縄文時代から弥生時代には、樽味遺跡において弥生時代前期前半の溝SD4と、それに続く時期の貯蔵穴土坑SK5が確認されている。報告には、出土資料は平野北部や道後城北遺跡で確認されている縄文時代晩期土器からの系譜を追うことができると指摘されている〔宮本一夫1989a〕。

弥生時代

弥生時代の遺跡には、桑原高井遺跡、東本遺跡をはじめとして、桑原田中遺跡、桑原稲葉遺跡、樽味四反地遺跡、樽味立添遺跡、樽味高木遺跡などがあり、当時の集落構造や住居形態などが解明されつつある。桑原高井遺跡では竪穴式住居址5棟のほか、集落関連遺構と遺物が検出されている。住居址には円形と方形の2種類があり、壁体に沿って周溝が巡る。特に2号住居址は、平面形が六角形を思わせるような円形で、柱穴は中心部に1本と壁体に沿って6本の計7本からなり、ベット状施設を付設している。〔森光晴1980〕

東本遺跡2次調査地では、竪穴式住居址2棟、掘立柱建物址、土坑等が検出されている〔森光晴1980〕。4次調査においては、一辺が6mをこえる方形の大型住居址や、直径が9mをこえる周堤帯を



第1図 松山平野の地質図 (S = 1 : 100,000)

伴う円形の大型住居址が検出されている。さらに円形の大型住居址からは青銅鏡が出土している。

このほか、樽味立添遺跡では包含層中より『貨泉』が出土している。また、樽味高木遺跡3次調査では船を描いた線刻画土器が出土しており、古代の船舶構造を考えるうえでの重要な資料である。

古墳時代

古墳時代では、樽味遺跡から十数棟の竪穴式住居址と掘立柱建物址が検出されており、樽味高木遺跡からは5号竪穴式住居址と土坑SK5より5世紀代の甕形土器・壺形土器・高坏形土器などが出土している。また、桑原本郷遺跡では、5世紀後半の方形竪穴式住居や掘立柱建物址が検出され、さらには滑石製の白玉100点余りが須恵器と共に出土している〔栗田茂敏1987〕。

さて、この地区には、2基の前方後円墳の存在が古くから知られている。経石山古墳は、全長48.5mの前方後円墳で、5世紀末に比定されている〔森光晴1986〕。三島神社古墳は、経石山古墳の東約300mの地点に存在していたが、昭和46年の宅地造成により消滅した。報告によると、初期畿内型の横穴式石室を内部主体に持つ全長約45mの前方後円墳であり、出土遺物から6世紀初頭に比定されている〔森光晴1986〕。

さらに、桑原地区の東側丘陵部には、東野お茶屋台古墳群と畑寺竹ノ谷古墳群が存在する。東野お茶屋台古墳群では、3基の周溝から5世紀後半の須恵器が出土し、畑寺竹ノ谷古墳群においても周溝内から須恵器や直刀が出土している。

古代・中世

樽味四反地遺跡では10世紀代に比定される溝SD1・SD3が検出されている。また、樽味遺跡SD1・SD2からは14世紀後半、SD3・SK5からは15世紀代の土師器が出土している。特に、樽味遺跡SD1は、集落境界の溝として位置づけられている〔宮本一夫1989〕。

中世後期の松山平野は河野氏の統治下にあり、湯築城を本拠地としている。この湯築城の近くに位置する桑原地区は河野氏の勢力が強く及んでいたことが考えられる〔田崎博之1993〕。

〔文献〕

- 梅木謙一 1992 『桑原地区の遺跡』（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
1994 『桑原地区の遺跡Ⅰ』（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
宮本一夫 1989 『鷹子・樽味遺跡の調査』愛媛大学埋蔵文化財研究室
田崎博之 1993 『樽味遺跡Ⅱ』愛媛大学埋蔵文化財研究室
岸郁男・長井数秋・大山正風 1973 『釜ノ口遺跡調査報告書』松山市教育委員会

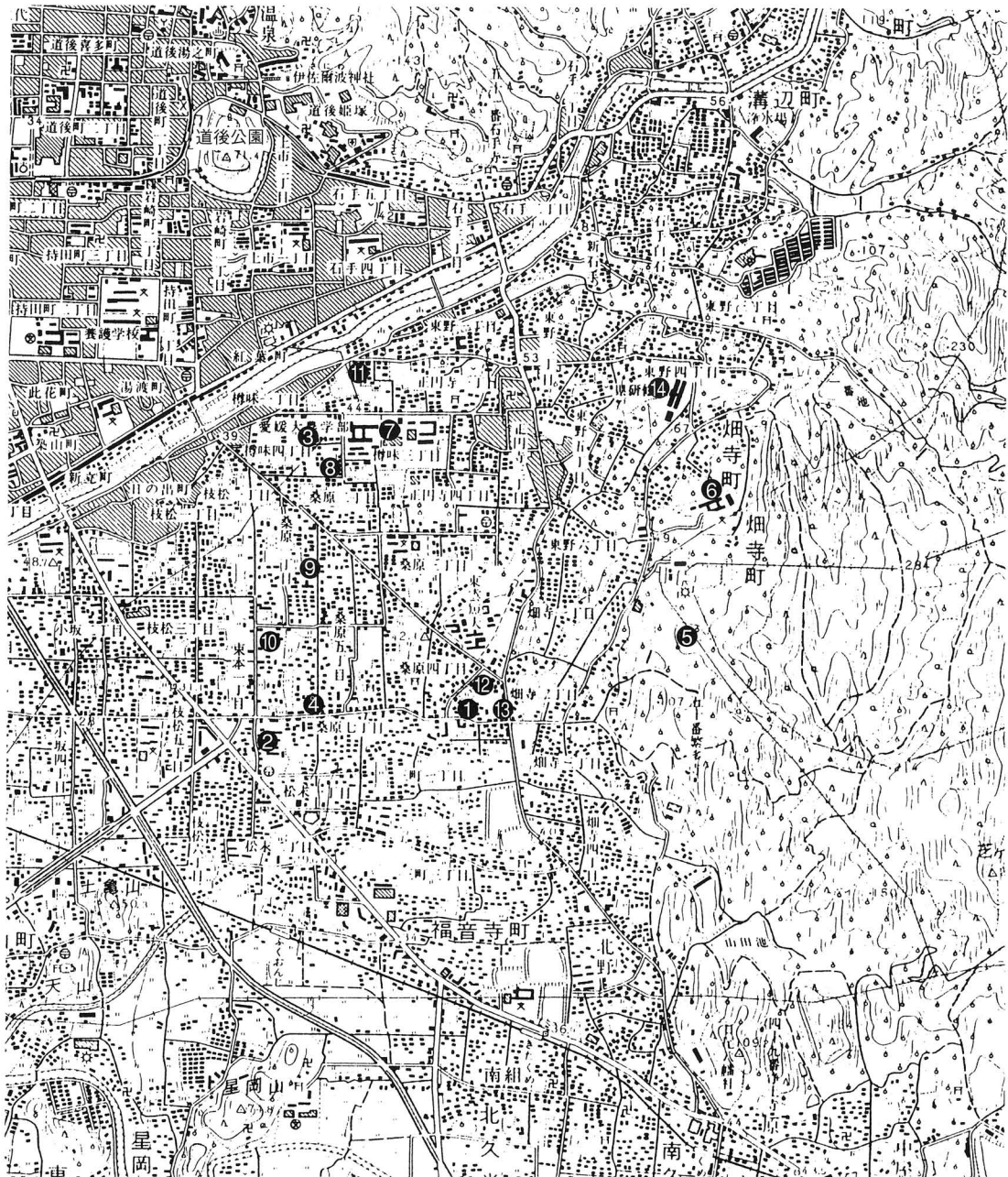


伊予灘

(S = 1 : 100,000)

- A 大湫遺跡 ● B 古照遺跡 ● C 祝谷六丁場遺跡 ● D 文京遺跡 (愛媛大学)
- E 道後湯築城址 ● F 三島神社古墳 ● G 東本遺跡 ● H 福音寺遺跡 ● I 来住廃寺

第2図 松山平野の主要遺跡分布図



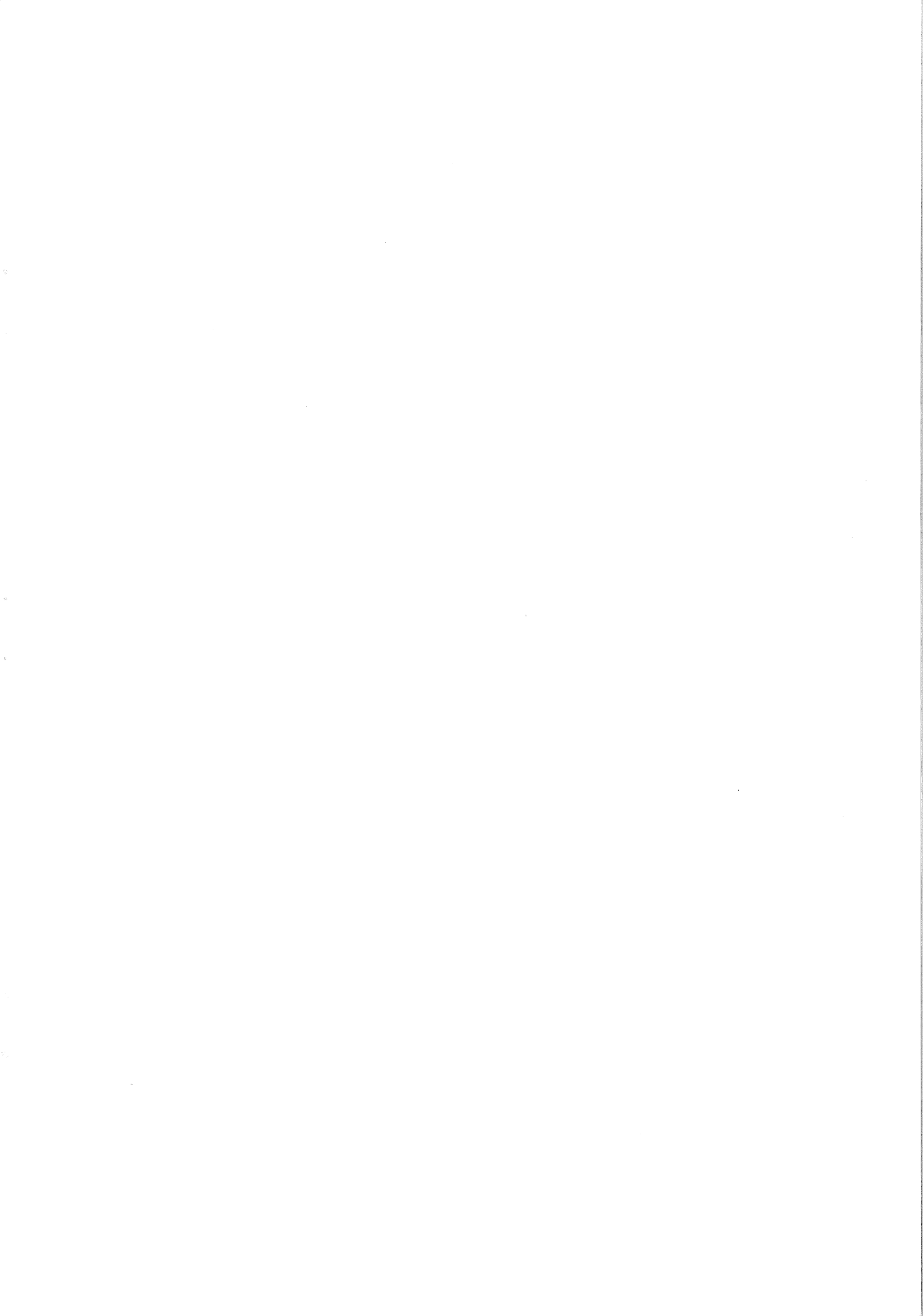
- | | | |
|----------|------------|-----------|
| ① 経石山古墳 | ② 束本遺跡 | ③ 樽味高木遺跡 |
| ④ 桑原田中遺跡 | ⑤ 畑寺5号墳 | ⑥ 畑寺竹ヶ谷古墳 |
| ⑦ 樽味遺跡 | ⑧ 樽味四反地遺跡 | ⑨ 桑原高井遺跡 |
| ⑩ 桑原稲葉遺跡 | ⑪ 樽味立添遺跡 | ⑫ 桑原本郷遺跡 |
| ⑬ 三島神社古墳 | ⑭ 東野お茶屋台古墳 | |

第3図 桑原地区の主要遺跡分布図 (S = 1 : 25,000)

第2章

キョウ セキ ザン
経石山古墳

— 2次調査地 —



第2章 経石山古墳 2次調査地

1. 調査の経過

(1) 調査に至る経過 (第4・5図)

1994(平成6)年1月17日、木村達也氏より松山市桑原4丁目410-3地内における宅地開発にあたり、当該地の埋蔵文化財の確認願いが松山市教育委員会文化教育課(以下、文化教育課)に提出された。

当地は、松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地『84 経石山古墳』内にある。周辺地域では、以前より調査が実施されており、当地一帯は周知の遺跡地帯として知られている。

調査地周辺には、東に位置する古墳時代後期の三島神社古墳をはじめとして、東野お茶屋台遺跡群や畑寺竹ヶ谷古墳群があり、古墳時代中期の群集墳である。北の樽味・桑原地区には樽味遺跡・樽味四反地遺跡・樽味立添遺跡・樽味高木遺跡、南には筋違遺跡・福音小学校構内遺跡、西には拓南中学校遺跡・釜ノ口遺跡・枝松遺跡・東本遺跡などがあり、弥生時代から古墳時代までの集落が展開している。調査地は、5世紀末から6世紀初頭の前方後円墳の領域内にある。経石山古墳は、全長48.5m、後円部径27m、同高さ5.5m、前方部幅16m、同高さ3.5mで、主軸方位は、前方部が西より約20°北に振り、西向きを指向している。後円部が前方部に比べ2m低く、墳丘施設や埋葬施設は未調査である。

本調査地は、この経石山古墳の後円部東裾に位置している。北隣には、平成2年10月に調査を行った経石山古墳1次調査地があり、調査では古墳の周溝を検出している。周溝からは鉄鏃や鉄斧が出土している。

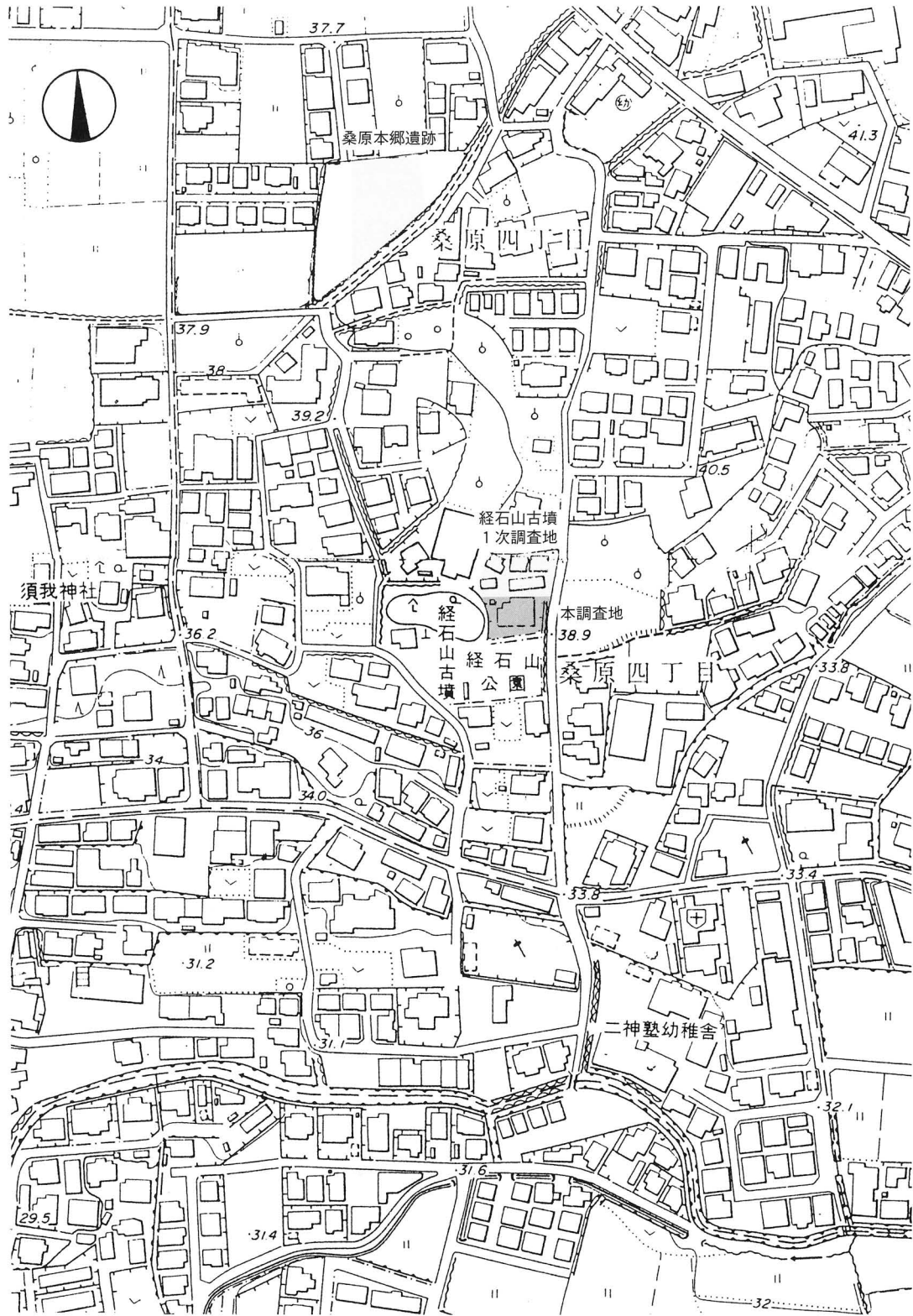
これらのことから、当該地における埋蔵文化財の有無と、さらには遺跡の範囲やその性格を確認するため、1994(平成6)年2月15日に文化教育課は試掘調査を実施した。試掘調査の結果、経石山古墳の周溝と思われる遺構と遺物包含層(須恵器・土師器)を検出した。

この結果を受け文化教育課と地権者である木村達也氏は遺跡の取扱いについて協議を重ね、宅地開発によって失われる遺構・遺物について記録保存のため発掘調査を実施することとなった。発掘調査は、北側に隣接する経石山古墳1次調査地で確認した周溝の範囲確認と、1次調査では明確に把握できなかった周溝の埋没時期の特定を主目的に、文化教育課が主体となり地権者の協力のもと1994(平成6)年5月17日に調査を開始した。

(2) 調査の経緯

1994(平成6)年5月17日、地権者立会のもと、調査区を設定する。5月18日、発掘用器材や道具を搬入する。5月19日、重機により表土剥ぎ取り作業を開始した。試掘結果及び深掘りによる土層観察により、地表面下約0.4mまで剥ぎ取りを行う。5月20日、古代・中世の遺物包含層である第IV層の掘り下げを行う。5月24日、第V-2層上面にて南北に走る小溝を検出する。5月25日、小溝を完掘する。5月27日、経石山古墳の周溝を検出する。5月30日、周溝の掘り下げを開始する。6月1日、周溝床面より土坑状遺構・小柱穴を検出する。6月2日、遺構と土層の測量を完了し、完掘写真を撮影する。本日に現場作業を終了する。

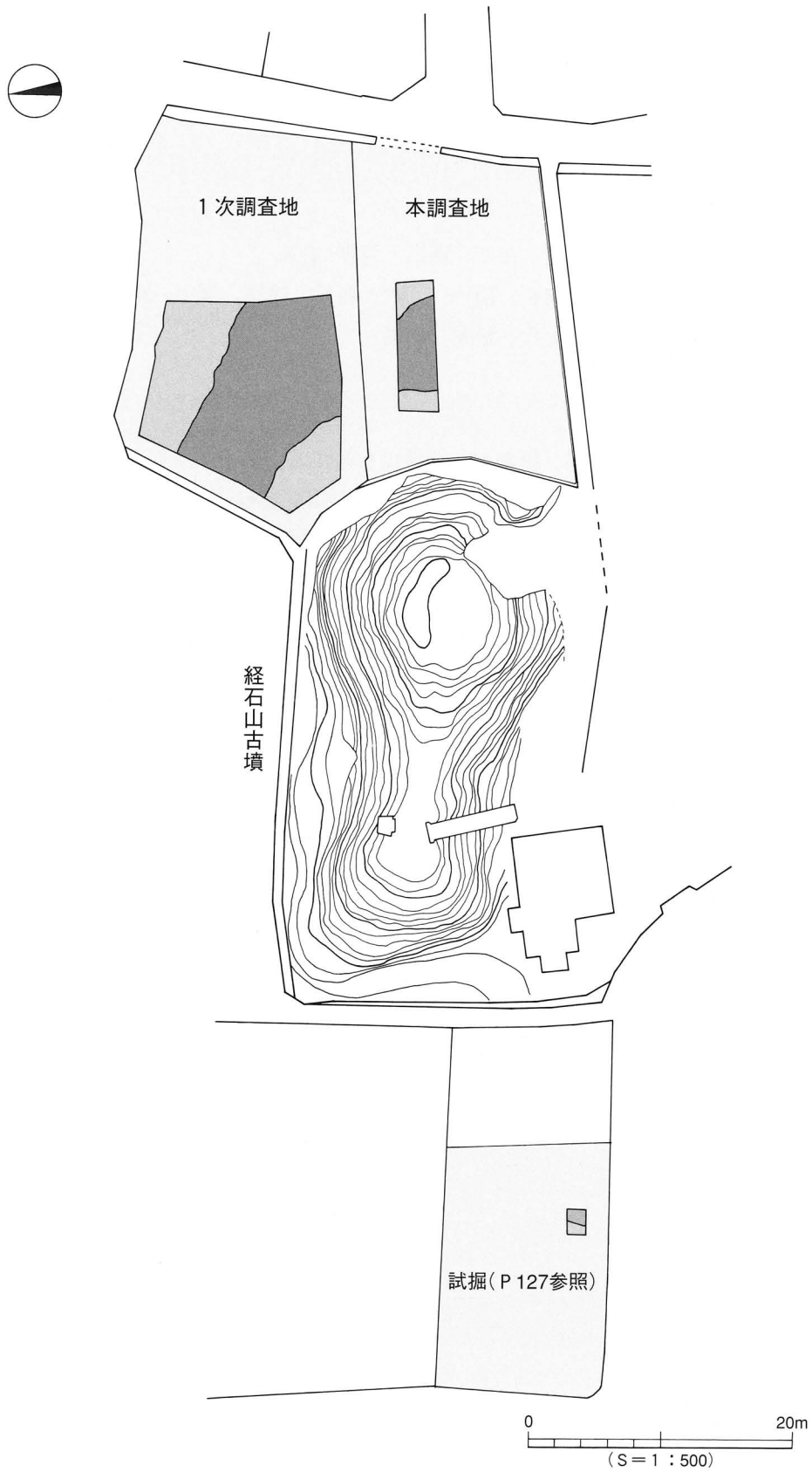
經石山古墳 2次調査地



(S = 1 : 2,500)

第4図 調査地位置図(1)

調査の経過



第5図 調査地位置図 (2)

(3) 調査組織

調査地 松山市桑原4丁目410-3

遺跡名 経石山古墳2次調査

調査期間 1994(平成6)年5月17日～同年6月2日

調査面積 364.5m²

調査委託 木村 達也

調査担当 田城 武志・重松 佳久・相原 浩二・河野 史知

調査作業員 池田 平、宇都宮東吾、田中 勲、西原 義法、西田 竜一、二宮 和見
前田 伸哉、向井 大作、松友 利夫

2. 層位 (第6図)

本遺跡は、東野洪積台地の先端部、標高40m前後に立地する。調査前は宅地であった。調査対象面積は364.5m²であるが、排土置き場と安全管理のため実際の調査面積は28.4m²である。

基本層位は、第Ⅰ層表土、第Ⅱ層灰色土、第Ⅲ層灰オリーブ色土、第Ⅳ層暗灰色土、第Ⅴ層黒褐色土、第Ⅵ層黒色土、第Ⅶ層黄褐色土である。

第Ⅰ層—近現代の造成・耕作に伴う客土である(厚さ15～30cm)。

第Ⅱ層—水田耕作に伴う床土である(厚さ3～5cm)。

第Ⅲ層—第Ⅱ層以前の農耕による客土である(厚さ10～15cm)。

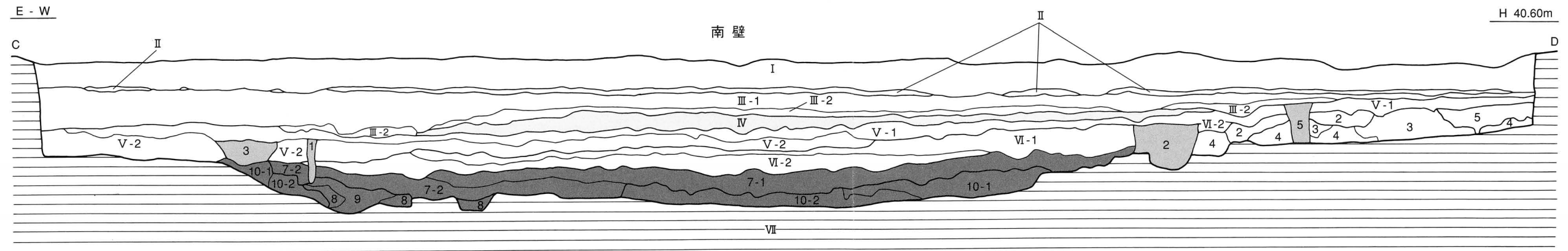
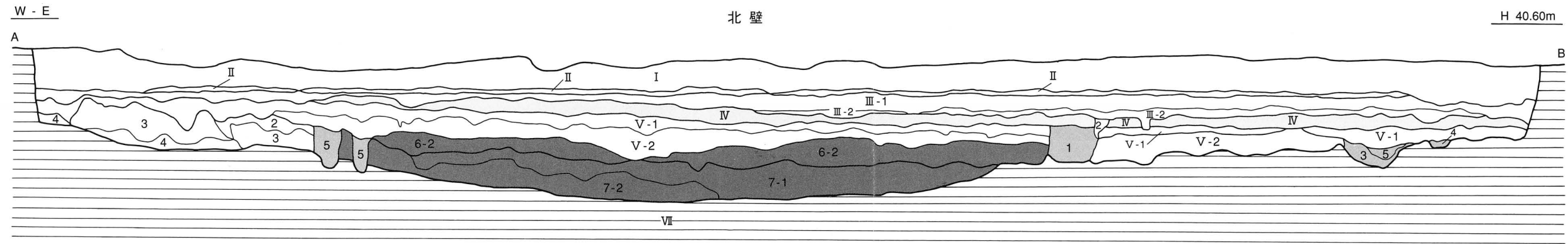
第Ⅳ層—調査区南東部を除く全域に堆積(厚さ8～30cm)しており、東から西へと傾斜している。
東・西壁の上面より柱穴・杭状遺構を検出した。同層より土師器、瓦器、磁器片が出土している。

第Ⅴ層—周溝上面に被る状態で、西から東へ堆積している(厚さ10～20cm)。

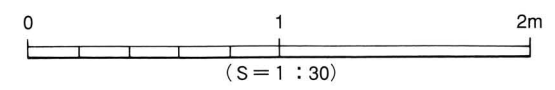
第Ⅵ層—黒色土(厚さ4～20cm)。

第Ⅶ層—地山と呼ばれるものである。

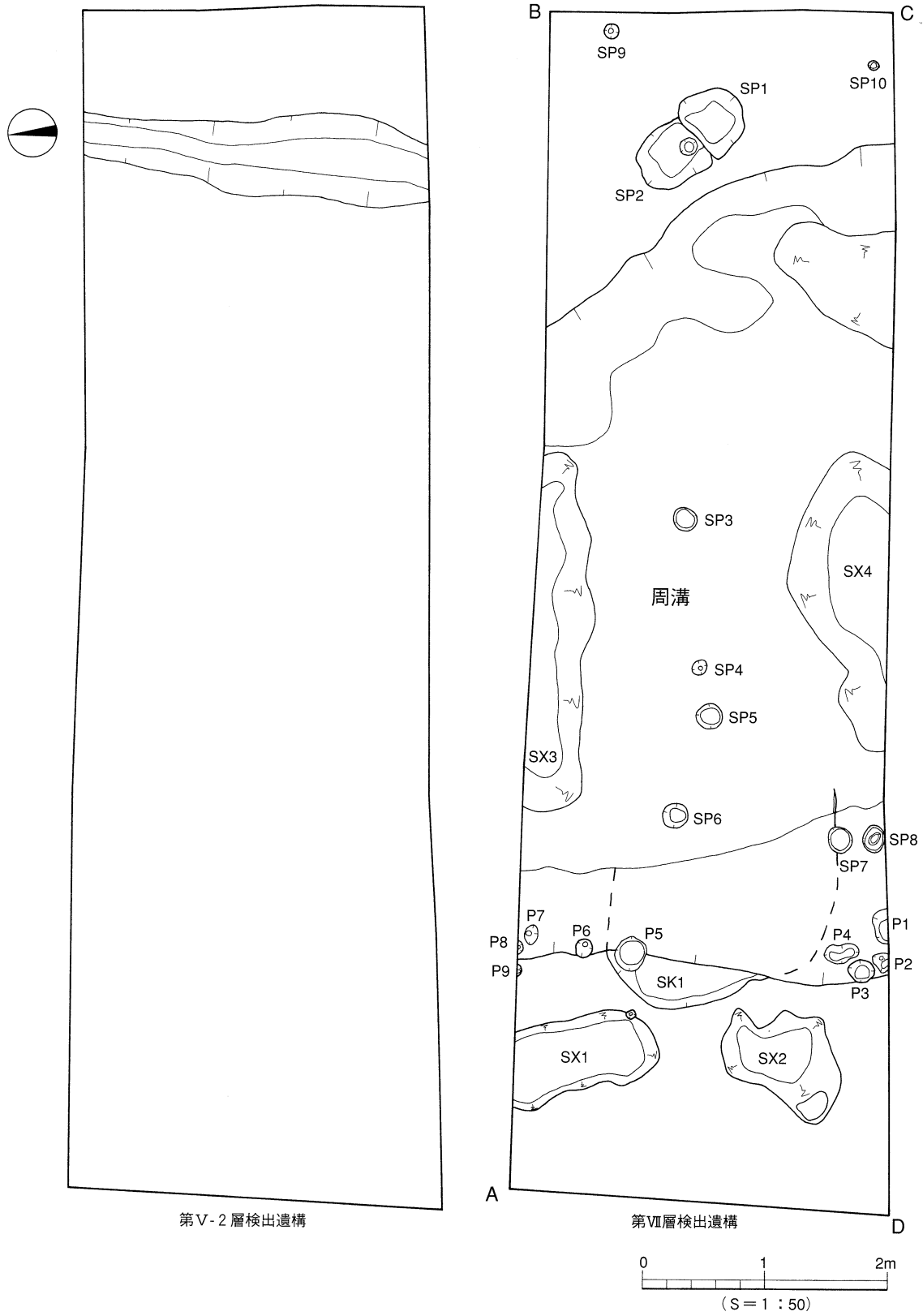
今回の調査により確認された遺構は、第Ⅴ-2層上面にて溝1条、第Ⅶ層上面より周溝1条、土坑1基、柱穴10基、性格不明遺構4基を検出した。また、西側の南北壁面においては第Ⅵ層・周溝埋土を切る柱穴状遺構9基を確認した。



- | | | |
|----------------|--------------------|--------|
| I 表土 | 1. 黄灰褐色土 | } 周溝埋土 |
| II 灰色土(床土) | 2. 黒色土 | |
| III 旧耕作土 | 3. 褐色土 | |
| 1. 灰オリーブ色土 | 4. 3層に5mm大の黄色砂礫を含む | |
| 2. 1層に砂粒を多含する | 5. 暗褐色土 | |
| IV 暗灰色土 | 6-1. 黒褐色土 | |
| V-1. 黒褐色土 | 6-2. 6-1層より粘性が強い | |
| -2. 1層より粘性が強い | 7-1. 暗褐色土(5層より多い) | |
| VI 黒色土 | 7-2. 7-1層より粘性が強い | |
| VII 黄褐色シルト(地山) | 8. 7-2層に黒色斑紋混じる | |
| | 9. 7-3層に灰色を帯びる | |
| | 10-1. 明褐色土 | |
| | 10-2. 10-1層より砂質が強い | |



第6図 基本土層図



第V-2層検出遺構

第七層検出遺構

第7図 遺構配置図

3. 遺構と遺物

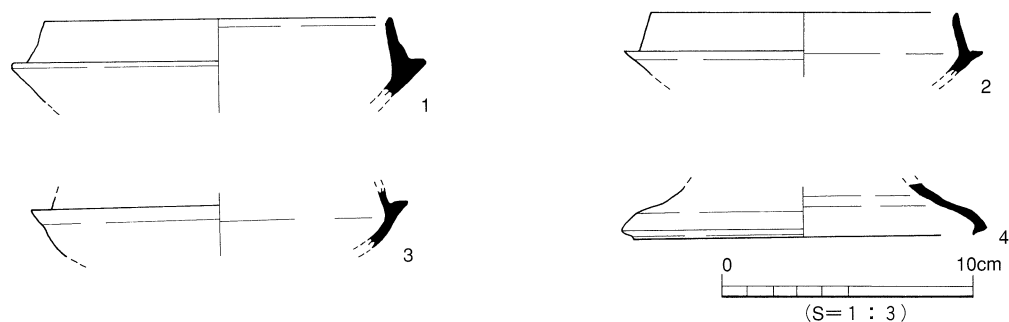
〔1〕古墳時代

周溝（第7図）

調査区の東西端を除く全域で検出し、SK1を切る。断面形態は皿状を呈し、規模は上場幅5.1~6.7m、検出長2.8m、検出面よりの深さ約0.35mを測る。周溝外側の上場は北側が幅狭となる。床面からは径10~20cmの柱穴を検出する。周溝埋土は、上層が黒褐色土で下層は上層に比べ褐色の強い黒褐色土であり、上層と下層は更に2層に分層でき、それぞれ下部は粘性が強くなる。墳丘裾部側の周溝内は黒色が強くなる。出土遺物は壁面より弥生土器片に混じり須恵器片が出土している。

出土遺物（第8図）

1~3は須恵器坏身である。たちあがりは内傾しており、1・2はほぼ水平にのびる受部をもつ。1は口縁端部は丸く仕上げられており、内傾する。1は立ち上がり部がやや肥厚されている。2・3は受部に沈線状の凹みをもつ。4は須恵器高坏で、脚端部内側は接地する。

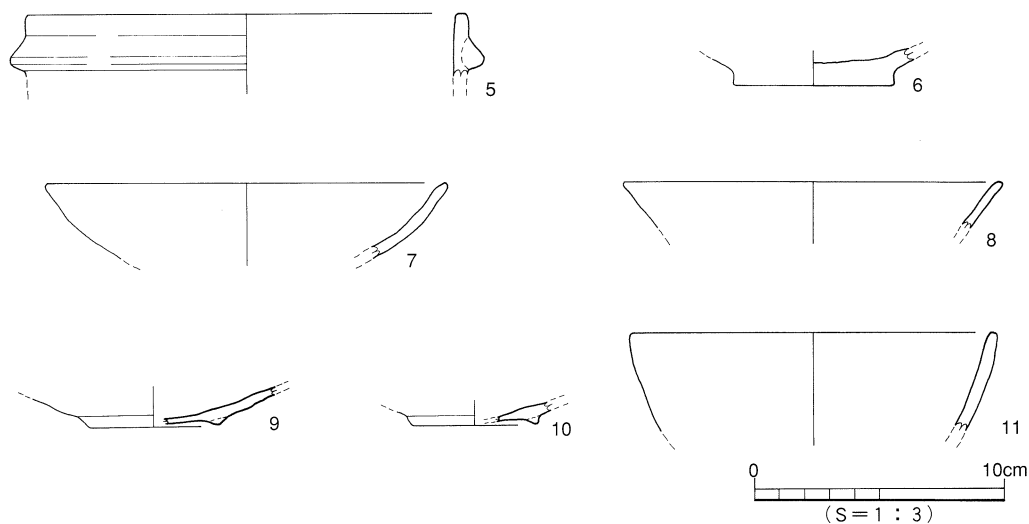


第8図 周溝内出土遺物実測図

〔2〕中世

第IV層出土遺物（第9図）

5は土師質の釜である。胴部が直立しており、口縁端部よりやや下がった位置に垂れ気味の鐙を貼り付けている。口縁端面は平坦に仕上げられている。6は土師器の坏である。円盤状に突出した底部をもつ。7~10は瓦器碗である。7は胴部が内湾しており、口縁端部はやや外反している。8は外反気



第9図 第IV層出土遺物実測図

味の口縁端部をもつ。9・10は断面三角形の貼り付け高台をもつ。7~10は和泉型瓦器碗である。11は青磁碗である。内湾気味の胴部より口縁端部は丸く仕上げられている。内外面は施釉されており、外面に釉の垂れがみられる。

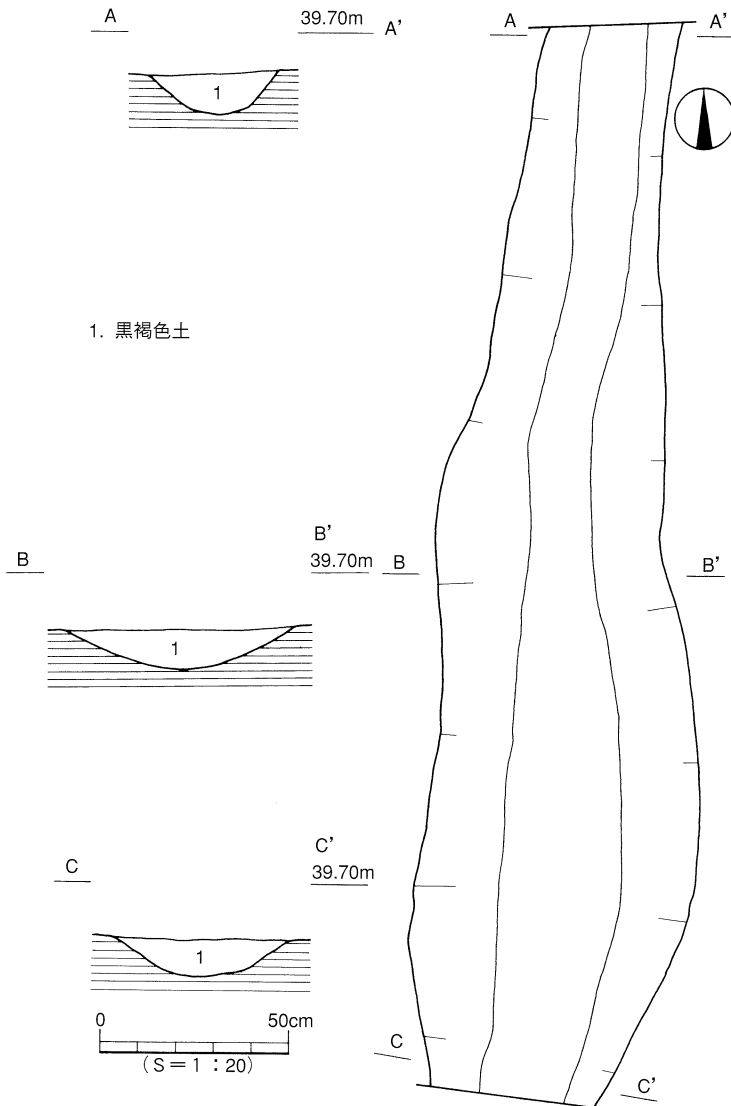
SD1 (第10図)

調査区東側に位置し、第V層上面にて検出した。断面形状はレンズ状を呈し、規模は上場幅0.38~0.75m、検出長2.8m、検出面よりの深さ9~12cmを測る。主軸はN-5°-Eとほぼ真北を指向する。基底面は、北から南に向けわずかな傾斜をなす(比高差3cm)。埋土は黒褐色土である。埋土中に砂粒を多く含まないことから水利に伴うものとは考え難い。出土遺物は、瓦器碗が出土している。

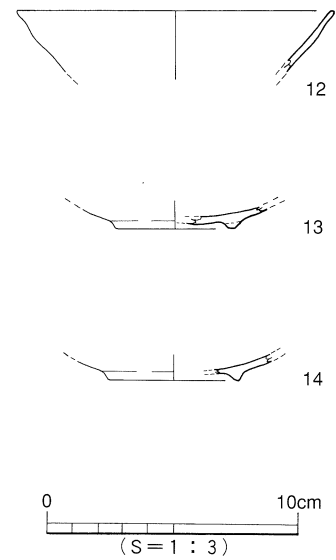
出土遺物 (第11図)

瓦器碗(12~14) 12は口縁部がやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部は丸くおさめられる。13は断面逆台形の高台をもつ。14は断面逆三角形の高台をもつ。12~14は和泉型瓦器碗。

時期：13世紀



第10図 SD1測量図



第11図 SD1出土遺物実測図

〔3〕 弥生時代

S K 1 (第12図)

調査区西側、周溝の西肩部に位置する。遺構の大半が周溝の西肩に切られており、西壁と床面が僅かに残存する。平面形態は隅丸方形、断面形は逆台形状を呈する。規模は南北1.95m、東西1.3m以上、検出面よりの深さ0.2mを測る。基底面はやや凹凸であり、壁は床面からほぼ垂直に立ち上がる。埋土は黒色土である。出土遺物は、弥生土器の底部片と石器が床面付近より出土している。

出土遺物 (第13図)

15は壺形土器である。平底の底部は、外傾して立ち上がる。底部内面にナデ調整がみられる。16は甕形土器である。平底の底部から内湾気味に立ち上がる。17は敲石の欠損品である。敲打による剥離痕が先端部の片側を中心に側部にまでみられる。茎部は欠損している。砂岩質である。

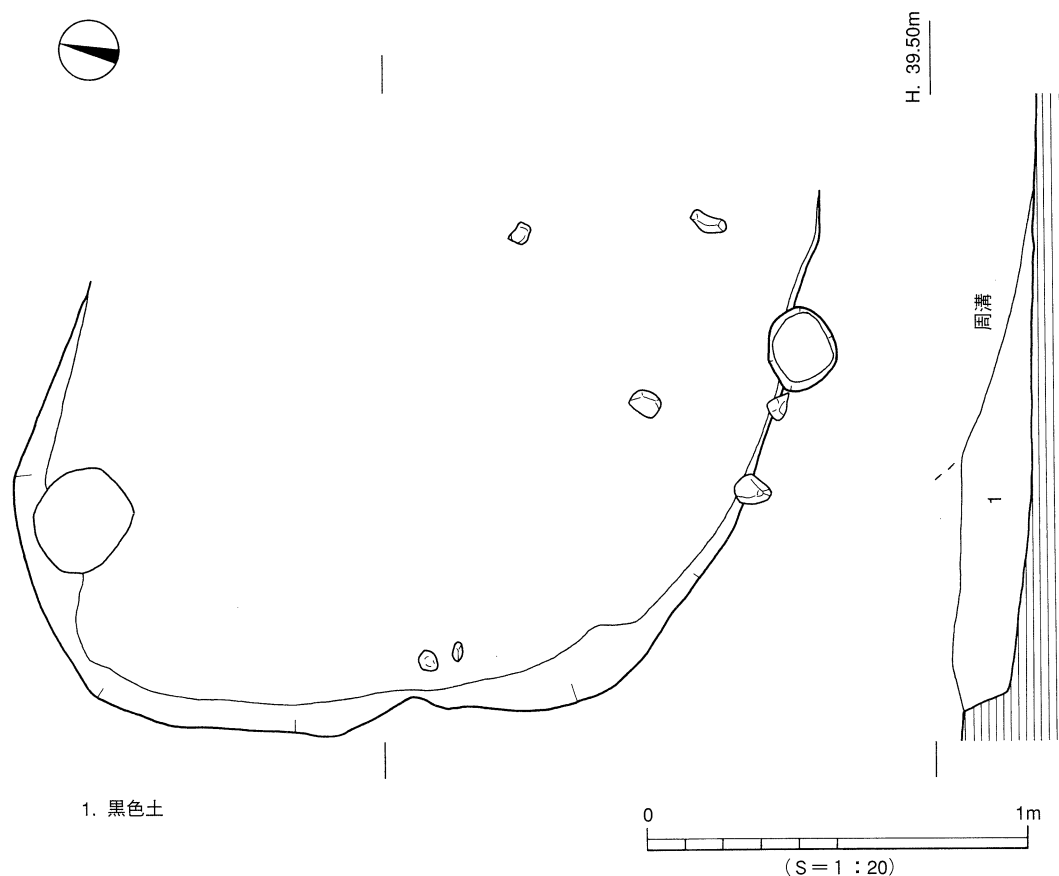
時期：弥生時代後期

〔4〕 その他の遺構 (第7・14図)

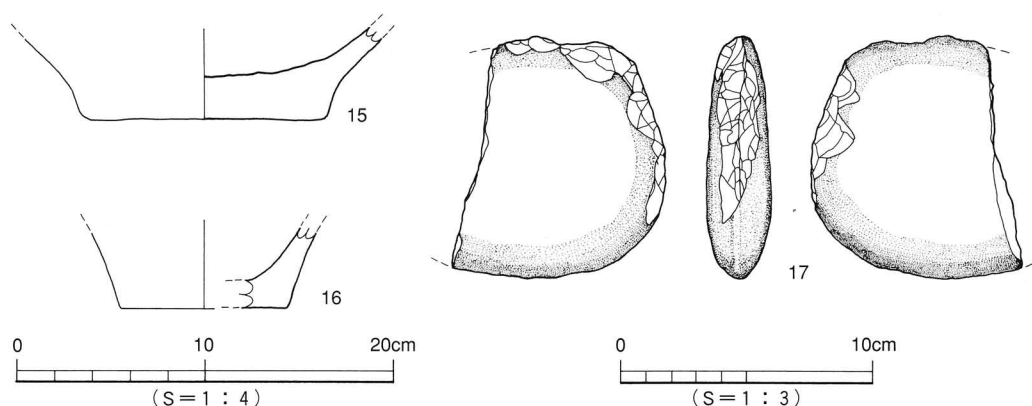
調査区東側においてS P 1がS P 2を切った状態で検出した。いずれも第Ⅶ層上面の検出である。

S P 1は平面形態が楕円形を呈しており、規模は長軸0.55m、短軸0.4m、検出面よりの深さ0.35mを測る。埋土は灰色土である。

S P 2は平面形態が方形を呈し、規模は長軸0.5m、短軸0.4m以上、検出面よりの深さ0.3mを測る。埋土は灰色土に黄橙色の粘土塊を少含しており、柱痕を確認している。



第12図 SK1測量図

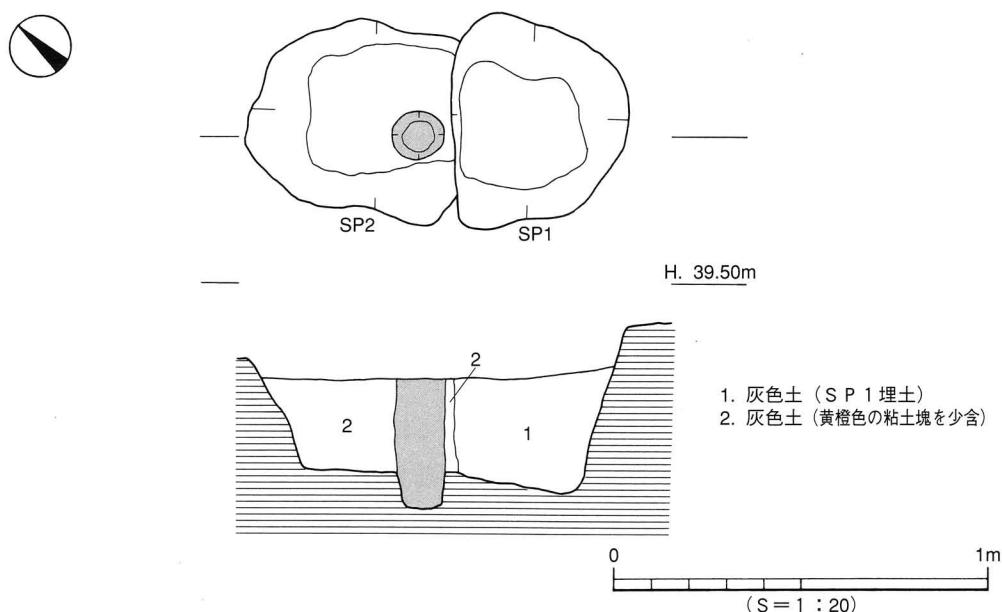


第13図 SK1出土遺物実測図

SP1・2共に出土遺物はなく、時期は不明である。

小型の柱穴であるSP3～SP8は、周溝の床面より検出した。平面形態が円形を呈し、直径は約10～20cmのものが主体で、検出面よりの深さは6～20cmである。柱穴埋土は黒色土である。出土遺物はない。

P1～P9は周溝の西肩部に集中した状態で検出した。平面形態は円～楕円形を呈し、直径は約10～20cmのものが主体で、検出面よりの深さは10～20cmである。柱穴埋土は黒色土である。出土遺物はない。



第14図 SP1・2測量図

SX1は調査区西側の周溝西肩上に位置する。平面形態は隅丸長方形状、断面形態は薄いレンズ状を呈する。規模は長軸1.2m、短軸0.6m、検出面よりの深さ4cmを測る。埋土は褐色土であり、中央部の上面に10cm大の角礫が1点出土した。

SX2はSX1の南隣に位置する。平面形態は不定形状、断面形態は薄いレンズ状を呈する。規模は長軸1.0m、短軸0.65m、検出面よりの深さ6cmを測る。埋土は褐色土であり、西端にて14cm大の角

礫が出土した。

S X 3 は周溝の北壁基底部で検出した。平面形態は長方形状、断面形態はレンズ状を呈する。規模は東西2.9m、検出面よりの深さ5cmを測り、北端は調査区外へひろがる。埋土は暗褐色土である。

S X 4 は周溝の南壁基底部で検出した。平面形態は不定楕円形状、断面形態はレンズ状を呈する。規模は東西2.5m、検出面よりの深さ5cmを測り、南端は調査区外へひろがる。埋土は暗褐色土である。

4. 小 結

本調査では、弥生時代から中世までの遺構と遺物を検出した。最も注目されるのは、経石山古墳の周溝を確認したことである。

まず、周溝内側の肩は1次調査の延長線上にあり、古墳の後円部に沿って内湾している。周溝外側の肩は、1次調査で検出された周溝の外側の肩が南東部で広がるのに対し、本調査地では、1次調査の周溝外側の肩より南で検出し、周溝の幅が狭くなっている。このことより、本調査で検出された周溝は削平による形状の変形が考えられる。また、周溝の床面からは不整形プランの凹みが南北壁沿いに並んで検出された。これは意図的に掘られたものかは判断できなかった。

さて、周溝の内側には杭状の遺構が確認されている。これは、周溝の内側に杭を打ち込み、墳丘からの土砂の流入を防いでいるものと考えられる。周溝内よりの出土遺物は数点の細片しかなく明確な時期決定は難しい。

弥生時代の遺構であるS K 1は、周溝の床面で検出した。周溝の床面にはS K 1の北壁下場が東に延びる痕跡がみられ、このことより、東西方向に長いものと思われる。出土遺物には、弥生時代後期の土器があり、同時期の隅丸長方形の土坑と考えられる。

周溝の上層からは中世（13世紀）の溝や遺物包含層を検出している。本調査地周辺での中世集落の広がりも今後の調査において考えなくてはならない。

経石山古墳の東280mには、内部構造や造営時期が明らかにされた前方後円墳の三島神社古墳がある。墳丘のほとんどは盛土で形成されており、前方部前面の裾部には朝顔形埴輪をならべ、墳丘の周囲には円筒埴輪を巡らせている。古墳の規模は、全長45.2m、後円部の径23m、同高さ4m、前方部の幅20m、同高さ3.25mである。後円部には右片袖式の横穴式石室がある。石室の規模は、全長5.7m、玄室の長さ3.7m、奥壁の高さ2m、玄門の幅1m、羨道部の長さ2mとなる。玄室の平面形は長方形を呈し、床面には礫が敷かれている。床面は羨道へむかって傾斜している。内部より管玉、滑石製垂飾品、ガラスの丸玉、小玉、白玉、銀製の空玉、銅製の半鈴垂飾品、鉄鏃、鉄地金銅張金具、鉄釘、銀環、須恵器が出土している。出土遺物より6世紀前半に築造されている。これまでのところ、経石山古墳はこの三島神社古墳に先行する前方後円墳で古墳時代中期と考えられている。

出土遺物観察表

〔参考文献〕

- 橋本久和 1992『中世土器研究序論』真陽社
 尾上 実 1983「南河内の瓦器椀」『藤沢一夫先生古希記念古文化論叢』
 陶邑Ⅲ大阪府文化財調査報告書 第30輯1980 (財)大阪文化財センター
 「桑原地区の遺跡」『松山市文化財調査報告書第26集』 (財)松山市生涯学習振興財団 埋蔵文化財センター
 ・松山市史・第1巻 1992松山市編集委員会

遺構・遺物一覧 (河野史知)

- (1) 以下の表は、本調査検出の遺物の計測値及び観察一覧である。
 (2) 遺構の一覧表中の出土遺物欄の略号について。
 例) 弥生→弥生土器、土師→土師器、須恵→須恵器。
 (3) 遺物観察表の各記載について。

法量欄 () : 復元推定値

形態・施文欄 土器の各部位名称を略記。例) 口→口縁部

胎土・焼成欄 胎土欄では混和剤を略記した。例) 砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土。() 中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。例) 砂・長(1~4) →「1~4mm大の砂粒・長石を含む」である。

焼成欄の略号について。◎→良好、○→良、△→不良

表2 土坑一覧

土坑 (SK)	地 区	平 面 形	断 面 形	規 模 長さ×幅×深さ (m)	埋 土	出 土 遺 物	時 期	備 考
1	調査区西側	隅丸方形	逆台形	1.95×1.3×0.2	黒色シルト	弥 生	弥生後期	周溝に切られる

表3 周溝内出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形 態・施 文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
1	坏身	口径(13.6) 受部径(15.8) 残高 3.2	たちあがりは上方向にのび端部は内傾する段をもつ。	㊦回転ナデ	㊦回転ナデ	青灰色 灰色	密 ◎		
2	坏身	口径(12.0) 受部径(14.2) 残高 2.6	たちあがりは内傾し端部は尖り気味に丸い。受部はほぼ水平にのびる。	㊦回転ナデ	㊦回転ナデ	灰色	密 ◎		
3	坏身	受部径(14.8) 残高 2.3	受部は沈線状の凹みもち、ほぼ水平にのびる。	回転ナデ	回転ナデ	灰色	密 ◎		
4	高坏	底径(13.4) 残高 2.1	ゆるやかなラッパ状をなす脚である。	回転ナデ	回転ナデ	灰色	密 ◎		

経石山古墳 2次調査地

表4 第IV層出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
5	土釜	口径(17.4) 残高 2.5	鈎が口縁端から若干下がった位置に貼り付けられる。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	黄橙色	石・長(1~3) ○		
6	坏	底径 6.4 残高 1.5	円盤状に突出した平底をもつ。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	黄橙色	密 ◎		
7	椀	口径 15.8 残高 3.0	内湾する胴部である。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	乳白色 灰白色	密 ○		
8	椀	口径(15.0) 残高 1.9	外反気味の胴部である。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	暗灰色	密 ○		
9	椀	高台径(5.2) 残高 1.5	断面三角形の貼付高台をもつ。	◎ヨコナデ	◎ヨコナデ	灰白色 灰黄色	密 ○		
10	椀	高台径(5.0) 残高 0.9	断面三角形の貼付高台をもつ。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	灰黄色 にぶい黄橙	密 ○		
11	碗	口径(14.4) 残高 4.5	内湾気味にたちあがり、口縁端部は丸い。	施釉	施釉	浅黄色 灰黄色	密 ◎		

表5 SD1 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
12	椀	口径(12.6) 残高 2.5	口縁部は外反気味にたちあがり端部は丸い。	◎ヨコナデ	摩滅の為不明	灰色	密 ◎		
13	椀	高台径(4.8) 残高 0.3	断面逆台形の貼付高台をもつ。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	浅黄色	密 ○		
14	椀	高台径(5.1) 残高 0.3	断面逆三角形の貼付高台をもつ。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	灰白色 灰色	密 ○		

表6 SK1 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
15	壺	底径(12.4) 残高 4.9	平底の底部より屈曲し、外方向に内湾気味にたちあがる。	摩滅の為不明	◎ナデ	浅黄橙色	石・長(1~3) ○		
16	甕	底径(8.8) 残高 4.2	平底の底部。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	灰橙色 乳白色	石・長(1~2) ○		

表7 SK1 出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
17	敲石	茎部欠損	砂岩	7.5	9.5	2.6	398.0		

第3章

エダ マツ
枝松遺跡

— 5次調査地 —

第3章 枝松遺跡5次調査地

1. 調査の経過

(1) 調査に至る経過

1994（平成6）年8月25日、松山市教育委員会同和教育課（以下、同和教育課）より松山市枝松4丁目242番1・2における枝松教育集会所建設にあたって、当該地の埋蔵文化財の確認願いが松山市教育委員会文化教育課（以下、文化教育課）に提出された。

確認願いが提出された松山市枝松4丁目242番1・2は、松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地『83 枝松遺物包含地』内にある。周辺地域では、以前より調査が実施されており、当地一帯は周知の遺跡として知られている。

同包含地内では、これまでに桑原高井遺跡、東本遺跡（1～4次調査）、枝松遺跡（1～4次調査）などの調査が実施されており、弥生時代から中世の集落存在が明らかになりつつある。特に、東本遺跡は、アカホヤ火山灰やA T火山灰が検出されている。アカホヤ火山灰と石器が同一地点で確認できたのは、四国においては初例である。

周辺には、北に樽味遺跡（愛媛大学農学部）、樽味立添遺跡、樽味高木遺跡（1～3）など数多くの調査が行われ、弥生時代から中世までの集落の存在が確認されている。

これらのことから当該地における埋蔵文化財の有無と、さらには遺跡の範囲やその性格を確認するため、1994（平成6）年9月6日に文化教育課は試掘調査を実施した。試掘調査の結果、地表面下約50cmにて弥生土器・土師器を含む遺物包含層と土坑を検出し、当該地に弥生時代から近世までの集落関連遺構があることを確認した。

この結果を受け、文化教育課・同和教育課の両者は遺跡の取扱について協議を重ね、教育集会所建設のため遺跡が消失する地点に対し、記録保存のための発掘調査を実施することとなった。発掘調査は、弥生時代から近世までの当該地及び周辺地域の集落構造解明を主目的とし、文化教育課の指導のもと、（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターが主体となり、1994（平成6）年11月22日に開始した。

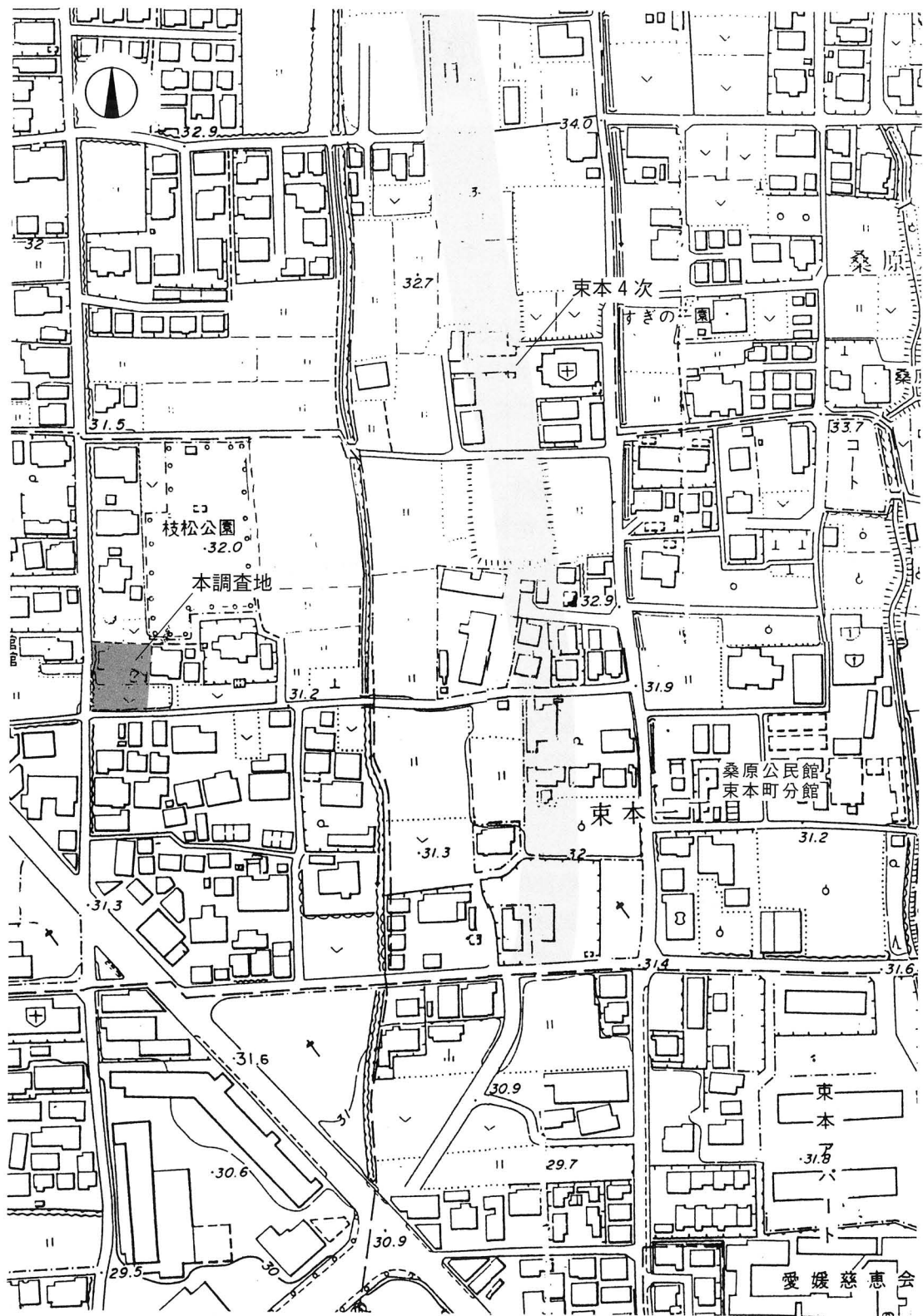
(2) 調査の経緯

本遺跡は、石手川左岸の低位段丘上、標高31m前後に立地する。調査地は南側の一段低い所が農耕作地、北側は宅地であった。調査の対象面積は546.56m²である。

実施面積は調査事務所や排土置場等により357.925m²である。調査は、調査区を南・北西・北東部に分割し実施した。

1994（平成6）年11月22日より重機により南部の表土剥ぎ取り作業を開始した。試掘調査の結果及び深掘りによる土層観察を参考にし地表下約20cmまで剥ぎ取りを行う。11月24日、作業員を増員し本格的な発掘調査を開始した。11月28日、第Ⅵ層上面にて遺構検出を行う。11月29日、遺構の掘り下げ及び遺物の検出作業を開始した。12月2日、南部の調査が終了し、埋め戻し作業を行う。12月5日より重機による北西部の表土剥ぎ取り作業を開始した。12月8日、第Ⅵ層上面にて遺構検出を行う。12月

枝松遺跡 5次調査地



(S = 1 : 2,500)

第15図 調査地位置図 (1)

調査の経過

11日、遺構の掘り下げ及び遺物の検出作業を開始する。12月26日、北西部の調査が終了し、埋め戻し作業を行う。12月27日、現場仕事納め。1月5日、仕事始め。調査事務所を移動し、重機による北東部の表土剥ぎ取り作業を開始した。1月9日、第VI層上面にて遺構検出を行う。1月10日、遺構の掘り下げ及び遺物の検出作業を開始する。1月19日、北東部の調査が終了し、埋め戻し作業を行う。1月25日、調査事務所を撤去する。

(3) 調査組織

調査地 松山市枝松4丁目242番1・2

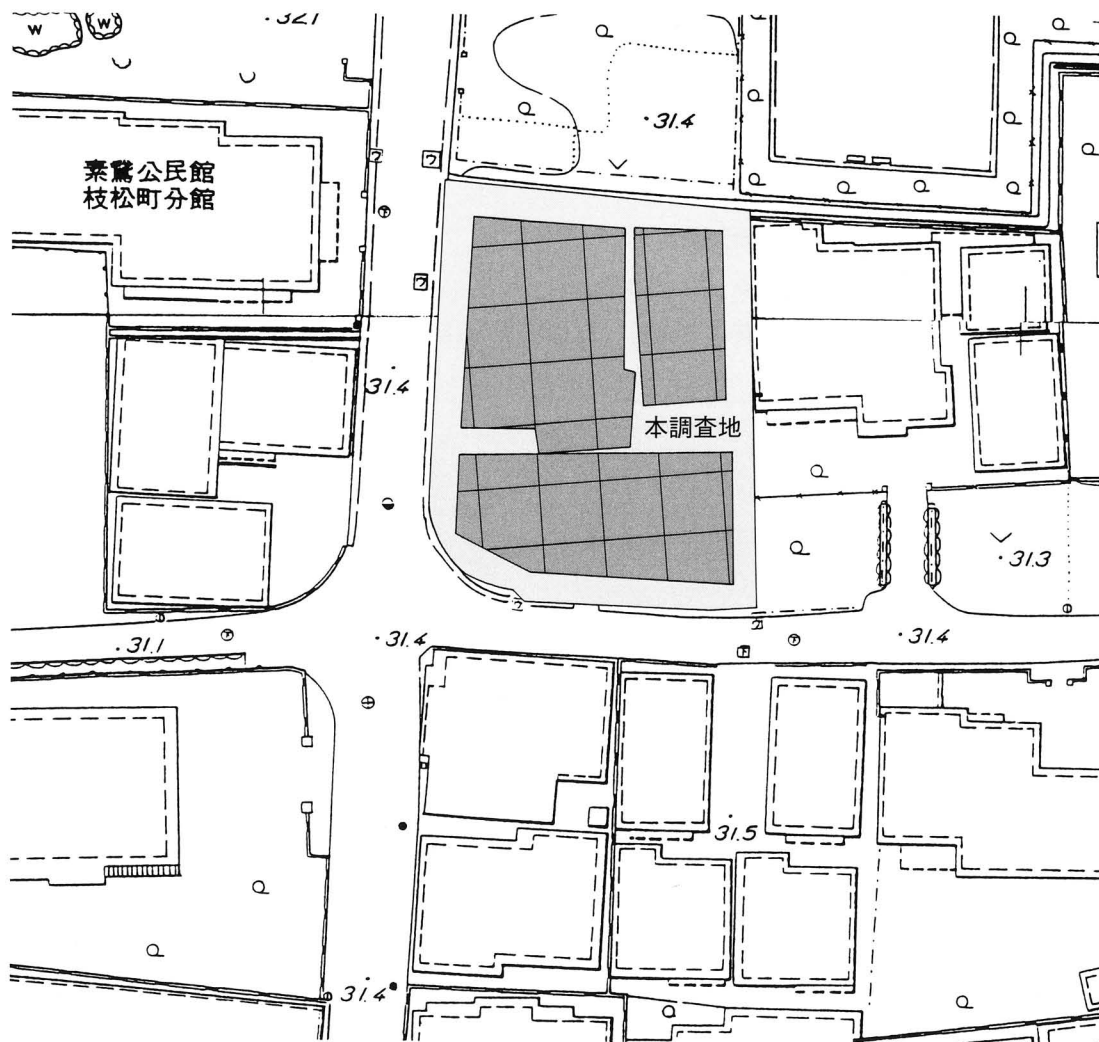
遺跡名 枝松遺跡5次調査地

調査期間 1994(平成6)年11月22日～1995(平成7)年1月19日

調査面積 対象面積 546.56㎡

調査委託 松山市教育委員会 同和教育課

調査担当 河野 史知・相原 浩二



第16図 調査地位置図(2) (S=1:500)

調査作業員 相原 勇、池田 平、宇都宮東吾、岡本 克司、久保 浩二、小磯 勝一、
重松 恒彦、篠崎 正記、田中 勲、西田 竜一、西原 義法、二宮 和見、
野口 昌弘、前田 伸哉、松友 利夫、松本 幸正、真木 雅子、藤田美恵子、
種子田千津子

2. 層位 (第17・18図)

本調査地の基本層位は、第Ⅰ層造成土、第Ⅱ層耕作土、第Ⅲ層水田床土、第Ⅳ層褐灰色土（旧耕作土）、第Ⅴ層黒褐色土、第Ⅵ層黄橙色シルト～暗茶褐色砂質土（A T火山灰塊を混じる、上面において遺構を検出）、第Ⅶ層褐色～橙色土、第Ⅷ層暗褐色シルト、第Ⅸ層鈍い橙色シルト、第Ⅹ層青灰黄色の砂質土、第Ⅺ層暗灰黄色～明黄褐色の砂質土である。

第Ⅰ層－宅地造成による真砂土（厚さ5～15cm）。

第Ⅱ層－近現代の耕作土である（厚さ7～15cm）。

第Ⅲ層－水田耕作に伴う床土である（厚さ2～5cm）。

第Ⅳ層－第Ⅱ層以前の耕作土である（厚さ5～25cm）。

第Ⅴ層－遺物包含層（厚さ10～20cm）。

第Ⅵ層－砂質土とA T火山灰塊の混交層で、上面において遺構を検出する（厚さ13～21cm）。

（調査区全体に堆積しているが、所々を第Ⅳ層の耕作段階の削平を受けている。）

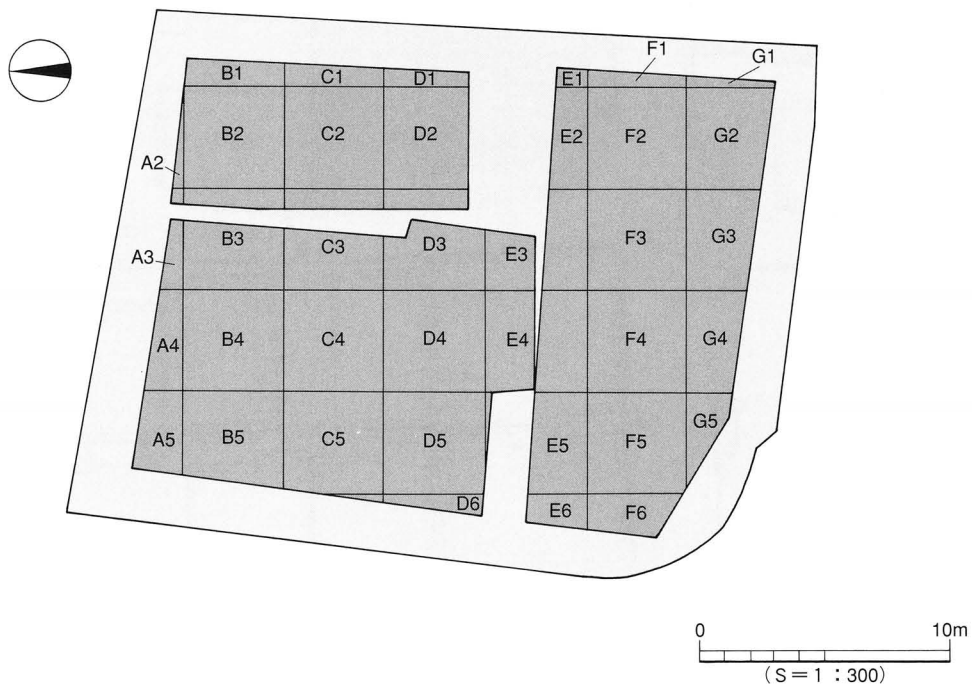
第Ⅶ層－3層に分層できる（厚さ30～40cm）。

第Ⅷ層－暗褐色シルト（厚さ7～10cm）。

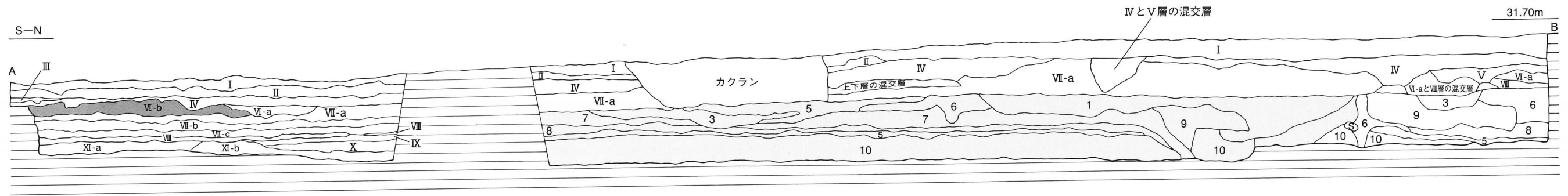
第Ⅸ層－鈍い橙色シルト（厚さ約10cm）。

第Ⅹ層－青灰黄色の砂質土である（厚さ約15cm）。

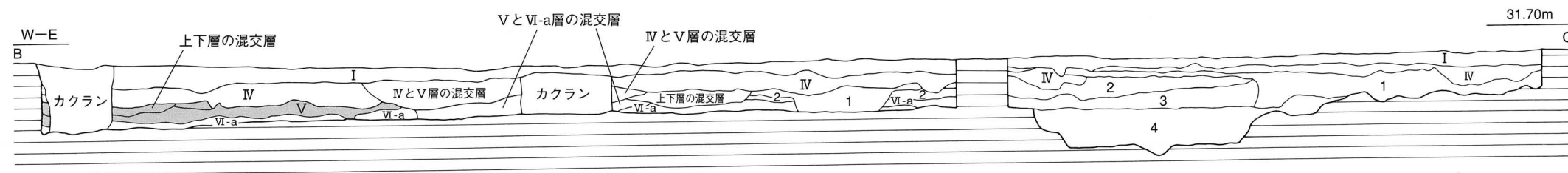
第Ⅺ層－暗灰黄色～明黄褐色砂質土である（厚さ約10～17cm）。



第17図 調査地区割図



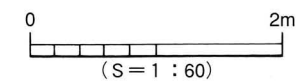
西壁



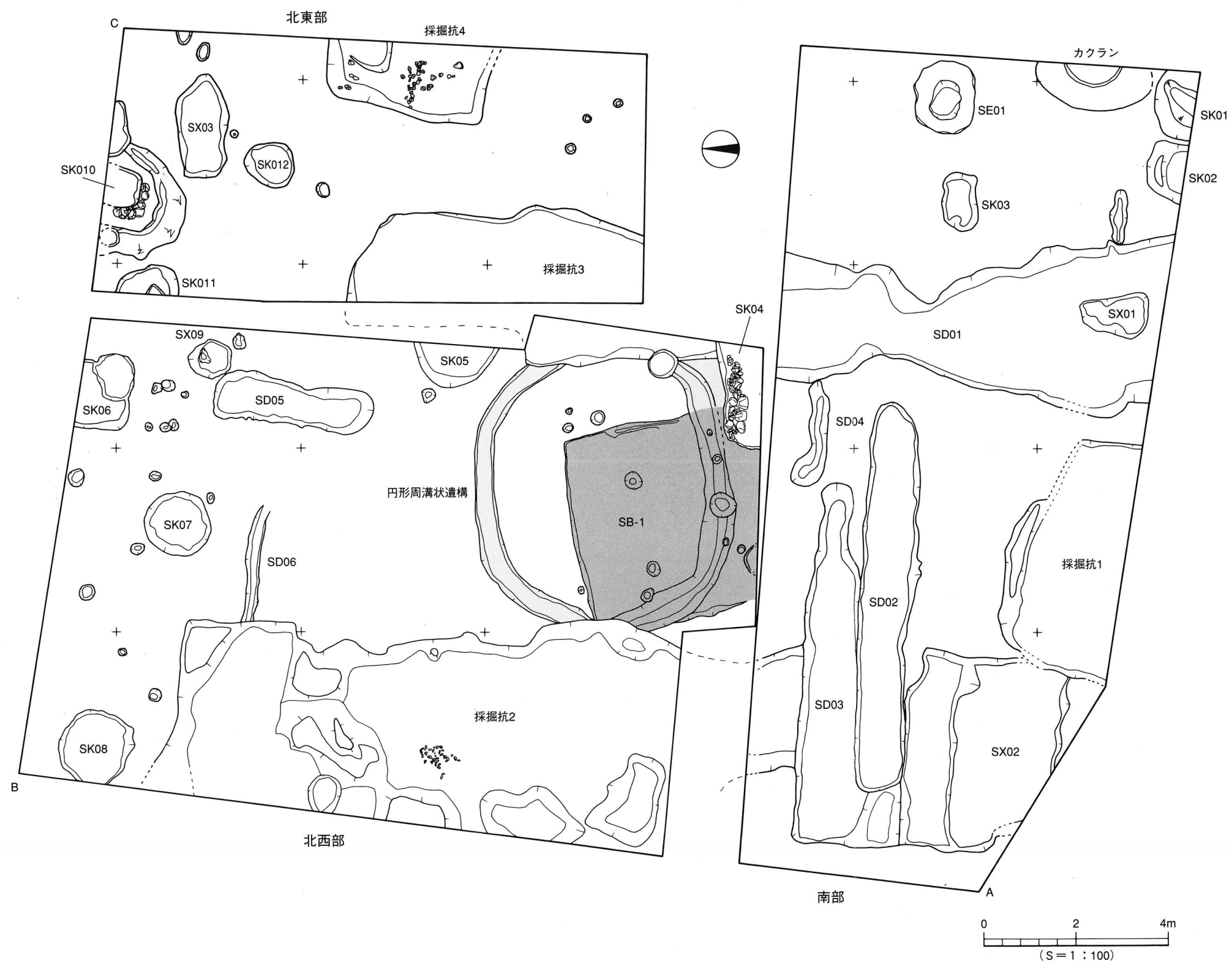
北壁

- | | |
|------------------------------|-----------|
| I 造成土 | 1. 黄灰色土 |
| II 耕作土 | 2. 細砂 |
| III 水田床土 | 3. 灰褐色土 |
| IV 褐灰色土(旧耕作土) | 4. 灰黄褐色土 |
| V 黒褐色土(遺物包含層) | 5. 黄橙色土 |
| VI-a. 暗茶褐色砂質土 | 6. 鈍い黄褐色土 |
| -b. V-a層に黄橙色シルト塊(AT火山灰)を多含する | 7. 黄色土 |
| VII-a. 褐色土 | 8. 褐色土 |
| -b. 鈍い赤褐色土 | 9. 暗褐色土 |
| -c. 橙色土 | 10. 灰色砂質土 |
| VIII 暗褐色土(砂粒多含) | |
| IX 鈍い橙色土(粘性強い) | |
| X 青灰黄色砂質土 | |
| XI-a. 灰黄褐色砂質土(1~3cm大の礫を多含する) | |
| -b. 明黄褐色砂質土 | |

- AT火山灰
- 遺物包含層
- 粘土採掘坑



第18図 西・北壁土層図



第19図 遺構配置図

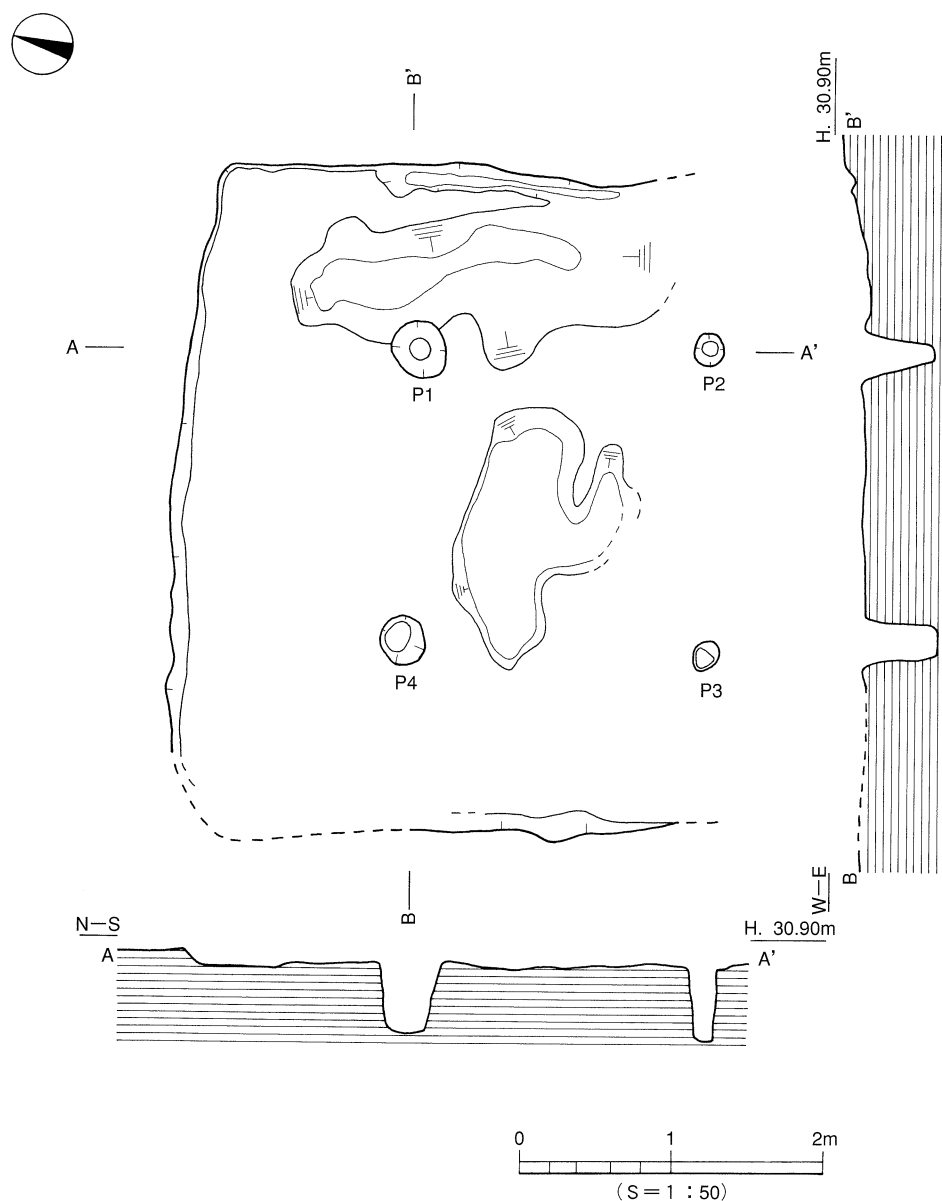
遺構は第Ⅵ層上面にて、弥生時代の竪穴式住居址1棟、周溝1条、近世の井戸1基、溝6条、土坑12基、柱穴27基、粘土採掘坑4基、性格不明遺構3基を検出した(第18図)。

尚、調査にあたり調査区内を磁北に沿って4m四方のグリッドに分けた。(第17図)

3. 遺構と遺物

SB1 (第20図)

中央部のD3~E4区に位置する。周溝を切り、住居址南側はSK1に切られている。南西コーナー部は南区の北壁において一部を確認した。平面形態は方形を呈し、規模は東西4.4m、南北4.2m、壁高は15cmを測る。埋土は黒褐色シルトである。主柱穴はP①・②・③・④の4本である。柱穴は円~楕円形を呈し、直径18~38cm、検出面よりの深さ46~50cm、柱穴間は1.9~2.05mを測る。住居址の東壁には、幅15cm、深さ3cm、断面形態がレンズ状の壁体溝がある。床面は、東側と中央部が浅く凹ん



第20図 SB1測量図

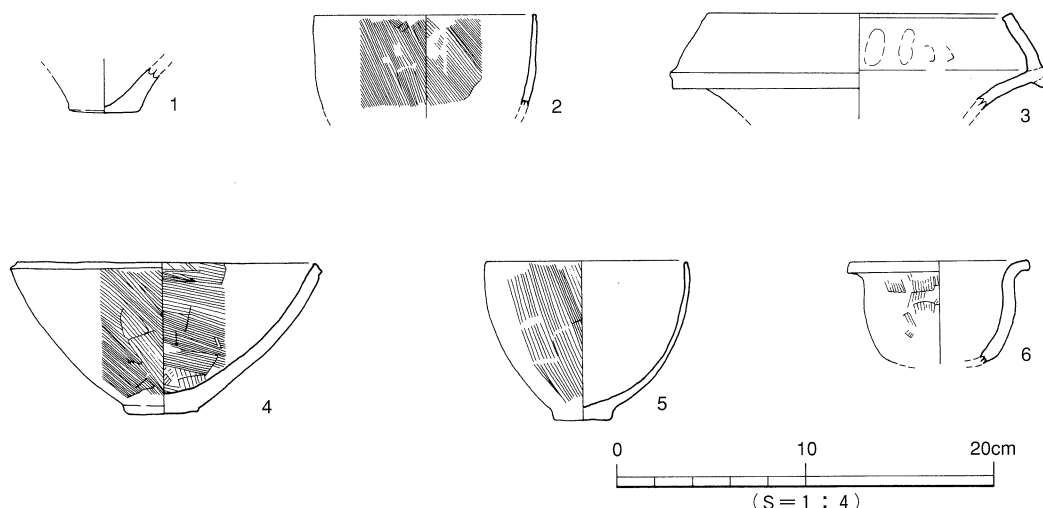
でいる。炉は未検出である。遺物は床面付近より、甕形土器、壺形土器、鉢形土器、石皿が出土している。

出土遺物（第21図）

甕形土器（1） 1は平底の底部片である。

壺形土器（2～3） 2は長頸壺の口縁部片である。口縁部が内湾気味にたちあがり、口縁端部が尖る。内外面共に刷毛目調整を施す。3は複合口縁壺である。接合部分が突出しており、口縁拡張部は無文である。

鉢形土器（4～6） 4は平底の底部に、内湾気味に立ち上がる口縁部をもつ。口縁端部は斜めに面をなす。内外面共に刷毛目調整を施す。5は平底の底部に、内湾気味に立ち上がる口縁部をもつ。外面に刷毛目調整を施す。6は口縁部が外反する。外面は口縁～頸部がナデ調整、胴部が刷毛目調整、内面は口縁部が刷毛目調整、胴部がナデ調整となる。



第21図 SB1出土遺物実測図

円形周溝状遺構（第22図）

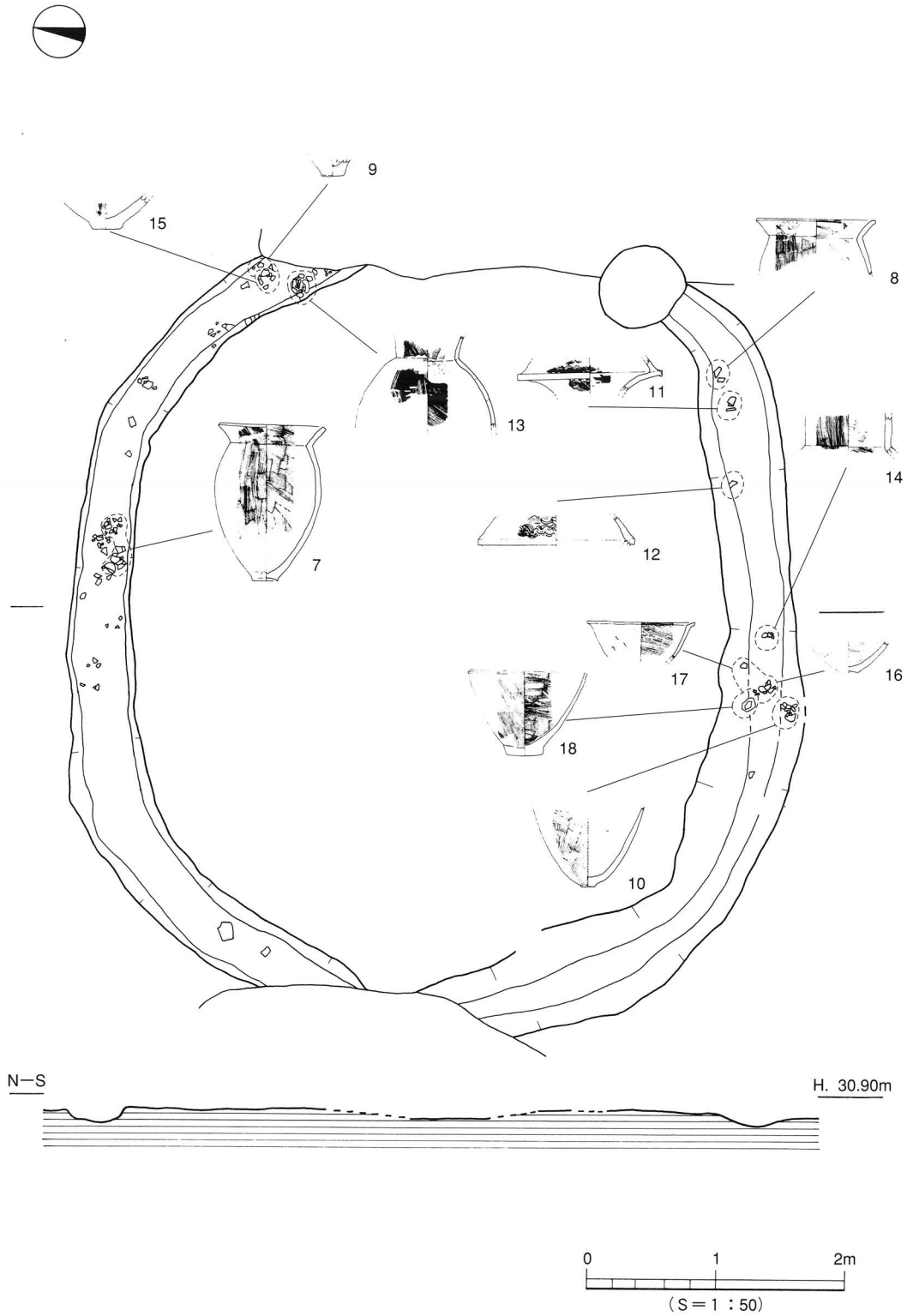
中央部のC3～E4区に位置し、中心部付近から南側をSB1に、東側を採掘坑3に切られている。平面形態はやや角張った楕円形で、断面形態は舟底状を呈している。規模は東西6.5m、南北5.5m、上場幅0.4～0.6m、検出面よりの深さ7～13cm、周溝の内側面積は20.3㎡を測る。埋土は黒褐色シルトである。遺物は、周溝内の東側を中心に壺形土器、甕形土器、鉢形土器が出土している。

出土遺物（第23図）

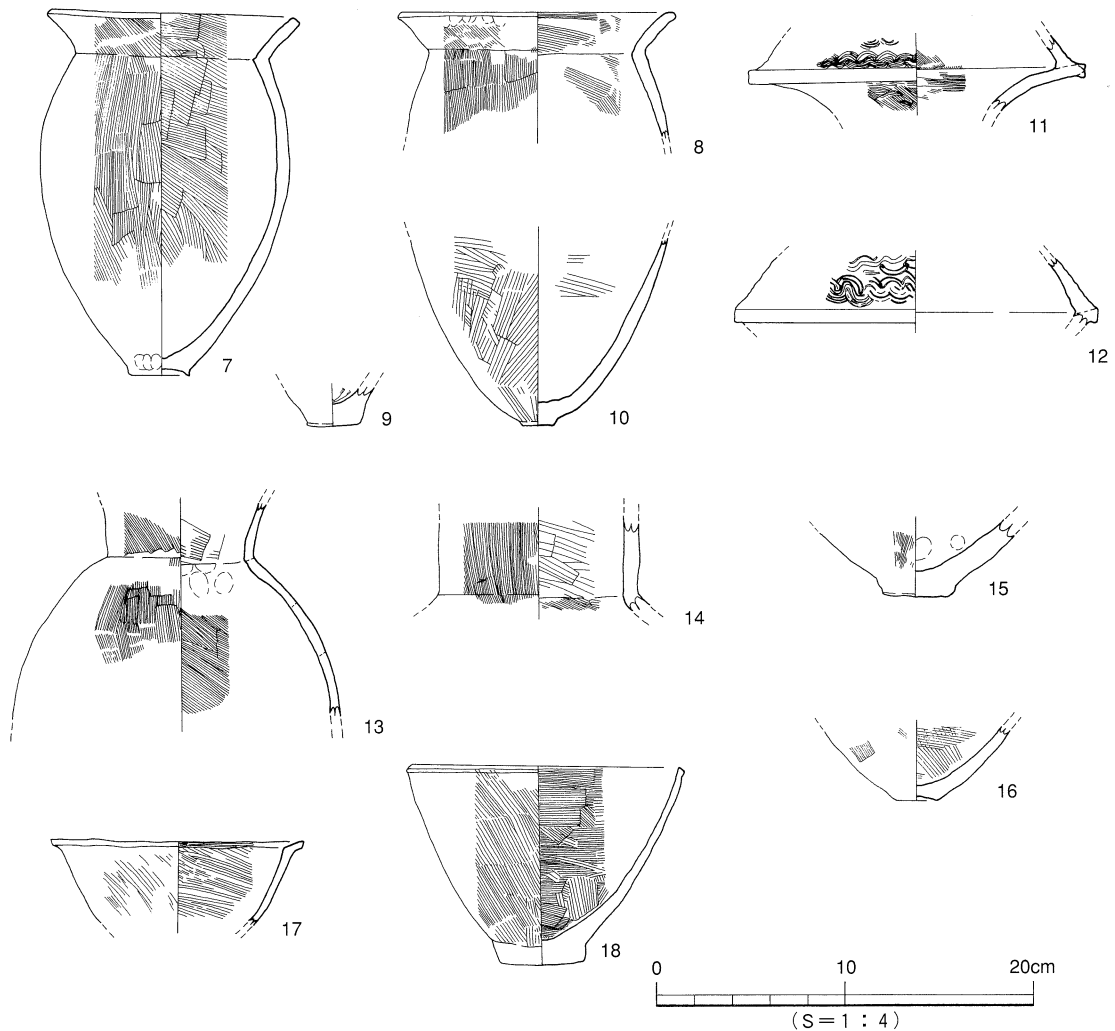
甕形土器（7～10） 7は底部が上げ底で、肩部の張りは弱い。7・8は「く」の字状の口縁部をもつ。内外面共に刷毛目調整が施される。9は平底の底部。内外面共に刷毛目調整が施される。10は平底の底部片である。外面に刷毛目調整、内面に刷毛目の打ち込み痕が残る。

壺形土器（11～16） 11・12は複合口縁壺、13・14は長頸壺、15・16は底部片である。11・12は口縁接合部が「コ」字状に仕上げられており、11は内湾する口縁拡張部に櫛描き波状文が施される。13は胴部が球状で、口縁部は外傾する。14は頸部が直立するものである。13・14は内外面共に刷毛目調整が施される。15は厚めの平底に内湾して立ち上がる胴部をもつ。外面は刷毛目調整、内面はナデによる調整が施される。16は僅かに上げ底が残っている。内外面共に刷毛目調整が施されている。

鉢形土器 (17・18) 18は厚めの平底に、胴部が内湾気味に立ち上がる口縁部をもつ。口縁端部は面をなす。17は外傾した胴部に、外反する口縁部をもつ。17・18は内外面共に刷毛目調整が施される。



第22図 円形周溝状遺構測量図



第23図 円形周溝状遺構出土遺物実測図

SE01 (第24図)

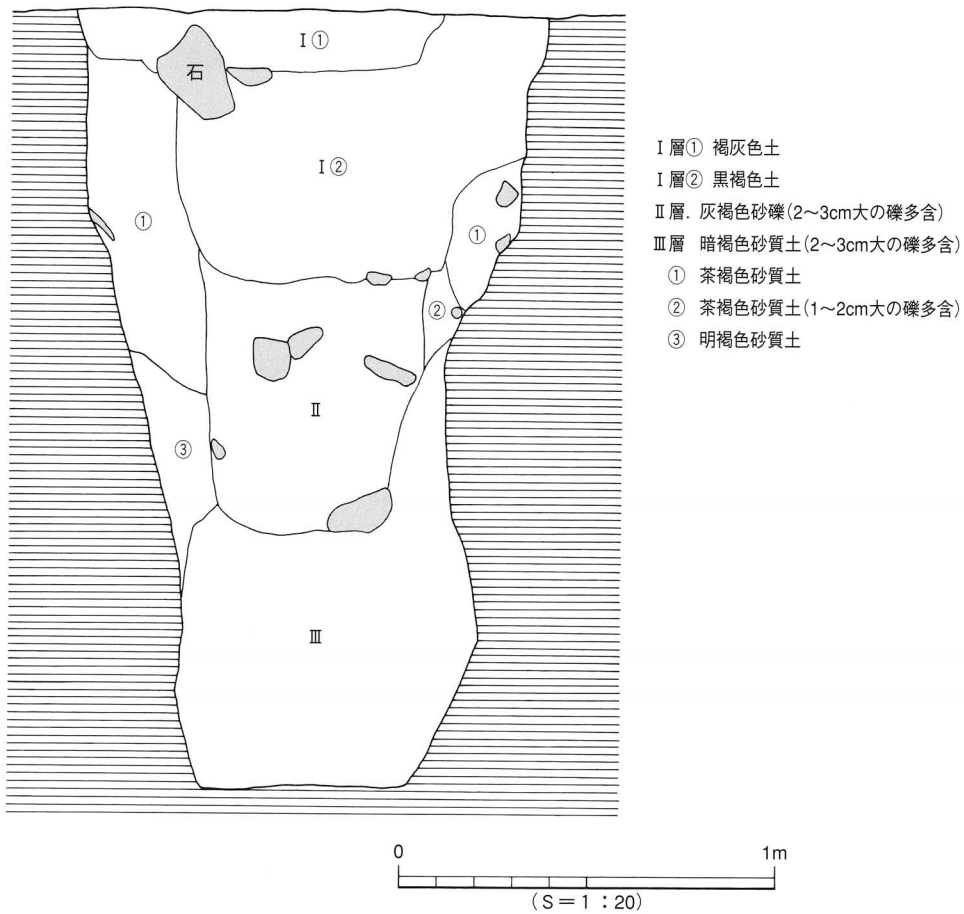
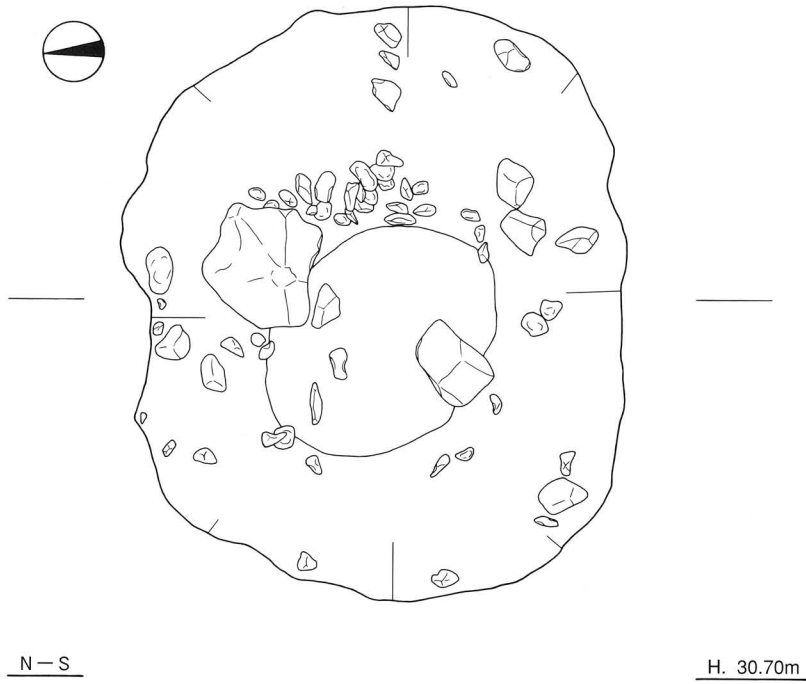
調査区南東部のF1~2区に位置する。平面形は楕円形を呈し、規模は東西1.6m、南北1.3m、検出面よりの深さ2mを測る。井戸枠は円形で、径は0.4mである。井戸枠はI~III層の土壌で覆われていた。I層は5~10cmの円礫、II層は礫はなく、しまりの強い砂質土。III層は8~13cmの円礫からなる。基底面付近の内側では、壁面に貼り付いた状態で曲げ物の板材が薄く残存していた。井戸内は①~③層の土壌で埋まっている。遺物は①層からは20~40cm大の礫、III層からは陶磁器碗、平瓦、丸瓦、軒丸瓦片が出土している。

出土遺物 (第25図)

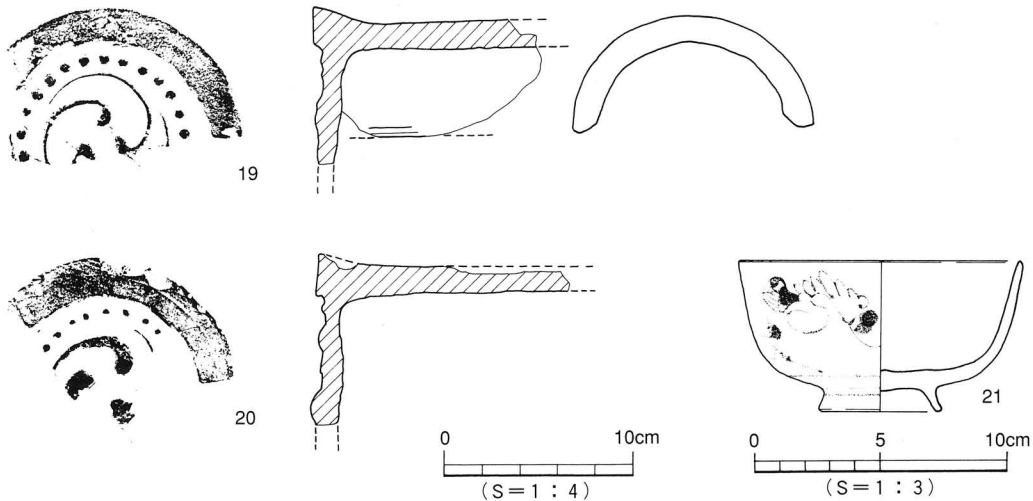
19・20は軒丸瓦である。いずれも三巴文で、連珠文と左三巴文の組み合わせとなる。珠文は丸く高い。尾部は離れている。丸瓦との接合は瓦当裏面に丸瓦を接合している。19の方が僅かに直径や珠文が大きく、巴は19の尾が細く伸び、20は幅広である。断面色調は、19が灰白色、20が淡黄灰白色で、焼成はやや軟質である。

21は磁器碗である。「ハ」の字状に細く外反した高台をもつ。外面胴部に染め付けの草花文が施されている。

遺構と遺物



第24図 SE01測量図



第25図 SE01出土遺物実測図

時期：江戸時代後期

S D 0 1 (第19図)

調査区中央南側のE3～G3区に位置し、南北方向に走る。南北端は調査区外に延びる。断面形態は皿状を呈し、上場幅1.4～3.7m、検出長7.9m、検出面よりの深さ6～10cmを測る。溝床は平坦である。埋土は褐灰色土である。出土遺物は陶器碗、外面の煤けた土師質の胴部片、焼成の甘い瓦片が出土している。

出土遺物 (第26図)

22は土師皿で、回転糸切り痕の残る底部をもつ。

時期：江戸時代後期

S D 0 2 (第19図)

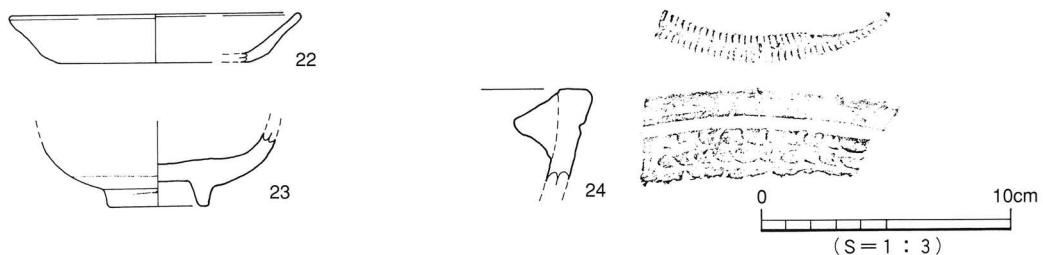
調査区北西部のE4～E6区に位置し、S D 0 3 に並行し東西に走る。断面形態はレンズ状を呈し、検出長7.8m、検出面よりの深さ17cmを測る。埋土は灰褐色土である。出土遺物は陶磁器碗、土師器片が出土している。

出土遺物 (第26図)

23は磁器碗である。下胴部と高台に1条づつ染め付けが施されている。高台に砂目痕が残る。

24は瓦質の風炉である。口縁端部内面には断面三角形の受部を貼り付けている。口縁外面には1条の凹線が施され、その下にはヘラ状工具による模様を施す。

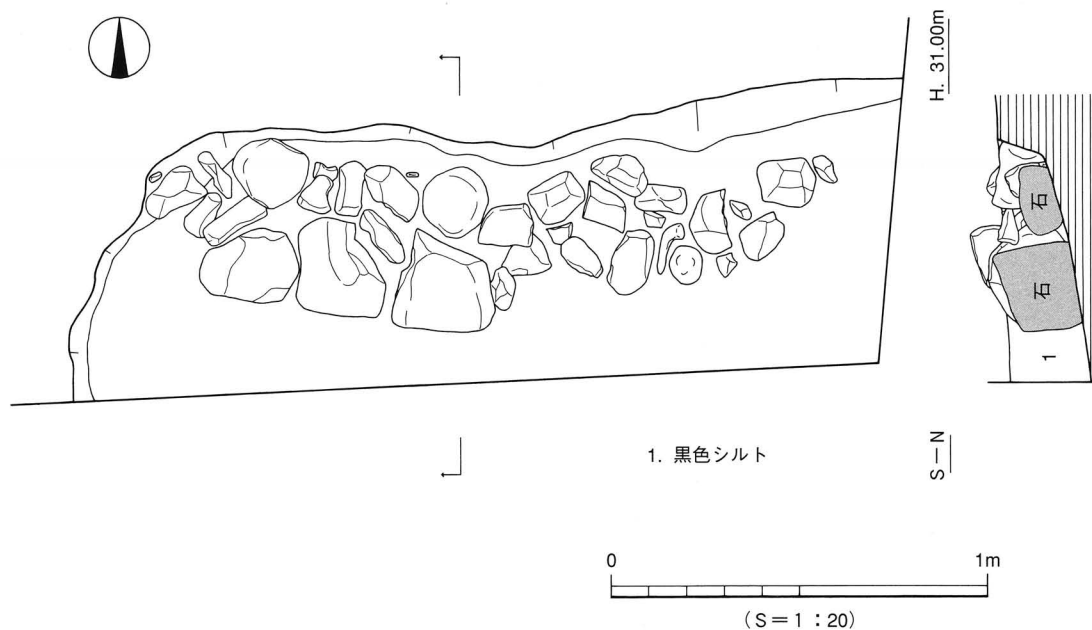
時期：江戸時代後期



第26図 SD01・02 出土遺物実測図

SK04 (第27図)

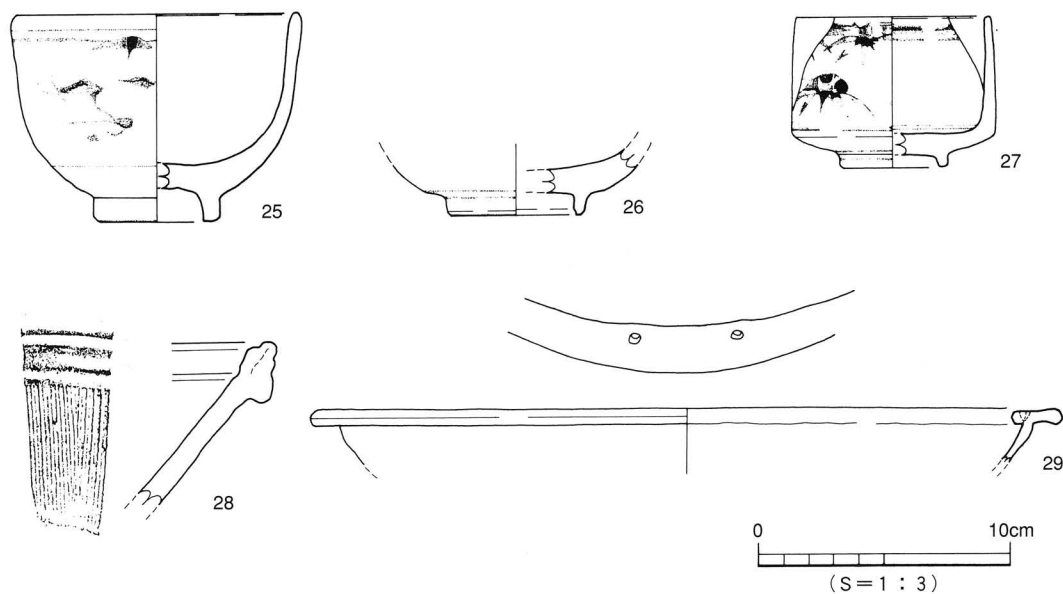
調査区南東隅のE3区に位置し、SB1と円形周溝状遺構を切っている。平面形態は北西部に隅丸のコーナーを検出しているが全容は不明である。床面は南側が下がってる。掘り方の東・南側は調査区外に延びる。規模は検出長2.3m、深さ0.23m、検出面よりの深さ約0.2mを測る。埋土は黑色シルトである。遺構内からは、拳大から人頭大の礫が密集して検出された。遺物は、土師器・瓦片が礫に混じり出土している。



第27図 SK04測量図

出土遺物 (第28図)

25～27は磁器碗である。25は外面に染付草文が施される。25・26は高台に砂目痕がある。27は外面に染付笹文が描かれ、内面見込み部にコンニャク版痕あり。



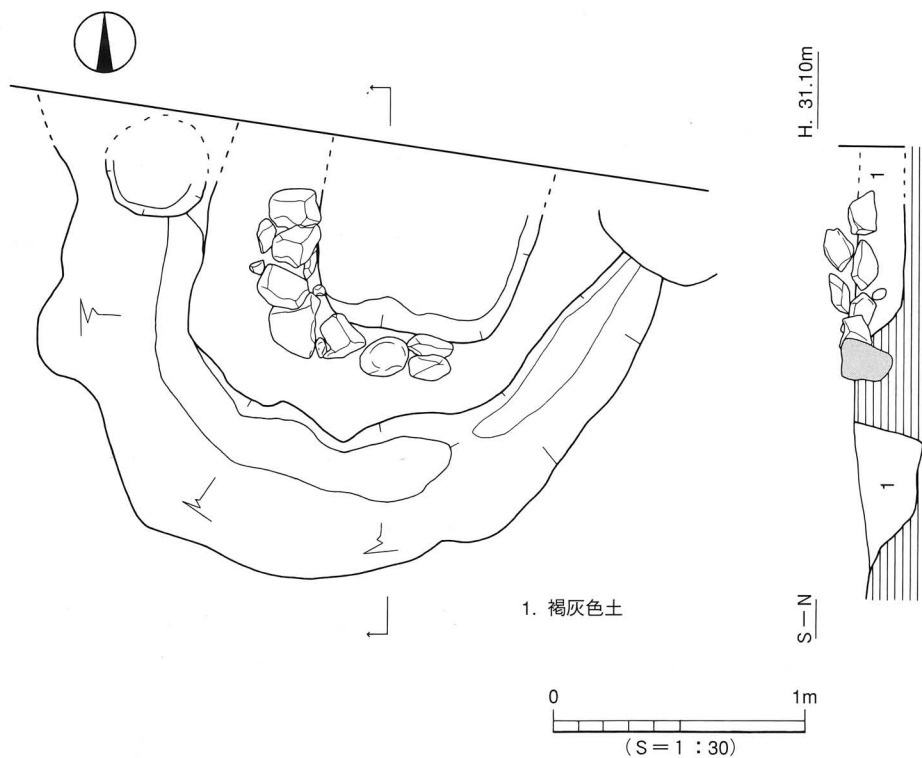
第28図 SK04出土遺物実測図

28は備前焼のすり鉢である。口縁端部が下方方向に拡張され、2条の凹線をもつ。内面に放射線櫛描き条痕を施す。

29は土師質の内耳付き鍋である。口縁端部が外方向にのび、内耳に未完通の穿孔が施されている。外面が煤けている。

SK010 (第29図)

調査区北端のB2区に位置する。規模は東西2.2m、南北1.8m以上、検出面より深さ0.3mを測る。13~20cmの礫がL字形に積まれている。周囲には、掘り込みを巡らせている。掘り込みの斜面は外側が緩やかで、内側は急傾斜である。石積み内からは瓦片が出土している。



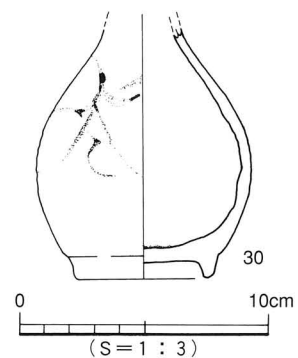
第29図 SK010測量図

採掘坑1 (第19図)

調査区南端のF4~G5区に位置し、南側は調査区外へ延びる。試掘溝に切られ、北コーナー部は一部不明である。平面形態は隅丸方形で、北辺の約2/3は緩やかに湾曲している。規模は東西5.2m、南北2.6m以上、検出面よりの深さ0.7mを測る。床面は平坦で、壁は垂直に立ち上がる。埋土は褐灰色土で、床面には薄く黒褐色粘質土が堆積する。出土遺物は、上層から中層の間に土師器の細片と磁器片が出土する。

出土遺物 (第30図)

30は磁器の徳利である。下底部は輪高台で、胴下半部は膨らんでいる。胴部外面には染め付け草文が施される。



第30図 採掘坑1 出土遺物実測図

時期：江戸時代後期

採掘坑2（第19図）

調査区南西部のB5～E5区に位置する。南端はS D03に切られており、西側は調査区外に延びる。検出長は南北15m、東西4.8m以上、検出面よりの深さ1.2mを測る。床面は平坦であり、C5区には10～20cmの礫が密集して検出された。埋土は3層にわかれる。上層は地山の造成土である橙色シルトに黒褐色シルトが多く含まれ、中層は黄灰色シルトに黒褐色シルトが混じり、下層は黄灰色土となる。遺物は、主に下層から陶磁器・瓦片が出土する。

時期：江戸時代後期

採掘坑3（第19図）

調査区南西部のC2～E3区に位置する。円形周溝状遺構を切り、S K 0 4に切られている。規模は南北7.7m以上、東西3.5m、検出面よりの深さ0.5mを測る。床面は平坦で、壁体は垂直に立ち上がる。埋土は、にぶい黄橙色土に黒灰土が混じる土壌である。

出土遺物（第31図）

31は土師質の羽釜である。口縁部が内湾しており、外方向にのびる鏝をもつ。

32は備前焼のすり鉢である。口縁部上面が上下方向に拡張される。内面に放射線櫛描条痕を施す。

時期：江戸時代後期

採掘坑4（第19図）

調査区東側C1～C2区に位置し、東端は調査区外に延びる。規模は東西1.7m以上、南北3.5m、検出面よりの深さ0.3mを測る。床面は平坦で、北端には円形の凹みをもち、壁体は垂直に立ち上がる。埋土は、にぶい黄橙色土に黒灰土が混じる土壌である。床面からは拳大の礫に混じり土師器・磁器片等が出土する。

出土遺物（第31図）

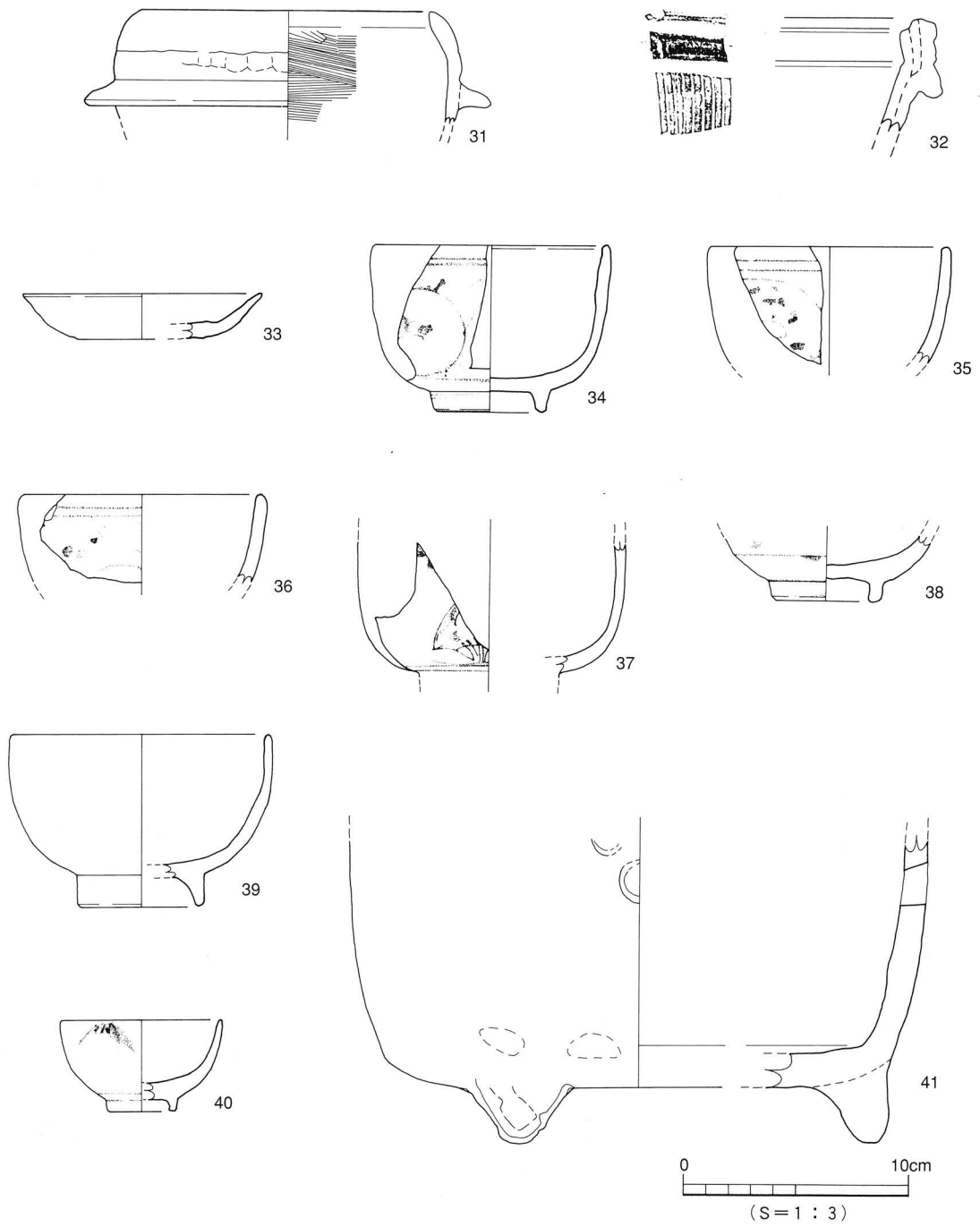
33は土師器皿である。平底の底部より内湾気味に立ち上がり口縁部が外反する。底部に回転糸切り痕がみられる。

34～39は磁器碗であり、ほとんどが胴部は内湾気味である。34～38は外面に染付草文が描かれている。34は高台に砂目痕をもつ。

40は猪口である。外面に染付笹文を施しており、高台に砂目痕をもつ。

41は瓦質の火鉢である。底部に短脚が付けられており、胴部に円孔が施される。内面は煤けている。

時期：江戸時代後期



第31図 採掘坑3・4出土遺物実測図

5 小 結

今回の調査では、弥生時代後期から近世までの遺構と遺物、さらにはA T火山灰を検出した。

東本遺跡で検出されたA T火山灰は、当地にまでおよぶことが確認された。A T火山灰は調査区の全域において堆積がみられるが、近現代の耕作により削平を受け消失していた。

弥生時代遺構には、円形周溝状遺構と竪穴住居址を検出している。円形周溝状遺構は楕円形を呈し、周溝内からは完形に近い土器が数点出土した。本遺溝の性格を解明することは難しいが、平野には検出例が数基ある（第7章）。

竪穴式住居址S B 1は四角形で4本の支柱穴をもつ。これは弥生時代の後期、特に終末期に類例が多いものである。これらの遺構から、東本地区で検出された弥生時代後期の集落は本調査地に及ぶことを確認した。

近世では、井戸や竈施設が検出されており、周辺に建物跡の存在が窺える。井戸の上層より出土した大きな石は、井戸を埋める時に土砂と一緒に埋没させたものと考えられるものである。また、調査区全域の至るところに掘られている粘土の採掘坑は、その殆どが垂直に掘られ、ほぼ平坦になる。埋土は遺物包含層の黒褐色土と地山層が混入する土壌であり、地山直上に遺物包含層が堆積していたことが窺える。

今回の調査では、調査地に一帯に弥生時代後期の集落が展開していることが判明した。今後は、集落の詳細な分析を行うことが課題となる。

参考文献

- 梅木謙一 1992 『桑原地区の遺跡』（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
 1994 『桑原地区の遺跡Ⅱ』（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
 1991 『松山大学構内遺跡』松山市教育委員会
 岡田敏彦 1990 『桑原住宅埋蔵文化財調査報告—桑原稲葉遺跡』（財）愛媛県埋蔵文化財センター
 宮本一夫 1989 『鷹子・樽味遺跡の調査』愛媛大学埋蔵文化財研究室
 田崎博之 1993 『樽味遺跡Ⅱ』愛媛大学埋蔵文化財研究室
 高尾和長 1996 『東本遺跡4次調査・枝松遺跡4次調査』（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
 岸郁男・長井数秋・大山正風 1973 『釜ノ口遺跡調査報告書』松山市教育委員会

遺構・遺物一覧（河野史知）

（1）以下の表は、本調査検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。

（2）遺構の一覧表中の出土遺物欄の略号について。

例）弥生→弥生土器、土師→土師器、須恵→須恵器、陶磁→陶器・磁器。

（3）遺物観察表の各記載について。

法量欄（ ）：復元推定値

形態・施文欄 土器の各部位名称を略記。例）口→口縁部、頸→頸部、胴上→胴部上位。

胎土・焼成欄 胎土欄では混和剤を略記した。例）砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土。（ ）中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例）砂・長（1~4）→「1~4mm大の砂粒・長石を含む」である。

焼成欄の略号について。◎→良好、○→良、△→不良

表8 竪穴式住居址一覧

竪穴 (SB)	時 期	平 面 形	規 模 長さ(長径)×幅(短径)×深さ(m)	主柱穴 (本)	内 部 施 設				周 壁 溝	備 考
					高床	土坑	炉	カマド		
1	弥生後期末	方 形	4.4×4.2×0.15	4					○	周溝1を切る。

表9 土坑一覧

土坑 (SK)	地 区	平 面 形	断 面 形	規 模 長さ×幅×深さ (m)	埋 土	出土遺物	時 期	備 考
01	G1~2	半 円	逆台形状	0.9×0.7×0.25	にぶい黄褐色土	土師器・陶器・瓦	近 世	
02	G2	半楕円	逆台形状	1.2×0.8×0.53	褐灰色土	土師器・陶器	近 世	
03	F2	楕 円	皿 状	1.3×0.8×0.07	褐灰色土	土師器	近 世	
04	E3~4	隅 丸	皿 状	2.3×0.75×0.23	黒色土	土師器・磁器	近 世	
05	C3	半 円	逆台形状	1.4×0.7×0.1	暗灰黄色土	瓦	近 世	
06	AB3	方 形	皿 状	1.6×0.9×0.05	黒褐色土		不 明	
07	B4	円	逆台形状	1.4×1.4×0.43	暗褐色土		不 明	
08	A5	円	逆台形状	1.6×1.5×0.42	暗褐色土	土師器・陶器	近 世	
09	B3	円	舟底状	0.9×0.85×0.15	褐灰色土		近 世	
010	AB2	方 形	逆台形状	2.2×1.8×0.3	褐灰色土	瓦	近 世	
011	B3	半楕円	皿 状	1.3×0.6×0.1	暗褐色土		不 明	
012	B2	円	逆台形状	2.2×1.9×0.4	灰黄褐色土	陶 器	近 世	

表10 溝一覧

溝 (SD)	地 区	断 面 形	規 模 長さ×幅×深さ (m)	埋 土	出土遺物	時 期	備 考
01	E3~G3	皿状	7.9×3.7×0.1	褐灰色土	土師・陶器	近 世	基底面よりSX01検出
02	F3~5	レンズ状	8.7×1.2×0.17	褐灰色土	陶磁器	近 世	SD03を切る
03	E4~5	レンズ状	7.8×1.1×0.16	褐灰色土		近 世	
04	E3~4	レンズ状	2.3×0.4×0.08	褐灰色土		近 世	
05	B3~C3	レンズ状	3.5×0.9×0.07	褐灰色土	陶磁器	近 世	
06	B4	レンズ状	2.5×0.3×0.05	灰黄褐色土		近 世	

表11 SB1出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形 態・施 文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
1	甕	底径 3.7 残高 2.4	平底の底部より外反気味にたちあがる。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	橙色 橙色	石・長(1~3) ○		
2	壺	口径(11.8) 残高 5.1	内湾してたちあがる口縁部。	ハケ目(10~12本/cm)	ハケ目(8~9本/cm)	明赤褐色 橙色	石・長(1~2) ○		
3	壺	口径(16.2) 残高 5.1	複合口縁壺。接合部は突出し外面に1条凹線が巡る。	ヨコナデ	ヨコナデ	橙色 橙色	石・長(1~4) ○		15
4	鉢	口径(16.3) 残高 3.8	平底の底部より内湾気味に大きく開き、口縁端部は斜めに面をなす。	ハケ目(6~10本/cm)	ハケ目(5~9本/cm)	橙色 にぶい黄褐色	石・長(1~4) ○		15
5	鉢	口径(10.6) 器高 8.4 底径 3.1	平底の底部より内湾気味の胴部に口縁端部は尖る。	ハケ目(7本/cm)	ナデ	橙色 橙色	石・長(1~4) ○		15
6	鉢	口径 9.5 残高 5.4	内湾した胴部より口縁部は外反する手づくね。	㊦ナデ ハケ目(8本/cm)	㊦ハケ ㊦ナデ	橙色 黒色	石・長(1~2) ○		

出土遺物観察表

表12 円形周溝状遺構出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
7	甕	口径(13.4) 器高19.4 底径3.0	底部は上げ底で、肩部がわずかに張り、最大径は胴部上位にある。	ハケ目(7~9本/cm)	ハケ目(6~8本/cm)	灰褐色 にぶい橙色	石・長(1~3) ○		15
8	甕	口径(14.5) 残高6.6	稜をもって折れ曲る。口縁部をもつ。	ハケ(11~12本/cm)	ハケ(7~11本/cm)	にぶい黄褐色	石・長(1~3) ○		15
9	甕	底径1.6 残高9.9	平底の底部より口縁部は外傾する。	ハケ(5本/cm)	ハケ(5本/cm)	明赤褐色 にぶい黄褐色	石・長(1~4) ○		
10	甕	底径2.8 残高2.0	平底の底部である。	ナデ	ハケ	橙色	石・長(1~4) ○		15
11	壺	残高3.6	複合口縁壺。波状文(6)。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい黄褐色 にぶい橙色	石・長(1~3) ○		15
12	壺	残高4.0	複合口縁壺。波状文(6)。	ハケ(10本/cm)	ハケ(13~14本/cm)	橙色 浅黄褐色	石・長(1~2)		
13	壺	残高11.4	肩部が張り、球形の胴部。	ハケ(10~15本/cm)	ハケ(7~12本/cm)	橙色 にぶい黄褐色	石・長(1~4)		
14	壺	残高5.1	直立する頸部をもつ。	ハケ(12本/cm)	ハケ(4~5本/cm)	橙色 にぶい黄褐色	石・長(1~3)		
15	壺	底径3.6 残高	厚めの平底に内湾してたちあがる胴部をもつ。	ハケ(14本/cm)	ナデ(指頭痕)	灰黄褐色 褐灰色	石・長(1~4)		
16	壺	底径2.4 残高3.9	上げ底の底部に内湾する胴部をもつ。	ハケ(13本/cm)	ハケ(6~7本/cm)	にぶい黄褐色 黒褐色	石・長(1~2)		
17	鉢	口径(13.5) 残高4.4	外傾した胴部より口縁部が外反する。	ハケ(5~7本/cm)	ハケ(5~7本/cm)	にぶい褐色 褐灰色	石・長(1~2)		
18	鉢	口径14.2 器高10.7 底径4.4	やや厚めの底部より内湾する胴部をもち、口縁端部は面をなす。	ハケ(7~8本/cm)	ハケ(5~13本/cm)	赤褐色 明赤褐色	石・長(1~3)		15

表13 SE01 出土遺物観察表 軒丸瓦

番号	直径・厚さ(cm)	内区(cm)				外区(cm)			周縁(cm)	
		径	巴卷	巴長	巴頭径	幅	珠数	珠径	幅	高さ
19	14.4・1.5	67	左	39	12~14	15.5	S26	0.5	21	5
20	13.7・1.4	55	左	36	14	15.5	S28	0.4	22.5	5

表14 SE01 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
21	碗	口径(11.0) 器高5.95 高台径4.65	「ハ」の字状に外反した高台染付の草文	施釉	施釉	明緑灰色	密 ◎		16

表15 SD01・02 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
22	皿	口径(11.4) 器高1.9 底径(7.5)	底部に回転糸切り痕。	ヨコナデ	ヨコナデ	淡橙色	密 ○		
23	碗	残高2.8 高台径3.9	下胴部、高台に染付がみられる。高台に砂目痕あり。	施釉	施釉	灰色	密 ◎		
24	風炉	口径(21.0) 残高4.9	口縁外面に一条の凹線、その下にヘラ状工具による模様。	回転ナデ	回転ナデ	暗灰色	○		17

枝松遺跡 5次調査

表16 SK04出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
25	碗	口径(11.0) 器高 8.2 高台径 4.8	外面に染付草文が施されている。 高台に砂目痕。	施釉	施釉	灰オリーブ色	密 ◎		16
26	碗	残高 2.5 高台径 5.2	高台上に2条の染付。高台に砂目痕あり。	施釉	施釉	灰色	密 ◎		
27	碗	口径(7.6) 器高 5.95 高台径(4.05)	外面に笹文様の染付。内面見込み部にコンニャク版。	施釉	施釉	淡黄灰色	密 ◎		16
28	播鉢	残高 8.55	口縁上面が下方向に拡張される。 2条の凹線。	ナデ	ヨコナデ	暗赤褐色	長・石(1~4) ◎		16
29	土鍋	口径 3.96 残高 3.8	口縁端部が外にのびる。内耳未通の穿穴をもつ。	ナデ	ヨコナデ	黒褐色 茶褐色	長(1~2) ○		16

表17 採掘坑1・3・4 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
30	徳利	残高 9.9 高台径5.0	染付の草文が施されている。	施釉	回転ナデ	灰白色	密 ◎		17
31	羽釜	口径 12.7 残高 4.9	口縁部が内湾しており、外方向にのびる鑊をもつ。	ナデ	㊦ヨコナデ ㊧ハケ目8本~9本/cm	灰褐色 灰色	長(1~2) ◎		17
32	播鉢	口径 30.4 残高 5.0	口縁上面が上下に拡張される。	ヨコナデ	ヨコナデ	赤褐色	長(1) ◎		
33	皿	口径(10.4) 器高 2.0 底径 5.6	平底の底部より内湾気味にたちあがり口縁部が外反する底部は回転糸切り。	ヨコナデ	ヨコナデ	明橙色	長(1) ○		
34	碗	口径(10.4) 器高 7.36 高台径4.6	外面に染付草文が施される。高台に砂目痕あり。	施釉	施釉	明青灰色	密 ◎		
35	碗	口径 10.4 残高 5.18	口縁外面に2重線が周る。 染付草文碗。	施釉	施釉		密 ◎		
36	碗	口径(10.4) 残高 3.9	外面に染付草文あり。 口縁に2条の染付が周る。	施釉	施釉		密 ◎		
37	碗	残高 5.9	外面に染付草文を施す。	施釉	施釉	灰色	密 ◎		
38	碗	口径(13.4) 器高 7.58 高台径 (5.2)	細くのびた高台に胴部は内湾師口縁端部は丸くおさめる。	施釉	施釉		密 ◎		
39	碗	残高 2.98 高台径 4.4	内傾気味の高台に、内湾する胴部をもつ。	施釉	施釉		密 ◎		
40	猪口	口径 7.0 器高 4.02 高台径 2.9	外面口縁部に染付笹文。高台に砂目痕あり。	施釉	施釉	明緑灰色	密 ◎		17
41	火鉢	残高 17.9 底径(30.0)	平底の底部に短脚が貼付けられ内湾気味の胴部に円孔がみられる。	指頭痕		黒灰色 灰黄色	石・長(1~3) ○		17

第4章

タル ミ タカ ギ
樽味高木遺跡

— 4 次調査地 —

第4章 樽味高木遺跡4次調査地

1. 調査の経過

(1) 調査に至る経過

1995(平成7)年5月9日、浅川純男氏より松山市樽味2丁目278番1・5における宅地開発にあたって、当該地の埋蔵文化財の確認願いが松山市教育委員会文化教育課(以下、文化教育課)に提出された。

確認願いが提出された松山市樽味2丁目278番1・5は、松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地『81 樽味遺物包含地』内にある。周辺地域では以前より調査が実施されており、当地一帯は周知の遺跡として知られている。

同包含地内ではこれまでに樽味遺跡(愛大農学部)をはじめ、樽味四反地遺跡、樽味立添遺跡、樽味高木遺跡1～3次調査など数多くの調査が行われ、弥生時代から中世までの遺構や遺物が多数検出されており、集落の存在が明らかになりつつある。特に、北東約150mの樽味立添遺跡では、中国の古代貨幣である『貨泉』が出土している。また、南方約40mの樽味高木遺跡3次調査では「船」を描いた線刻画土器が出土している。

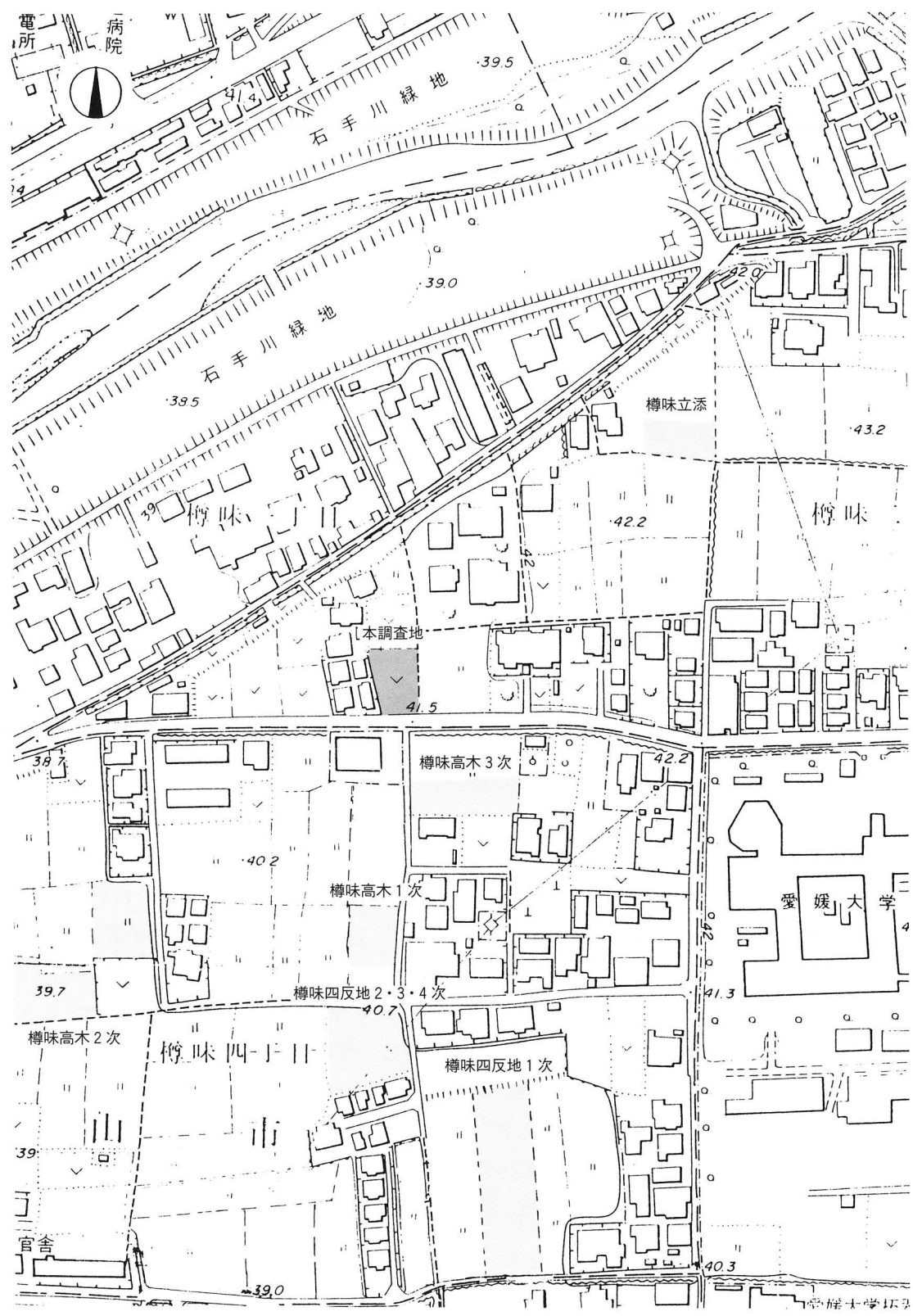
これらのことから当該地における埋蔵文化財の有無と、さらには遺跡やその性格を確認するため、1995(平成7)年5月31日に文化教育課は試掘調査を実施した。試掘調査の結果、地表面下約0.3mより弥生土器・須恵器・土師器が出土し、弥生時代から近世までの遺構や遺物を確認した。

これらの結果を受け、文化教育課と地権者の両者は遺跡の取扱いについて協議を重ね、宅地開発によって失われる遺構・遺物について、記録保存のため発掘調査を実施することとなった。発掘調査は、樽味における集落展開の解明を主目的として実施した。

(2) 調査の経緯

1995(平成7)年10月11日、重機により表土剥ぎ取り作業を行い、排土はプレハブ設置のための造成にあてた。また、第Ⅲ層までの掘り下げを開始する。10月12日、プレハブが設置される。10月16日、作業員を増員し、本格的な発掘作業を開始する。10月18日、近世遺構の検出写真を撮影し、近世遺構の掘り下げをする。10月23日、近世遺構の調査を完了し、古代の自然流路SR3の調査を開始する。11月1日、SR3を完掘する。基底面からは2本の自然流路を検出する。11月15日、人力により北西隅を拡張する。11月30日、古墳時代と古代の遺構を完掘し、写真撮影をする。南側を拡張するため、排土を調査区の一部に埋め戻す。12月2日、重機により南側を拡張する。12月5日、本遺跡の国土座標を愛大農学部の3級基準点より、座標値をトラバース測量により求める(B・C-3・4グリット杭：X軸93,000.427、Y軸-65,475.781 第Ⅳ系)。12月11日、調査区内2ヶ所に、深掘りを行い、土層を観察する。本日にて現場での調査を完了する。12月13日、プレハブ解体。12月14日、重機による埋め戻し完了。

樽味高木遺跡4次調査地

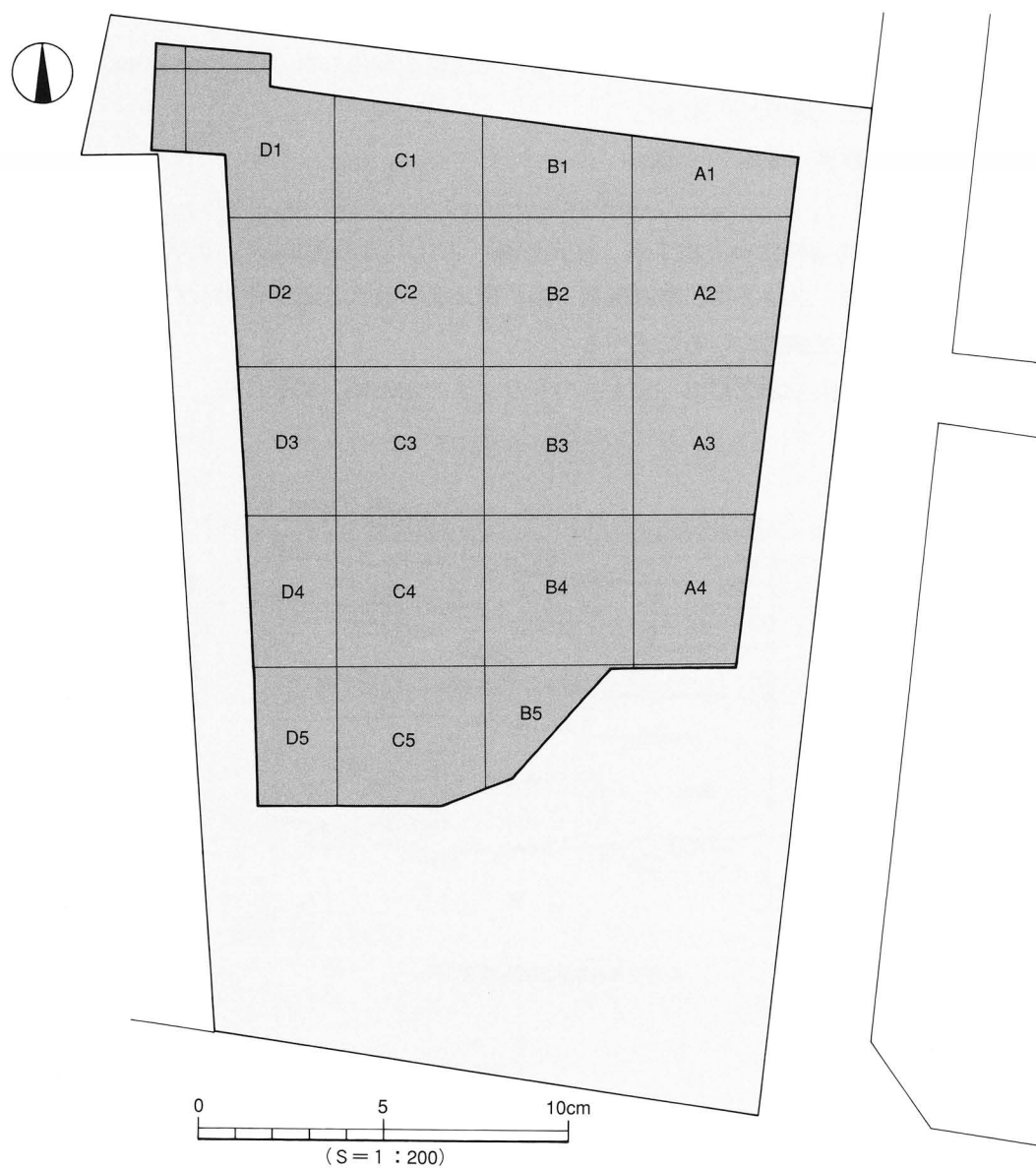


第32図 調査地位置図

(S=1:2,500)

(3) 調査組織

調査地 松山市樽味2丁目278番1・5
遺跡名 樽味高木遺跡4次調査地
調査期間 野外調査 1995(平成7)年10月11日～同年12月11日
屋内調査 1995(平成7)年12月12日～1996(平成8)年2月29日
調査面積 462m² (242m²)
調査委託 浅川 純男
調査担当 河野 史知・相原 秀仁



第33図 調査地区割図

調査作業員 池田 平、宇都宮東吾、大塚 隆重、岡本 克司、小磯 勝一、重松 恒彦、
篠崎 正記、中路 勝巳、二宮 和見、前田 伸哉、松本 幸正、藤田美恵子、
乗松 和枝、岡本 邦栄、真木 雅子

2. 層位 (第34~36図)

本遺跡は、石手川左岸の洪積世扇状地上、標高41m前後に立地する。調査以前は耕作地として使用していた。

基本層位は、第I層表土、第II層茶褐色土、第III層オリーブ灰色粘質土、第IV層黄灰色シルト、第V層明黄褐色砂質土、第VI層黄褐色細砂~オリーブ褐色粘質砂、第VII層褐色砂礫である。

第I層-近現代の農耕による客土である(層厚15~20cm)。

第II層-耕作に伴う床土である(層厚2~5cm)。

第III層-旧耕作土で、調査区南側を除く全域に薄く残存する(層厚4~12cm)。

第IV層-地山とよばれるものであり、この面において遺構を検出した(層厚18~30cm)。

第V層-明褐色砂質土(層厚10~20cm)。

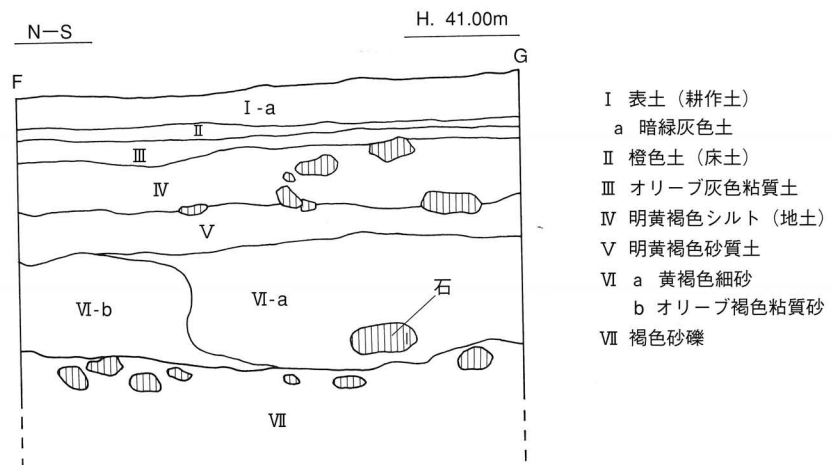
第VI層-細砂~粘質砂層(層厚35~55cm)。

第VII層-褐色砂礫。

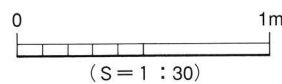
遺構は第IV層にて、古墳時代の土坑7基、柱穴12基、古代の自然流路3条、土坑6基、性格不明遺構1基、近世の柵列1条、土坑2基、集石遺構1基、溝4条、柱穴6基を検出した。

以下、時代ごとに主な遺構について記述する。

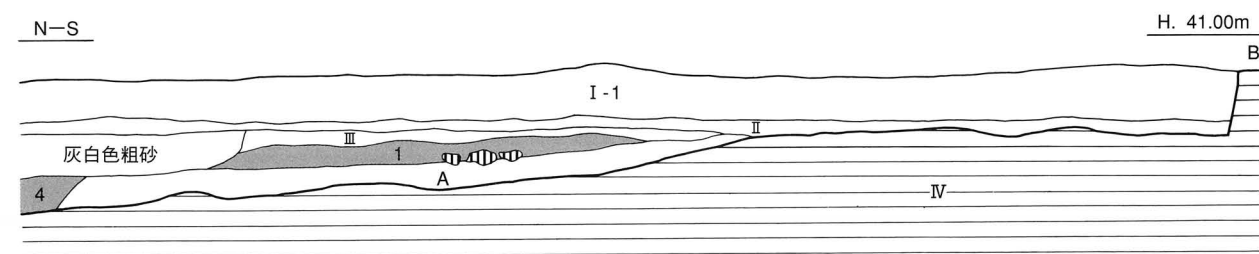
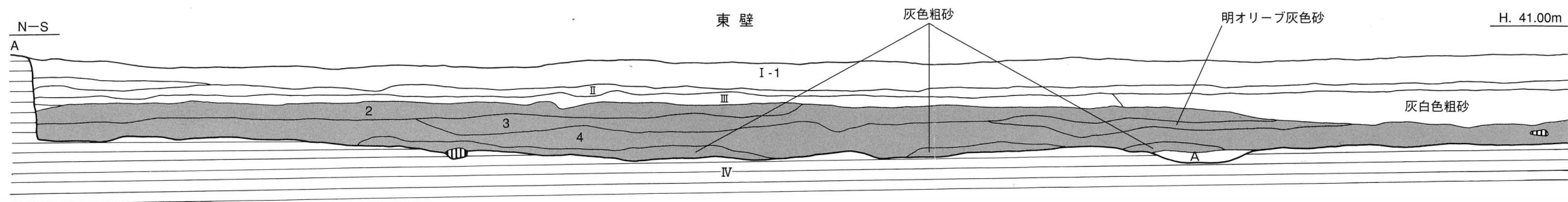
なお、調査では調査区内を磁北に沿って4mのグリット(第33図)に分けた。



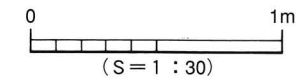
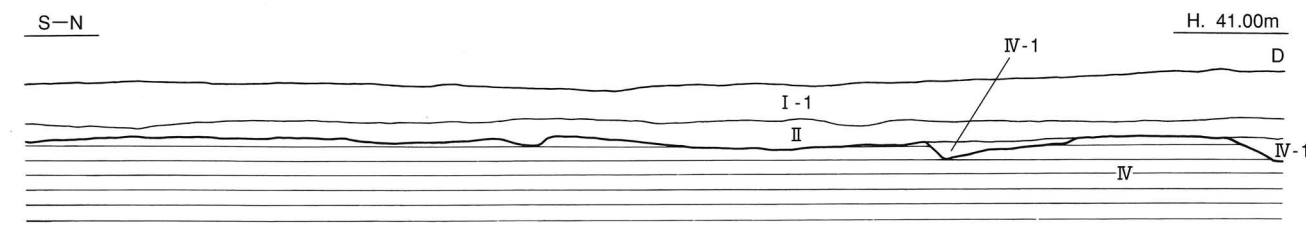
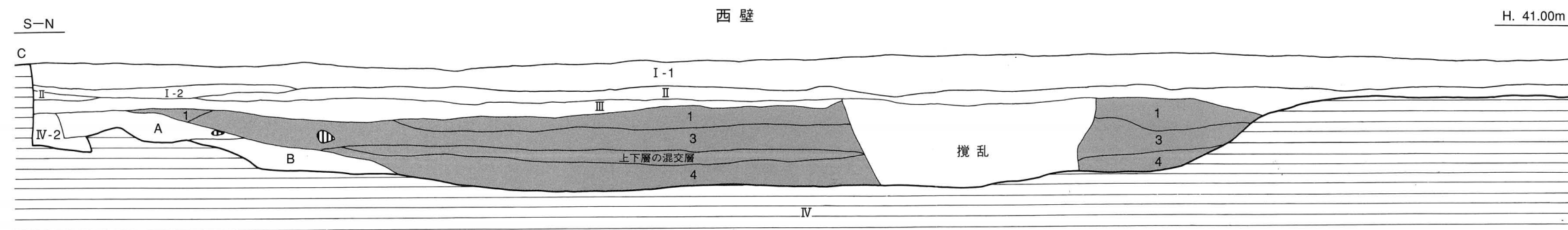
※F・G地点は第37図に記載した。



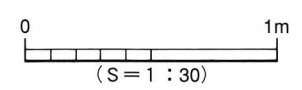
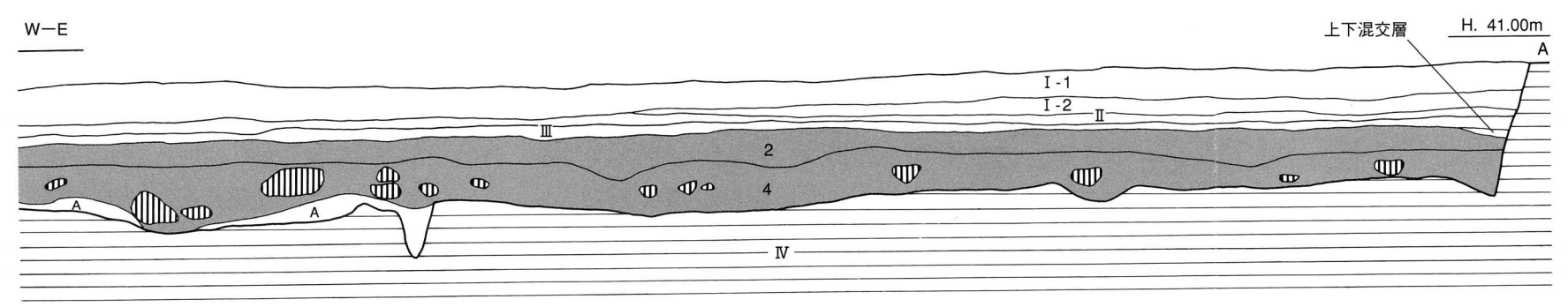
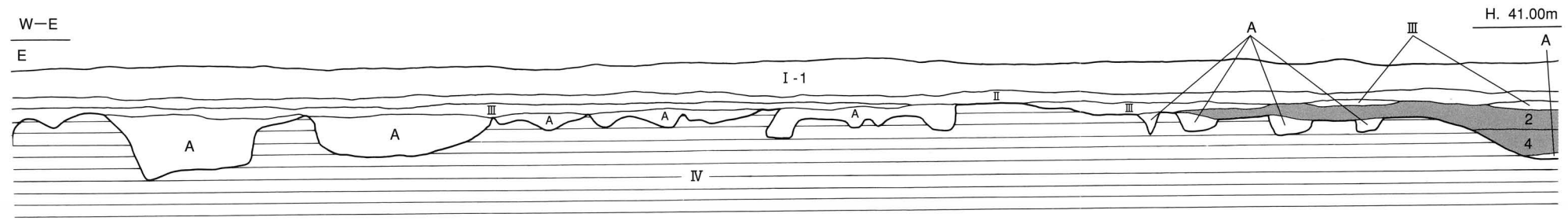
第34図 深掘トレンチ層位図(1)



- I 表土(耕作土)
 - 1. 暗緑灰色土
 - 2. 緑灰色土
 - II 橙色土(床土)
 - III オリブ灰色粘質土
 - IV 明黄褐色土(地山)
- 遺構埋土
- A. 黒褐色土
 - B. A層に褐色塊を多含する
- 石
- 河川埋土
- 1. 灰色砂質土
 - 2. 黄灰色粘質土
 - 3. オリブ灰色砂質土
 - 4. 青灰色砂質土



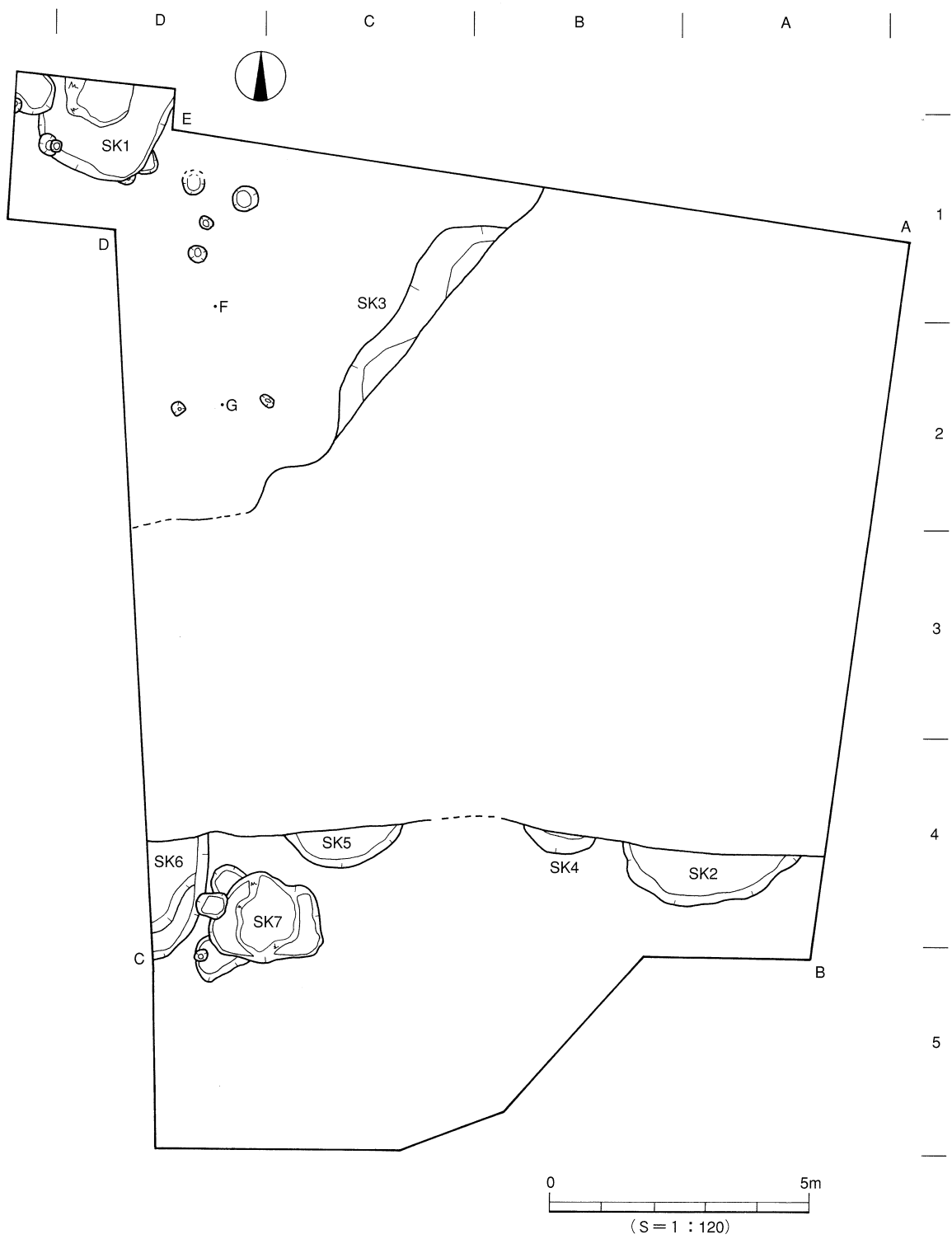
第35図 東・西壁層位図(2)



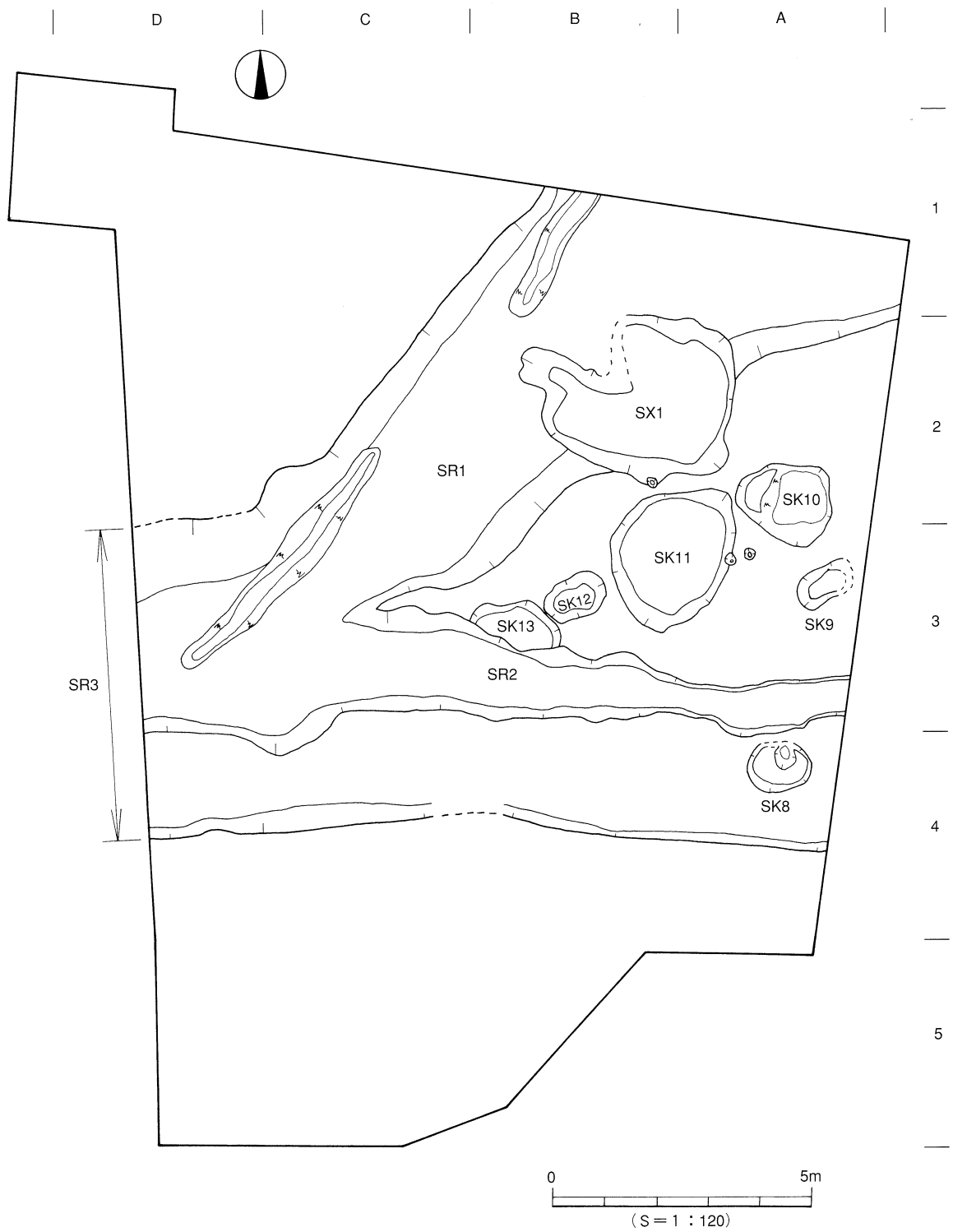
- | | |
|----------------|--------------|
| I 表土(耕作土) | 河川埋土 |
| -1. 暗緑灰色土 | 1. 灰色砂質土 |
| -2. 緑灰色土 | 2. 黄灰色粘質土 |
| II 橙色土(床土) | 3. オリーブ灰色砂質土 |
| III オリーブ灰色粘質土 | 4. 青灰色砂質土 |
| IV 明黄褐色土(地山) | |
| 遺構埋土 | |
| A. 黒褐色土 | 石 |
| B. A層に褐色塊を多含する | |

第36図 北壁層位図(3)

層 位

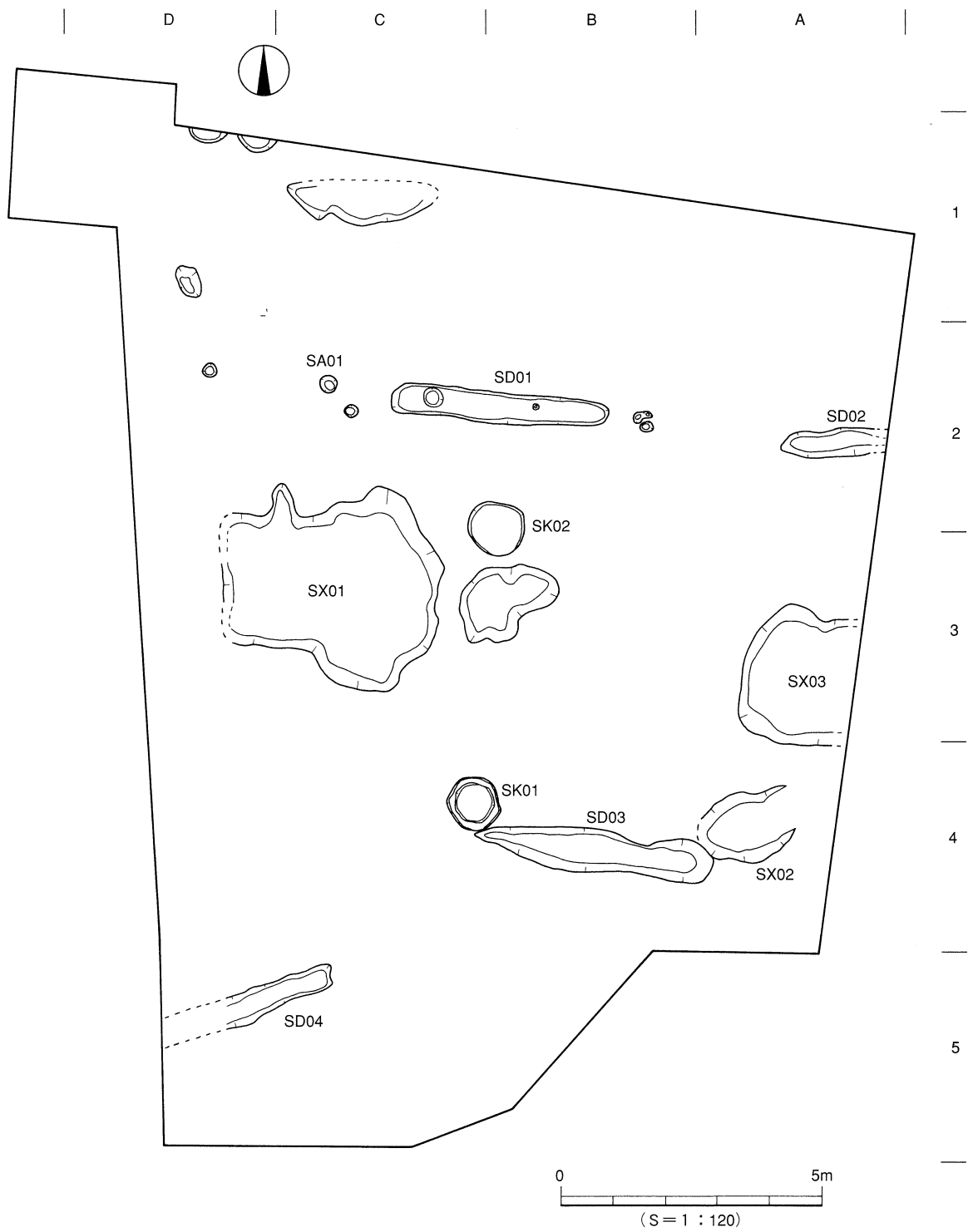


第37図 古墳時代の遺構配置図



第38図 古代遺構配置図

層 位



第39図 近世遺構配置図

3. 遺構と遺物

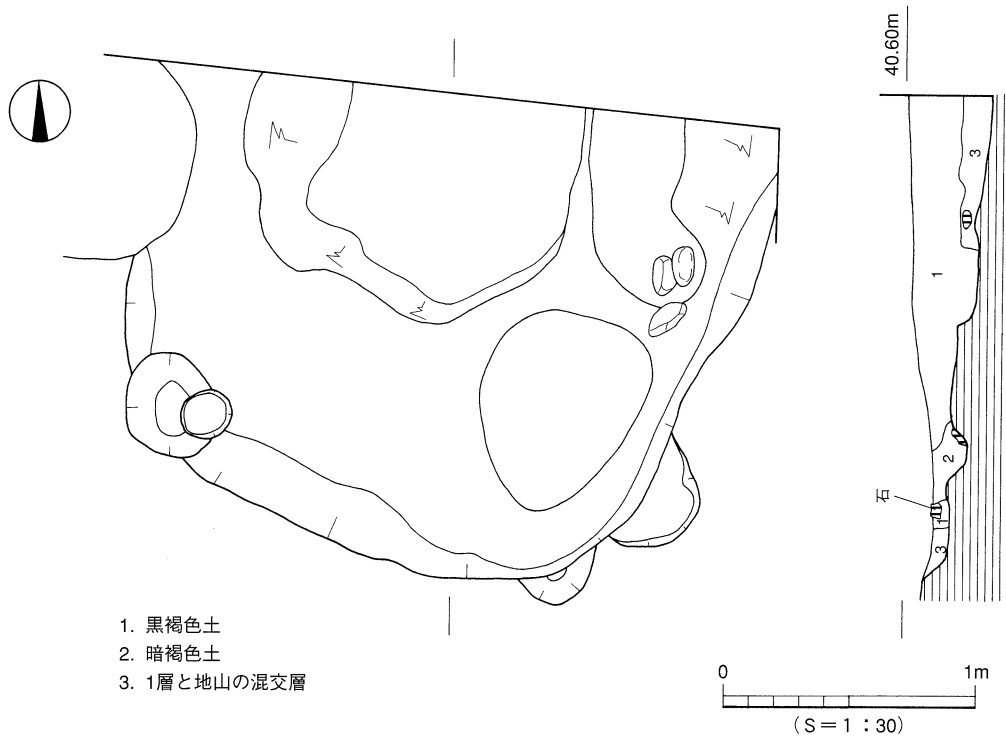
〔1〕古墳時代

SK 1 (第40図)

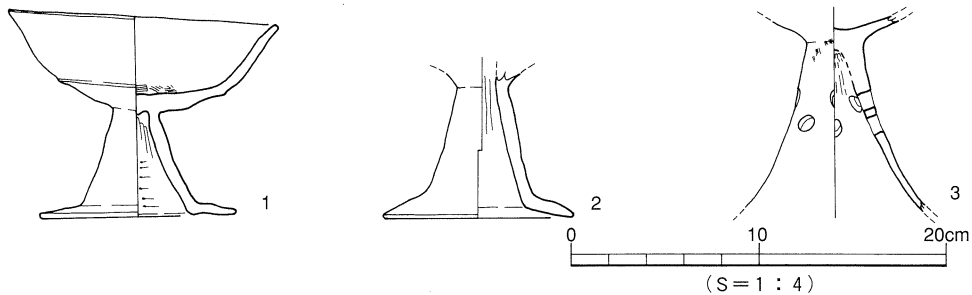
調査区北西隅のD0~1区に位置し、北半部は調査区外へのびる。平面形態の全容は不明であるが隅丸のコーナーをもつ方形と思われ、断面形態は逆台形状を呈している。規模は、長軸は2m以上、短軸は2.2m、検出面よりの深さは約0.2mを測る。主軸はS-30°-Wである。床面中央部は浅く凹んでおり、床面南東部は倒木痕と推測される掘り込みを検出した。埋土は黒褐色土である。出土遺物は弥生土器片に混じり、床面付近より、ほぼ完形の土師器の高杯が出土している。

出土遺物 (第41図)

1~3は高杯である。1は丸みをもつ坏部で、弱い段と外反する口縁部をもつ。脚部は、三角錘状を



第40図 SK1測量図



第41図 SK1出土遺物実測図

呈する柱部に、水平に開く裾部をもつ。脚柱裾部内面には稜をもち、柱部内面にはケズリ痕が看取される。3は柱部に2段の円孔の透かしをもつ。

時期：5世紀後半～6世紀初頭

SK 2 (第42図)

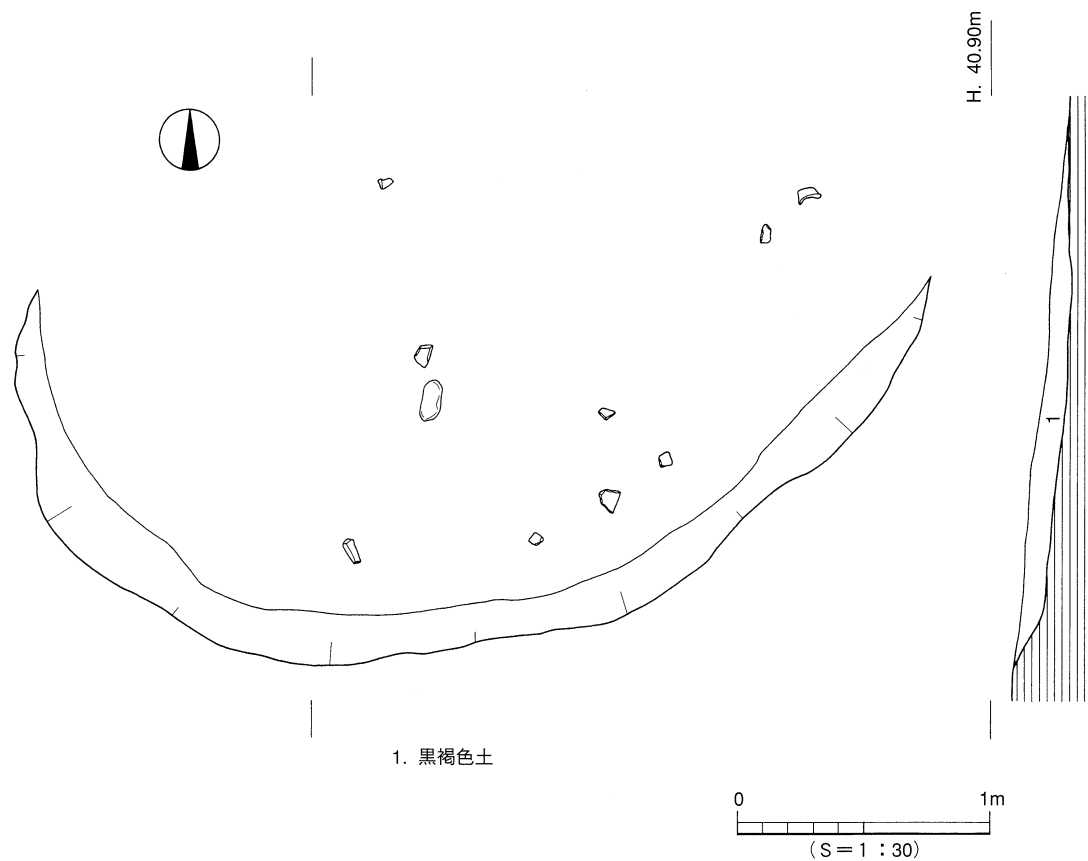
調査区南東部のA～B4区に位置する。SR 3に約2/3を切られた状態で検出した。平面形態は円形、断面形態は逆台形状を呈している。規模は推定直径約3.6m、検出面よりの深さは0.15mを測る。埋土は黒褐色土で、埋土からは約5～10cm大の円礫、須恵器底部と砥石・石斧が出土している。

出土遺物 (第43図)

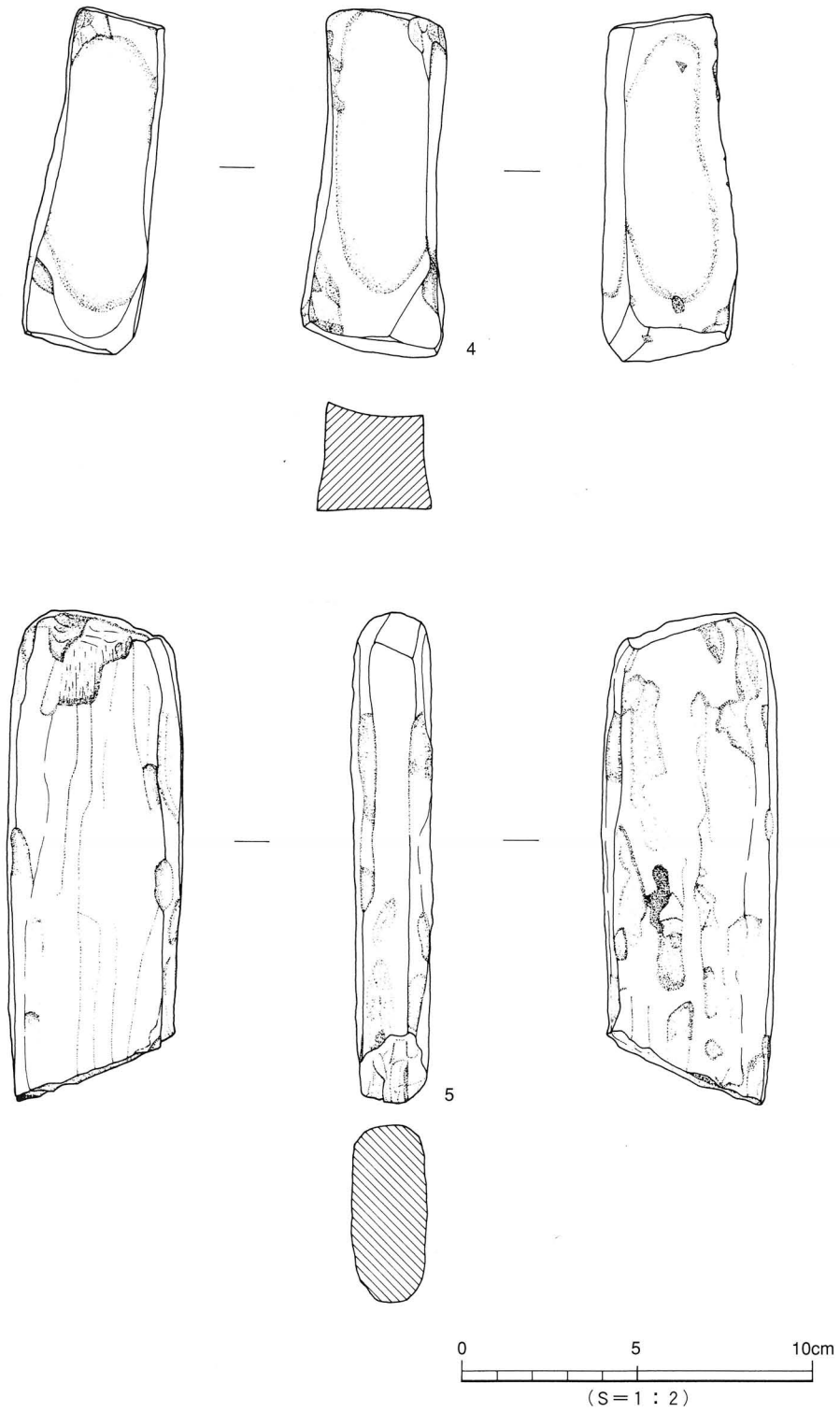
4は砥石の完形品である。形状は方柱状で、石材は砂岩製である。砥面は4面あり、いずれも長軸方向に平行して平面研磨された使用痕がみられる。

5は柱状片刃石斧の欠損品である。刃部が欠損しており、背部に研磨痕が残る。石材は緑泥片岩製である。

時期：6世紀以降



第42図 SK2測量図



第43図 SK2出土遺物実測図

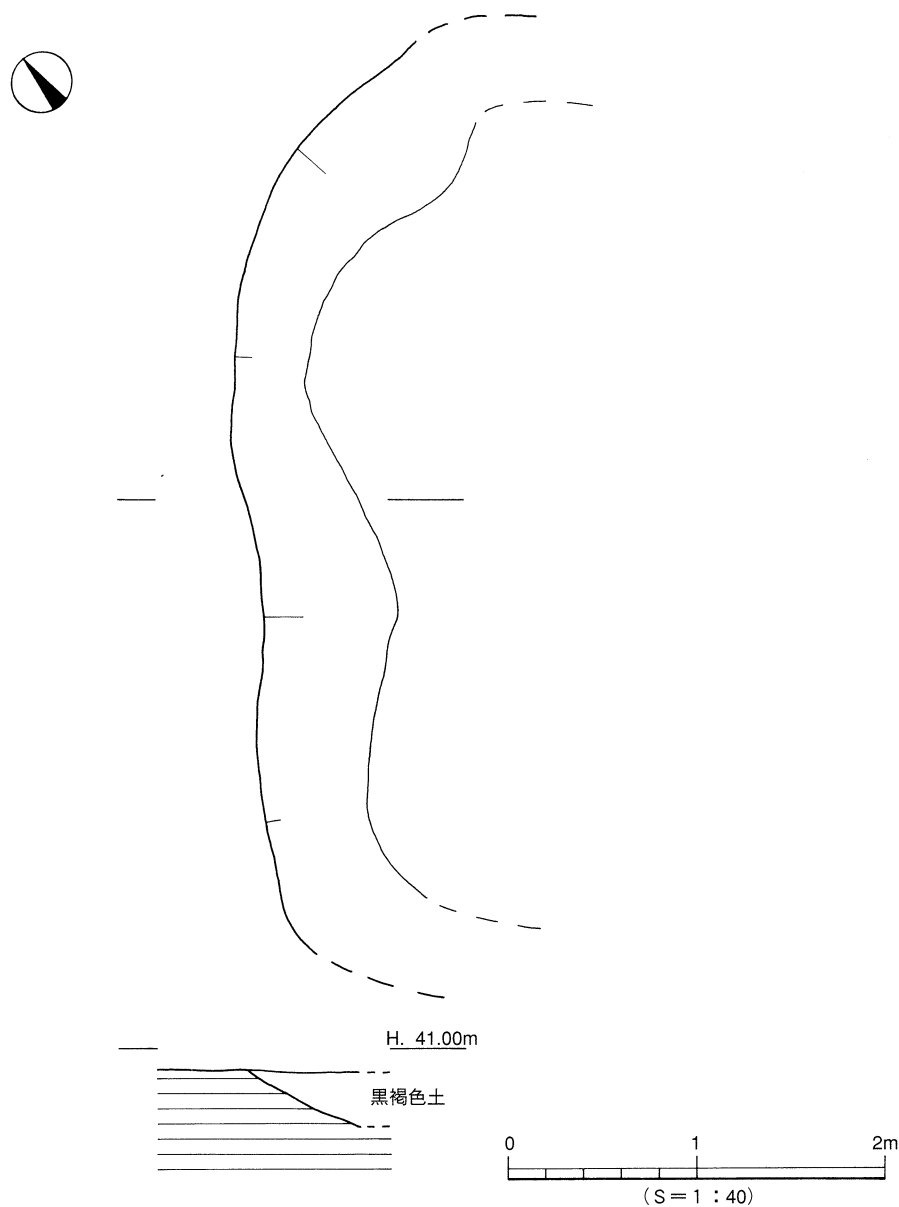
SK 3 (第44図)

調査区北西部のC1~2区に位置する。SR 3に殆どを切られており、北西部の一辺と角が残存している。平面形態は隅丸形を呈しており、壁体部は床面より急勾配に立ち上がる。規模は一辺が4m、検出面よりの深さは0.3mを測る。埋土は黒褐色土である。出土遺物は、上層において須恵器とガラス玉が出土している。

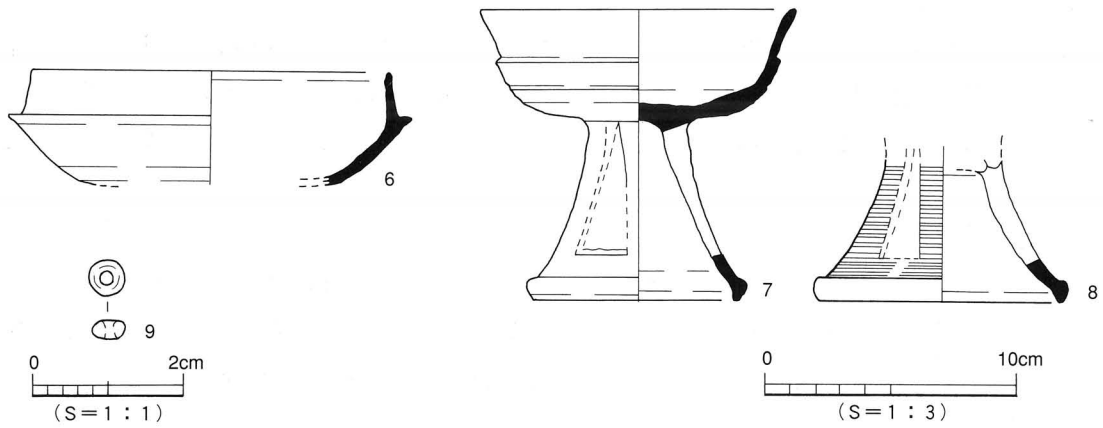
出土遺物 (第45図)

6は須恵器坏身である。口縁部は上にのび、端部は内傾する。受部は外方に延びる。7・8は須恵器の高坏である。7・8は透かしを持っている。7は無蓋の高坏で、口縁が外反する。8は脚部である。9はガラス製の小玉である。透明な水色で、高さ2.5mm、直径5.0mm、孔径1.5mmを測る。

時期：6世紀前葉



第44図 SK3測量図

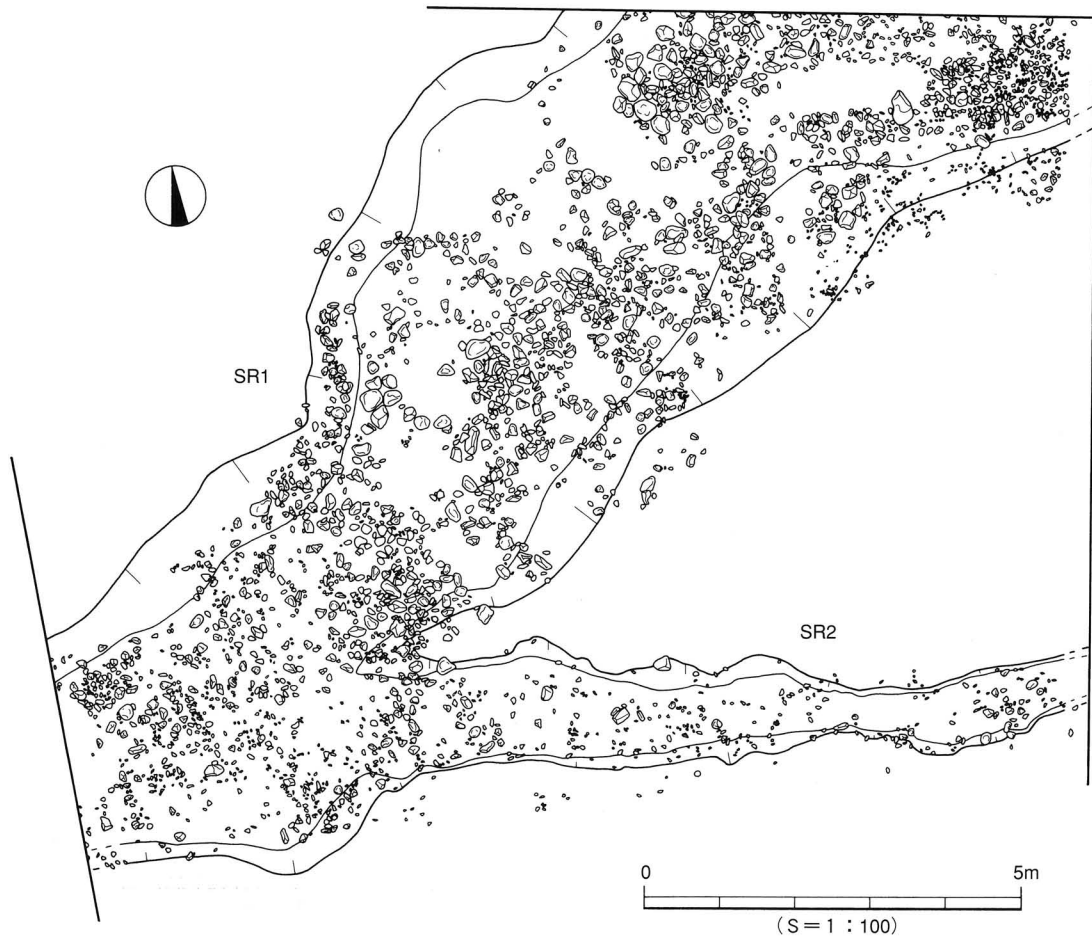


第45図 SK3出土遺物実測図

〔2〕 古 代

SR1 (第38・46図)

調査区北東部A1～B1区より西D3区に向かって流れ、C・3付近にてSR2と合流する河道である。東・西端は調査区外に延びる。断面形態はレンズ状を呈し、検出長は14m、幅は5.5～4mで下流が狭まる。検出面よりの深さは0.25～0.3mを測る。東と西では約5cmの比高差があり、西が低い。



第46図 SR1・2礫出土状況

主軸はS-36°-Wである。黄橙色砂の埋土中より約10cm～人頭大の円礫が密集した状態で検出された。礫に混じり弥生土器、須恵器、土師器片が出土している。

出土遺物（第47図）

坏蓋（10～12）10・11は天井部と口縁部との境には沈線を1条巡らせ稜をつくる。10は口縁部が内湾しており、端部には明瞭な段をもつ。11は口縁端部が外反し、内面は内傾する。12は端部が内方へ屈曲し丸い。

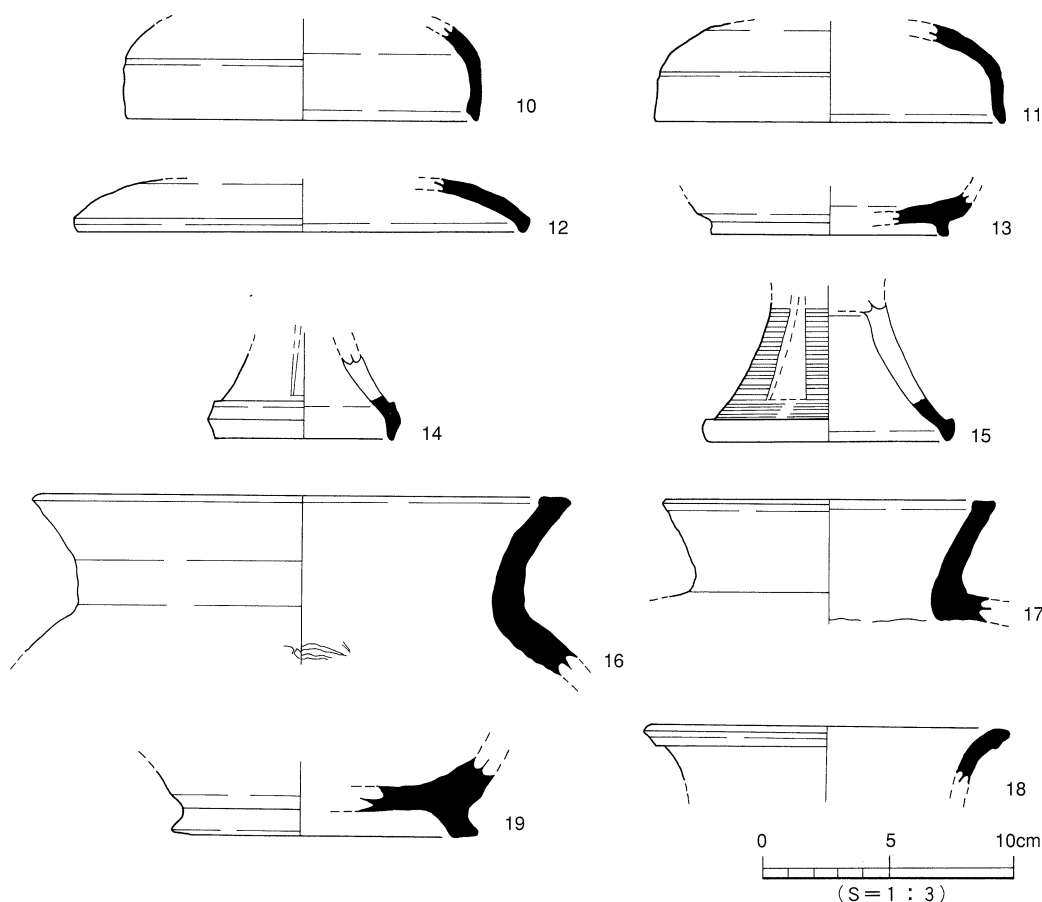
坏身（13）「ハ」の字気味で細身の貼り付け高台である。

高坏（14・15）脚部は「ハ」の字状に外反して下がり、透かしをもつ。14は端部付近で段をなし内傾する。15は端部を下方方向に屈曲させ段をなす。

甕形土器（16～18）10は口縁部が外反しており、端部は平らな面をなし、内側がやや肥厚される。17は口縁部が外反してたちあがる。端部はやや凹み、内側がやや肥厚される。18は口縁部が外反し、端部は「コ」の字状におさめる。

壺形土器（19）「ハ」の字状の比較的高い高台を貼り付けている。高台端面はやや凹んでいる。

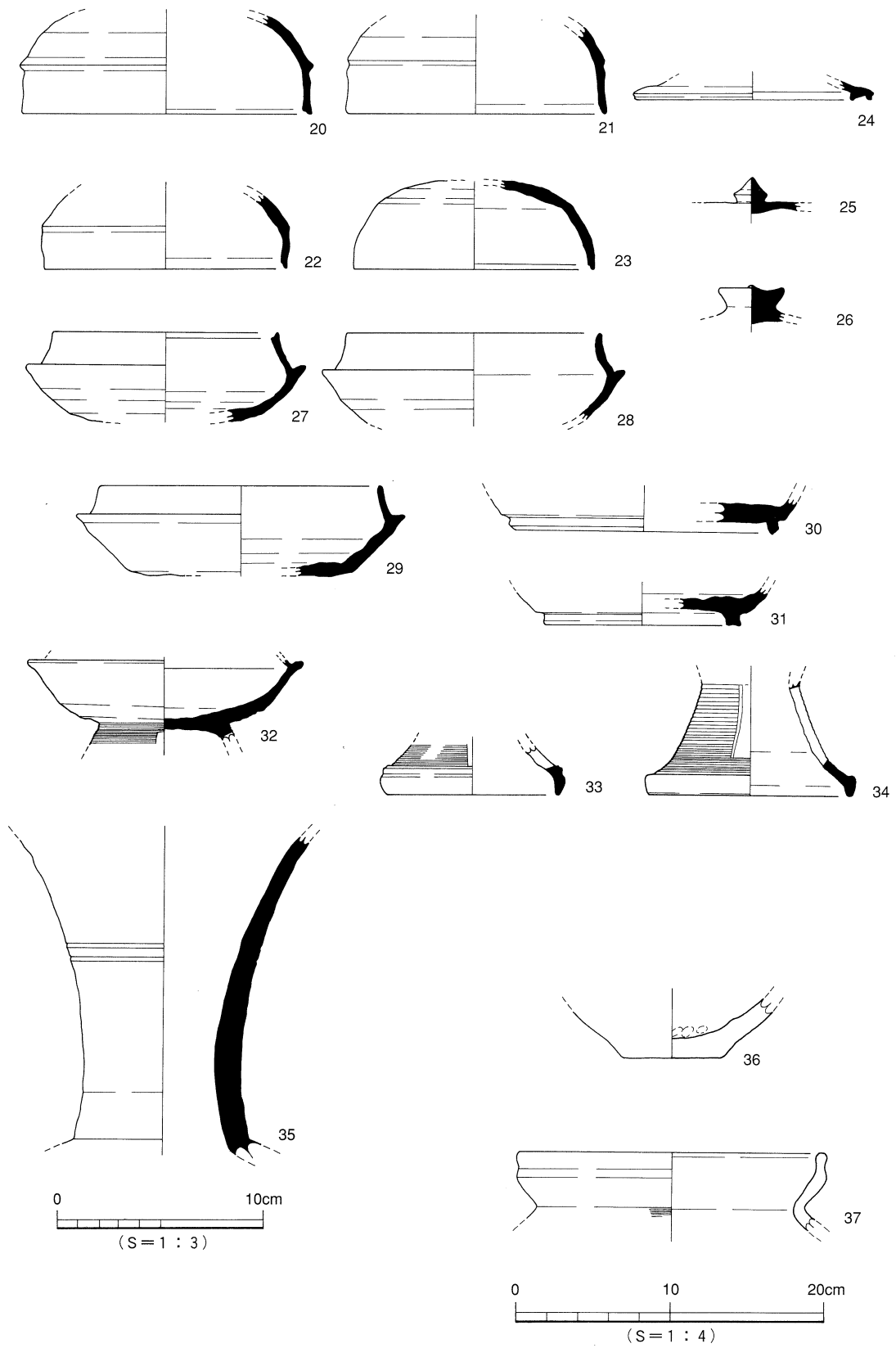
時期：8世紀前半



第47図 SR1出土遺物実測図

S R 2（第38・46図）

調査区南東部A3区より西D3区に向かって流れ、SR1と合流する河道である。断面形態はレンズ状を呈し、検出長は13.6mを測る。上場幅は0.7～2mで、下流である西は広がる。検出面よりの深さ



第48図 SR2出土遺物実測図

は0.1～0.15mを測る。東と西では約10cmの比高差があり、西が低い。東・西端は調査区外に延びる。埋土は黄橙色砂である。出土遺物は弥生土器、須恵器、土師器片が出土している。

出土遺物（第48図）

20～26は須恵器坏蓋である。20は稜が鋭く口縁端部に段を有する。21は天井部端に沈線を1条巡らせ稜を浮かび上がらせている。22は僅かに稜が残る。23は天井部から口縁部にかけて内湾し、口縁端部に明瞭な段を有する。24はかえりのある坏蓋で、かえり端部と口縁端部は同一面で接地する。25・26はつまみ部である。25は断面形が菱形を呈する宝珠様のつまみである。26は扁平なつまみであり中央部がやや突出する。

27～31は須恵器坏身である。27はたちあがりが高く内傾し、端部に明瞭な段を有する。受部は外上方向にのびる。28は受部のつけね部に沈線状の凹みを有する。29は端部は丸く仕上げられている。30～31は高台を有する坏身である。30は「ハ」の字状の貼り付け高台の内端部が接地する。31は直立気味の高台は内外端が接地する。

32～34は須恵器高坏である。32は有蓋高坏である。たちあがりは内傾し、受部は上外方向に延び3方向の透かしをもつ。33・34は脚部は「ハ」の字状に外反しており脚端部を下方方向に屈曲させ段をなす。33は屈曲部外面に凹みをもつ。

35は須恵器長頸壺である。口縁部が外反し頸部に2条の沈線を施している。

36は壺形土器である。平底の底部より内湾気味に立ち上がる。内面底部に指頭痕を施す。

37は土師器の甕形土器である。口縁中に屈曲部をもち上位は直立気味に立ち上がる。口縁端部は丸く仕上げる。内外面に刷毛目調整を施す。

時期：8世紀

S R 3（第49図）

調査区の大半を占める自然流路であり、調査区北東部A1～4区より西D区3に向かって流れ、SR1・2を覆っており、SK2～6を切る。北側の上場はSR1の北肩と同じ位置である。断面形態はレンズ状を呈し、検出長は18m、上場幅は16～7.3mで、下流が狭まっている。検出面よりの深さは0.15～0.25mを測る。東と西では約3cmの比高差があり、東が高い。北の壁面は急勾配を呈し、南側の上場はSR2より約2m南に位置する。南の壁面は北に比べ緩やかな傾斜である。埋土は上層にはオーブ灰色砂質土、下層には青灰色砂質土が堆積している。出土遺物は弥生土器、須恵器、土師器があり、床面からは手斧（ちょうな）と土錘が出土している。弥生土器には、線刻が見られるものが1点出土している。

出土遺物（第50図）

坏蓋（38～41）38は天井端部に沈線を一条巡らすことにより、稜を浮かび上がらせている。口縁端部に内傾する段を有する。39は蓋の内面に短いかえりを有する。40は扁平なつまみである。41はつまみの中央部が凹む。

坏身（42～46）42はたちあがり内傾し、受部は上外方向にのび、端部に明瞭な段を有する。43～46は平底の底部に「ハ」の字状の高台を貼り付けている。46は平底の底部に比較的高い「ハ」の字状の高台を貼り付けている。

47は無蓋の高坏である。口縁部は外反し、端部は丸く納められている。

壺形土器 (48~50) 48は頸部は短く直立し、肩部がやや張る。上胴部に回転カキ目を施す。49は頸部は短くやや外反している。50は底端部に「ハ」の字状の高台を貼り付けている。

甕形土器 (51・52) 口縁部は外反しており、端部は上下に拡張する。

53は線刻土器である。広口壺の口縁端部片である。口縁内面に格子状の線刻がみられる。

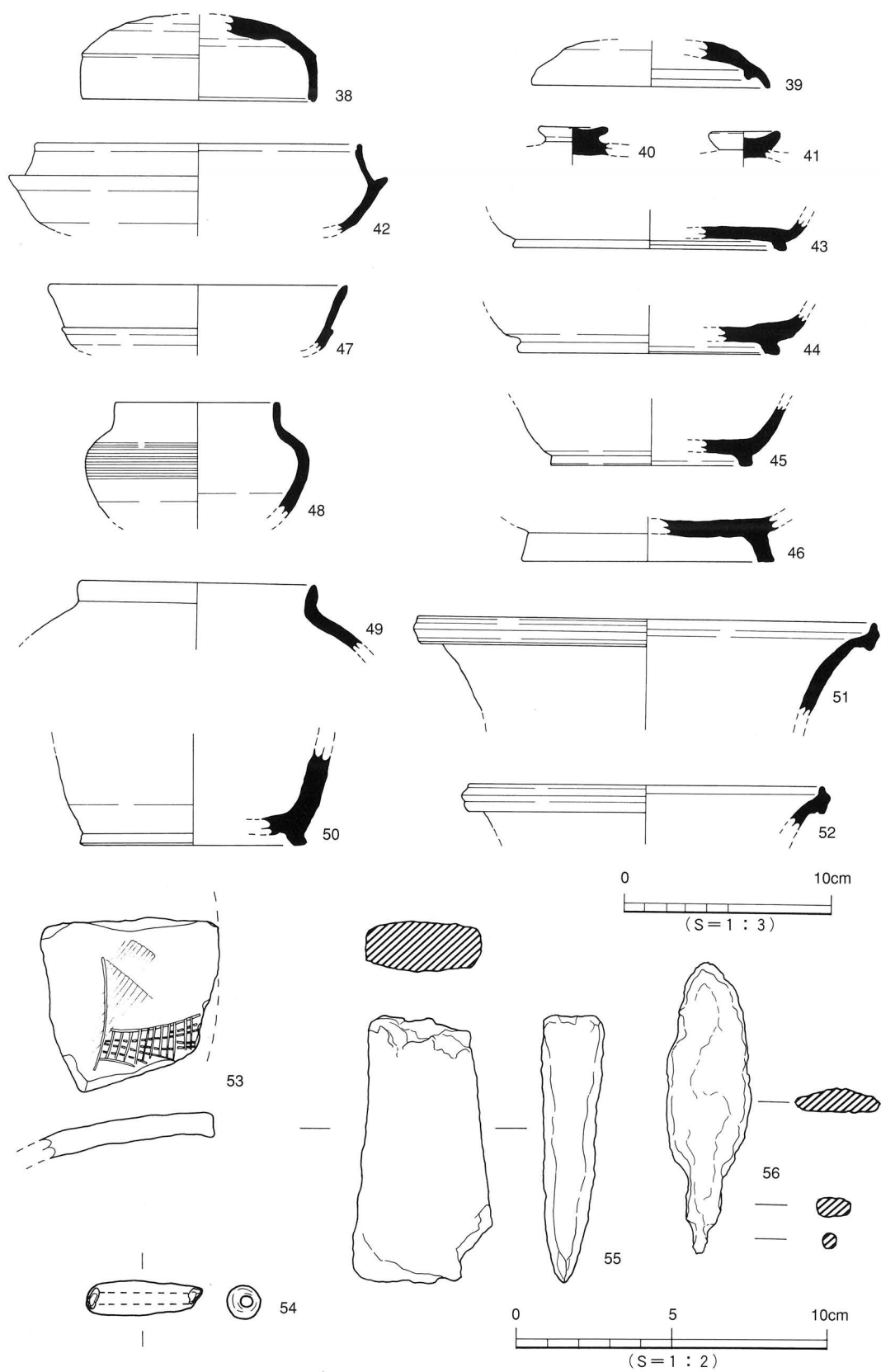
54は管状土錘であり、中心部に孔を開けている。長さ3.7cm、胴径1.1cm、重量3.101gを測る。

55は手斧(ちょうな)である。全長8.6cm、刃部幅4.7cm、重量125.237gを測る。袋状の着柄部を持つ短冊型である。

56は鉄鏃である。柳葉鏃であり、全長9.3cm、幅2.7cm、厚み0.8cm、重さ25.391gを測る。



第49図 SR3測量図

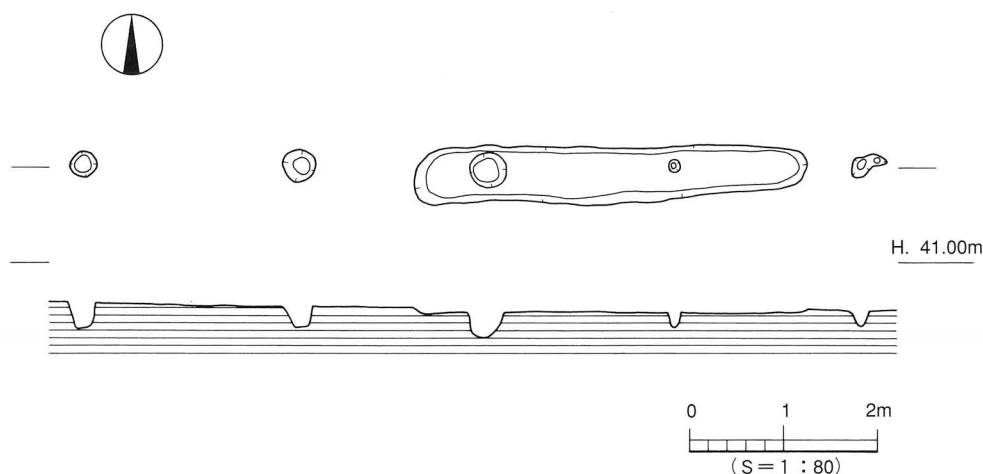


第50図 SR3出土遺物実測図

〔3〕 近世 (第39図)

SA01・SD01 (第51図)

調査区北西部のB2～D2区に位置し、4間分と付随する溝 (SD01) を検出した。柵列の西端は調査区外に延びると考えられる。主軸はW-5°50'-Nで、ほぼ東西を指している。柱穴は円形～楕円形で、直径は約0.1～0.4m、検出面よりの深さは0.17～0.27mを測る。柱間は2～2.2mである。埋土はオリーブ灰色粘質土で、埋土からは土師器、磁器の細片が出土している。溝は、規模が検出長4.18m、幅0.6m、検出面よりの深さ0.04mを測る。埋土はオリーブ灰色粘質土である。A2区に、この溝とつながると考えられる溝 (SD02) を検出している。



第51図 SA01・SD01測量図

SX01 (第53図)

調査区中央西寄りのC2～D3区に位置する。平面形態は不整形、断面形態は皿状を呈している。規模は長軸4.25m、短軸3.82m、検出面よりの深さ9cmを測る。埋土はオリーブ灰色粘質土で、埋土からは約5～20cm大の礫に混じり、備前焼の壺、播鉢、磁器碗、平瓦、寛永通寶10枚を藁で束ねた緡銭が出土している (第52図)。

出土遺物 (第54図)

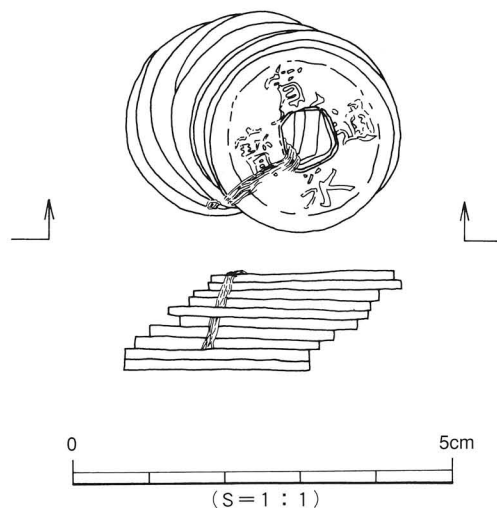
57は陶器の甕である。口縁端部が内外に肥厚され上胴部に2条の押圧突帯が巡らされている。

58は磁器の碗である。外面に染付の草文が施されている。

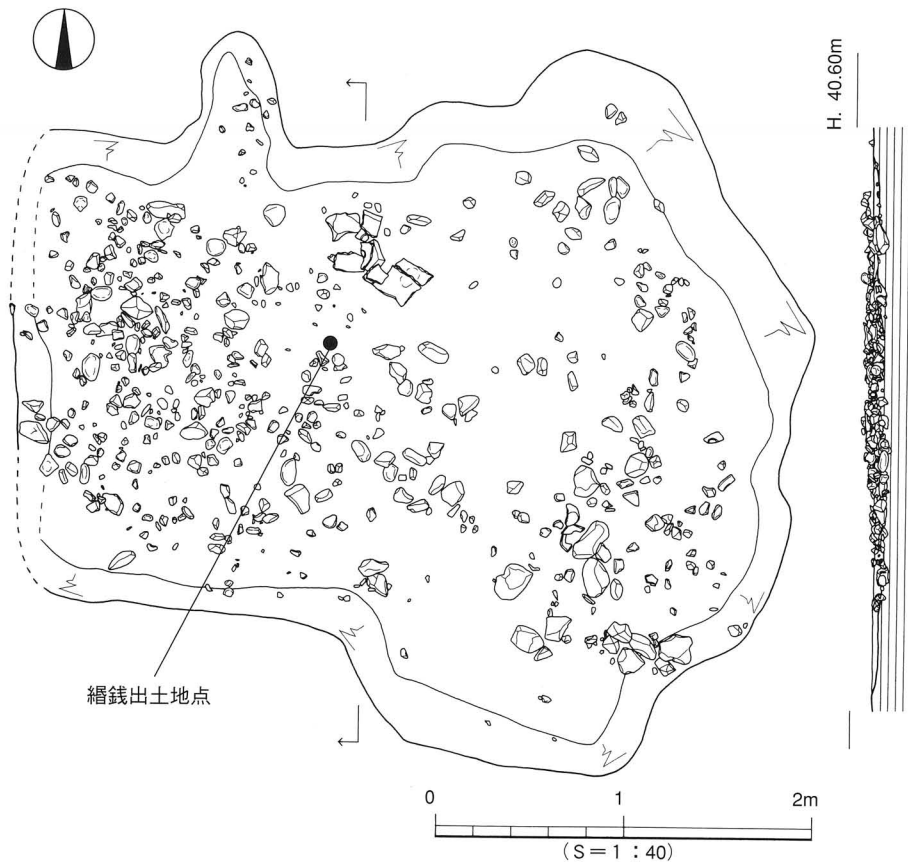
59は陶器の皿である。口縁部が端反りしており、高台は断面逆台形状を呈する。

60は徳利である。下胴部が膨らんでおり、頸部は細く絞られる。底部付近に㊦の刻印をもつ。備前焼き。

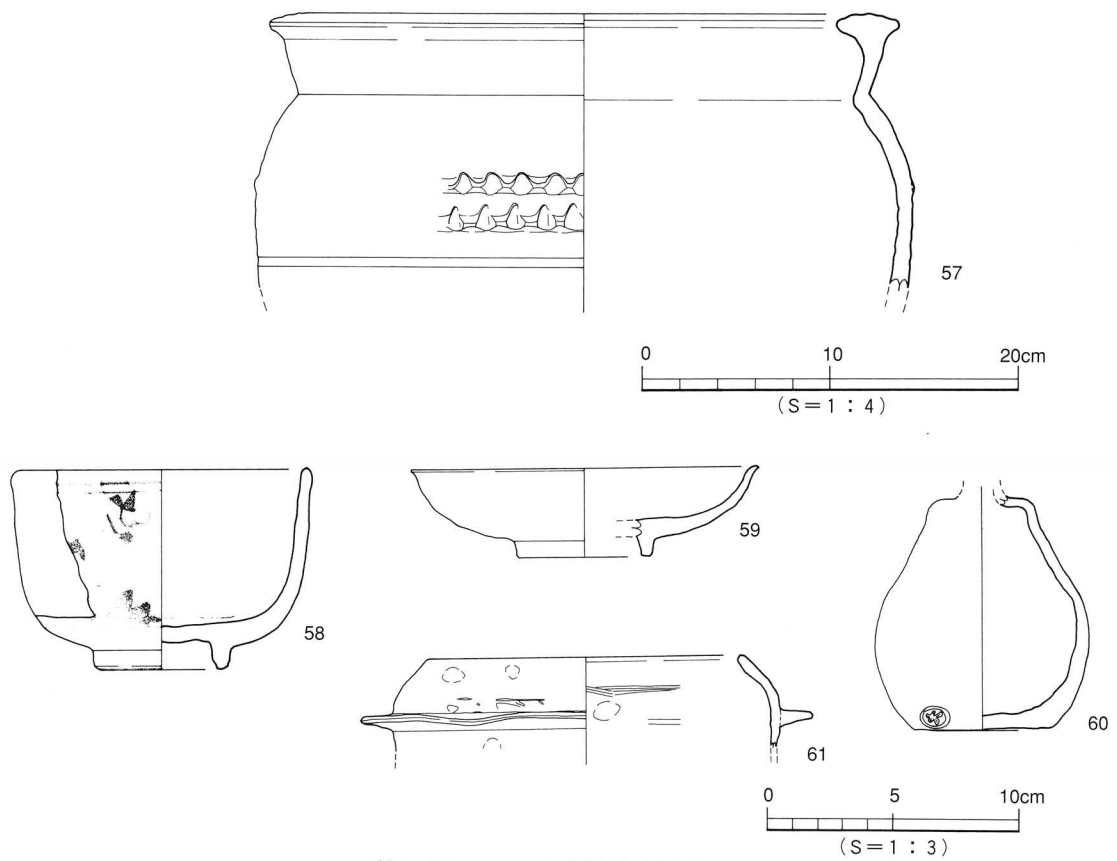
61は土師質の羽釜である。口縁部は内湾しており、外上方向にのびる鏝を貼り付けている。



第52図 SX01緡銭出土状況



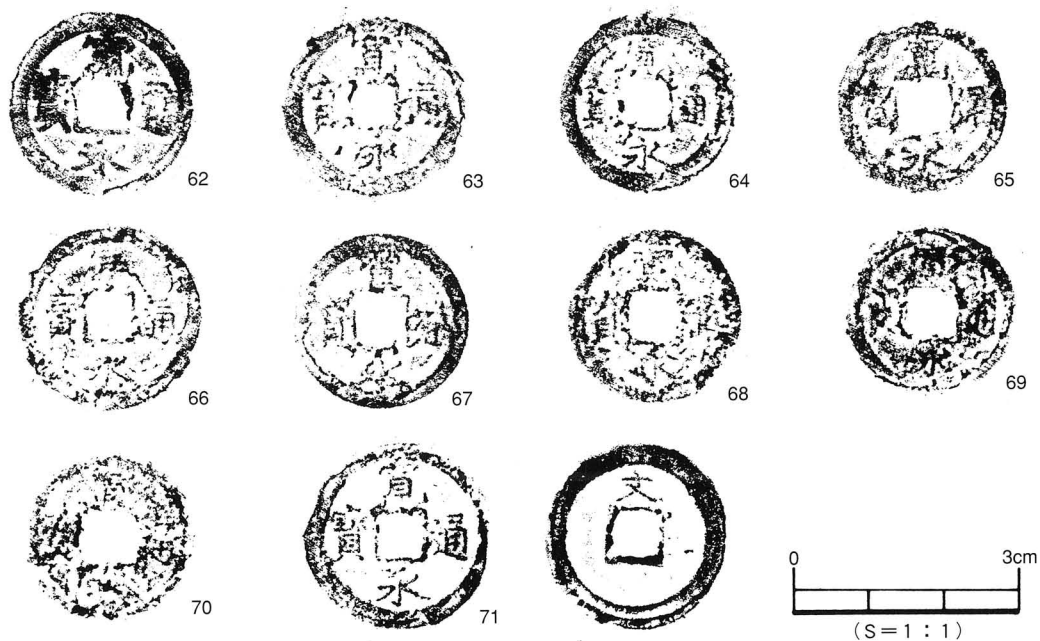
第53図 SX01測量図



第54図 SX01出土遺物実測図

緡銭 (第52・55図)

62～71は寛永通寶の銅銭である。62は古寛永通寶であり、63～71は新寛永通寶である。71は裏面に「文」の背文字があり、寛文期(1661～1672年)の鑄銭である。



第55図 SX01出土銭拓本

SX02 (第39図)

調査区東側A2～3区で、SR3の床面にて検出した。平面形態は楕円形、断面形態は薄いレンズ状を呈している。土坑内からは5～15cm大の礫が密集した状態で出土した。規模は、長軸1.8m、短軸1.5m、検出面よりの深さ0.08mを測る。埋土は灰褐色砂質土である。遺物の出土はない。

SK01 (第39図)

調査区中央部のB2～C4区に位置する。平面形態は円形で、断面形態は段状を呈している。規模は、直径1m、検出面よりの深さ0.15mを測る。埋土は上層がオリーブ灰色粘質土、下層は灰黄褐色土であり、上層の上場には砂層が巡らされている。出土遺物は須恵器・土師器の細片が僅かに出土している。

4. 小 結

今回の調査では、古墳時代中期から近世までの遺構と遺物を検出した。

古墳時代には、円形と隅丸方形の土坑7基がある。確実に時期を特定できたのはSK1・3で、5世紀末～6世紀前半のものである。ただし、このうちSK2は遺構の規模より円形の竪穴住居址、SK3・6は隅丸方形の竪穴住居址が考えられる。

古代には、8世紀前半の集落に関連する土坑SK8～13がある。これらは、遺構内の堆積土より、SR1・2が機能する以前に埋没したと考えられる。SR1・2は石手川の支流とみられる。特に、SR1からは多数の礫が検出されており、暗渠の可能性がある。SR3は、SR1・2が氾濫により崩壊した後に、形成されたものと考えられる。SR3は出土遺物より、8世紀中頃まで機能していたことが推測される。なお、SR3内からは線刻土器が出土している。近接する樽味高木遺跡3次調査より、弥生時代後期の複合口縁壺に船の線刻を施した貴重な資料が出土している。今回出土した土器は弥生時代後期末に属する広口壺の口縁部片と思われ、口縁部内面に格子状の広がりをもつ線刻がなされている。この線刻は何を意味しているのか現在のところ不明である。

近世では、溝を付随し東西に走る柵列が検出されている。この柵列はSD02に向かって東に延びることも考えられる。柵列の南側には、柵列に直交する円形の土坑(SK01・02)や集石遺構(SX01)が検出されているが、北側には遺構は少なく、柵列による区画が考えられる。集石遺構は自然の落ち込みで、多数の礫と遺物の破片が出土している。集落内の廃棄場所と考えられる。これらのことから本調査地周辺には、近世集落が広がり、今後の調査においては、その構造を考えなくてはならない。

[参考文献]

- 梅木謙一 1992 『桑原地区の遺跡』(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
 1994 『桑原地区の遺跡Ⅱ』(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
 宮本一夫 1989 『鷹子・樽味遺跡の調査』愛媛大学埋蔵文化財研究室
 田崎博之 1993 『樽味遺跡Ⅱ』愛媛大学埋蔵文化財研究室
 1996 『東本遺跡』(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
 佐原 真 1990 「弥生時代の絵画」『考古学雑誌』 第66巻第1号
 春成秀爾 1991 「絵画から記号へ」国立歴史民俗博物館研究報告第35集
 橋本裕行 1988 「東日本弥生時代土器絵画・記号総論」榎原考古学研究所論集

遺構・遺物一覧 (河野史知)

- (1) 以下の表は、本調査検出の遺物の計測値及び観察一覧である。
- (2) 遺構の一覧表中の出土遺物欄の略号について。

法量欄 () : 復元推定値

形態・施文欄 土器の各部位名称を略記。例) 口→口縁部

胎土・焼成欄 胎土欄では混和剤を略記した。例) 砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土。

樽味高木遺跡 4次調査地

表18 土坑一覧

土坑 (SK)	地 区	平 面 形	断 面 形	規 模 長さ×幅×深さ (m)	埋 土	出土遺物	時 期	備 考
1	D1	方形	皿状	2.2×2.0×0.23	黒褐色土	弥生・土師	古 墳	北側は調査区外にのびる
2	A4~B4	半円	皿状	3.6×1.5×0.15	黒褐色土	土師・石器	古 墳	SR3に切られる
3	B1~C2	隅丸方形	逆台形状	4.5×1.0×0.3	黒褐色土	土師・須恵・ガラス玉	古 墳	SR3に切られる
4	B4	半円	逆台形状	1.6×1.1×0.19	黒色土	土 師	古 墳	SR3に切られる
5	C4	半円	レンズ状	2.4×1.1×0.3	褐灰色土	土師・須恵	古 墳	SR3に切られる
6	D4	隅丸方形	皿状	2.2×1.1×0.17	黒褐色土	土師・須恵	古 墳	SR3に切られる
7	C4~D5	楕円	皿状	2.1×1.7×0.27	黒褐色土	土師・須恵	古 墳	
8	A4	楕円	逆台形状	1.2×1.0×0.15	暗褐色土	須 恵	古 代	SR3の床面より検出
9	A3	楕円	逆台形状	1.1×0.7×0.12	灰褐色土		古 代	SR3の床面より検出
10	A3	楕円	レンズ状	1.8×1.5×0.2	暗灰褐色土	須 恵	古 代	SR3の床面より検出
11	B3	楕円	逆台形状	3.0×2.2×0.2	灰褐色土	須 恵	古 代	SR3の床面より検出
12	B3	楕円	逆台形状	1.2×0.8×0.29	にぶい黄褐色土	須 恵	古 代	
13	B3	楕円	逆台形状	1.8×1.0×0.3	暗褐色土	須 恵	古 代	SR3の床面ににてSR2に切られる
01	B4~C4	円形	皿状	1.0×1.0×0.15	オリブ灰色砂質土	磁器・瓦	近 世	
02	B2~C3	円形	皿状2段	1.1×1.0×0.13	灰黄褐色土		近 世	

表19 溝一覧

溝 (SD)	地 区	断 面 形	規 模 長さ×幅×深さ (m)	埋 土	出土遺物	時 期	備 考
01	B2~C2	レンズ状	4.2×0.6×0.04	オリブ灰色粘質土	土 師	近 世	SA01に付随する
02	A2	レンズ状	1.7×0.5×0.07	オリブ灰色粘質土		近 世	
03	A4~B4	レンズ状	4.6×0.8×0.08	黄褐色土	土 師	近 世	
04	C5~D5	皿 状	2.2×0.5×0.07	灰褐色土		近 世	

表20 SK1 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形 態・施 文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
1	高坏	口径(14.3) 器高 11.1 底径 10.2	有段の坏部。三角錐の柱部。水平に開く裾部。	㊦ヨコナデ ㊧ナデ	㊨ヨコナデ ㊩ハケ目 ㊪ケズリ	橙色	石・長(1~2) ◎		27
2	高坏	残高 7.6 底径 (9.9)	柱裾部内面に稜あり。	摩滅の為不明	㊫ケズリ	橙色	石・長(1~3) ◎		27
3	高坏	残高 10.3	柱部に2段の円孔。 (φ0.8~0.9cm)	摩滅の為不明	㊬ケズリ	橙色	長(1~2) ◎		

表21 SK2 出土遺物観察表 石製品

番号	器 種	残 存	材 質	法 量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
4	砥 石	完 形	砂 岩	9.85	4.05	3.3	182.1		27
5	石 斧	刀部欠損	緑泥片岩	13.9	5.05	2.15	312.5		27

出土遺物観察表

表22 SK3 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
6	坏身	口径(14.2) 残高 4.5	口縁部は上へのび端部は内傾する。	回転ナデ	回転ナデ	灰色	密 ○		
7	高坏	口径(12.5) 器高 11.6 底径 8.1	口縁部が外反しており透かしをもつ無蓋高坏。	回転ナデ	回転ナデ	灰色	長(1~2) ○		27
8	高坏	残高 5.5 底径 9.4	脚端部が下方向にのびる3方向の透かし。	回転カキ目	回転ナデ	灰オリーブ	石・長(1) ○		

表23 SK3 出土遺物観察表 ガラス製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				直径 (cm)	孔径 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
9	玉	完形	ガラス	0.5	0.15	0.25	0.063		27

表24 SR1 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
10	坏蓋	口径(13.8) 残高 3.7	天井端部に沈線を一条巡らし稜を浮かび上げさせており、口縁端部に内傾する段を有する。	⊖回転ナデ	⊖回転ナデ	青灰色	密(1~2) ◎		
11	坏蓋	口径(13.7) 残高 3.9	天井端部に沈線を一条巡らし稜を浮かび上げさせている。口縁端部はやや外反する。	⊖回転ナデ ⊕回転ヘラケズリ	⊖(丸)回転ナデ	灰白色	長(1~2) ○		
12	坏蓋	口径(17.6) 残高 2.1	端部が内方へ屈曲し丸くおさめる。	⊖回転ナデ	⊖回転ナデ	灰色	長(1) ◎		
13	坏身	底径(9.4) 残高 1.3	ハの字気味で細身の貼付高台。	⊖回転ナデ	⊖回転ナデ	灰色	長(1) ◎		
14	高坏	脚底径(6.8) 残高 3.4	脚部はハの字状に外反して下がり、端部付近で段をなし、内傾。スカシあり。	⊖回転ナデ	⊖回転ナデ	灰色	密 ◎		
15	高坏	脚底径(8.0) 残高 5.3	脚部はハの字状に外反して下がり、端部を下方向に屈曲させ段をなす。	回転カキ目 ナデ	回転ナデ	灰色 暗灰色	長(1~2) ◎	外面 自然釉	
16	甕	口径(20.6) 残高 6.3	口縁部が外反し、端部は平らな面をなす。	⊖回転ナデ ⊖上タタキ	⊖(丸)回転ナデ ⊖上タタキ	灰白色	長(1~2) ○		27
17	甕	口径(13.2) 残高 3.9	口縁部が外反気味で端部は平らな面をなす。	⊖(丸)回転ナデ	⊖回転ナデ	灰白色	長(1) ○		27
18	甕	口径(13.9) 残高 2.2	口縁部は外反し、端部は「コ」の字状におさめる。	⊖(丸)回転ナデ	⊖回転ナデ	青灰色	長(1) ◎		
19	壺	底径 12.0 残高 2.5	ハの字形の比較的高い高台を貼り付ける。	⊖(丸)⊖回転ナデ	⊖ナデ	灰色	長(1~4) ◎		27

樽味高木遺跡 4 次調査地

表25 SR2 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面 内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
20	坏蓋	口径 14.0 残高 4.8	丸みを帯びた天井部稜は鋭く口縁端部は段をなす。	回転ナデ	回転ナデ	灰色	長(1~2) ◎		
21	坏蓋	口径(12.4) 残高 4.2	天井端部に沈線を一条めぐらすことにより稜を浮かび上げさせている。	回転ナデ	回転ナデ	灰色	長(1) ◎		
22	坏蓋	口径(11.8) 残高 3.6	口縁部は内湾気味で端部はやや外反する。	回転ナデ ヘラケズリ	回転ナデ	灰赤色 青灰色	長(1~2) ◎		
23	坏蓋	口径(11.6) 残高 4.3	天井部から口縁端部にかけて内湾しており端部に明瞭な段を有する。	㊦回転ナデ ㊧ヘラケズリ	回転ナデ	青灰色 灰色	長(1) ◎		28
24	坏蓋	口径(11.4) 残高 0.9	内面の口縁部とかえり部がほぼ同一の高さ。	㊦回転ナデ	回転ナデ	灰色	長(1) ◎	内面 自然釉	
25	坏蓋	つまみ径(1.4) 残高 1.8	天井部外面中央に断面ひし形を呈する宝珠様つまみ。	回転ナデ	回転ナデ ヘラケズリ	灰色	長(0.5~1) ◎		28
26	坏蓋	つまみ径(3.2) 残高 1.9	偏平な擬宝珠様つまみ。	㊦つまみ回転ナデ	㊦つまみ回転ナデ	灰色	長(1~2) ◎		
27	坏身	口径(10.8) 残高 4.4	たちあがりは高く内傾し、端部に明瞭な段を有し、受部は上外方へのびる。	㊦回転ナデ ㊧ヘラケズリ	回転ナデ	青灰色	密 ◎		28
28	坏身	口径(12.2) 残高 4.2	たちあがりは内傾し受部に沈線上の凹み。	㊦回転ナデ ㊧ヘラケズリ	回転ナデ	青灰色	長(1~2) ◎		
29	坏身	口径(13.6) 残高 4.4	たちあがりは比較的短く内傾し、端部は丸く仕上げられている。	㊦回転ナデ ㊧ヘラケズリ	回転ナデ	青灰色	長(1~2) ◎		
30	坏身	底径(12.4) 残高 1.5	「ハ」の字状の貼付け高台の内端部が接地する。	㊧回転ナデ	㊧回転ナデ	灰色	長(1~2) ◎		28
31	坏身	底径(9.4) 残高 1.6	直立気味の貼付け高台。	㊧回転ナデ	㊧回転ナデ	灰色クリブ・灰 灰オリーブ色	密 ◎		28
32	有蓋 高坏	受部径(13.4) 残高 4.1	たちあがりは内傾し、受部は上外方向へのび、3方向の透かしをもつ。	㊦回転ナデ ㊧上ヘラケズリ ㊧下回転カキ目	回転ナデ ナデ	青灰色	長(1~4) ◎		28
33	高坏	脚底径(8.4) 残高 2.4	脚端部は内湾して直立する。外面上部に凹みをもつ。	㊧回転ナデ 回転カキ目	㊧回転ナデ	暗灰色	密 ◎		28
34	高坏	脚底径(9.8) 残高 5.6	脚部はハの字状に反し、端部を下方向に屈曲させ段をなす。3方向の透かし。	㊧回転カキ目	㊧回転ナデ	暗灰色 青灰色	密 ◎	外面 自然釉	
35	壺	残高 16.7	口縁部は外反し、頸部に二条の沈線が施される。	㊧回転ナデ	㊧回転ナデ	灰色	石・長(1~2) ◎		
36	壺	底径 6.4 残高 3.9	平底の底部より内湾気味にたちあがる。	㊧下ナデ	㊧下ナデ	にぶい橙色	石・長(1~4) ◎	底部 黒斑	
37	甕	口径(19.8) 残高 4.3	段を有する口縁部。	㊧ハケ目(10本/cm)	㊦ヨコナデ	赤橙色 にぶい茶色	石・長(1~4) ◎		

出土遺物観察表

表26 SR3出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
38	坏蓋	口径 11.2 残高 4.1	天井端部に沈線一条巡らし稜を浮かび上げらせる。	㊦回転ナデ (天井)回転ヘラケズリ	㊦(天井)回転ナデ	灰色	長(1) ○		
39	坏蓋	口径 11.4 残高 2.2	蓋内面のかえりは短い。	㊦回転ナデ (天井)回転ヘラケズリ	㊦回転ナデ	灰色	密 ○		28
40	蓋	つまみ径(3.4) 残高 1.3	扁平な擬宝珠様つまみ。	㊦つまみ 回転ナデ	回転ナデ	灰色	長(1) ○		28
41	蓋	つまみ径 3.4 残高 1.4	つまみ中央部は凹む。	㊦つまみ 回転ナデ	回転ナデ	茶色	密 ○		28
42	坏身	口径(15.4) 残高 4.3	たちあがり内傾し端部は明瞭な段を有する。受部は上外方向へびる。	㊦(底体上)回転ナデ (底体下)ヘラケズリ	回転ナデ	灰色	長(1) ◎		
43	坏身	高台径12.9 残高 1.3	底部端に凹みをもつ。	㊦回転ナデ	㊦回転ナデ	灰色	長(1) ◎		28
44	坏身	高台径12.3 残高 1.7	「ハ」の字状の端部の丸みがある貼付け高台。	㊦回転ナデ	㊦回転ナデ	青灰色	石・長(1~2) ◎		
45	坏身	高台径 9.6 残高 2.7	「ハ」の字状の貼付け高台をもつ。	㊦回転ナデ	㊦回転ナデ	灰色	長(1) ◎		
46	坏身	高台径12.0 残高 2.8	「ハ」の字状の比較的長い貼付け高台をもつ。	㊦回転ナデ	㊦回転ナデ	灰色	長(1) ◎		
47	高坏	口径 14.2 残高 3.2	口縁部が外反する無蓋高杯。	㊦回転ナデ	㊦回転ナデ	青灰色	密 ◎		
48	壺	口径 (7.8) 残高 5.7	頸部は短く、やや外反している。	㊦回転ナデ	㊦回転ナデ	灰色	長(1) ○		28
49	壺	口径 11.2 残高 2.8	頸部は短く、やや外反している。	㊦回転ナデ	㊦回転ナデ	灰色	長(1) ○		
50	壺	底径(10.4) 残高 4.4	「ハ」の字状の貼付け高台をもつ。	㊦(頸下)回転ナデ	㊦(頸下)回転ナデ	灰色	石・長(1~2) ◎		
51	甕	口径(21.8) 残高 4.6	外反する口縁部、端部は上下方に拡張。	㊦回転ナデ	㊦回転ナデ	青灰色	長(1~2) ◎		28
52	甕	口径 17.0 残高 2.1	外反する口縁部は上下方に拡張。	㊦回転ナデ	㊦回転ナデ	青灰色	石・長(1) ○		28
53	壺	残存長5.7 器厚 0.75	口縁端部が僅かに現存し内面に線刻。	摩滅の為不明	ハケ6~8本/cm	浅橙色	石・長(1~2) ○		28
54	錘	全長 3.8 外径 1.1 内径 0.4	中心部に孔を開けている。管状土錘である。重量3.101g。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	浅橙色	長(1) ○		28

表27 SR3 出土遺物観察表 鉄製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
55	手斧	茎部欠損	鉄	8.6	4.7	1.6	125.237		28
56	鉄鎌	茎部欠損	鉄	9.3	2.7	0.8	25.391		28

表28 SX01 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面 内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
57	甕	口径(41.0) 残高14.5	口縁端部が内外に肥厚される。上胴部の突帯に押圧痕あり。	㊦ヨコナデ	㊦ヨコナデ	極暗赤褐色 灰赤色	密 ○		29
58	碗	口径11.4 器高7.9 底径4.8	外面に染付草花文が施される。	施釉	施釉	緑灰色	密 ○		29
59	碗 (青磁)	口径(13.6) 残高3.5	断面逆台形状の高台をもち内湾する胴部より口縁端部は外反する。	施釉	施釉	明緑灰色	密 ◎		29
60	徳利 (備前)	残高12.4 底径(7.1)	下胴部が膨らみ頸部が絞られる。 ㊦の刻印。	㊦回転ナデ ナデ	㊦回転ナデ	暗赤褐色 にぶい橙色	密 ○		29
61	羽釜 (土師質)	口径(16.4) 鐙径(23.9) 残高4.9	口縁部が内湾しており、鐙は外上方へのびる。	㊦㊦ヨコナデ粗雑	㊦ヨコナデ粗雑 ハケ目2本~4本/cm	にぶい橙色 (鐙下)黒色	細粒 ○		29

表29 SX01出土遺物観察表 銭貨

遺物 No.	銭名	初鑄年	銭径 (mm)	孔径 (mm)	外縁厚 (mm)	内側厚 (mm)	重量 (g)	備考
62	寛永通寶	1626	25.18	6.10	1.15	1.14	3.819	古寛永
63	寛永通寶	1636	24.90	5.52	1.51	1.40	4.055	新寛永
64	寛永通寶	1636	24.12	6.32	1.18	1.12	3.175	新寛永
65	寛永通寶	1636	23.40	6.60	1.25	1.23	3.093	新寛永
66	寛永通寶	1636	25.18	5.98	1.55	1.26	3.982	新寛永
67	寛永通寶	1636	23.69	6.68	1.24	1.16	3.289	新寛永
68	寛永通寶	1636	23.63	6.58	1.14	0.96	2.329	新寛永
69	寛永通寶	1636	22.78	5.69	1.22	1.16	3.088	新寛永
70	寛永通寶	1636	23.39	6.50	1.05	0.78	2.142	新寛永
71	寛永通寶	1636	25.31	6.01	1.34	1.32	3.230	新寛永

第5章

クワ バラ タ ナカ
桑原田中遺跡

— 3次調査地 —

第5章 桑原田中遺跡3次調査地

1. 調査の経過

(1) 調査に至る経過

1995（平成7）年8月、松山市桑原5丁目559-2、559-4地内における宅地開発にあたって、当該地の埋蔵文化財の確認願いが松山市教育委員会文化教育課（以下、文化教育課）に提出された。確認願いが提出された土地は松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地の『No82 東本遺物包含地』内の西端にあたる。申請地が所在する桑原地区では、以前より調査が実施されており、周知の遺跡群として知られている。当該地の北西約1.5kmには、樽味遺跡（愛媛大学農学部構内）、『貨泉』が出土した樽味立添遺跡、『船の絵画土器』が出土した樽味高木遺跡3次調査地などの調査が行われており、弥生時代から中世にかけての集落様相が明らかになりつつある。また東方には前方後円墳の経石山古墳、三島神社古墳をはじめ東野古墳群、東野お茶屋台古墳群が展開する。

これらのことから当該地における埋蔵文化財の有無と、さらには遺跡の範囲やその性格を確認するため、平成7年8月30日に文化教育課は試掘調査を実施した。試掘調査の結果、土坑状遺構2基、溝3条、柱穴数基、土師器、須恵器等、古代から近現代にかけての遺構及び遺物を確認した。

そのため、当該地における遺跡の取り扱いについて文化教育課と地権者は協議を行い、開発工事によって失われる遺跡について、記録保存のために発掘調査を実施することとなった。

本調査地の南方100mに位置する桑原田中遺跡1次調査地からは、弥生後期～古代の遺構・遺物が検出されている。また西方80mに位置する桑原田中遺跡2次調査地からは弥生～近世の遺構・遺物が検出されている。よって本調査は弥生時代から中近世にわたる集落構造解明を主目的とし、(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターが主体となり地権者の協力のもと1995（平成7）年11月10日に開始した。

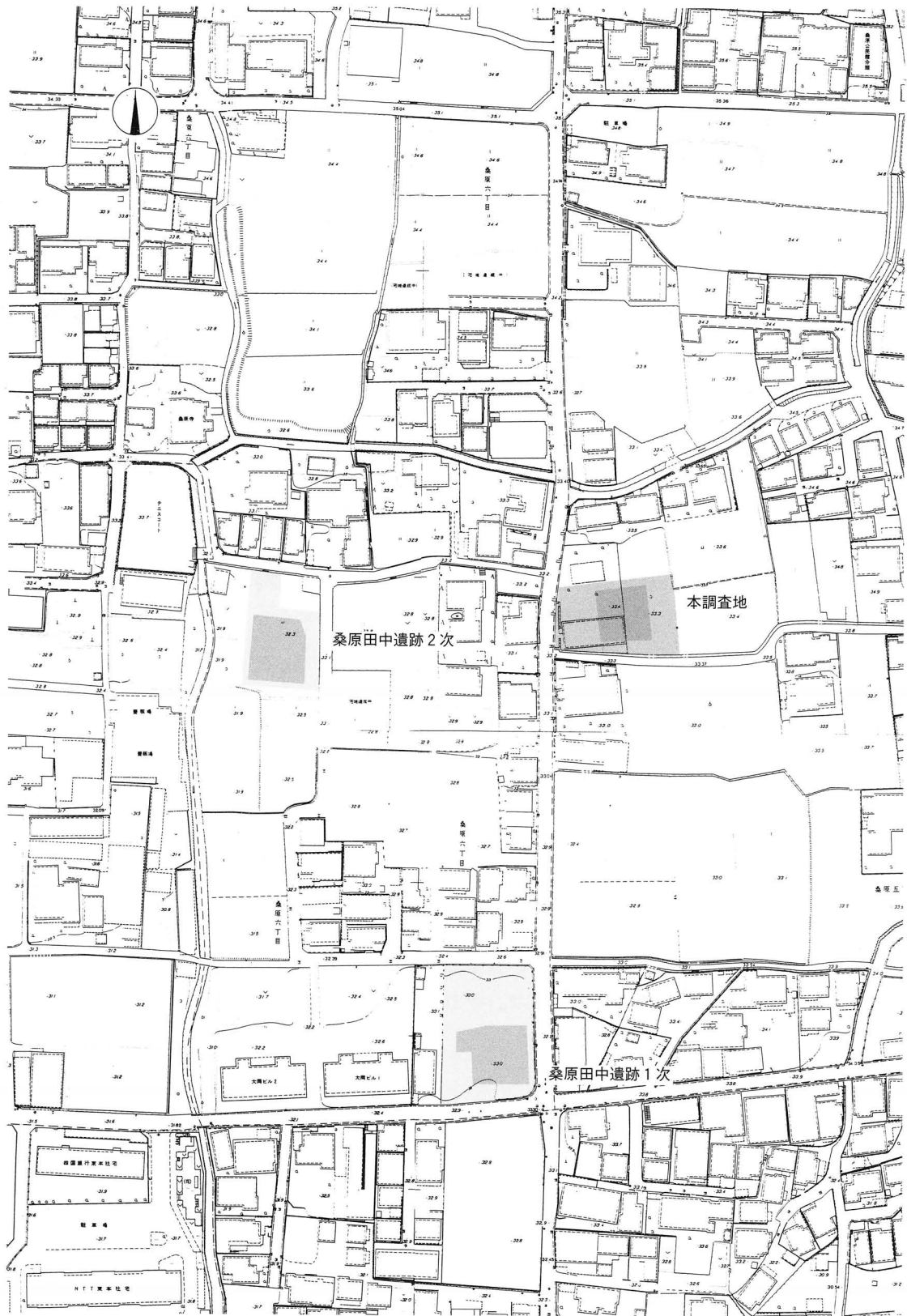
(2) 調査の経緯

1995（平成7）年11月10日より重機により表土剥ぎ取り作業を開始した。試掘の結果及び深掘りによる土層観察により、地表下約40cmまで剥ぎ取りを行い、排土は調査区内と隣接する地権者の所有地に分散して土盛りしたため3日間を費やした。その後、調査区内に仮設事務所を設置し、作業用具等を搬入した。

(3) 調査組織

調査地	松山市桑原5丁目559-2、559-4
遺跡名	桑原田中遺跡3次調査地
調査期間	野外調査 1995（平成7）年11月10日～1996（平成8）年1月12日 室内調査 1996（平成8）年1月16日～同年3月29日
調査面積	896m ²
調査委託	松本 温富氏
調査担当	山本 健一・武正 良浩

桑原田中遺跡 3次調査地



(S = 1 : 2,000)

第56図 調査地位置図

層 位

調査作業員 後藤 公克、酒井 直哉、広沢 忠、坪内 寛美、武田 俊昭、市山 積、
重松 吉雄、松田 常義、好川昇三郎、宮脇 和人、栗林 和孝、保島 秀幸、
村上真由美、白石あさか、木下奈緒美、岩本 美保

2. 層 位 (第58図)

基本層位は、第Ⅰ層耕作土、第Ⅱ層茶色粗土、第Ⅲ層旧耕作土、第Ⅳ層茶褐色土、第Ⅴ層暗灰茶褐色土、第Ⅵ層淡黄茶色粘質土、第Ⅶ層明青灰色粘質砂(黄茶色混)、第Ⅷ層灰色粗砂(3~15cm礫混)である。なお、第Ⅶ層及び第Ⅷ層は調査区内2カ所に深掘り調査を実施した結果によるものである。

第Ⅰ層—近現代の農耕による客土である(層厚11~50cm)。

第Ⅱ層—造成土である(層厚6~104cm)。

第Ⅲ層—旧耕作土で調査区北側を除くほぼ全域に広がる(層厚2~20cm)。

第Ⅳ層—第Ⅲ層設定時に伴う造成土である(層厚5~30cm)。

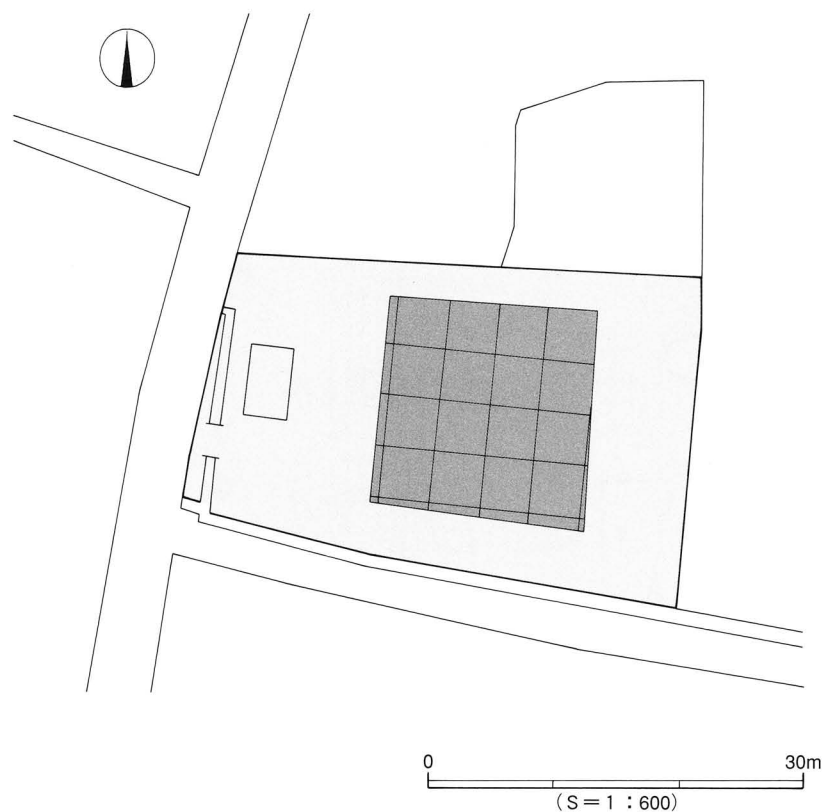
第Ⅴ層—調査区東側で確認された堆積層である(層厚6~32cm)。

第Ⅵ層—地山とよばれるものであり、この面において遺構を検出した(層厚3~32cm)。

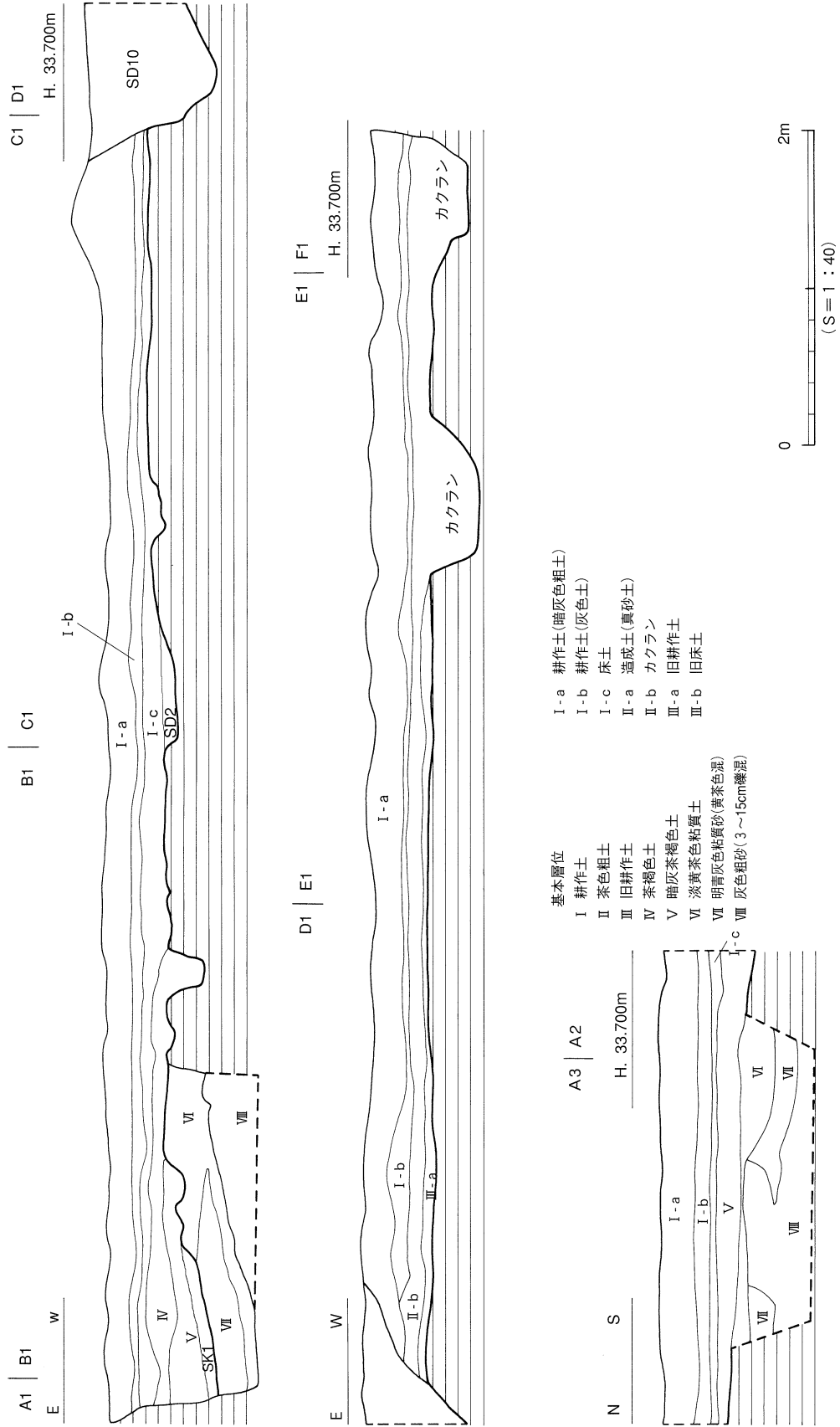
第Ⅶ層—(層厚3~22cm)。

第Ⅷ層—(層厚10~42cm)。

なお調査の便宜上、部分的に基本層序を細分化した(第58図参照)。



第57図 調査地測量図

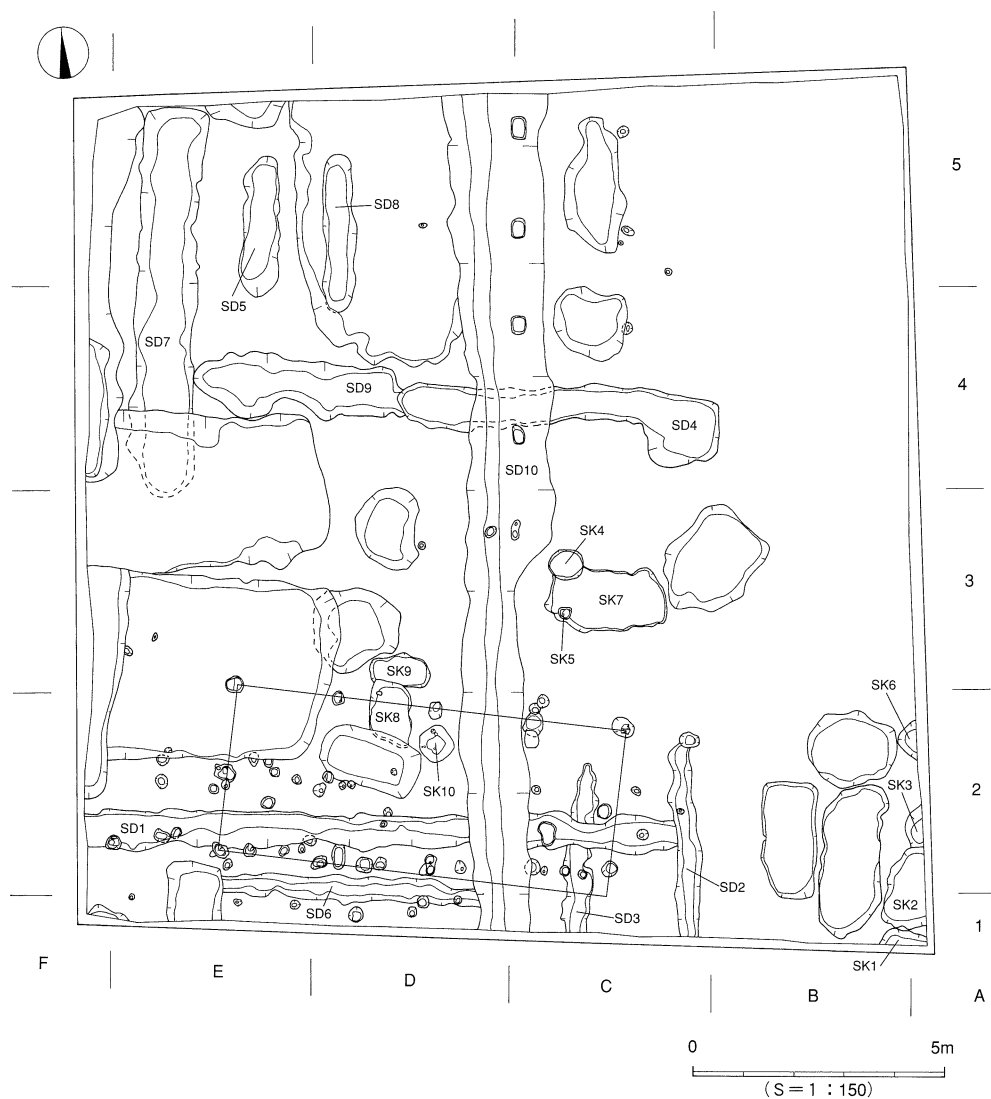


第58図 調査区南・東壁土層図

3. 遺構と遺物

今回の調査で検出された遺構は、掘立柱建物址1棟、溝10条、土坑10基、柱穴59基、性格不明遺構8基である。遺構の時期は、古代～近現代と思われる。

以下、主な遺構・遺物について記述する。



第59図 遺構配置図

(1) 掘立柱建物址

1号掘立柱建物址

調査区南側中央C2・D2・E2グリットに所在しており、10基の柱穴を確認した。方向は、桁行方向でW-11.5°-Nである。規模は、2×4間の東西棟で桁行長7.7m、梁行長3.3mを測る。柱穴プランは、楕円形と不整形円で直径0.23~0.45m、検出面よりの深さ0.24~0.5mを測る。全柱穴とも埋土は灰茶色土で柱痕は確認されなかった。検出された全ての柱穴の基底部から根石が検出されている。柱穴(SP6)の基底部から銭貨が一枚検出された。腐食の為、銭文の判読は不可能であった。また、柱穴内からは土師器小片が数点出土している。

出土遺物 1は直径25.5mm、重さ1.6g、方孔は7.5mmを測る。銭文は判読不能。

時期：1号掘立柱建物址については柱穴内からの遺物が僅少であり詳細な年代付けは難しいが、柱穴埋土等から中世以降の建物址と考える。

(2) 溝

本調査において確認された溝は10条である。全て第VI層上面での検出である。

SD1 (第59図)

調査区南西部C2~F2区に位置する。断面形は舟底状を呈し、上場幅40~70cm、深さ9cmを測る。埋土は暗灰茶色土である。遺物は埋土中から土師器、須恵器の小片が数点出土したにとどまる。出土遺物等から古代以降に埋没したものと考えられる。

SD3 (第59図)

調査区南壁から北へのびる溝でSD1に切られている。断面形は皿状を呈し、上場幅40~55cm、深さ3cmを測る。埋土は暗褐色土である。遺物は埋土中から土師器、須恵器の小片が数点出土している。SD1に先行する。遺物等から古代以降に埋没したものと考えられる。

SD6 (第59図)

調査区南西部D2・E2区に位置する。SD1とほぼ平行に伸びる。断面形は舟底状を呈し、上場幅30~60cm、深さ6cmを測る。埋土は灰茶色土である。遺物は埋土中から土師器、須恵器の小片が数点出土している。遺物等から古代以降に埋没したものと考えられる。

本調査で検出した溝に関する詳細は表31に記す。

(3) 土坑

SK1 (第59図)

調査区南東隅に位置する。平面形は楕円形を呈すると思われる。南側は調査区南壁である。検出長は95+ α cm、深さ16cmを測る。埋土は暗灰茶色土である。

時期：不明

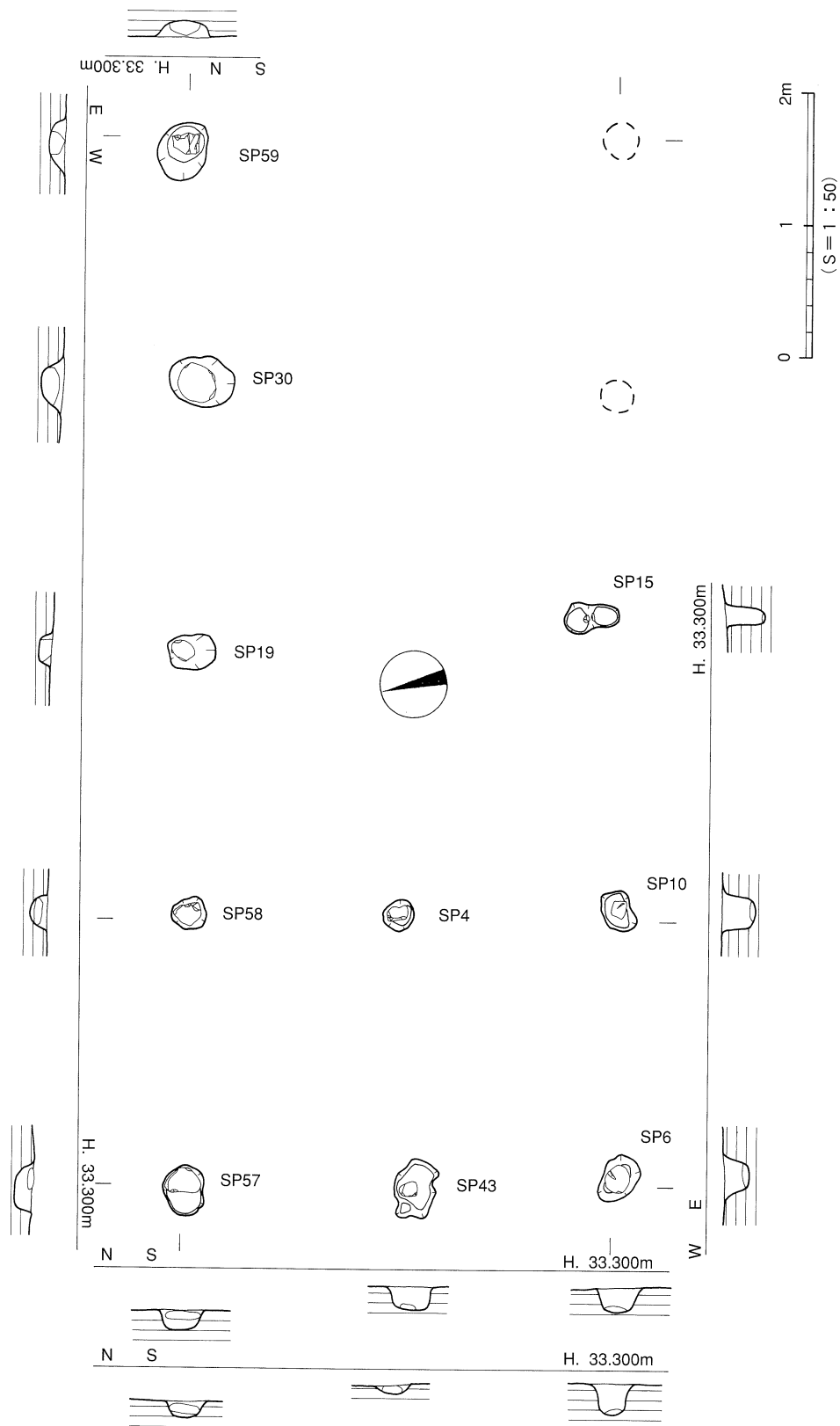
SK2 (第59図)

調査区南東隅に位置する。平面形は不整形楕円形を呈すると思われる。東側は調査区東壁である。検出長は165cm、深さ22cmを測る。埋土は暗灰茶色土である。



(S=1:1)

第60図 1号掘立出土銭拓影



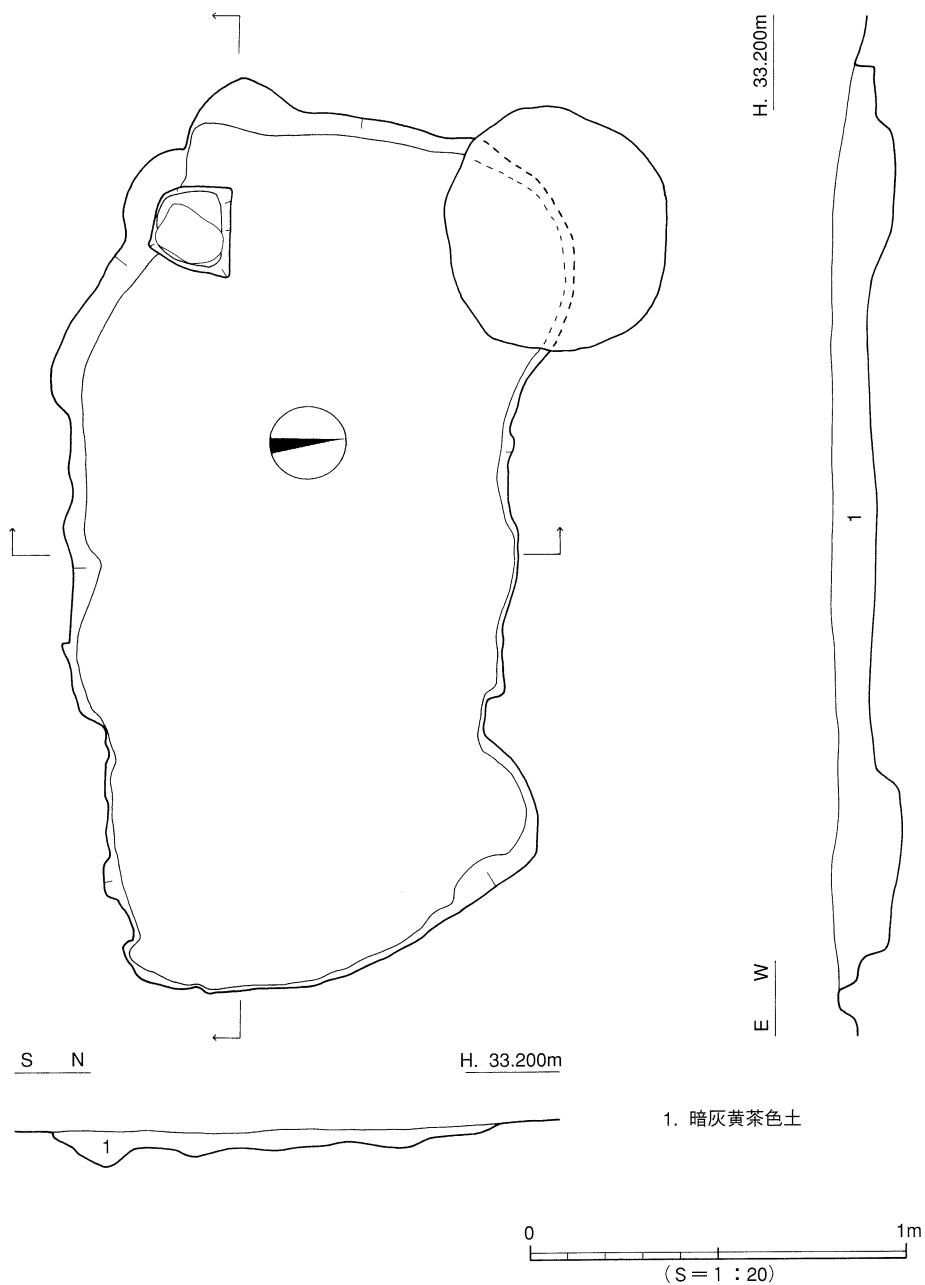
第61図 1号掘立測量図

時期：不明

SK 3 (第59図)

調査区南東隅に位置する。平面形は楕円形を呈すると思われる。東側は調査区東壁である。検出長は $90 + \alpha$ cm、深さ26cmを測る。埋土は暗灰茶色土である。

時期：不明



第62図 SK7測量図

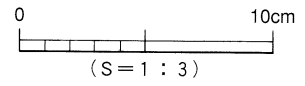
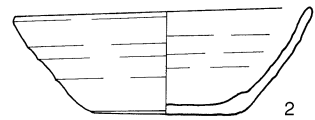
SK 4 (第59図)

調査区中央C 3グリットに位置する。平面形は円形を呈し、検出規模は長さ65cm、幅60cm、深さ24cmを測る。埋土は暗褐色土である。

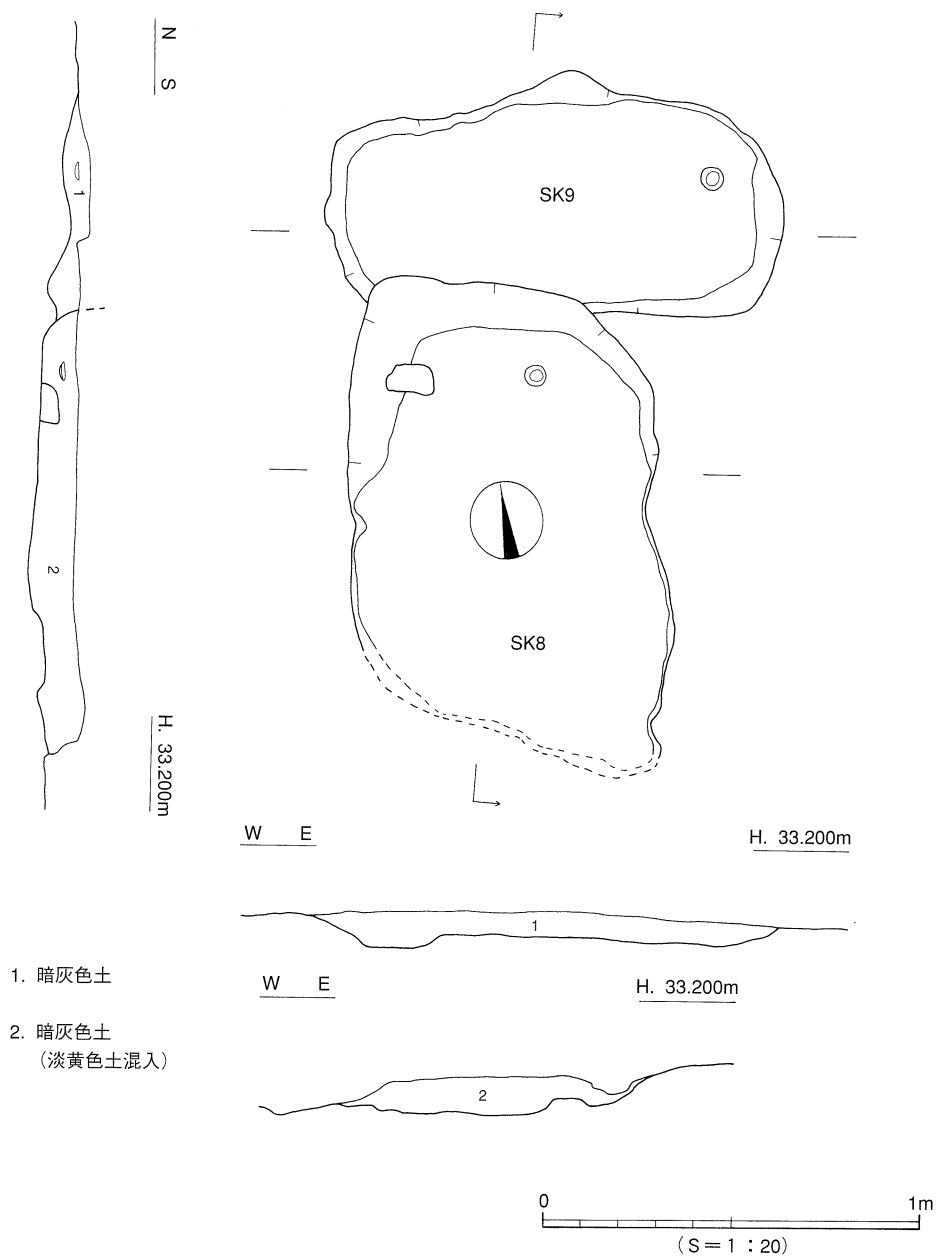
時期：SK 7が先行することより15世紀以降と思われる。

SK 5 (第59図)

調査区中央C 3グリットに位置する。平面形は不整形円形を呈し、検出規模は長さ25cm、幅23cm、深さ10cmを測る。埋土

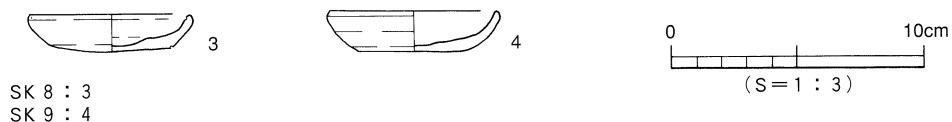


第63図 SK7出土遺物実測図



- 1. 暗灰色土
- 2. 暗灰色土
(淡黄色土混入)

第64図 SK8・9測量図



第65図 SK8・9出土遺物実測図

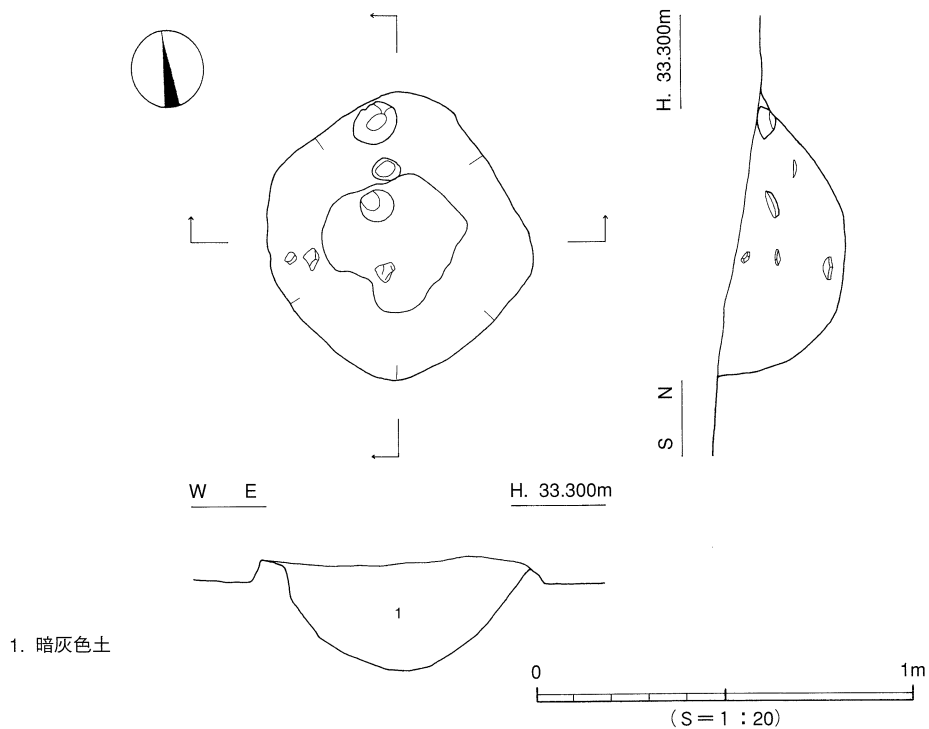
は暗褐色土である。

時期：SK 7が先行することより15世紀以降と思われる。

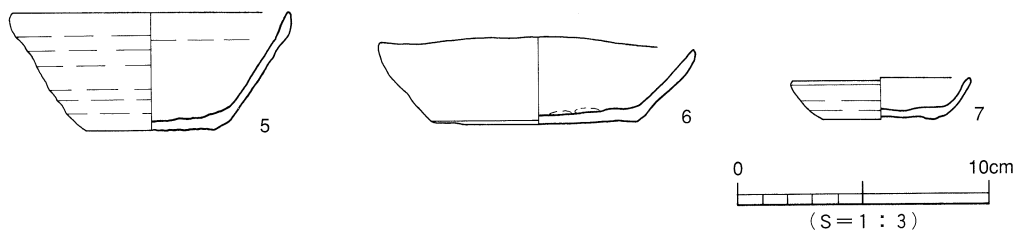
SK 6 (第59図)

調査区東B 2グリットに位置する。東側は調査区東壁である。検出長80cm、深さ4cmを測る。埋土は暗灰茶色土である。

時期：不明



第66図 SK10測量図



第67図 SK10出土遺物実測図

S K 7 (第62図)

調査区中央C 3グリットに位置する。平面形は不整長方形を呈し、検出規模は長さ243cm、幅118cm、深さ18cmを測る。埋土は暗灰黄茶色土である。遺物は土師器坏片が検出された。

出土遺物 (第63図)

2は土師器の坏。口縁部はわずかに内反する。底部切り離しは、回転糸切りによる。

時期：出土遺物より14～15世紀と考える。

S K 8 (第64、65図)

調査区中央D 2グリットに位置する。南側は攪乱を受け破損している。平面形は長方形を呈し、検出規模は長さ116cm、幅82cm、深さ11cmを測る。埋土は暗灰色土で、遺物には土師器坏がある。

出土遺物 3は土師器皿の完形品。底面に回転糸切り後板状圧痕が看取される。

時期：出土遺物より14～15世紀と考える。

S K 9 (第64、65図)

調査区中央D 3グリットに位置する。2号土坑墓に先行する。平面形は、ほぼ長方形を呈する。検出規模は長さ120cm、幅58cm、深さ10cmを測る。埋土は暗灰色土で、遺物には土師器坏がある。

出土遺物 4は土師器皿の完形品。内反する口縁部をもち、端部は丸く仕上げられる。

時期：出土遺物より14～15世紀と考える。

S K 10 (第66、67図)

調査区やや南寄りD 2グリットに位置する。平面形は、ほぼ円形を呈する。検出規模は、長さ75cm、幅69cm、深さ28cmを測る。埋土は暗灰色土である。遺物は土師器坏が検出された。

出土遺物 7は土師器の皿。底面に回転糸切り後板状圧痕が看取される。5と6は土師器の坏。5は直線的に外傾する立ち上がりで、口縁部はやや肥厚され直立する。

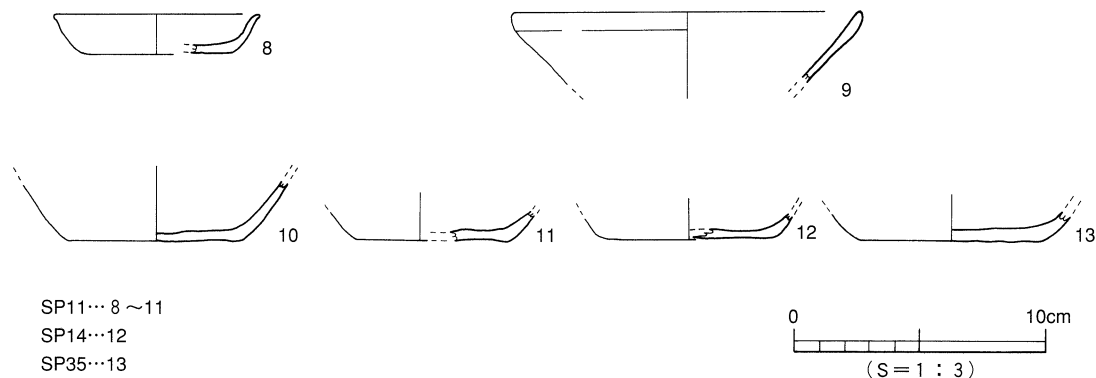
時期：出土遺物より14～15世紀と考える。

(4) その他の遺構と遺物

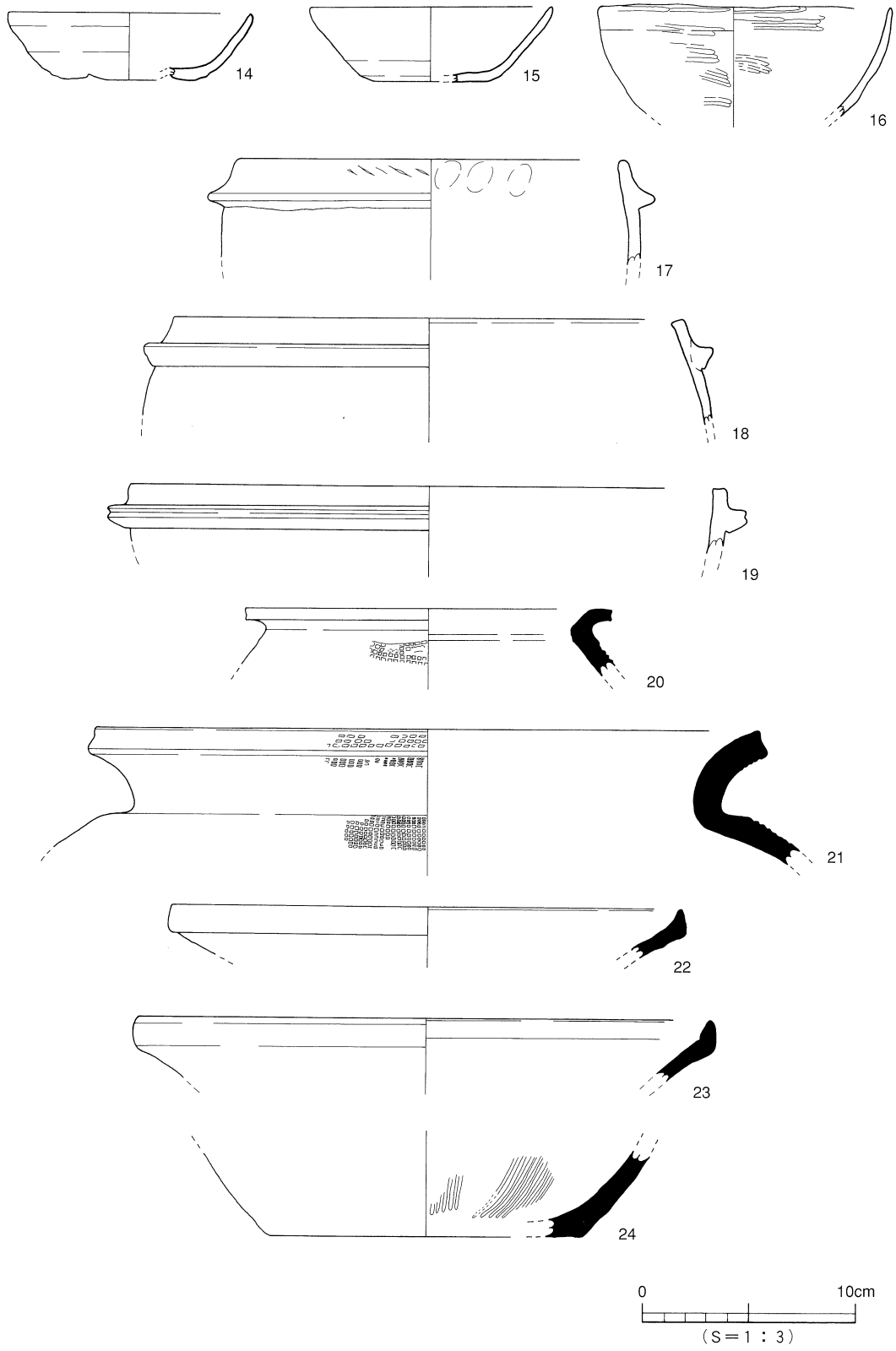
本調査において確認された柱穴は49基である。すべて第VI層上面での検出である。

柱穴出土遺物 (第68図)

皿(8・11～13)共に底部切り離しは回転糸切りが用いられる。13は糸切り後、板状圧痕が看取さ



第68図 柱穴出土遺物実測図



第69図 層不明出土遺物実測図

れる。

坏（9・10）9は直線的に外傾する口縁部。端部はやや肥厚される。10は平底でやや内反する立ち上がり。

層不明出土遺物（第69図）

14は土師器の坏で底部に強い板状圧痕を看取。15は瓦質の坏。直線的に外傾する口縁部で端部は先細りしながら丸くおさめる。16は瓦質の椀。ゆるやかに内反する口縁部で内外面共に磨きを看取。17・18は土師質の土釜。口縁部外面に断面三角形の凸帯が貼り付けられる。19は土師質の羽釜。逆「ハ」の字状の口縁部に断面方形の凸帯が貼り付けられる。20・21は須恵質の甕の口縁部。口縁端部及び頸部外面にタタキ痕を看取。22・23は須恵質の捏鉢。共に口縁端部が上方に拡張される。24は備前焼の播鉢。備前焼編年V期のものである。

4. 小 結

本調査において中世～近現代の遺構と遺物を確認することができた。

1. 中 世

遺構 中世に時期比定できるのはS K 8、9、10である。これらは、遺構の平面形及び完形の土師器が出土している点から土坑墓あるいは何らかの祭祀遺構の可能性はある。

遺物 旧耕作土中及び攪乱土中、遺構埋土より出土した。S K 10からは土師質土器の坏、皿、小皿がセットで出土している。松山平野の土師質土器編年を考えるうえでの好資料（一括資料）となるものである。また、S K 8、9、10から同形状の土師質土器の小皿が各1点出土している。

2. 中・近世

遺構 切り合い関係からS K 8、9、10より後出するのが1号掘立柱建物址である。本調査地の西方80mに位置する桑原田中遺跡2次調査地において方位、規模がほぼ同等の掘立柱建物址が検出されている。また北方に位置する樽味遺跡2次調査地〔1993田崎博之〕においても掘立柱建物址群が検出されている。よって今回の1号掘立は当時の桑原遺跡群の集落構造を考えるうえでの補充資料となり貴重である。

遺物 攪乱土中及び遺構埋土より出土した。1号掘立柱建物址を構成する柱穴から根石が出土した。また柱穴S P 6の基底部から銭貨が一枚出土した。S P 6からは銭貨のみの出土であるがこれは建造物を建てる時の「地鎮め」の祭りの可能性がある。また、他の柱穴からは14～15世紀に位置付けられる土師質土器片が出土している。

3. 近・現代

遺構 調査区内において随所に粘土の抜き取り遺構が見受けられた。詳細な時期については不明であるが、愛媛県下には数多くの瓦窯業所が存在することより何らかの関係があるものと思われる。

〔参考文献〕

- 中野良一 1988 「愛媛県における古代末から中世の土器様相」『中近世土器の基礎研究』日本中世土器研究会
 宮本一夫 1989 『鷹子・樽味遺跡の調査』愛媛大学埋蔵文化財調査室
 梅木謙一・宮内 慎一他 1992 『桑原地区の遺跡』(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
 辻 佳伸 1992 「皿と銭貨—中世地鎮め遺構の—様相—」『真朱』(財)徳島県埋蔵文化財センター
 田崎博之 1993 『樽味遺跡Ⅱ』愛媛大学埋蔵文化財調査室
 栗田茂敏 1994 『石井幼稚園遺跡・南中学校構内遺跡—第2次調査—』(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
 梅木謙一・宮内 慎一 1994 「樽味高木遺跡3次調査地」『桑原地区の遺跡Ⅱ』(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
 梅木謙一・山本健一 1994 「桑原田中遺跡2次調査地」『桑原地区の遺跡Ⅱ』(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
 柴田 圭子 1994 「伊予における15・16世紀の土器様相」『第6回四国中世土器研究会—15・16世紀の土器様相—』
 四国中世土器研究会編

遺構・遺物一覧 (武正良浩)

- (1) 以下の表は、本調査検出の遺物の計測値及び観察一覧である。
 (2) 遺構の一覧表中の出土遺物欄の略号について。

法量欄 () : 復元推定値

形態・施文欄 土器の各部位名称を略記。例) 口→口縁部

胎土・焼成欄 胎土欄では混和剤を略記した。例) 砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土。

表30 掘立柱建物址一覧

掘立	方位	規模 (間)	桁行		梁行		床面積 (㎡)	時期	備考
			実長 (m)	柱間寸法 (m)	実長 (m)	柱間寸法 (m)			
1	東西	2×4間	770(25.7)	6.7, 6.7, 6.3, 6	330(11)	5.3, 5.7	25.41	中世以降	SP.4.6.10.15.19. 30.43.57.58.59

表31 土坑一覧

土坑 (SK)	地区	平面形	断面形	規模 長さ×幅×深さ (m)	埋土	出土遺物	時期	備考
1	A・B1	半円	レンズ状	$(0.3 + a) \times (0.95 + a) \times 0.16$	暗灰茶色土		不明	
2	A:B 1:2	半楕円	レンズ状	$(0.8 + a) \times 1.65 \times 0.22$	暗灰茶色土	土師	不明	
3	A・B2	半円	レンズ状	$(0.35 + a) \times (0.9 + a) \times 0.26$	暗灰茶色土 (黄色土混入)		不明	
4	C3	円	レンズ状	$0.6 \times 0.65 \times 0.24$	暗褐色土 (黄色土粒混入)	土師	中世以降	
5	C3	円	レンズ状	$0.23 \times 0.25 \times 0.2$	暗褐色土 (黄色土粒混入)	土師・須恵	中世以降	
6	A・B2	半円	レンズ状	$(0.35 + a) \times 0.8 \times 0.04$	暗灰茶色土		不明	
7	C3	不整形長方形	逆台形	$2.43 \times 1.18 \times 0.18$	暗灰黄茶色土	土師	中世	
8	D2・3	長方形	逆台形	$0.82 \times 1.16 \times 0.11$	暗灰色土 (淡黄色土混入)	土師	中世	
9	D3	長方形	逆台形	$0.58 \times 1.20 \times 0.10$	暗灰色土 (淡黄白色土混入)		中世	
10	D2	円形	レンズ状	$0.69 \times 0.75 \times 0.28$	暗灰色土	土師	中世	

出土遺物観察表

表32 溝一覧

溝 (SD)	地区	断面形	規模 長さ×幅×深さ (m)	埋土	出土遺物	時期	備考
1	C・D・E・F・2	舟底状	11.7×0.7×0.09	暗灰茶色土	土師・須恵	古代以降	
2	C1・2	皿状	3.8×0.5×0.08	暗灰茶色土 (黄色土混入)		不明	
3	C1・2	皿状	3.4×0.55×0.03	暗褐色土 (黄色土混入)	土師・須恵	古代以降	
4	C・D4	舟底状	6.4×0.9×0.22	灰茶色土 (黄白色土混入)	土師・瓦	古代以降	
5	E5	舟底状	2.8×0.75×0.12	暗灰茶色土 (黄色土混入)	須恵	古代以降	
6	D・E2	舟底状	5.1×0.6×0.06	灰茶色土	土師・須恵	古代以降	
7	E4・5	皿状	7.7×1.2×0.20	灰茶色土 (黄白色土混入)	土師	古代以降	
8	D4・5	舟底状	3.1×0.65×0.15	灰茶色土 (黄白色土混入)		不明	
9	D・E4	舟底状	4.2×1.3×0.11	灰茶色土 (黄白色土混入)		不明	
10	C1~D5	レンズ状	16.6×1.75×0.27	カクラン土		近現代	

表33 1号掘立出土遺物観察表 銭貨

番号	銭貨名	枚数	初鑄年	王朝	銭径 (mm)		量目 (g)	備考
					外径	内径		
1	不明	1	不明	不明	25.5	7.5	1.613	

表34 SK7出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
2	土師器 坏	口径 11.6 底径 5.7 器高 4.0	やや内反する口縁部。ロクロ成形。 底部切離しは回転糸入りによる。	横ナデ	横ナデ	乳灰茶色 乳灰茶色	石粒 (~1) ◎		32

表35 SK8 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
3	土師器 皿	口径 6.3 底径 4.3 器高 1.5	ほぼ完形品。短くわずかに内反する口縁部。端部は丸く仕上げられる。底面は回転糸切り後板圧痕。	回転横ナデ	回転横ナデ	乳茶色 乳茶色	長 (0.5~2) ◎		32

表36 SK9 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
4	土師器 皿	口径 6.6 底径 4.3 器高 1.6	ほぼ完形品。内反する口縁部。端部は丸く仕上げられる。回転糸切り。	回転横ナデ	回転横ナデ	乳茶色 乳灰茶色	長 (~1) ◎		32

表37 SK10 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
5	土師器 坏	口径 11.0 底径 5.2 器高 4.5	直線的に外傾する立ち上がり。口縁端部はやや肥圧される。回転糸切り、板圧痕を看取。	横ナデ	横ナデ	乳灰茶色 乳灰茶色	石粒 (1) ◎		32
6	土師器 坏	口径 12.5 底径 7.9 器高 3.1	全体的にやや粗い作り。底部内面に指頭圧痕を看取。回転糸切り、板状痕。	横ナデ	横ナデ	乳灰茶色 乳灰茶色	石粒 (~2) ◎		32
7	土師器 皿	口径 7.1 底径 4.5 器高 1.5	ほぼ完形品。わずかに外反する口縁部。端部は丸く仕上げられている。回転糸切り、板圧痕を看取。	回転横ナデ	回転横ナデ	乳茶色 乳灰茶色	長 (0.5~2) ◎		32

表38 柱穴出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
8	土師器 皿	口径 8.2 底径 6.2	口縁端部はやや先細りしながら、短く外反する。回転糸切り。	ナデ	ナデ	黄橙色 黄橙色	微砂粒 ○	SP11	
9	土師器 坏	口径 13.9 残高 2.7	直線的に外傾する立ち上がり。口縁部はやや肥厚される。	回転横ナデ	回転横ナデ	浅黄橙色 浅黄橙色	石(1) 微砂粒 ○	SP11	
10	土師器 坏	底径 7.0 残高 2.4	やや内反する立ち上がり。底部切離しは回転糸切り。	ナデ	ナデ	浅黄橙色 浅黄橙色	微砂粒 ◎	SP11	
11	土師器 皿	底径 (7.0) 残高 1.2	底部切離しは回転糸切り。	ナデ	ナデ 回転ナデ	灰白色 灰白褐色	微砂粒 ○	SP11	
12	土師器 皿	底径 (7.0) 残高 1.0	底部切離しは回転糸切り。	ナデ	?	淡黄色 淡黄色	石(1~4) 微砂粒 ○	SP14	
13	土師器 皿	底径 7.3 残高 1.2	底部内面に指頭圧痕を看取。回転糸切り。板圧痕。	横ナデ	横ナデ	灰白色 灰白色	石(0.5~3) ◎	SP35	

表39 層不明出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
14	土師器 坏	口径(11.4) 底径 7.3 残高 3.0	やや先細りする口縁端部。ロクロ成形。回転糸切り。強い板圧痕。	回転横ナデ	回転横ナデ	乳灰色 乳灰色	石(0.5~2) ◎		
15	瓦器 坏	口径 11.4 底径 (5.8)	直線的に外傾する立ち上がり。端部はやや先細りしながら、丸く仕上げ上げる。	ナデ	ナデ	灰白黒褐色 灰白黒褐色	微砂粒 ◎		
16	瓦器 椀	口径(14.6) 残高 5.0	ゆるやかに内反する口縁部。内外面共にミガキを看取。	ナデ後ミガキ	ナデ後ミガキ	? 乳灰色	石(1~5) ◎		
17	土師質 土釜	口径(18.0) 残高 4.9	内湾する口縁部。口縁外面に断面三角形の凸帯が貼り付けられる。	摩滅	摩滅	黄灰色 灰白色	微砂粒 ◎		
18	土師質 土釜	口径(24.0) 残高 4.9	逆ハの字状の口縁部。端部は面をなす。口縁外面に断面三角形の凸帯が貼り付けられる。	横ナデ	横ナデ	赤褐色 明黄褐色	微砂粒 ◎		
19	土師質 羽釜	口径(28.0) 残高 3.0	ゆるやかに内反する口縁部。端面は面をなす。断面方形の凸帯が貼り付けられ、端面中央部が凹む。	横ナデ	横ナデ	暗オリーブ灰色 暗オリーブ灰色	微砂粒 ◎		
20	甕	口径(17.2) 残高 3.1	短く鋭角的に外反する口縁部。端面は横ナデによりわずかに凹む。頸部外面にタタキ痕を看取。	格子目タタキ 横ナデ	横ナデ	灰白色 灰色	微砂粒 ◎		
21	甕	口径(31.0) 残高 6.7	短く外反する口縁部。口縁端面、口縁部外面、頸部にタタキ痕を看取。	格子目タタキ 横ナデ	横ナデ	灰白色 灰白色	微砂粒 ◎		
22	捏鉢	口径(24.0) 残高 2.2	口縁端部が上下に肥拡される。端面に自然釉。	横ナデ	横ナデ	暗灰白色 灰白色	微砂粒 密 ◎		
23	捏鉢	口径(27.0) 残高 2.9	口縁端部が上方に拡張される。先端は丸く細く仕上げられ、わずかに外傾する。	横ナデ	横ナデ	灰白色 灰白色	微砂粒 ◎		
24	播鉢	底径(14.8) 残高 4.1	平底。立ち上がりはゆるやかに内反。	回転横ナデ	回転横ナデ	灰褐色 灰褐色	微砂粒 ◎		

第6章

ハ タ デ ラ
畑寺 6 号墳

第6章 畑寺6号墳

1. 調査の経過

(1) 調査に至る経緯

1996（平成8）年3月26日、医療法人友朋会より松山市畑寺町丙1-1.1-2.1-3.12-1.12-5.12-7.12-11.12-12.12-13他における老人ホーム建設にあたり、当該地の埋蔵文化財の確認願いが松山市教育委員会文化教育課（以下、文化教育課）に提出された。

当該地は、松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地『87 畑寺古墳群』内にあり、同じ丘陵上には『86 赤坂古墳』がある。

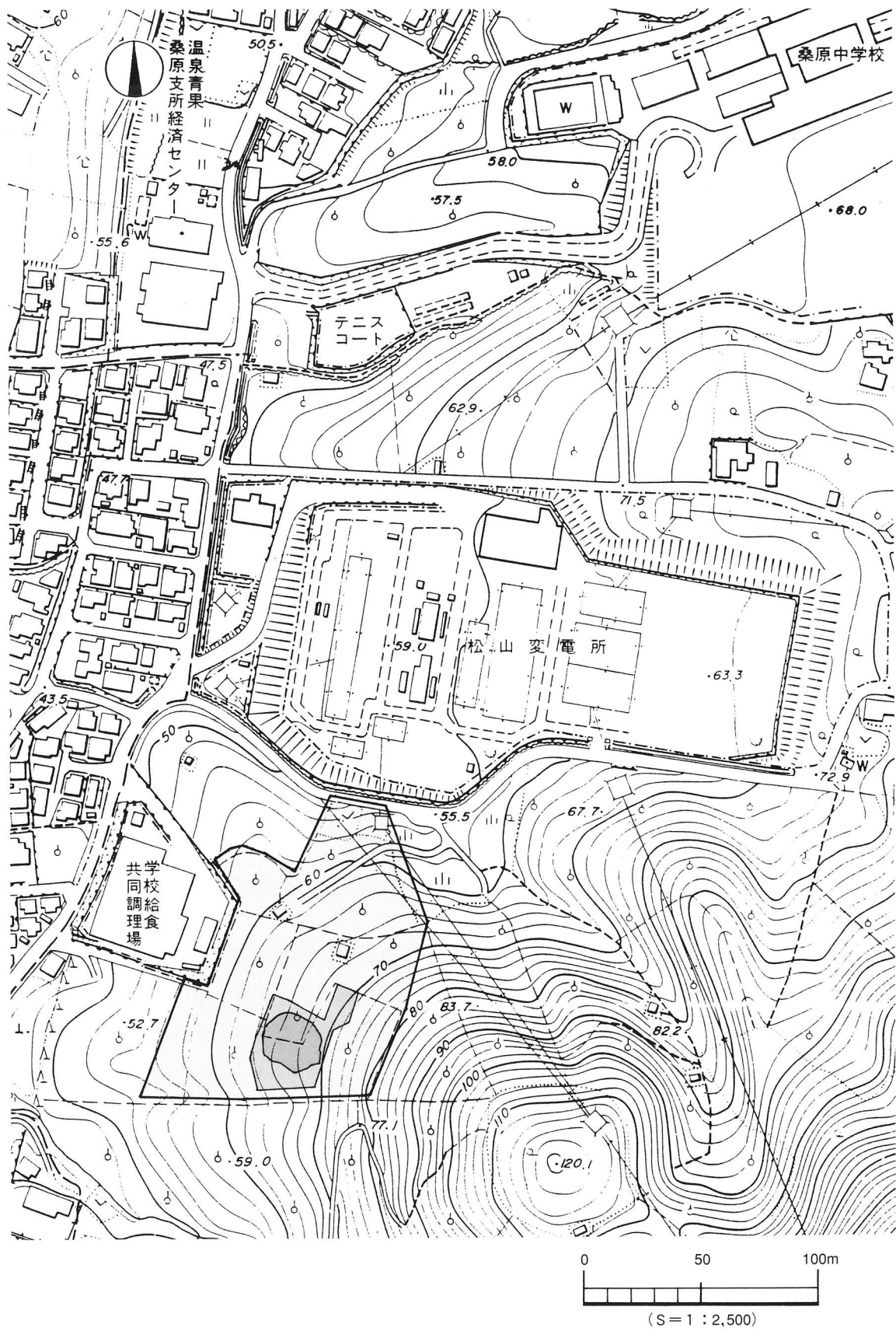
この畑寺古墳群は、踏査により5基の古墳が確認されているが、墳形や時期は未調査のため不明である。北約0.5kmに位置する畑寺竹ヶ谷古墳群には、9基の円墳が検出され、鉄製太刀、須恵器が出土し、5世紀後半に比定される。北約0.8kmの東野お茶屋台古墳は円墳が8基、方墳が1基で構成される。遺物は、円筒埴輪・形象埴輪・須恵器・鉄器類が出土しており、時期は5世紀中葉から6世紀初頭の古墳群と考えられている。南西約0.8kmの三島神社古墳は前方後円墳であり、片袖式の横穴式石室をもつ。前方部前面の裾部からは、11個の朝顔形埴輪が出土した。このほか、円筒埴輪・須恵器・耳環・玉類・滑石製有孔円板・金銅製鈴・鉄製品が出土し、時期は6世紀前半に比定されている。南西約1.1kmの経石山古墳（未調査）があるが、墳丘は三島神社古墳よりやや大きい。築造年代は5世紀代と考えられている。南約0.3kmに位置する桑原古墳群は、踏査により5基の古墳が確認されており、このうち2基は円墳で、横穴式石室である。

このことから、当該地における埋蔵文化財の有無と、さらには遺跡の範囲や性格を確認するため、1996（平成8）年5月13日～同年5月31日に（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）はトレンチによる試掘調査を実施した。試掘調査は、調査地内にT1～T21の計21本のトレンチを設定し、古墳の範囲及び土層確認を行った（第71図）。

試掘調査の結果、T12・13・14・18・20・21の土層観察では古墳盛土を検出した。また、T20からは円筒埴輪片、T12・13からは石器が1点ずつ出土した。

これらの結果を受け、文化教育課と申請者の両者は遺跡の取り扱いについての協議を重ね、老人ホーム建設に伴って消失する遺跡に対し、記録保存のための発掘調査を実施することとなった。発掘調査は、古墳の築造方法の解明と当地周辺に点在する古墳との関係を調査の主目的とし、文化教育課の指導のもと、埋文センターが主体となり、T12・13・14・18・20・21を中心に調査区を設定し、1996年6月1日より本格調査を開始した。

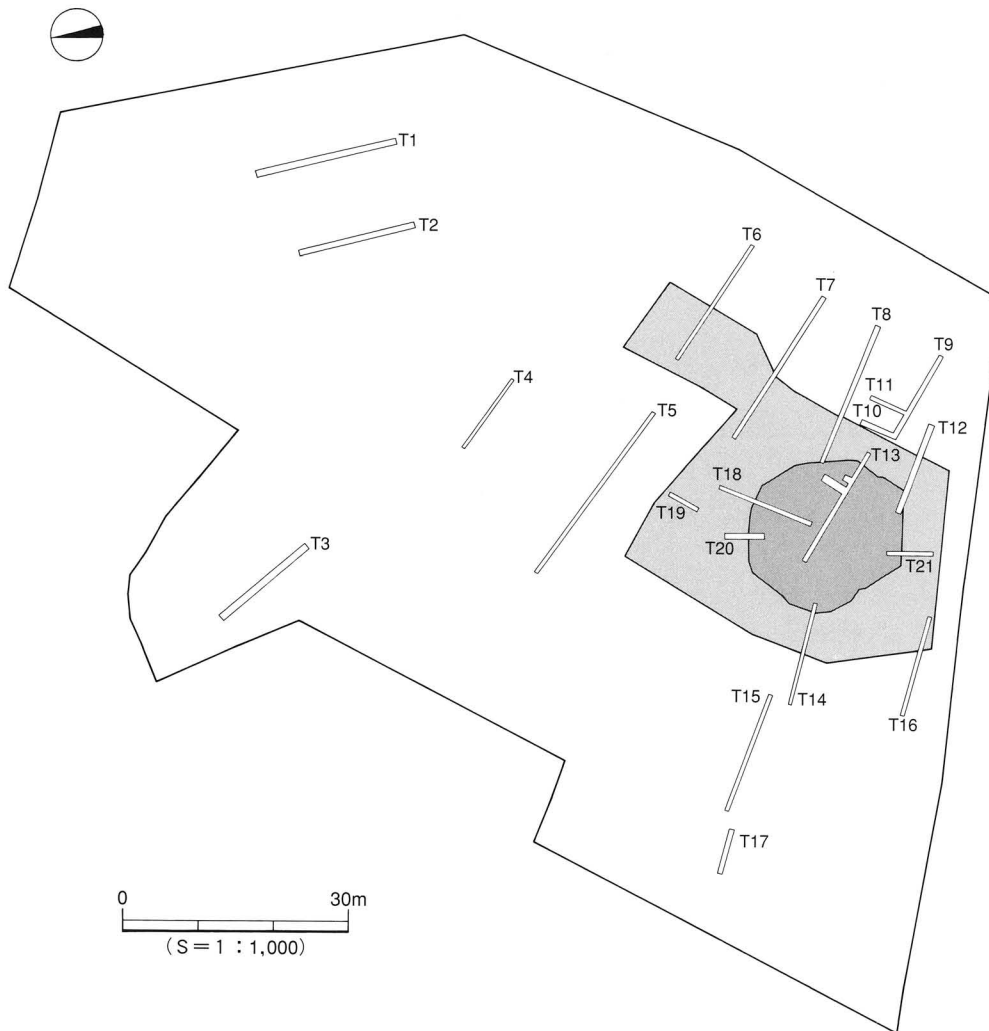
畑寺 6 号墳



第70図 調査地位置図

(2) 調査の経緯

1996（平成8）年6月3日、重機及び手掘りにより表土剥ぎ取り作業を開始する。試掘調査の結果をもとに地表面下約0.5mまで掘り下げを行う。平行して古墳の墳頂を軸とし、東西・南北方向に主軸トレンチを設定し、地山まで掘り下げを開始する。6月13日、遺構検出作業を開始する。6月18日、周溝内と墳丘盛土内にて、埴輪列の1部及び性格不明遺構を検出し、遺構検出状況の写真を撮影する。6月19日、東西・南北ベルト土層の測量を開始する。6月25日、周溝の掘り下げを開始した。それと同時に埴輪列の検出を行った。6月27日、東西・南北ベルト土層の測量を完了する。6月28日、性格不明遺構の掘り下げを開始する。7月4日、周溝の掘り下げや測量を完了する。7月10日、埴輪列の検出を完了した。また、性格不明遺構の掘り下げや測量を完了する。7月11日、遺構完掘写真を撮影する。7月12日、現地説明会を行う。その後、埴輪列の測量を完了し、盛土内から埴輪を取り上げる。7月13日、出土遺物や調査用具などを撤去する。平行して重機による埋め戻しを開始する。7月15日、重機による埋め戻しを完了する。なお、調査にあたり調査区内を5m四方のグリッドに分けた（第74図）。グリッドは墳丘の中心を軸とし、東西・南北方向に設定した。



第71図 調査地測量図・試掘トレンチ位置図

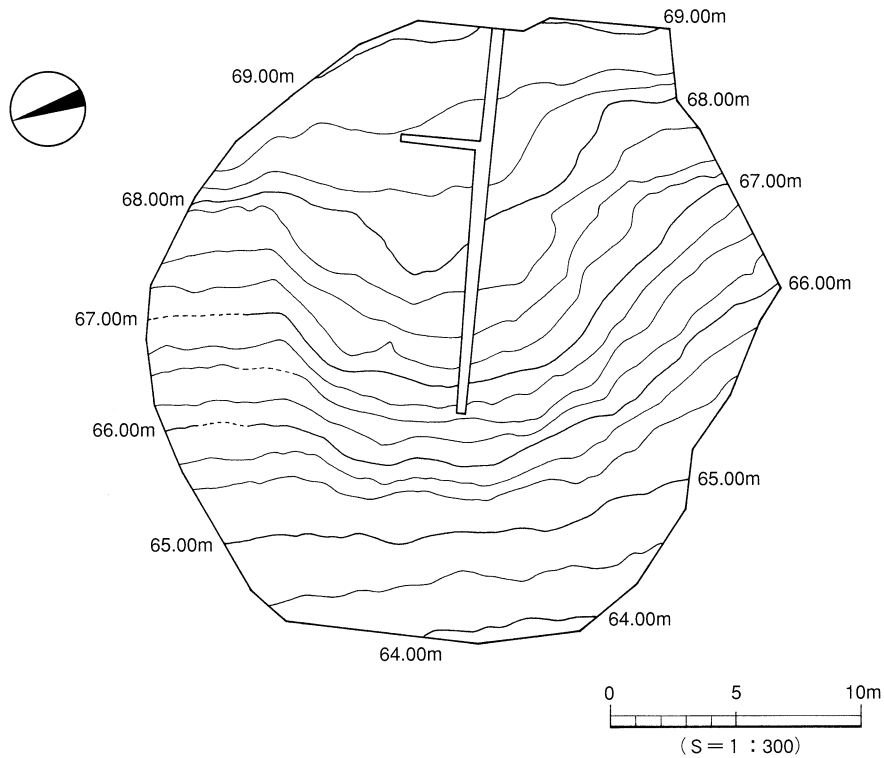
(3) 調査組織

遺跡名 畑寺6号墳
 調査地 畑寺町丙1-1、1-2、1-3、12-1、12-5、12-7、12-11、12-12、12-13
 調査面積 対象面積 9717.08m²
 実施面積 576.00m²
 調査期間 1996(平成8)年6月1日～同年7月15日
 調査委託 医療法人 友朋会
 調査担当 水本 完児、河野 史知
 調査作業員 池田 平、宇都宮東吾、大塚 隆重、岡崎 政信、岡本 克司、大西 等、
 酒井 直也、椿坂 和裕、中路 勝巳、西原 聖二、二宮 和見、能田 久士、
 松本 幸正、森脇 信介、猪野美喜子、岡本 邦栄、篠森 千里、乗松 和枝、
 藤田美恵子、真木 雅子、矢野 妙

2. 遺構と遺物

調査地は、高縄山系の南西側の麓、畑寺古墳群の西側丘陵地に位置し、標高約68m前後に立地する。調査以前は、耕作地(果樹園)であった。

本調査では、古墳を1基確認した。周溝1条、埴輪列(盛土内)1列、性格不明遺構1基を検出した。主体部は未検出である。



第72図 調査前地形測量図

(1) 墳丘

古墳は円墳で、規模は直径26mを測り、施設には周溝がある。墳丘は削平され、主体部は未検出である。ただし、墳丘中央部において性格不明遺構1基を検出した。

1) 墳丘に関わる土層は、第Ⅰ層表土、第Ⅱ層薄い黄色土（周溝埋土）、第Ⅲ層盛土、第Ⅳ層地山である。

第Ⅰ層は腐葉土で、厚さ25～50cmを測る。調査区全域で検出した。

第Ⅱ層は薄い黄色土（薄い赤褐色混じり）で、厚さ5～25cmを測る。周溝は、北部から南東部にかけて検出した。

第Ⅲ—1層は薄い赤褐色土（盛土④）で、厚さ10～75cmを測る。墳丘の中心部で検出した。

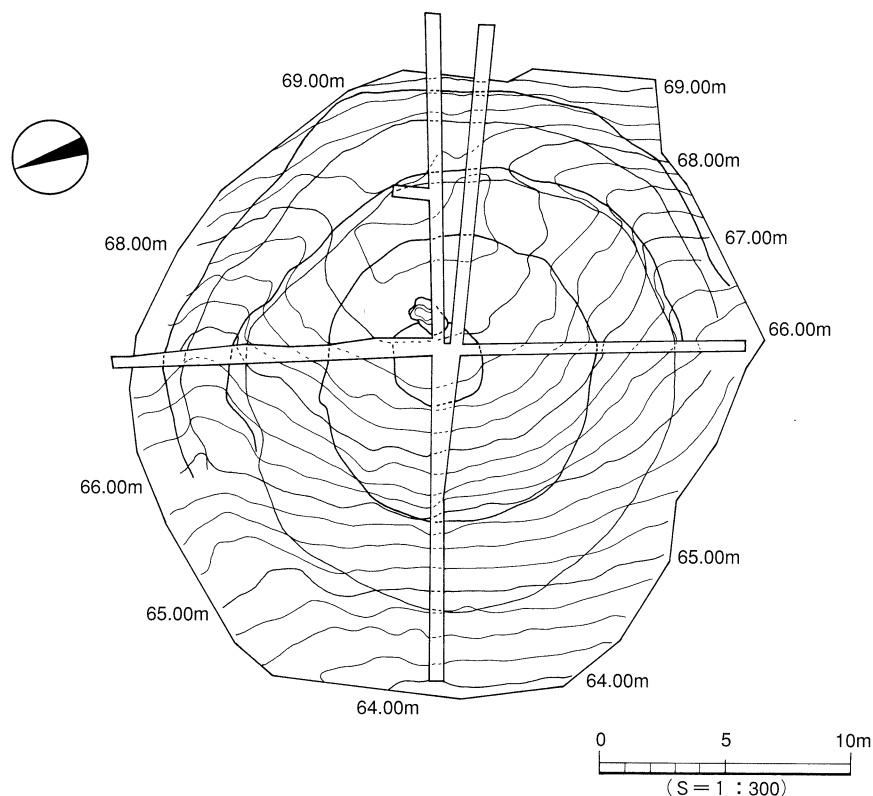
第Ⅲ—2層は薄い黄色土と薄い赤褐色土の混合土（盛土③）で、厚さ20～75cmを測る。調査区全域で検出した。

第Ⅲ—3層は灰白色粘土（盛土②）で、厚さ15～40cmを測る。墳丘部の中心から南へ5m、北へ2.7m、東へ2.2m、西へ5.5mの範囲で検出した。

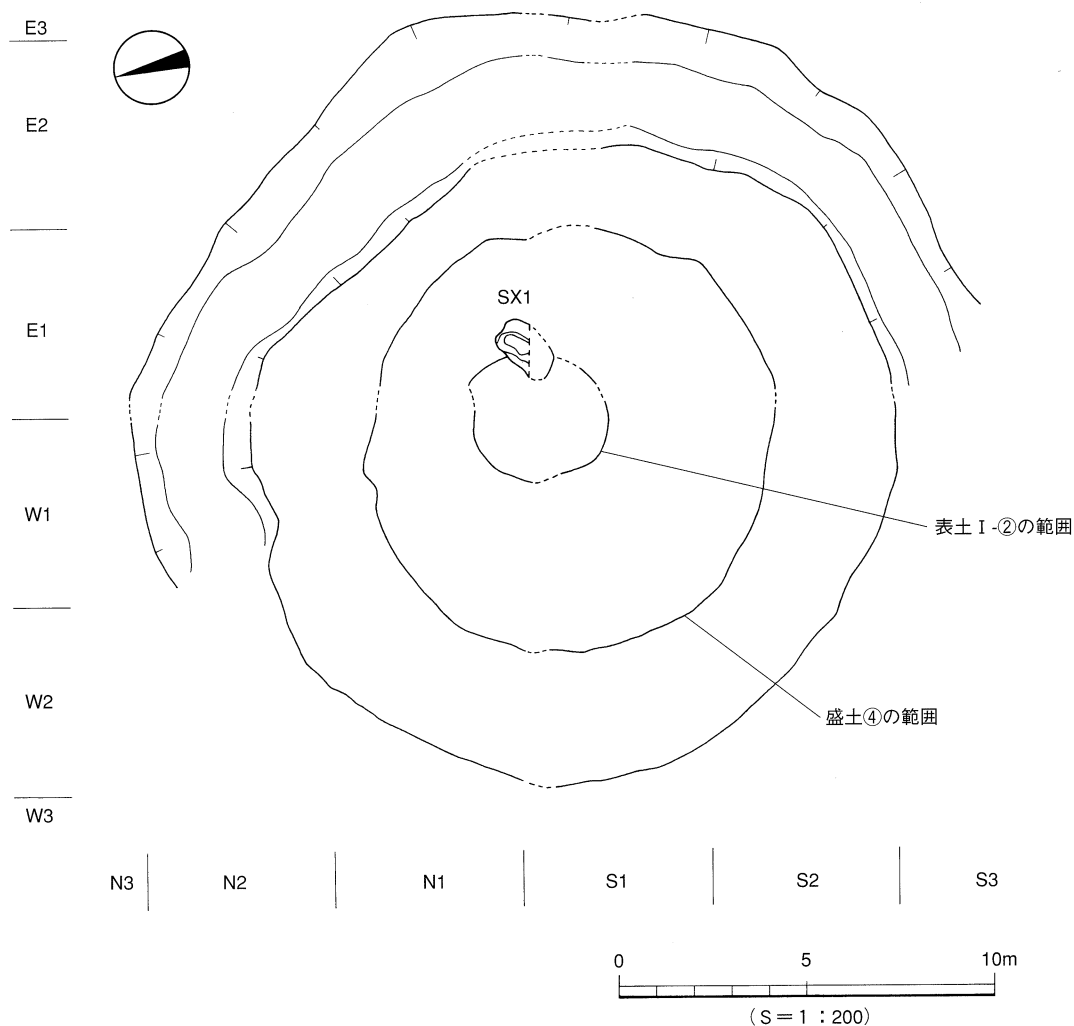
第Ⅲ—4層は薄い黄色粘砂（盛土①）で、厚さ10～55cmを測る。調査区ほぼ全域で検出した。

第Ⅲ—5層は赤褐色土（盛土⑤）で、厚さ10～40cmを測る。この土は埴輪を設置する穴を埋めた土である。

2) 墳丘の築造は、まず地山を削って基盤面をつくり、その上に盛土①・②・③・④を固めながら積んでいく。このうち盛土②は、粘土を貼り付け固くしまっている。埴輪は、盛土④を掘りこみ並べられている。



第73図 墳丘測量図



第74図 遺構配置図

(2) 円筒埴輪列 (第77図, 図版34)

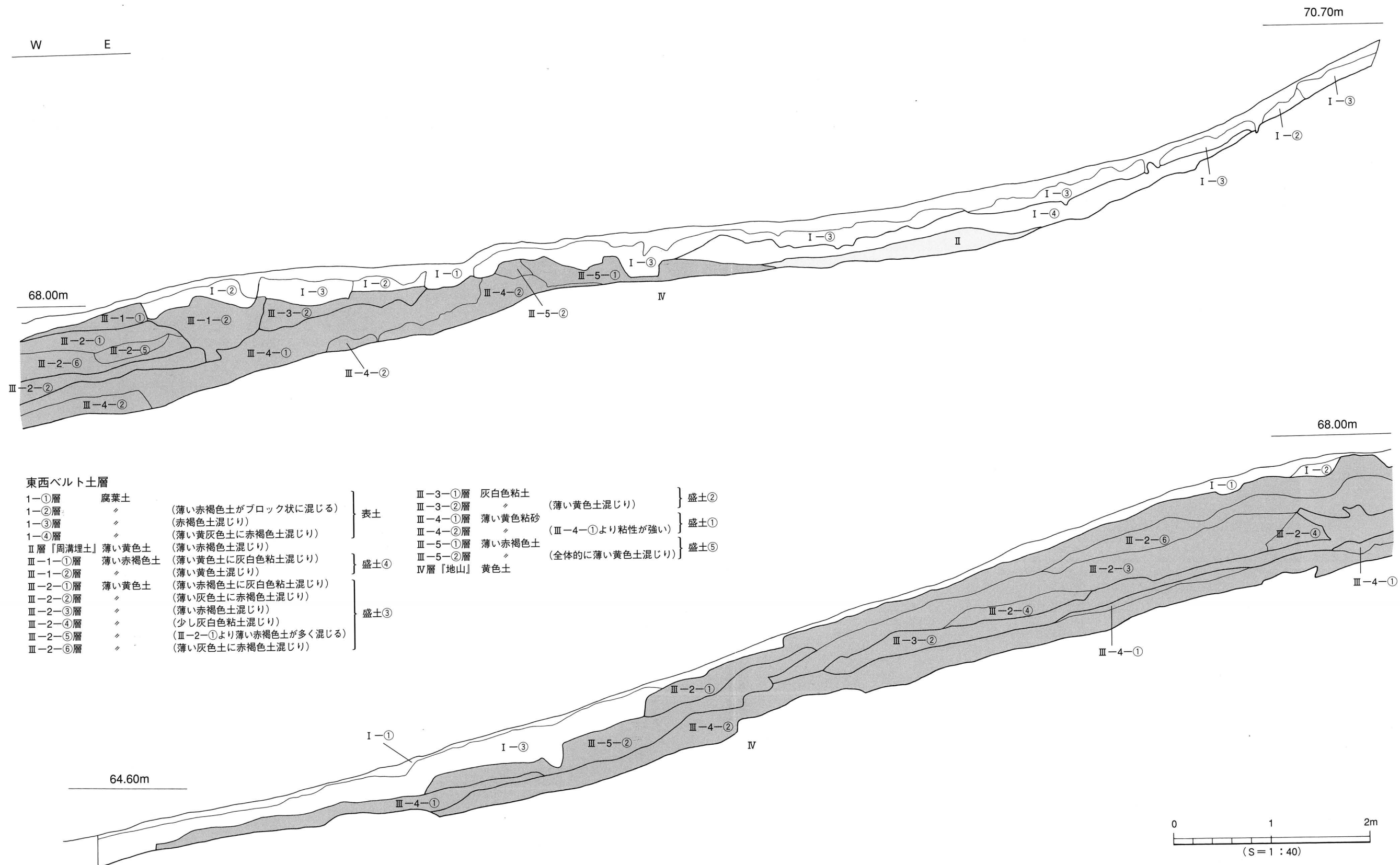
円筒埴輪は、墳丘北東部のN1E1～S1E2区に8個体、南東部のS2W1～S2E1区に4個体が出土し、50～160cm間隔に配される。また、中央北側のT20からは1個体が出土している(第78図2)。墳丘から出土した12個体は胴下半部～基底部、T20出土埴輪は口縁部が遺存するにすぎない。

出土遺物 (第78・79図, 図版)

円筒埴輪は径13.6～32cmを測り、16～17cmが主体である。残存高は9.4～29.5cmを測る。

①円筒埴輪はタガの形状により、M字状になるA類と、台形状になるB類に大別される。

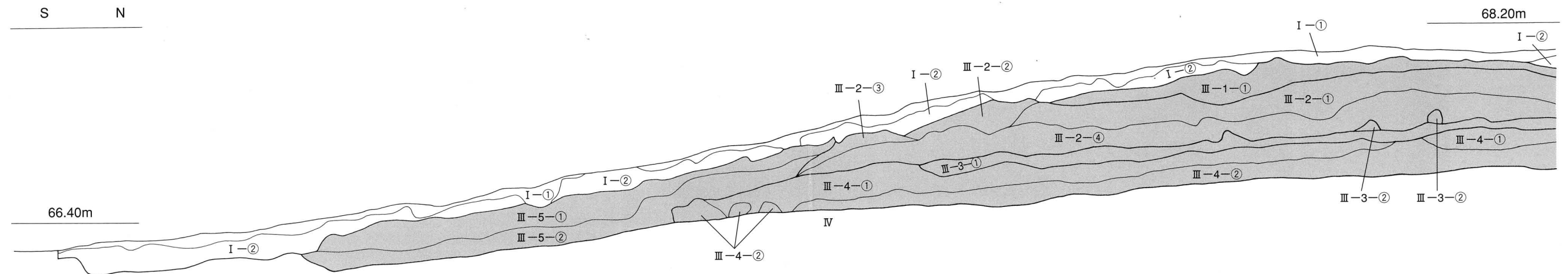
A類(1・2) 1は、底径14.9cm、残高29.5cmを測る。胴部はやや外反し、胴上部に径7.5cmの円形の透かしが施され、中央部にM字状の突出度の低いタガをもつ。内面の下胴部には粘土紐の巻き上げ痕や指頭痕がみられ、基底部にも指頭痕がみられる。外面は胴部と基底部にはナデ調整が施され、胴部には刷毛目調整が施される。内面はナデ調整が施される。色調は、外面が橙色(5YR6/6)に褐灰色(5YR5/1)混じりで、内面は黄灰色(2.5YR5/1)である。



東西ベルト土層

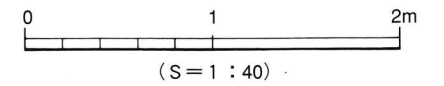
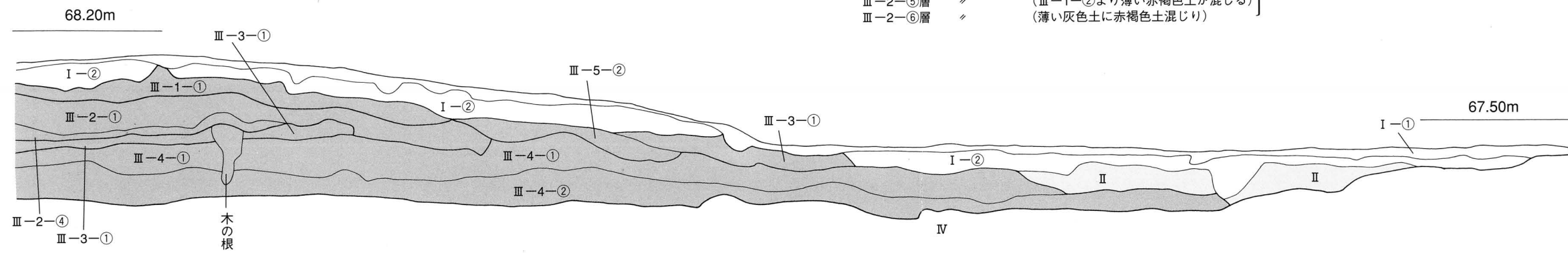
1-①層	腐葉土		III-3-①層	灰白色粘土	} 盛土②
1-②層	〃	(薄い赤褐色土がブロック状に混じる)	III-3-②層	〃	
1-③層	〃	(赤褐色土混じり)	III-4-①層	薄い黄色粘砂	} 盛土①
1-④層	〃	(薄い黄灰色土に赤褐色土混じり)	III-4-②層	〃	
II層	「周溝埋土」	薄い黄色土	III-5-①層	薄い赤褐色土	} 盛土⑤
III-1-①層	〃	薄い赤褐色土	III-5-②層	〃	
III-1-②層	〃	〃	IV層	「地山」	黄色土
III-2-①層	〃	薄い黄色土			
III-2-②層	〃	〃			
III-2-③層	〃	〃			
III-2-④層	〃	〃			
III-2-⑤層	〃	〃			
III-2-⑥層	〃	〃			

第75図 東西ベルト土層図

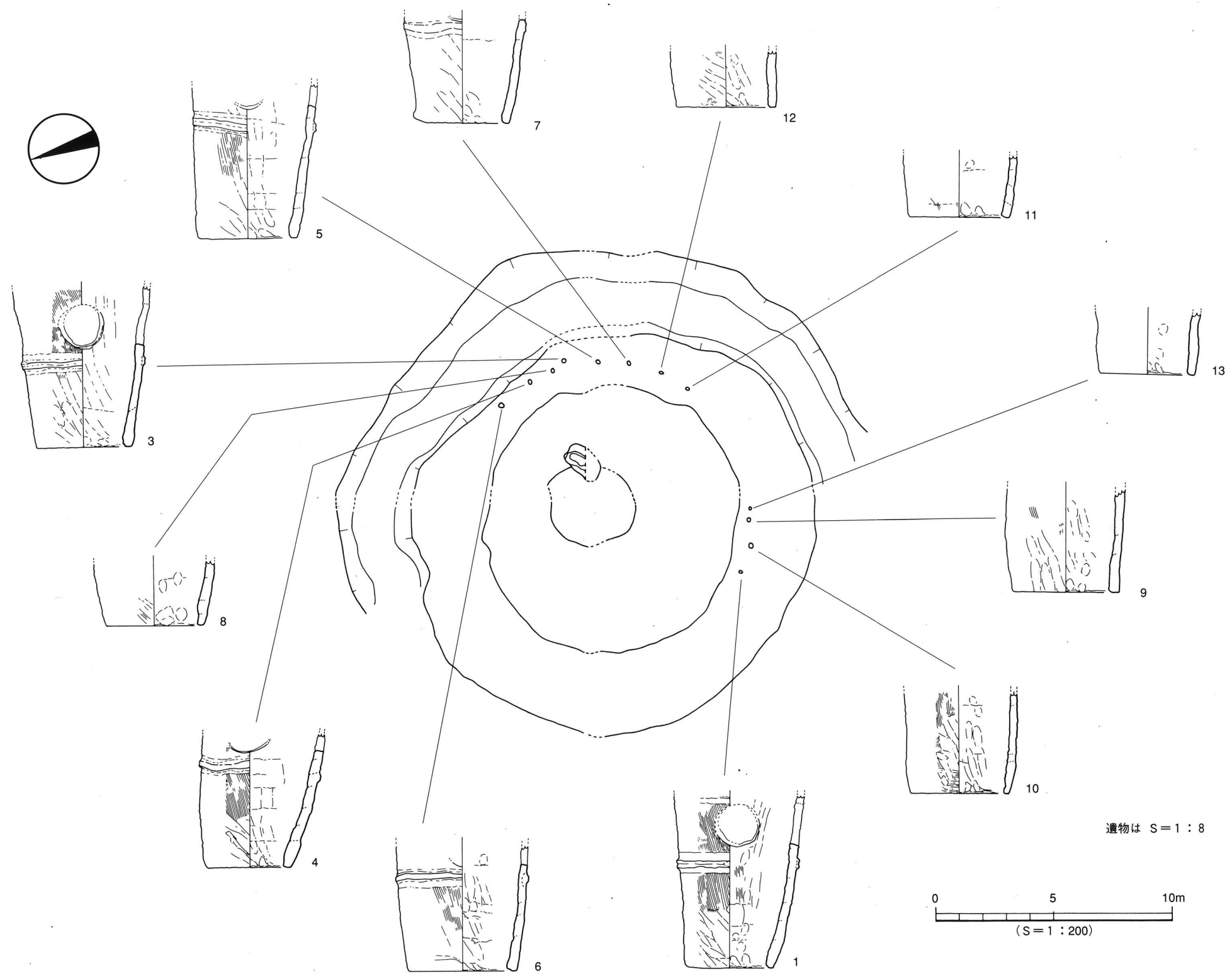


南北ベルト土層

I-1層	腐葉土	} 表土	III-3-1層	灰白色粘土	} 盛土②
I-2層	◇ (薄い赤褐色土がブロック状に混じる)		III-3-2層	◇ (薄い黄色土混じり)	
I-3層	◇ (赤褐色土混じり)		III-4-1層	薄い黄色粘砂	} 盛土①
I-4層	◇ (薄い黄灰色土に赤褐色土混じり)		III-4-2層	◇ (III-4-1より粘性が強い)	
II層【周溝】	薄い黄色土 (薄い赤褐色土混じり)	} 盛土④	III-5-1層	赤褐色土	} 盛土⑤
III-1-1層	薄い赤褐色土 (薄い黄色土に灰白色粘土混じり)		III-5-2層	◇ (全体的に薄い黄色土混じり)	
III-1-2層	◇ (薄い黄色土混じり)	} 盛土③	IV層【地山】	黄色土	
III-2-1層	薄い黄色土 (薄い赤褐色土に灰白色粘土混じり)				
III-2-2層	◇ (薄い灰色土に赤褐色土混じり)				
III-2-3層	◇ (薄い赤褐色土混じり)				
III-2-4層	◇ (少し灰白色粘土混じる)				
III-2-5層	◇ (III-1-2より薄い赤褐色土が混じる)				
III-2-6層	◇ (薄い灰色土に赤褐色土混じり)				



第76図 南北ベルト土層図



第77図 円筒埴輪配置図

2は、口径(32cm)、残高21.4cmを測る。胴上部は外反し、胴部中央にはM字状の突出度の低いタガをもつ。内面の胴部中央には粘土紐の巻き上げ痕がみられる。外面は、胴部から基底部にかけ刷毛目調整、胴部にはヨコナデ調整、内面はナデ調整が施される。色調は、外面が鈍い橙色(5YR6/3・7.5YR7/3)で、内面は灰黄色(2.5YR6/2)である。

B類(3~6) 3は、底径15.8cm、残高27.2cmを測る。胴上部には径7.7cmの透かしが施されている。胴部の中央部には突出度の低い台形状のタガをもつ。内面の胴部には粘土の接合痕、基底部には指頭痕がみられる。外面の調整は、胴部と基底部にはナデ調整、胴部には刷毛目・ヨコナデ・ナデ調整、内面はナデ調整が施される。色調は外面が橙色(5YR6/6・7.5YR7/6)、内面は橙色(5YR6/6)である。4は、底径13.6cm、残高22.5cmを測る。基底部はやや外反し、胴上部には透かしが施され、中央部よりやや上に突出度の低いタガをもつ。外面の基底部には意図的な工具痕が看取される。内面の中央部には粘土紐の巻き上げ痕、基底部には指頭痕がみられる。外面は、胴部と基底部にはナデ調整、胴部は刷毛目・ヨコナデ調整、内面はナデ調整が施される。色調は、内外面共に橙色(5YR6/6)である。

5は、底径16.4cm、残高26cmを測る。基底部はやや外反し、胴上部には透かしが施されている。中央部よりやや上に突出度の低い台形状のタガをもつ。内面の中央部は粘土紐の巻き上げ痕、基底部には指頭痕がみられる。外面は、刷毛目・ナデ・ヨコナデ調整が施される。色調は、外面・内面共に橙色(5YR6/6)である。

6は、底径18.0cm、残高21.2cmを測る。基底部はやや外反し、胴上部には透かしが施されている。胴部の中央に突出度の低い台形状のタガをもつ。内面の中央には粘土紐の巻き上げ痕、基底部には指頭痕がみられる。外面は胴部に刷毛目調整、内面はナデ調整が施される。色調は、内外面共に橙色(5YR6/6)である。

7は、底径16cm、残高17.9cmを測る。基底部はやや外反し、外面は胴部にはナデ調整、内面は基底部に指頭痕がみられる。色調は、外面が橙色(5YR6/8)に鈍い橙色(5YR6/4)混じりで、内面の色調は浅い黄橙色(10YR8/4)と橙色(7.5YR6/8)である。

②基底部片は6点が出土した。

8は、底径(16.4cm)、残高10.9cmを測る。内面基底部はやや外反し、外面の底部に刷毛目調整が施される。基底部には指頭痕がみられる。色調は、外面・内面共に橙色(5YR6/6)である。9は、底径18.2cm、残高17.4cmを測る。基底部は丸みを帯びる。外面は刷毛目調整とナデ調整が施される。内面は摩滅しているが、ナデ調整が施される。内面は指頭痕がみられる。色調は、外面・内面共に橙色(5YR6/8)である。

10は、底径16.6cm、残高17cmを測る。基底部は丸みを帯びる。外面には指頭痕がみられる。内面は基底部中央よりやや下部には粘土紐の巻き上げ痕、基底部下には指頭痕が残る。外面は、基底部は摩滅するが、刷毛目・ナデ調整が部分的に施される。外面・内面共に橙色(5YR6/6)である。11は、底径17cm、残高10.4cmを測る。基底部は丸みを帯びる。内面に指頭痕がみられる。外面の底部に刷毛目調整が施される。色調は、外面が淡い黄色(2.5Y8/4)に橙色(5YR6/6)混じりで、内面は淡い黄色(2.5Y8/4)である。

12は、底径16.6cm、残高9.4cmを測る。基底部はほぼ直立する。内面には指頭痕がみられる。色調は、外面が橙色(5YR6/6)に浅い黄橙色(10YR8/4)混じりで、内面は橙色(5YR6/6)である。

13は、底径（16cm）、残高10.5cmを測る。基底部はほぼ直立している。内面には指頭痕がみられる。色調は、外面が橙色（5YR7/6）で、内面は淡い黄橙色（10YR8/3）である。

（3）周溝

調査区東側N3W1～S3E2区にて検出し、西側は後世の削平を受け消滅している。断面形態はレンズ状を呈し、規模は幅2.5～4.5m、検出面よりの深さは10～50cmを測る。埋土は、薄い黄色土（薄い赤褐色混じり）であり、遺物は須恵器と埴輪片（土師質・須恵質）が数点出土している。

（4）性格不明遺構（SX1）（第80図，図版）

調査区中央東側N1E1・S1E1区に位置する。盛土④上面にて検出した。平面形態は隅丸長方形で、2段掘りになっている。規模は長軸1.4m、短軸1.0m、深さ70cmを測る。主軸方位はN-16.5°-Eで、北東を指向する。埋土は薄い赤褐色土（薄い黄色混じり）で、赤褐色土（盛土⑤）が混入する。遺物は、上部から中部に埴輪片と拳大の円礫が出土している。また、床面付近においても拳大の円礫が1点出土している。

（5）墳丘・周溝・試掘トレンチ出土遺物（第81・82図）

本調査では、円筒埴輪以外に墳丘、周溝、トレンチ内から須恵器・土師器片が数点出土した。ここでは、須恵器・土師器片のうち図化するものと、試掘調査の際に出土した石器類も掲載する。

①墳丘内出土遺物

14は須恵器の甕である。頸部径（24.7cm）、残高8.7cm、口縁部は大きく外反する。また、外面に平行叩きがあり、内面には同心紋叩き、回転ナデ調整が施されている。頸部には内外面共に自然釉が付着している。色調は、内外面共に灰色（N6/）である。釉付着部分は、外面はオリーブ黒色（7.5Y2/2）で、内面は灰オリーブ色（7.5Y4/2）である。

15は須恵器の広口壺である。頸部径（8.3cm）、残高7.5cm、頸部に1条の凹線が施され、その上下に波状紋をもち、下部には8条の波状紋が施されている。調整は内外面共に回転ナデ調整である。色調は、内外面共に灰色（N5/）である。

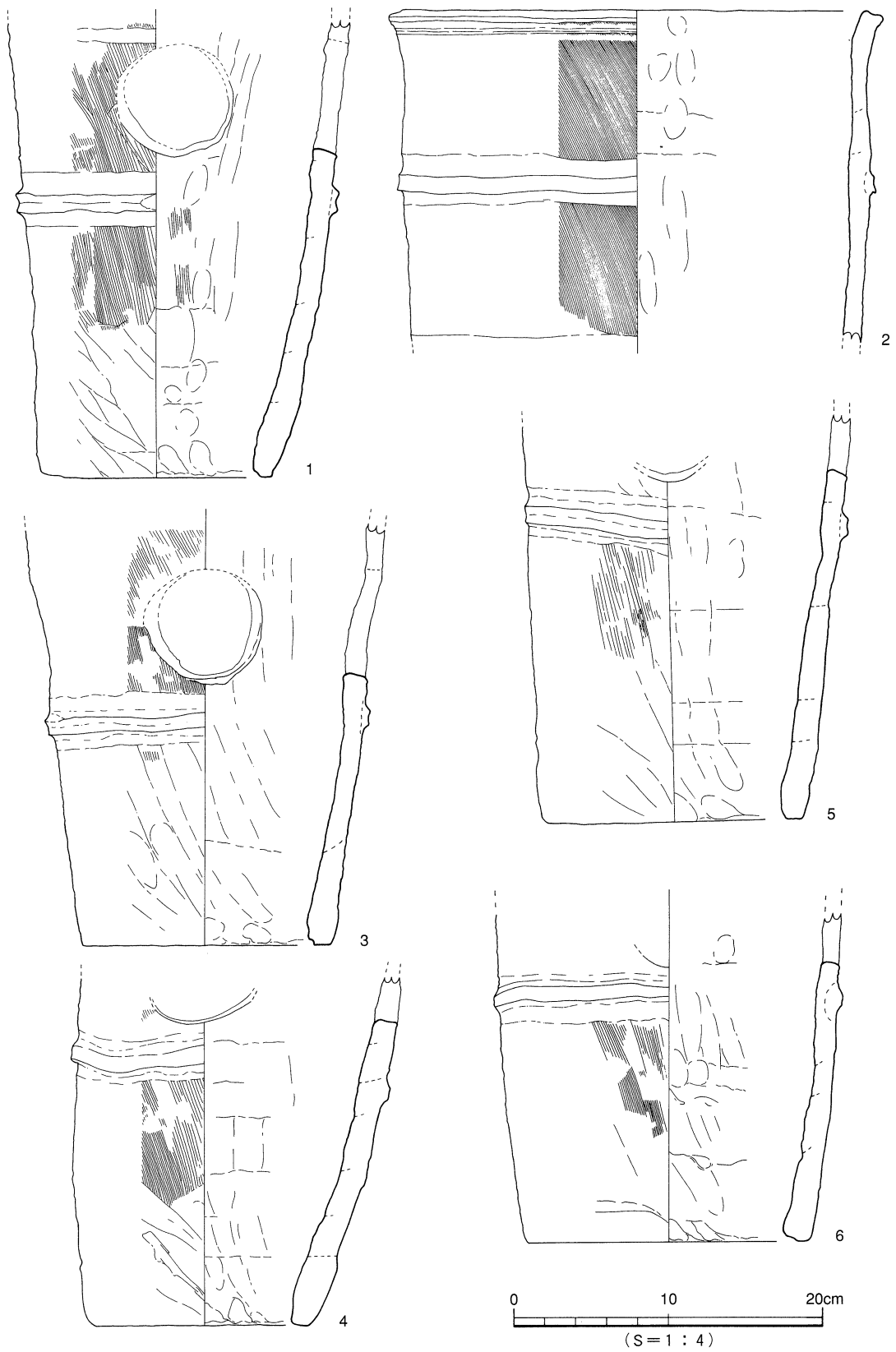
16は須恵器の器台である。残高5.2cm、胴部はほぼ直立し、2個の幅1cm前後の透かしが施されている。頸部に凹線を2条有し、その上下には櫛描き波状紋をもち、外面は回転ナデ調整で、内面は刷毛目・ヨコナデ調整が施されている。色調は、外面が灰色（N5/）に灰白色（10Y7/1）混じりで、内面は灰色（N5/）である。

②周溝内出土遺物

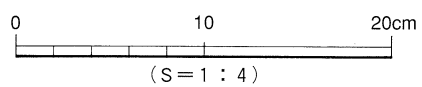
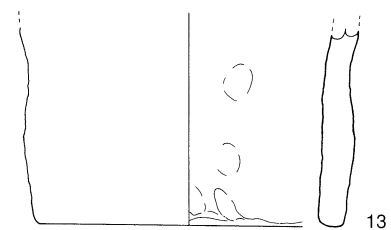
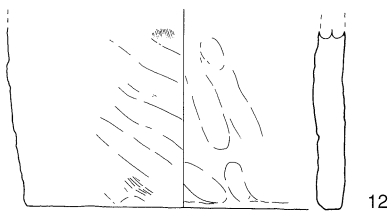
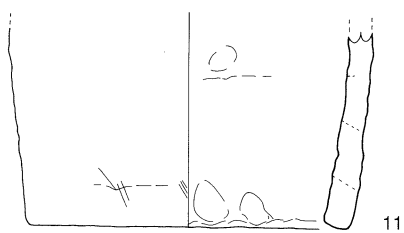
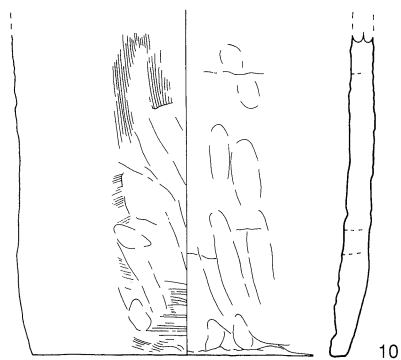
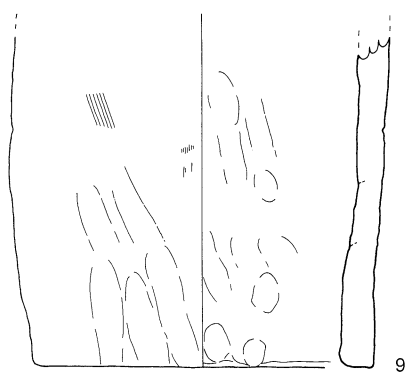
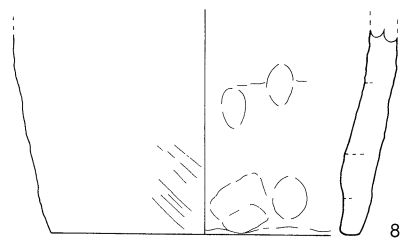
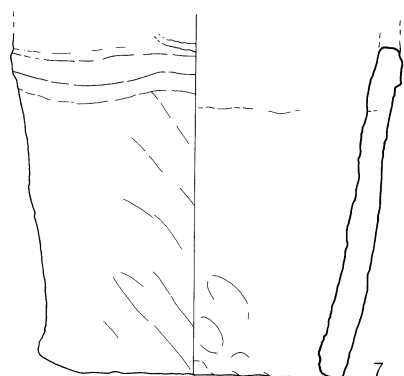
17は須恵器の甕である。口径24.2cm、残高5.25cm、口縁端部は大きく外反し、口縁端部は肥厚している。また、内面・外面には部分的に自然釉が付着している。外面は回転ナデ調整で、内面はナデが顕著にある。内外面共にオリーブ黒色（7.5Y3/2）の釉がかかる。

③トレンチ出土遺物

18は東西トレンチ出土の須恵器の甕の口縁部である。口径12.3cm、残高2.2cm、口縁端部には凹があり、外面には自然釉が付着している。内外面共に回転ナデ調整である。色調は、外面が灰白色（N7/）であり、内面は灰白色（N7/）に黄褐色（2.5Y5/6）混じりである。



第78図 盛土出土遺物実測図(1)



第79図 盛土出土遺物実測図(2)

小 結

④試掘調査出土遺物

試掘調査の際に石器が2点出土した。T12からは鉄剣型石剣が1点、T13からは石庖丁が1点出土している。

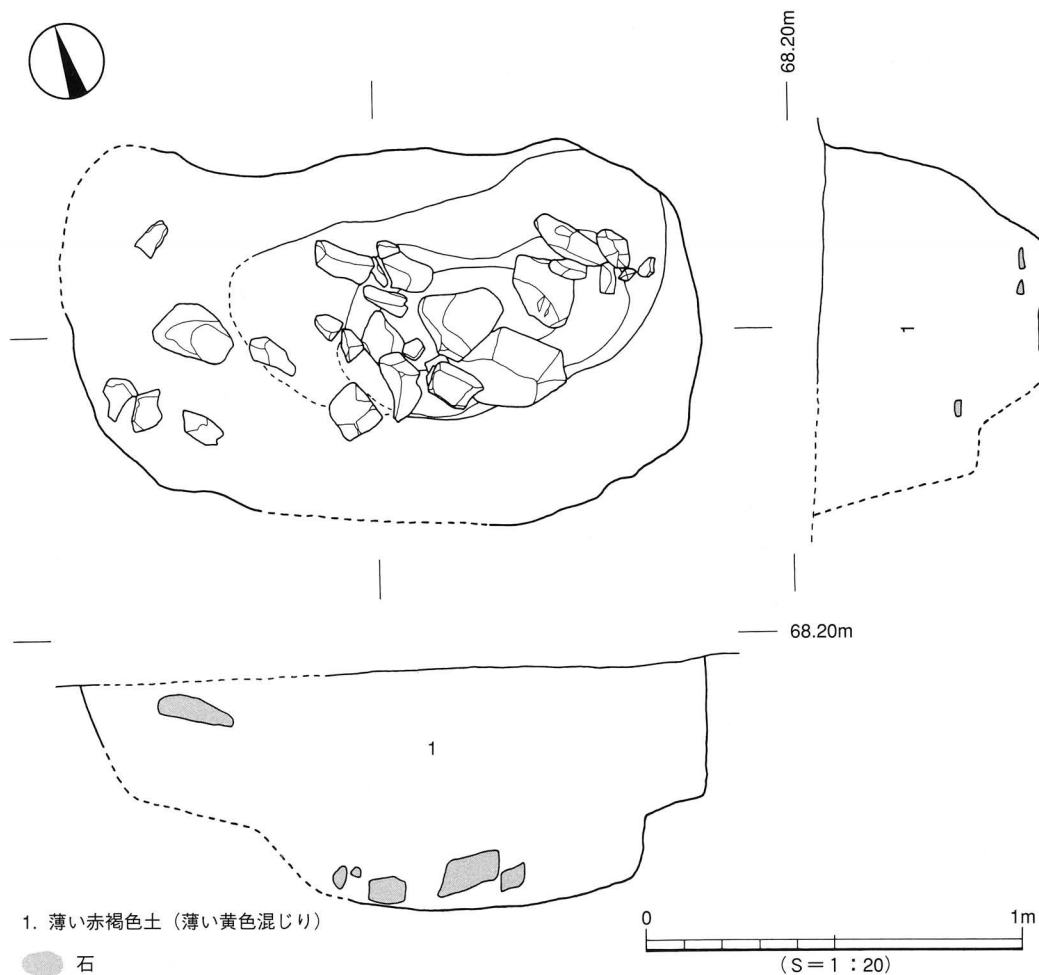
19は鉄剣型石剣である。長さ14.5cm、幅3.68cm、厚さ0.9cmで、使用による欠損が見られる。石剣の表面は風化が激しい。色調は、内外面共に鈍い橙色（10YR7/4）である。材質は緑色片岩である。

20は石庖丁である。長さ9.3cm、幅5.15cm、厚さ0.73cm。長側縁の片方には刃部の研磨がみられる。長側縁のもう一方では剥離している。材質は緑色片岩である。色調は、内外面共に灰オリーブ色（7.5Y6/2）に鈍い黄色（2.5Y6/3）混じりである。

4. 小 結

本調査では、古墳時代後期の古墳を1基確認することができた。本墳は、松山平野東部に位置する畑寺古墳群中の南西部にあり、畑寺古墳群としては初の調査になる。

6号墳は、6世紀中葉から後半の直径26mを測る円墳であり、北接する畑寺竹ヶ谷古墳群（円墳で7～11m）や、東野お茶屋台古墳群（円墳で10～15m）のものよりも規模が大きいことが判明した。



第80図 SX1測量図

特筆すべきことは円筒埴輪列の検出である。埴輪列は、50～160cm間隔に配され、墳丘を掘り設置されたことがわかった。なお、松山平野の円筒埴輪出土例を略記する。

平野北西部：長谷奥古墳（6世紀前半）、日杜古墳・谷町古墳・堀江大谷1号墳・正八幡神社1号墳・大谷古墳（時期不明）。

鶴ヶ峠1号墳（5世紀末）、平風山1・2号墳・たたり塚古墳（6世紀代）、永塚古墳（7世紀前半）、平風山3号墳・桜ヶ塔4・5号墳・珠数塚古墳・船ヶ谷向山古墳・鶴ヶ峠4号墳（時期不明）。

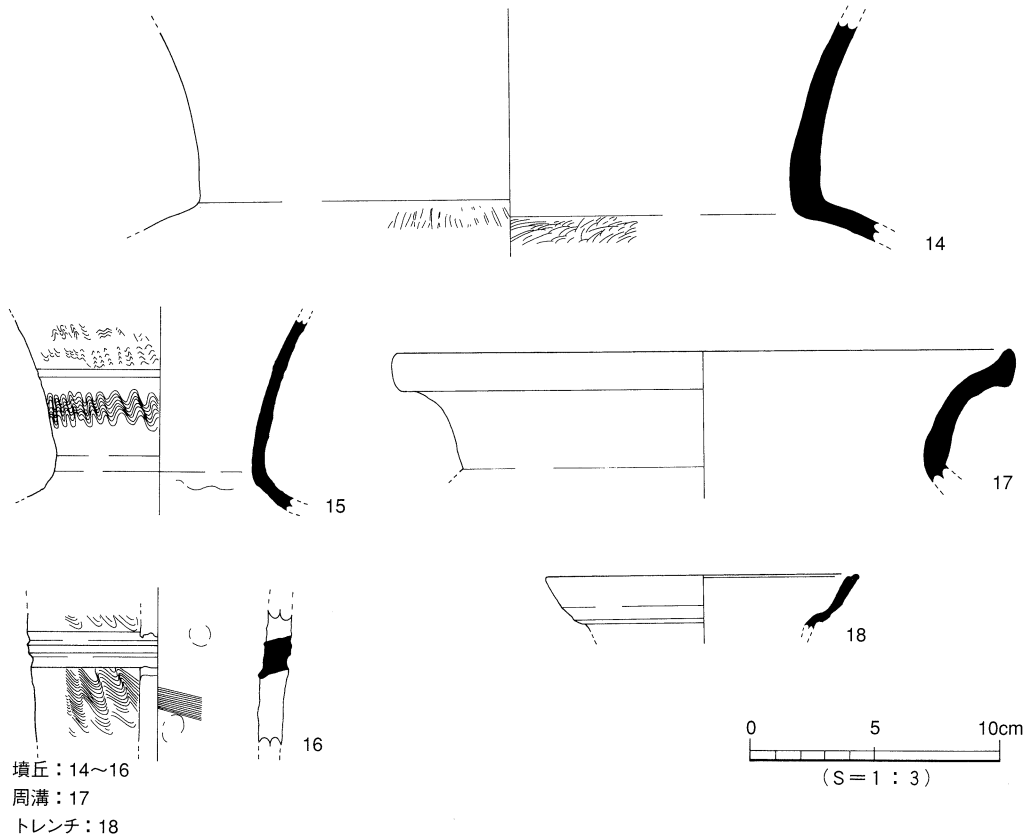
岩子山1号墳（5世紀後半）、斎院茶臼山古墳（5世紀末）。

東野お茶屋台1・9・10号墳（5世紀中葉～後半）、東雲神社2号墳（時期不明）。

平野南東部：観音山古墳（5世紀中葉）、白山神社古墳（5世紀）、三島神社古墳（6世紀初頭）、天山1号墳（6世紀中葉）、波賀部神社古墳（6世紀中葉～後半）、五郎兵衛谷1号墳・山田池4号（6世紀末～7世紀前半）、天山天王ヶ森古墳・東山鳶ヶ森2号墳・大門池古墳・檜山峠4号墳（時期不明）

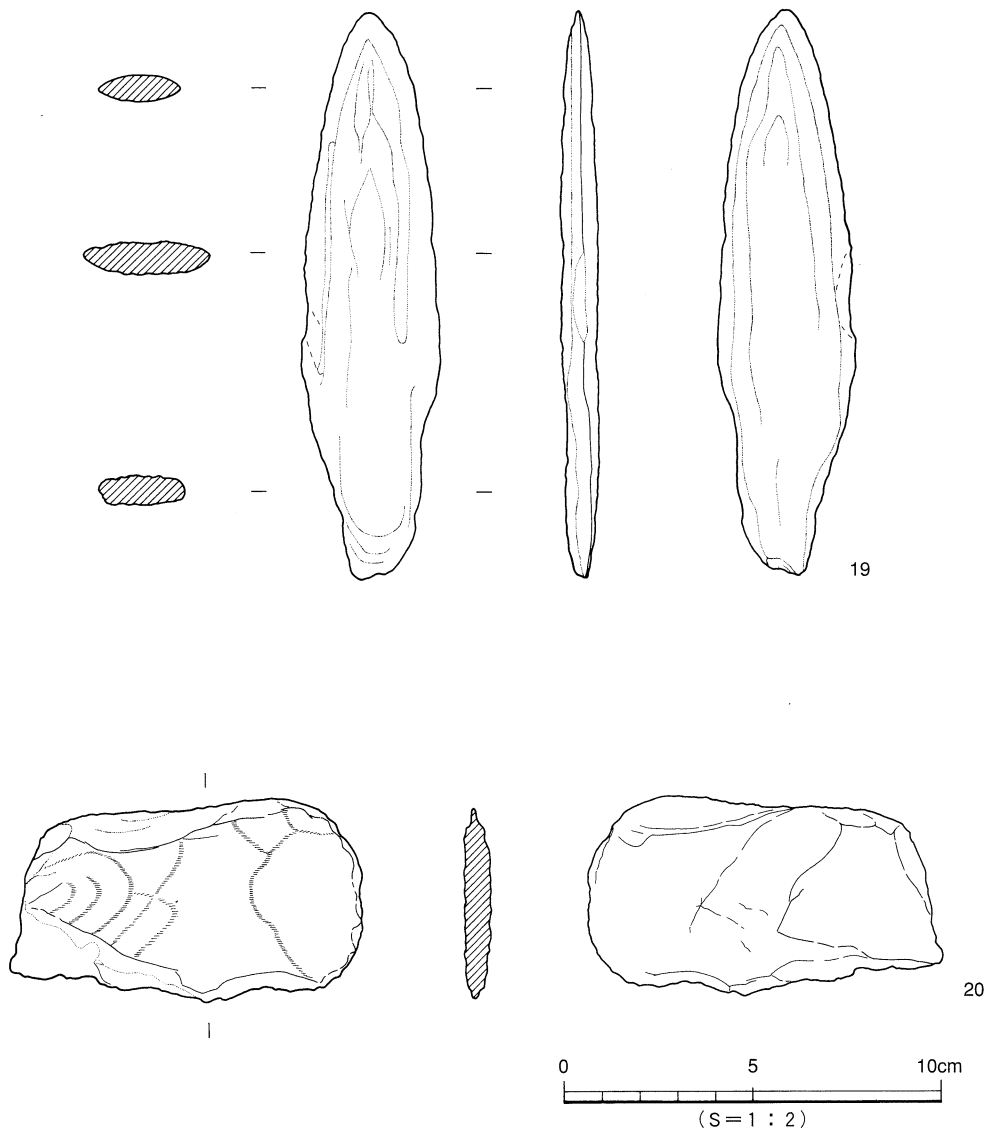
土壇原5号墳（5世紀前半）、土壇原9号墳（5世紀後半～6世紀初頭）、土壇原15・19号墳（6世紀中葉）、土壇原8号墳（時期不明）。

以上、調査の報告をおこなった。平野北東部にある桑原地区は、石手川の扇状地に集落を置き、畑寺～東野に墓域をもつ。今後は、墓域の構造と集落との関係を解明しなければならない。



墳丘：14～16
周溝：17
トレンチ：18

第81図 出土遺物実測図



第82図 試掘トレンチ出土遺物実測図

[参考文献]

- 宮内慎一 1994『桑原地区の遺跡Ⅱ』（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
梅木謙一 1992『桑原地区の遺跡』（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
愛媛県教育委員会 1991『愛媛県内古墳一分布調査報告書』
森 光晴 1990『浮穴・西石井荒神堂、束本Ⅱ・Ⅲ、桑原高井遺跡』松山市教育委員会
岡田敏彦 1990『桑原住宅埋蔵文化財調査報告書—桑原稲葉遺跡』（財）愛媛県埋蔵文化財調査センター
愛媛県 1986『愛媛県史 資料編 考古』
森 光晴 1980『東野お茶屋台古墳群』『経石山古墳』『三島神社古墳』『松山史料集第一巻考古編』松山市教育委員会
阪本安光 1979『東野遺跡埋蔵文化財調査報告書』愛媛県教育委員会
松山商科大学 史跡研究会 1974『久米遺跡群分布調査報告書』
岸郁男・長井数秋・森光晴 1972『三島神社古墳』松山市教育委員会

— 凡 例 —

遺物観察表

(1)以下の表は、本調査出土遺物観察一覧である。

(2)各記載について。

法量欄 () : 復元推定値

形態・施文欄 土器の各部位名称を略記

例) 口→口縁部、胴→胴部、基→基底部。

胎土・焼成欄 胎土欄では混和剤を略記した。

例) 砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土。() 中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例) 石・長(1~4)多→「1~4mm大の石英・長石を多く含む」である。

焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良。

出土遺物観察表

表40 盛土出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		(外面) 色調 (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
1	円筒 埴輪	底径 14.9 残高 29.5	胴部はやや外反し、上部に径7.5cmの透かしが施され、胴部中央にM字状の突出度の低いタガがある。	㊶ナデ、ハケメ ㊷ナデ	ナデ	橙色、褐灰色 黄灰色	石・長(1~7) ○		39
2	円筒 埴輪	底径(32.0) 残高 21.4	胴部中央にM字状の突出度の低いタガが施される。	㊶ハケメ、ヨコナデ ㊷ハケメ	ナデ	濃橙色 灰黄色	石・長(1~7) ○	T20 出土	39
3	円筒 埴輪	底径 15.8 残高 22.5	胴部はやや外反し、上胴部は径7.5cmの透かしが施されて、胴部中央に突出度の低い台形状のタガを有する。	㊶ハケメ、ヨコナデ、 ナデ、指ナデ ㊷ナデ	ナデ	橙色	石・長(1~5) ○		39
4	円筒 埴輪	底径 13.6 残高 22.5	胴部はやや外反し、上胴部は透かしが施されて、突出度の低い台形状のタガを持ち、下部に工具痕を有する。	㊶ナデ、ハケメ、 ヨコナデ ㊷ナデ	ナデ	橙色	石・長(1~5) ○		39
5	円筒 埴輪	底径 16.4 残高 26.0	胴部はやや外反し、上胴部は透かしが施されて、胴部中央に突出度の低い台形状のタガを持つ。	㊶ハケメ、ナデ、 ヨコナデ指ナデ、 ㊷ハクリ	ナデ	橙色	石・長(1~7) ○		39
6	円筒 埴輪	底径(18.0) 残高 21.2	胴部はやや外反し、上胴部は透かしが施されて、胴部中央に突出度の低い台形状のタガを持つ。	㊶ハケメ	ナデ	橙色	石・長(1~6) ○		39
7	円筒 埴輪	底径 16.0 残高 17.9	胴部はやや外反し、底部には指頭痕が施される。	㊶ナデ ㊷マメツ、ハクリ	ハクリ	橙色、濃橙色 淡黄橙色、橙色	石・長(1~6) ○		
8	円筒 埴輪	底径(16.4) 残高 10.9	胴部はやや外反し、内部の胴部と底部には指頭痕が施される。	㊶マメツ、ハクリ ㊷ハケメ	マメツ	橙色	石・長(1~6) △		
9	円筒 埴輪	底径 18.2 残高 17.4	胴部は丸みを帯びて、内面の下部及び底部には指頭痕を持つ。	㊶ナデ、ハケメ ㊷ナデ	ナデ	橙色	石・長(1~6) ○		
10	円筒 埴輪	底径 16.6 残高 17.0	胴部は丸みを帯びて、内面の下部及び底部には指頭痕を持つ。	㊶ハケメ ㊷ハケメ	マメツ	橙色	石・長(1~4) ○		
11	円筒 埴輪	底径 17.0 残高 10.4	胴部は丸みを帯びて、内部の胴部と底部に指頭痕が顕著。	㊶マメツ、ハクリ ㊷ハケメ	マメツ	淡黄色、橙色 淡黄色	石・長(1~3.5) △		
12	円筒 埴輪	底径 16.6 残高 9.4	胴部は直立して、内部の底部には指頭痕が顕著。	マメツ	マメツ	橙色、淡黄橙色 橙色	石・長(1~5) △		
13	円筒 埴輪	底径(16.0) 残高 10.5	胴部は直立して、内部の底部には指頭痕が顕著。	マメツ、ハクリ	マメツ ハクリ	橙色 浅い黄橙色	石・長(1~7) ○		
14	甕	頸径(24.7) 残高 8.7	口縁部は外反する。	㊸平行叩き	回転ナデ ㊹同心円文叩き	灰オリーブ	石・長(1~4) ○		40
15	広口壺	頸径(8.3) 残高 7.5	頸部に1条の凹線が巡る。凹線の上下に波状文を施す。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰色	石・長(1~3) ○		40
16	器台	胴径(上10.4) (下 9.6) 残高 5.2	胴部は直立し、長方形の透かしが2個。2条の凹線が巡り、その上下に櫛描波状紋を施す。	ヨコナデ	㊶ハケメ ㊷ヨコナデ	灰色	石・長(1~2) ◎		40

表41 周溝出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		(外面) 色調 (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
17	甕	口径(24.5) 残高 5.25	口縁部は外反し、口縁端部は上方に肥厚する。	回転横ナデ	ナデ	濃オリーブ	石・長(1~2) ○	自然釉	40

畑寺6号墳

表42 東西トレンチ出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
18	甌	口径 12.3 残高 2.2	口縁端部に凹みがある。	回転ナデ	回転ナデ	暗灰色	密 ○	自然釉	40

表43 試掘トレンチ出土遺物観察表 石製品

番号	器 種	残 存	材 質	法 量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
19	鉄剣型石剣	完形	緑色片岩	14.5	3.68	0.9	61.99	T12	40
20	石 庵 丁	約2/3	緑色片岩	9.3	5.15	0.73	57.03	T13	40

第7章 伊予における弥生時代の周溝状遺構

1. はじめに

昭和55年・56年の松山市文京遺跡の調査では、溝が円形や方形に巡るいわゆる周溝状遺構を検出した。特に、昭和56年度の3次調査（S X 1）では、周溝内より完形の土器が10点余り出土し、注目される遺構となった。その後、松山平野の弥生時代集落では少数であるが、周溝状遺構が検出されるようになった。

愛媛県では、周溝状遺構に関する研究は稀薄である。ただし、栗田茂敏氏と宮本一夫氏による調査所見は、周溝状遺構の機能を考える上で重要な提言といえる（註1）。両氏は、遺構の検出状況、遺物の出土状況、周溝の埋没状況より、周溝状遺構は祭祀的遺構と判断している。現在では、周溝状遺構の認識は両氏の所見を支持するむきが強い。

本稿は、周溝状遺構の研究を進展させるため、基礎資料の作成と、遺構・遺物状況について整理をするものである。

2. 資料

伊予においては、現在までに周溝状遺構の検出例は松山平野に限られ、6遺跡11例が知られている。

①文京遺跡 平野の北部に位置し、伊予を代表する弥生集落である。平成7年度までに13次の調査がなされ、2・3・10次の調査地点では、周溝状遺構が検出されている。

2次調査S X 1（註2） 弥生時代中期後葉から後期前葉まで集落遺構群のなかにある。遺構は、近現代に4分の1が削平されている。平面形態は円形で、規模は直径（周溝の内縁間）1.9m、面積（周溝で区画された中央部）3.4㎡である。周溝は幅0.5～0.9mで、断面形態は逆台形状を呈する（註3）。遺物は、周溝の南部分で壺の胴部片と高坏の脚部片が集中して出土している。時期は、後期前葉である。

3次調査S X 1（註4） 2次調査地の北東約100mにある。弥生時代中期後葉から後期前葉の竪穴式住居群に接している。平面形態は隅丸方形で、規模は短辺3.2m、長辺4.0m、面積16.7㎡である。周溝は幅120～150cmで、断面形態は逆台形状を呈する。遺物は完形品を含む大型の土器片が四隅付近に出土し、特に南東部に集中している。土器には甕・壺・鉢・高坏があり、壺には頸部以上を打ち欠いたものや、形態には吉備地方に類似するものがある。また、調査者によると、「周溝埋土は人為的に埋め戻された状況にある」という。時期は、後期前葉である。

10次調査S X 14（註5） 2次調査地の西に隣接する。弥生時代中期後葉から後期前半までの竪穴式住居址や掘立柱建物に接している。平面形態は円形で、規模は径2.3m、面積5.7㎡である。周溝は幅70～90cmで、断面形態は逆台形状を呈する。遺物は、完形品の土器が多く、特に南東部と北西部に集中している。また、南東部の土器は溝底にあり、そのほかの土器や石器は溝底よりやや浮いた状況で出土している。土器には甕・壺・高坏があり、大型の複合口縁壺は焼成後の穿孔がみられる。時期は、後期前葉から中葉である。

②釜ノ口遺跡 平野の北東部に位置し、弥生時代後期の集落遺跡である。

1次調査特殊遺構（註6） 平面形態は円形で、規模は径0.6～0.7m、面積3.2㎡である。周溝は幅60

～78cm、断面形態は逆台形状である。調査時の写真からすると、中央部の範囲は西に若干広がる（約2m²）状況にある。遺物は出土がない。時期は、周囲の遺構から推定すると後期と考えられる。

6次調査地円形特殊遺跡(註7) 平面形態は円形で、規模は径3.3m、面積9.5m²である。周溝は幅30～55cm、断面形態は逆台形状である。溝の深さは15cmであることから、遺構の上部は大きく削平されていると考えられる。遺物は、土器片が少量出土している。時期は、後期前葉である。

③枝松遺跡5次調査周溝状遺構(註8) 松山平野の北東部にある弥生時代後期の集落遺跡。平面形態は円形であるが、隅丸方形に近いものになる。規模は径5.5～6.5m、面積34.4m²である。周溝は幅40～86cmで、断面形態は逆台形状を呈する。遺物は、復元すると完形品となる土器2点があり、北東部と南西部に出土が多くみられる。土器には、甕・壺・鉢がある。時期は、後期後葉である。

④福音小学校構内遺跡SD1・SX300(註9) 松山平野の中央部にある弥生時代中期後葉から後期の集落。調査地内からは、周溝状遺構が2基検出されている。

SX300は、平面形態が隅丸長方形で、規模が3.8×6.2m、面積26.3m²である。周溝は幅34～78cmで、断面形態は逆台形状を呈する。遺物には甕・壺・鉢・高坏・器台などの土器があり、復元完形品が3点含まれる。遺構内には、柱穴が30基余りあるが、本溝に伴うかは不明である。時期は、後期後葉である。

SD1は、SX300の北東100mにある。平面形態は円形で、規模は径4.0～4.2m、面積13.2m²である。周溝は幅22～40cmで、断面形態は逆台形状を呈する。周溝は一部未検出であるが、これは後世の削平によるものと考えられる。出土遺物はない。時期は、特定できない。

⑤南久米片廻り遺跡1次調査周溝状遺構(仮称、註10) 福音小学校構内遺跡の南1kmにある。弥生時代後期から古墳時代前半期の集落遺跡。遺構は終末の竪穴式住居に切られ、北半分は消失している。さらに溝の深さは10cmと浅い部分があり、遺構上部は大きく削平されている。平面形態は円形で、規模は径4.3m、推定面積11.7m²である。周溝は幅34～60cm、断面形態は逆台形状を呈する。遺物は、弥生土器片が少量ある。時期は、後期後半か。

⑥姫原遺跡SD17・SD30(註11) 松山平野の北部にある弥生時代中期から後期の集落。周溝状遺構は2基を検出している。

SD17は、東半分が調査区外になり、2分の1を検出したにすぎない。平面形態は円形で、規模は径6.4m、推定面積30.9m²である。周溝は幅50～60cmで、断面形態は逆台形状を呈する。遺物は、溝の北部に集中し、土器には甕・壺があり、完形の土器5点が出土している。時期は、弥生時代後期後葉である。

SD30は、約4分の1を検出したにとどまる。平面形態は円形と想定され、規模は推定径4.4m、推定面積15.0m²である。周溝は幅60～140cm、断面形態は逆台形状を呈する。遺物は周溝の北東部で、高坏の坏部が1点出土している。時期は、中期後葉である。

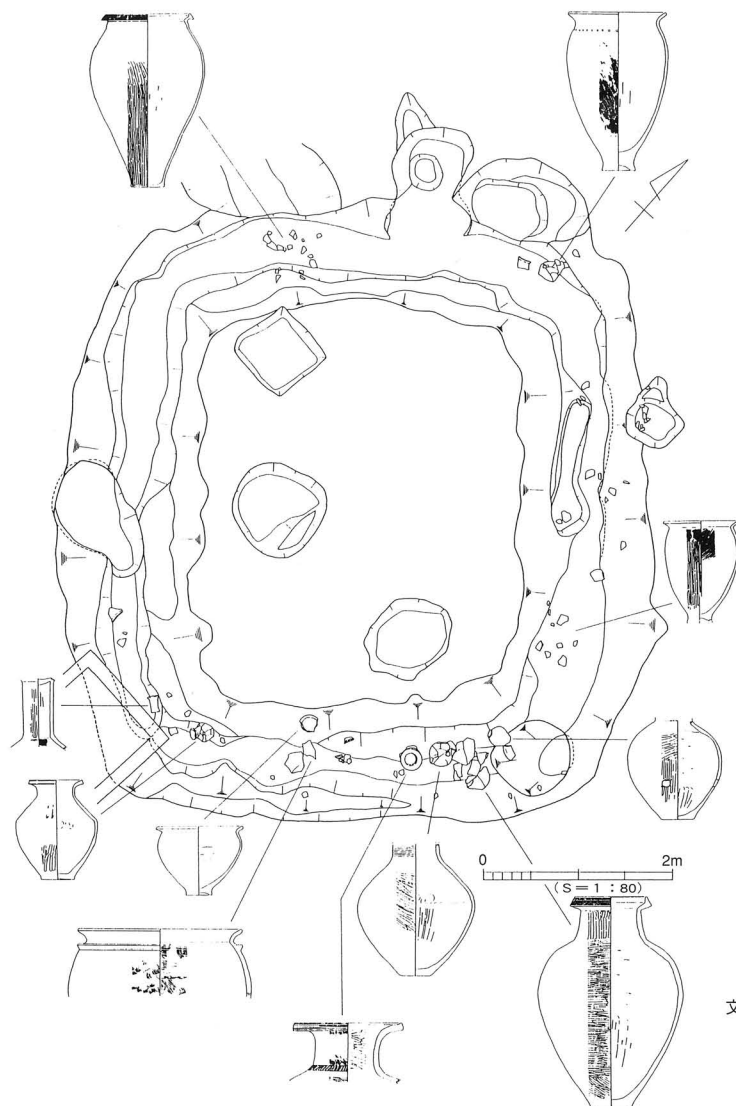
3. 分析

ここでは、遺構と遺物に関する整理をおこなう。

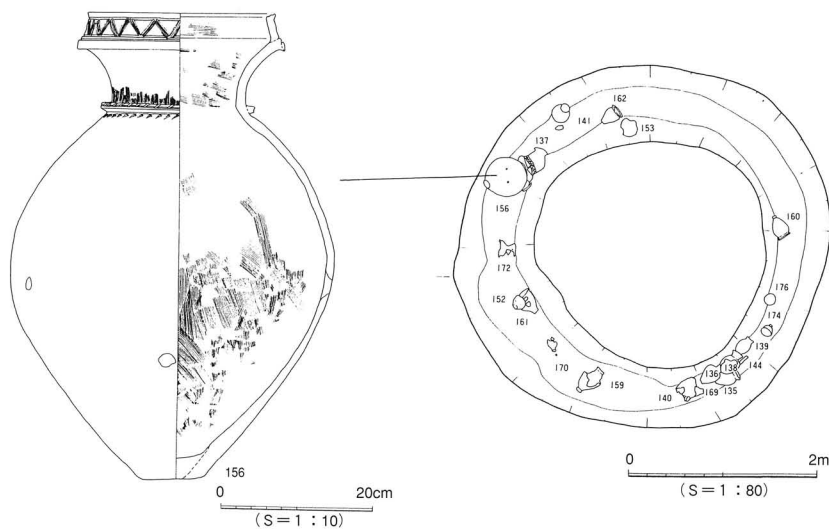
1) 遺構

まず、時期についてみる。現在までの最古例は、中期後葉の姫原遺跡SD30である。その後は、後期前葉から中葉は文京遺跡の各遺構があり、後期後葉には福音小学校構内遺跡、姫原遺跡などでみら

分 析



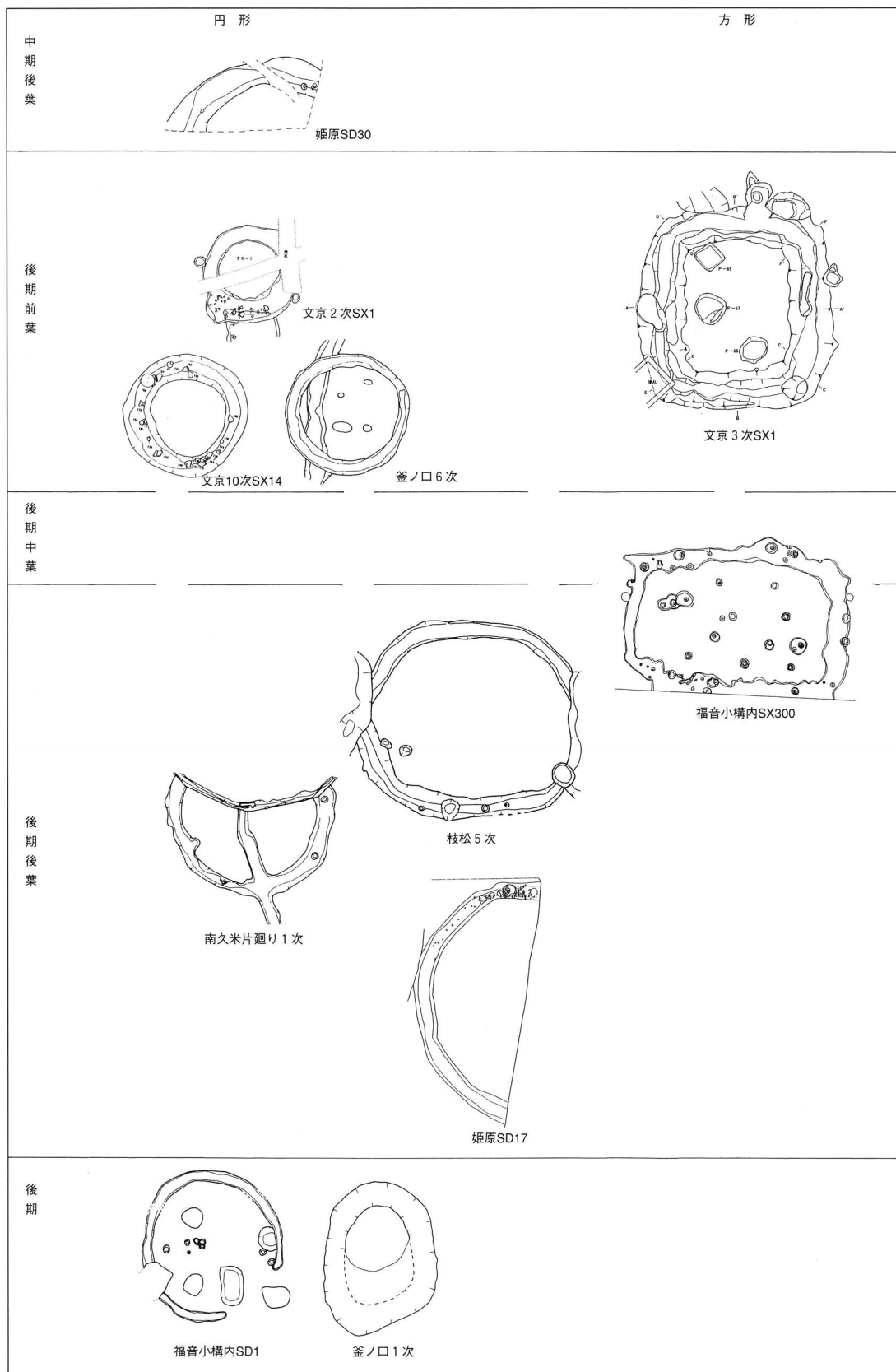
文京3次SX1



文京10次SX14

第83図 文京3次SX1・10次SX14遺物出土状況

伊予における弥生時代の周溝状遺構



第84図 伊予の弥生時代周溝状遺構

(S = 1 : 200)

れる。なお、後期終末には検出例がない。

次に、遺構の平面形態と規模についてみる。平面形態には、円形と四方形（方形ないし長方形）がある。

円形は、中期後葉に検出例があり、後期後葉までみられる。円形周溝の規模は、20㎡未満のものは継続してみられるが、25㎡を越えるものは後期後葉の検出例に限られる。

平面形態が四角形のもは、後期前葉から後葉までにみられる。規模は、16㎡と26㎡があり、広さに多少の差がある。

周溝は遺存状況により規模が異なるが、溝幅が2mを越えるものはない。また、断面形態は総じて逆台形状を呈している。

2) 遺 物

遺物は、周溝内からは出土するが、区画された中央部からは出土しない。

周溝からの遺物は、文京遺跡10次S X14を除くと、土器に限られている。土器は、完形品の出土例が半数におよび、出土状況では周溝の幾つかの地点に集中する傾向をもつ。器種は、壺と甕が多く、高坏や器台の出土は少ない。

また、文京遺跡3次・10次調査出土品には、穿孔をもつ壺や頸部以上を打ちかいた壺もあるが、大多数の土器は日常用の土器と形態や施文が異なることはない。

なお、土器以外の遺物は稀で、文京遺跡10次S X14で石庖丁や鉄製品の出土があるが、これ等の遺物は当初よりS X14に帰属するかは定かでない。

4. まとめ

伊予における周溝状遺構は、中期後葉以降に竪穴式住居や掘立柱建物に隣接して構築され、その数は文京遺跡にみられるように一時期に1基と限られている。

形態には、円形と四角形があるが、現時点では明確な機能差は認められない。規模は、後期中葉までは10㎡代と狭いものが主体となすが、後期後葉には大規模なものが多くなる。

出土遺物では、周溝に完形の土器が一括投棄される状況が認められるが、土器自体が特別な形状を呈しているわけではない。また、器種構成も日常と大差ないものである。

さて、周溝の内側にある平坦部には、施設の痕跡はなく、周溝内においては土器棺や人骨等の埋葬に関する遺物の出土はない。

よって、周溝状遺構には、土器を一括投棄するといった祭祀的行為はみとめられるが、埋葬に関する資料は完無である。

本稿では、周溝状遺構の資料収集を行い、分析項目とその傾向を提示した。今後、周溝状遺構の研究課題は、出現及び推移の検証と、機能の解明にある。また、調査課題は、周溝内での遺物と埋土の関係把握にあるだろう。

なお、本稿の作成にあたり、西尾幸則氏、栗田茂敏氏、高尾和長氏、相原浩二氏、河野史知氏、武正良治氏には資料を提供していただいた。また、資料収集には水口あをい氏、浄書には平岡直美氏の協力を得た。末尾になったが、記して感謝の意を表すものである。

伊予における弥生時代の周溝状遺構

表44 伊予の弥生時代周溝状遺構一覧

番号	遺跡	遺構	平面	規模(m)	面積(m ²)	周溝断面	周溝幅(cm)	出土物	時期	文献	備考
1 a	文京2次	SX1	円形	1.80×1.96	3.45	逆台形	50~90	土器	後期前葉	註2	
b	文京3次	SX1	隅丸方	3.20×4.00	16.7	逆台形	120~150	土器	後期前葉	註4	完形品、外来系土器
c	文京10次	SX14	円形	2.38×2.30	5.75	逆台形	70~90	土器・鉄器・石器	後期前葉	註5	完形品
2 a	釜ノ口1次	特殊遺構	円形	0.60×0.78	3.20	逆台形	60~78	出土物なし	後期か	註6	
b	釜ノ口6次		円形	3.30×3.05	9.56	逆台形	30~55	土器	後期前葉	註7	
3	枝松5次		円形	6.50×5.50	34.45	逆台形	40~86	土器	後期後葉	註8	完形品
4 a	福音小構内	SX300	隅丸長方	6.20×3.84	26.36	逆台形	34~78	土器	後期後葉	註9	
b	福音小構内	SD1	円形	4.00×4.28	13.2	逆台形	22~40	出土物なし	後期か	註9	
5	南久米片廻1次	円形周溝	円形	4.35×	(11.75)	逆台形	34~60	出土物なし	後期後葉か	註10	
6 a	姫原	SD17	円形	6.44×	(30.96)	逆台形	50~60	土器	後期後葉	註11	完形品
b	姫原	SD30	円形	(4.40)×	(15.04)	逆台形	60~140	土器	中期後葉	註11	

[註] ①()は推定値。②規模と面積は中央部の値。③周溝幅は上場間。

〔註〕

- 1) 栗田茂敏 1992 「Ⅲ 3次調査の概要 (3) 方形周溝状遺構 S X 1」『文京遺跡—第2・3・5次調査』愛媛大学、(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
宮本一夫 1991 「第3章 遺構と遺物 (6) 円形周溝状遺構」『文京遺跡第10次調査』愛媛大学埋蔵文化財調査室
- 2) 栗田茂敏 1992 「Ⅱ 2次調査の概要」『文京遺跡—第2・3・5次調査』愛媛大学、(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 3) 断面形態は、「V」字状と、逆台形に2大別したものをうい記述した。よって、報告と一部異なるものがある。
- 4) 栗田茂敏 1992 「Ⅲ 3次調査の概要」『文京遺跡—第2・3・5次調査』愛媛大学、(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 5) 宮本一夫 1991 『文京遺跡第10次調査』愛媛大学埋蔵文化財調査室
- 6) 岸 郁男・長井数秋・大山正風 1973 『釜ノ口遺跡調査報告書』釜ノ口遺跡発掘調査団、松山市教育委員会
- 7) 高尾和長 1997 (近刊)「釜ノ口遺跡6次調査地」『釜ノ口遺跡Ⅱ—第6~8次調査』松山市教育委員会、(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 8) 本書の第3章。
- 9) 梅木謙一・武正良治 1995 『福音小学校構内遺跡—弥生時代編—』松山市教育委員会、(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
なお、SD1は報告書13ページ第7図に位置図の掲載があるが、詳細は次号の報告にておこなう予定である。よって、本資料は武正氏の配慮による。
- 10) 栗田茂敏 1987 「南久米片廻り遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅰ』松山市教育委員会
なお、遺跡・遺構名については仮称である。
- 11) 相原浩二 1995 「姫原遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅶ』松山市教育委員会、(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

第8章 調査の成果と課題

今回調査した5遺跡からは、弥生時代から近世までの集落関連遺構と古墳の周溝を確認し、同時代における集落や古墳構造の一部が明らかになった。

弥生時代

後期 樽味高木遺跡4次調査地の自然流路内出土の線刻土器片は後期末の広口壺の口縁部片である。線刻は口縁部内面にあり、1条の弧と格子目文状の線が描かれているが、何を意味するものかは解らない。さて、近隣する3次調査地では、遺物包含層より弥生時代後期の複合口縁壺肩部片に、全国的にみても類例の少ない「船」を線刻した貴重な資料が出土している。

枝松遺跡5次調査地からは、弥生時代後期の円形周溝状遺構SD1が検出された。周溝内の遺物は南西部と北東部に集中して出土し、器種には甕・壺・鉢がみられる。SD1は、竪穴式住居址SB1に切られるが、出土遺物には時期差があまりなく、周溝が埋没した後、短い期間に竪穴式住居址が建てられたことが窺える。なお、両遺構は後世に削平を大きく受けており、付随する施設は確認されていない。

ここで検出した周溝状遺構と住居址は、東本遺跡の集落に属するものと考えられる。

古墳時代

経石山古墳2次調査地では、後円部に伴う周溝を確認した。周溝は後世の削平を受けており、経石山古墳1次調査地に比べ大幅に周溝の外側が狭まっている。周溝の内側からは木杭が打ち込まれていた痕跡を確認した。木杭は墳丘から周溝に土砂が流入するのを防ぐ役目をしていたと考える。今回の調査では古墳の時期を確定する遺物は確認されなかった。

また、2次調査後には、前方部の南西22mの地点にて試掘がおこなわれた。この地点では東側に落ち込む地形を確認したが、調査は上面だけの検出で終わった。落ち込みの埋土は経石山古墳1次調査地で検出した周溝を覆う土壌と同じ黒色土のものであったが、この落ち込みが本墳に関連する施設かどうかは判断できない。

畑寺6号墳は、経石山古墳の東1.1kmにある丘陵西斜面で検出された。畑寺古墳群では初めての本格調査であり、墳丘と円筒埴輪を確認した。墳丘は削平を受けており、周溝や埴輪列の一部は確認できなかったが、それらは墳丘を一周していたことが推測される。時期は、出土遺物より6世紀中頃に比定する。周辺には群集墳の畑寺竹ヶ谷古墳群、東野お茶屋台古墳群が存在し、当地の北側丘陵に立地する畑寺竹ヶ谷古墳群では円墳が検出されており、周溝を伴う直径7~11m前後の小型円墳が9基ある。今回検出の畑寺6号墳は、直径26mの円墳であり、竹ヶ谷古墳群のものに比べると規模が大きい。

古代

樽味高木遺跡4次調査地では8世紀代まで機能していた河川を検出した。この河川は、礫種の観察より石手川の支流と考えられる。また、河川に先行する土坑や遺物を確認したことより、周辺には古

代の集落が営まれていたことが推測できる。

中 世

桑原田中遺跡4次調査地で検出された土坑は、土壙墓或いは祭祀遺構と考えられるものであり、土坑内からは土師器の坏や皿が出土した。14世紀から15世紀に比定できる。桑原田中2次でも同様な土師器の坏・皿が出土しており、これら等の資料は松山平野における同時期の土器研究において貴重な資料になる。

また北に位置する樽味遺跡では同時期の遺構や遺物が確認されており、このなかには集落の境界を示す溝が検出され、河野氏との関係が問われる。このように、桑原地区一帯には中世後半の集落が広く展開していたことが推測できるのである。

桑原田中4次調査地の掘立柱建物からは柱穴の基底部より銭貨が出土し、「地鎮め」の様子がうかがえる。松山平野西部の南江戸町にある古照ゴウラ遺跡5次では、16世紀代の建物横の柱穴に土師皿と銭貨が埋納された「地鎮め」遺構が検出されている。今回の検出例は、これに先行する時期のものである。両資料は埋納形態が異なるものであり、中世における祭祀遺構の貴重な資料である。

近 世

枝松遺跡5次調査地と桑原田中遺跡4次調査地では粘土の採掘坑が多数検出されていた。採掘坑は、当地域における窯業に関連するものと考えられるが、窯業の生産地は判断できない。

枝松遺跡5次調査地では近世の井戸と、その隣に近現代の井戸も検出された。このことから、この地が安定した地下水の供給地として使用されていたことが窺える。

樽味高木遺跡4次調査地の性格不明遺構から出土した10枚の銭貨は「緡銭」であるが、藁を束ねた状態で出土した。中世の一括埋納銭にみられる「百文緡」や銭一貫文を貫いた「貫緡」に比べると束ねられた銭貨の枚数は少ない。

以上、時代別に調査の成果を概観した。今回の調査により、弥生時代から近世までの集落址が広域に展開されていることが再度確認された。今後は、桑原地区の古墳と集落との関連を分析することが必要であろう。

〔参考文献〕

- 宮本一夫 1989 『鷹子・樽味遺跡の調査』愛媛大学埋蔵文化財調査室
- 田崎博之 1993 『樽味遺跡Ⅱ』愛媛大学埋蔵文化財調査室
- 梅木謙一 1989 『桑原地区の遺跡』（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 森 光晴 1986 「経石山古墳」『愛媛県史 資料編 考古』愛媛県史編さん委員会
- 森光晴他 1972 『三島神社古墳』松山市教育委員会
- 西尾幸則 1986 「畑寺竹ヶ谷古墳群」『愛媛県史 資料編 考古』愛媛県史編さん委員会
- 高尾和長 1996 『東本遺跡4次調査・枝松遺跡4次調査』（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

写真図版

写真図版例言

1. 遺構の撮影は、調査担当者が行った。

2. 遺物の撮影は、大西が行った。

使用機材：

カメラ トヨ／ビュー45 G
レンズ ジンマー S 240mm F 5.6 他
ストロボ コメット／CA-32 2灯・CB 2400 2灯 (バンク使用)
スタンド他 トヨ／無影撮影台・ウエイトスタンド101
フィルム 白・黒 プラスXパン4×5
カラー エクタクロームEPP4×5

3. 遺構写真の焼き付け及び遺物写真のフィルム現像・焼き付けは、大西が行った。
(白黒に限る。)

使用機材：

引伸機 ラッキー450MD
ラッキー90MS
レンズ エル・ニッコール135mm F 5.6 A
エル・ニッコール 50mm F 2.8 N
印画紙 インフオードマルチグレードⅢRC

【参考】『埋文写真研究』Vol. 1～7

〔大西 朋子〕



1. 調査前の状況（西より）



2. SD1検出状況（東より）



1. SD1 (北より)



2. 周溝検出状況 南壁土層 (北東より)



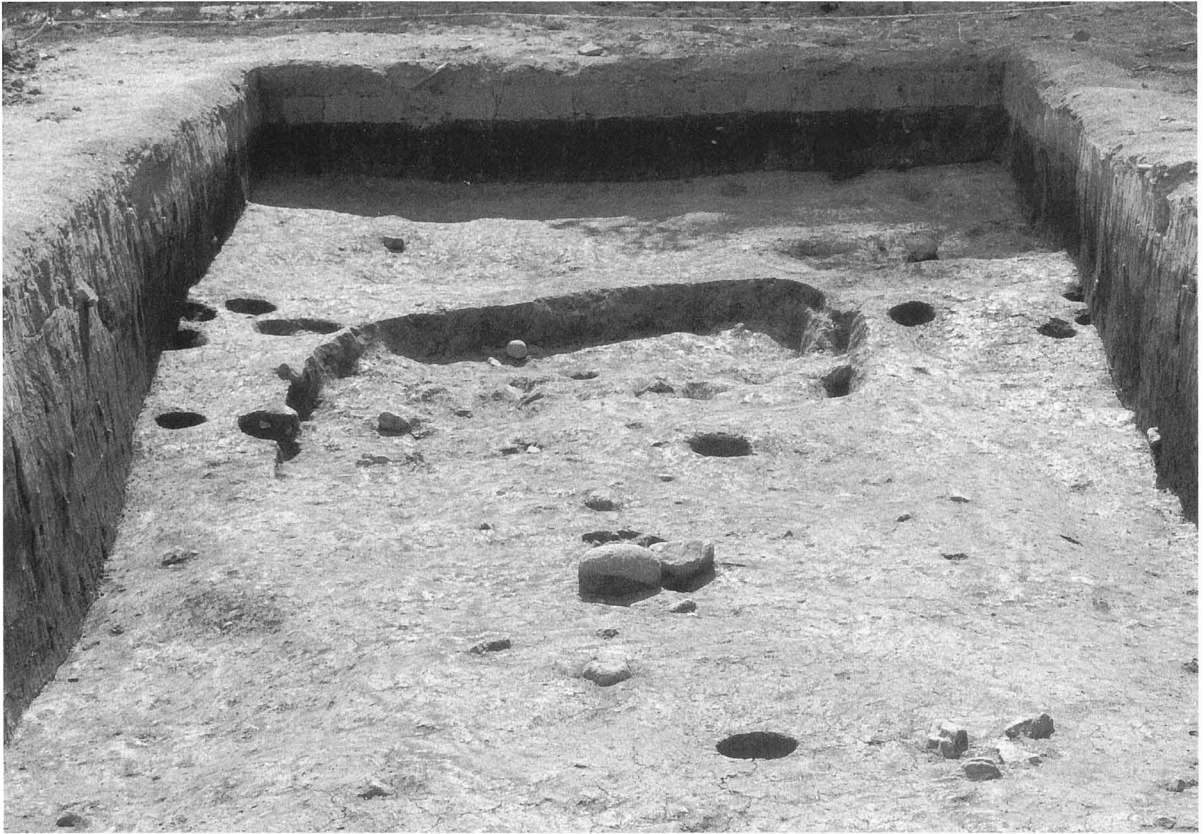
1. 遺構完掘状況（北東より）



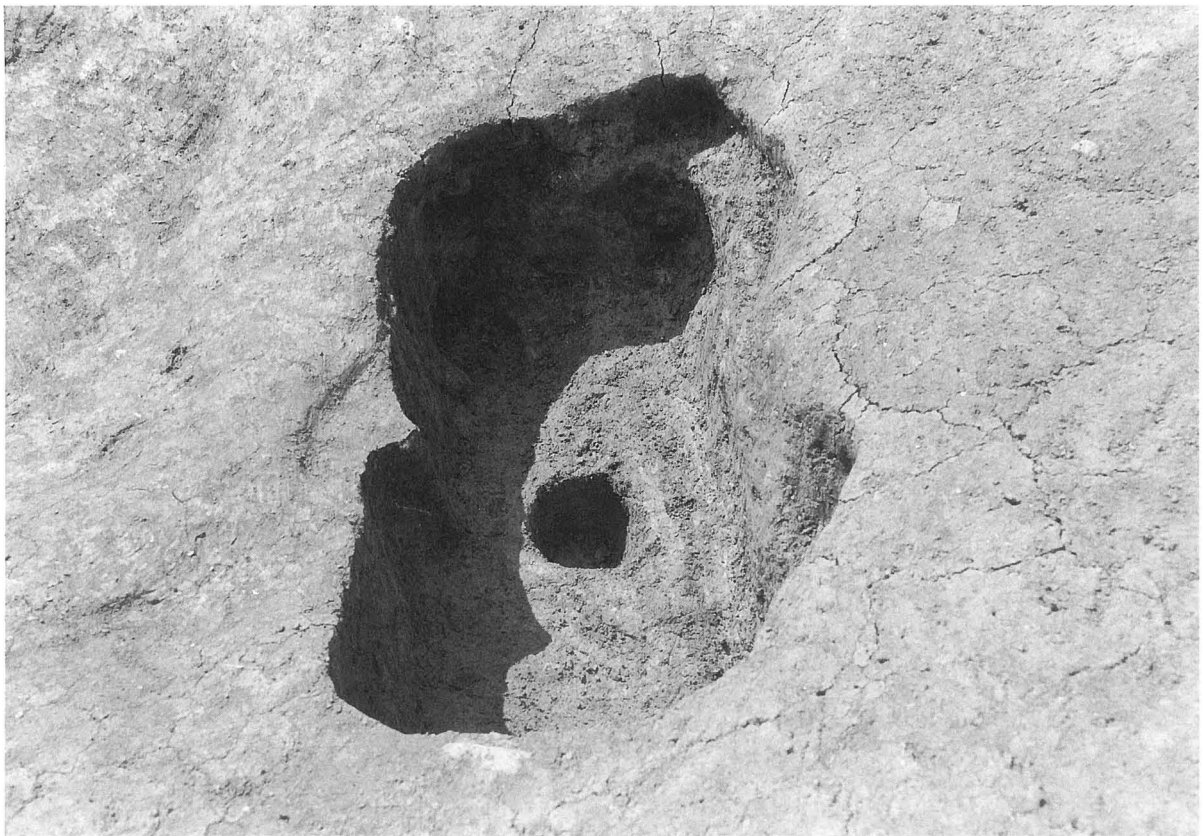
1. 遺構完掘状況（東より）



2. 南壁土層（北東より）



1. SK1 (東より)



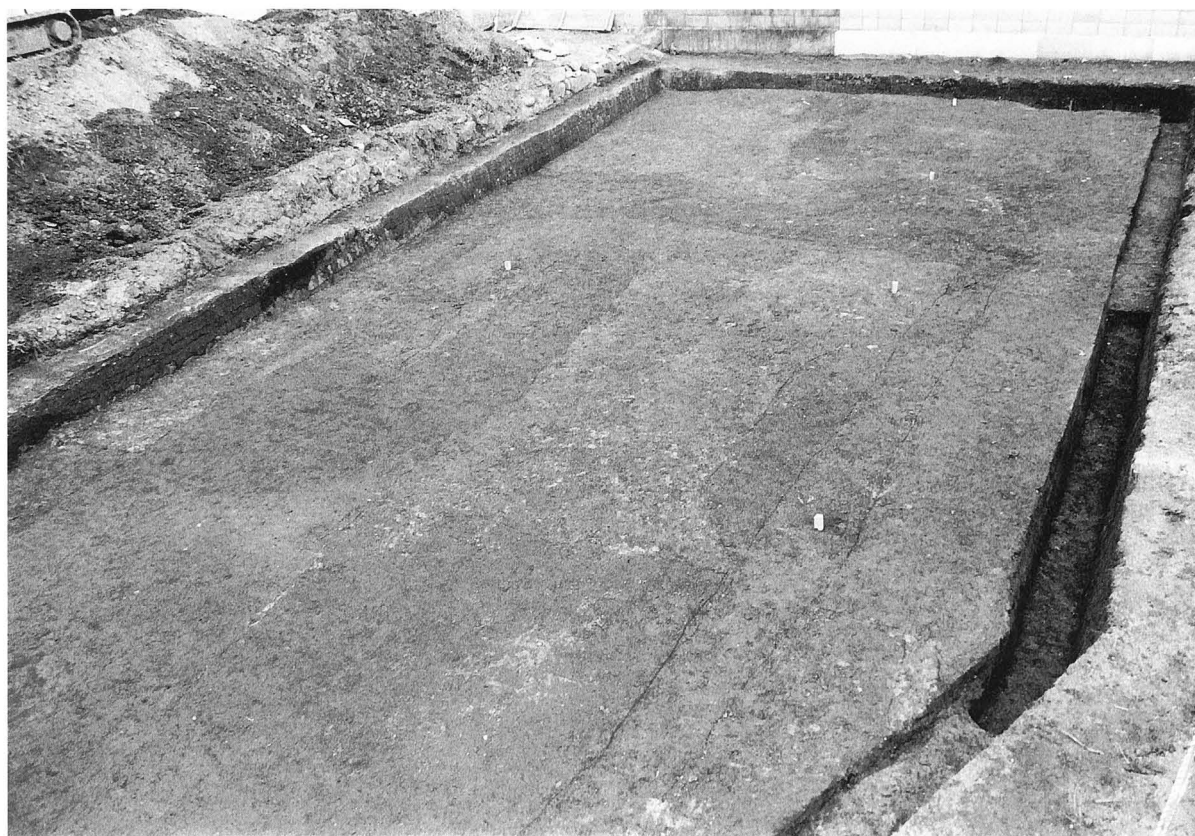
2. SP1・2 (北より)



1. 調査地遠景（南西より）



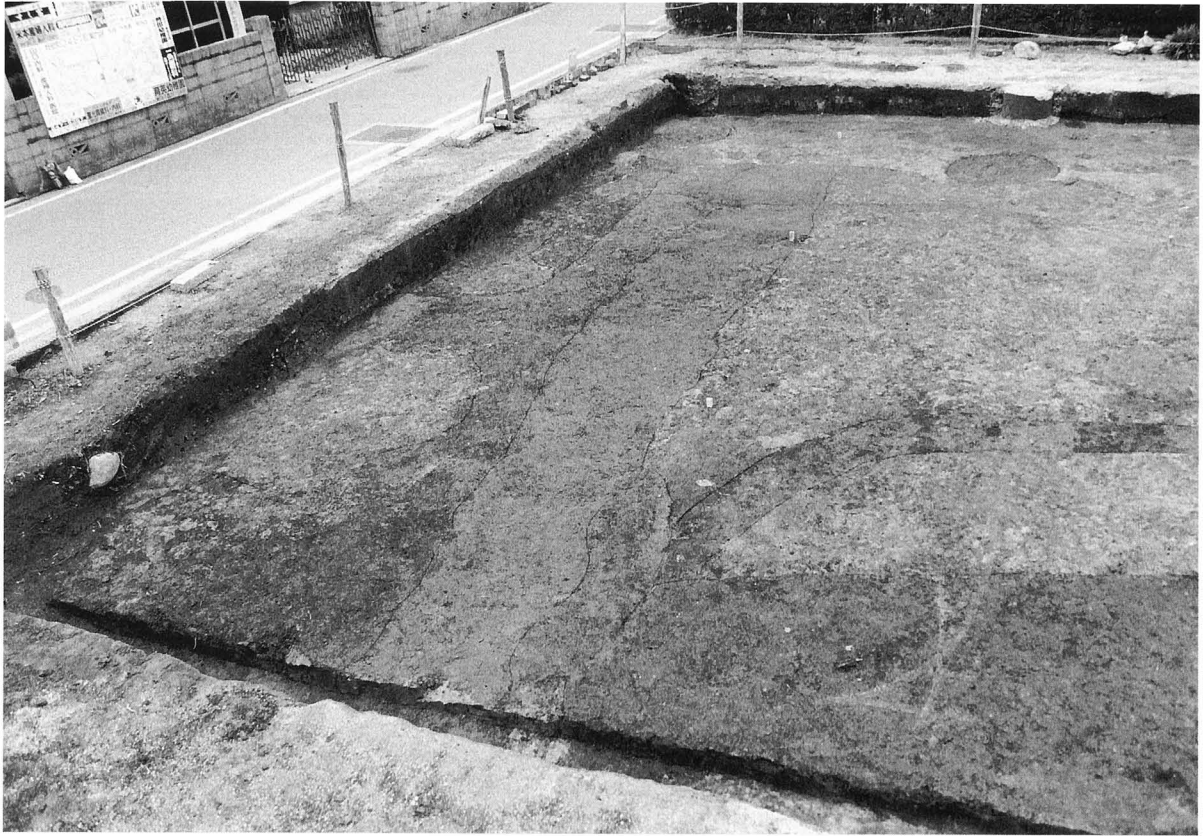
2. 調査前全景（南西より）



1. 南部遺構検出状況（南西より）



2. 南部遺構完掘状況（北より）



1. 北西部遺構検出状況（南より）



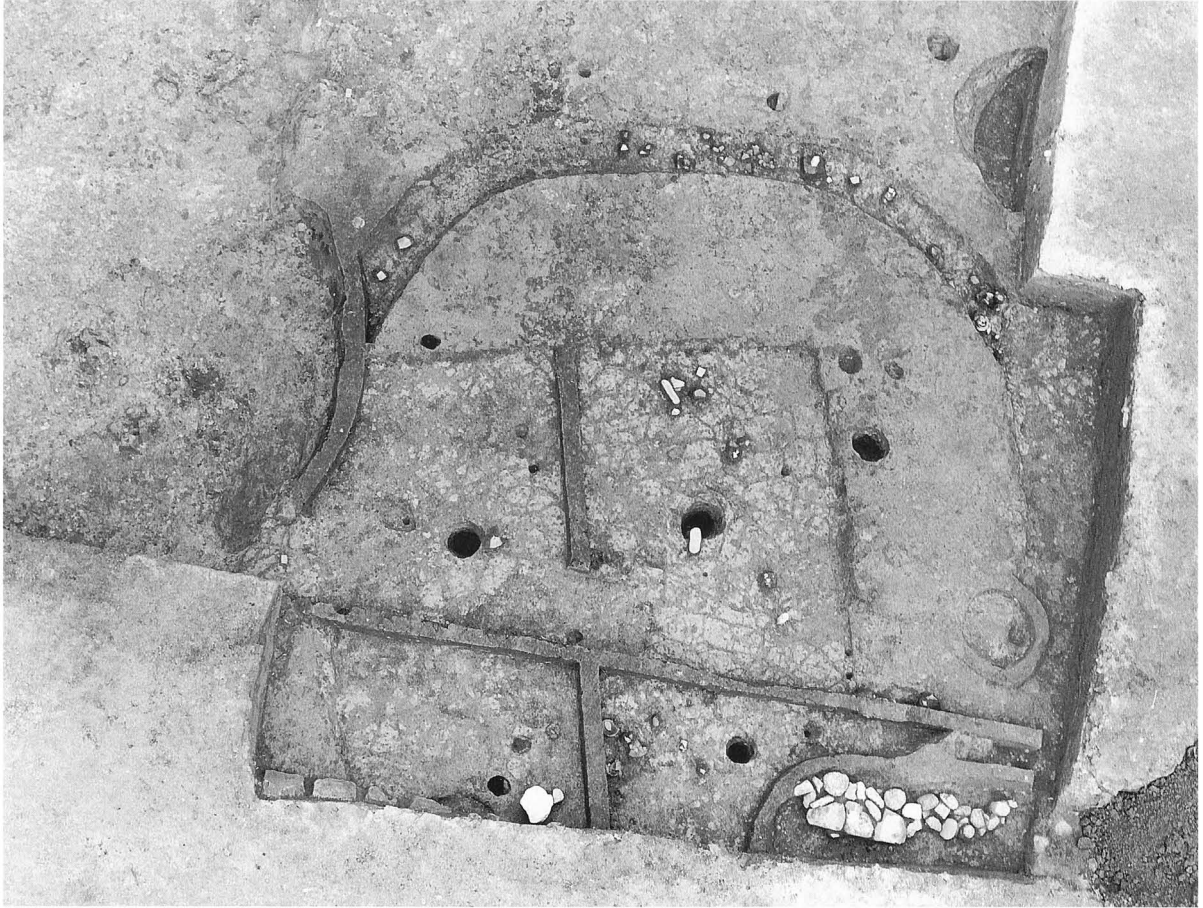
2. 北西部遺構完掘状況（南より）



1. 北東部遺構検出状況（西より）



2. 北西部遺構完掘状況（南より）



1. SB1・円形周溝状遺構（真上より）



2. SB1・周溝1（西より）



1. SB1 (南より)



2. 円形周溝状遺構遺物出土状況 (東より)



1. SE01 礫埋没状況 (西より)



2. SE01 完掘状況 (南東より)



1. S K 04 礫出土状況 (北東より)



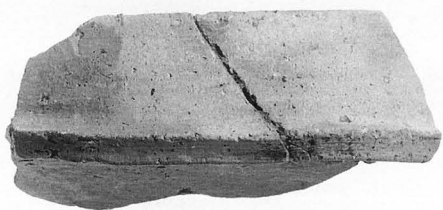
2. S K 010 (北より)



1. SK010 (東より)



2. 作業風景 (南東より)



3



5



4



8

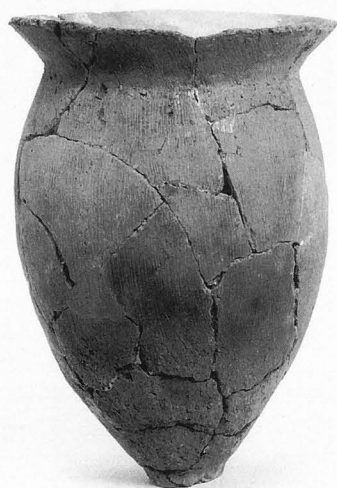


11



10

1. SB1出土遺物 (3~5)



7



18

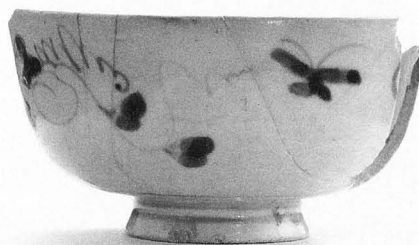
2. 周溝1出土遺物 (7・8・10・11・18)



19



20

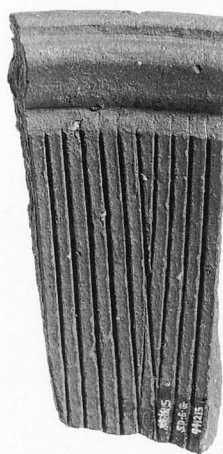


21

1. S E 01 出土遺物



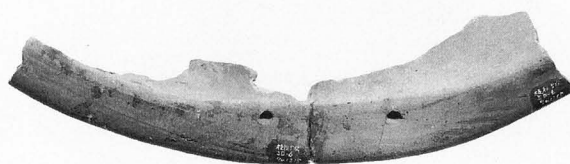
25



28



27



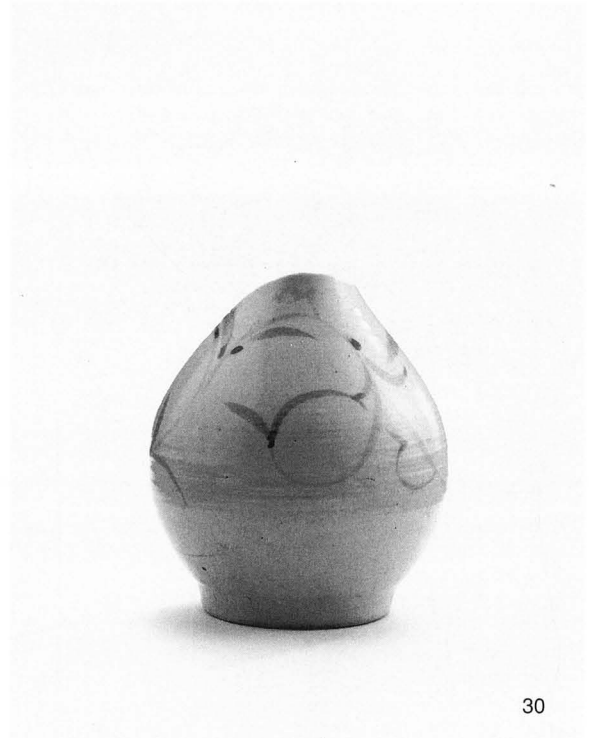
29

2. S K 04 出土遺物



24

1. S D 01 出土遺物



30

2. 採掘坑 1 出土遺物



31

40

3. 採掘坑 3・4 出土遺物



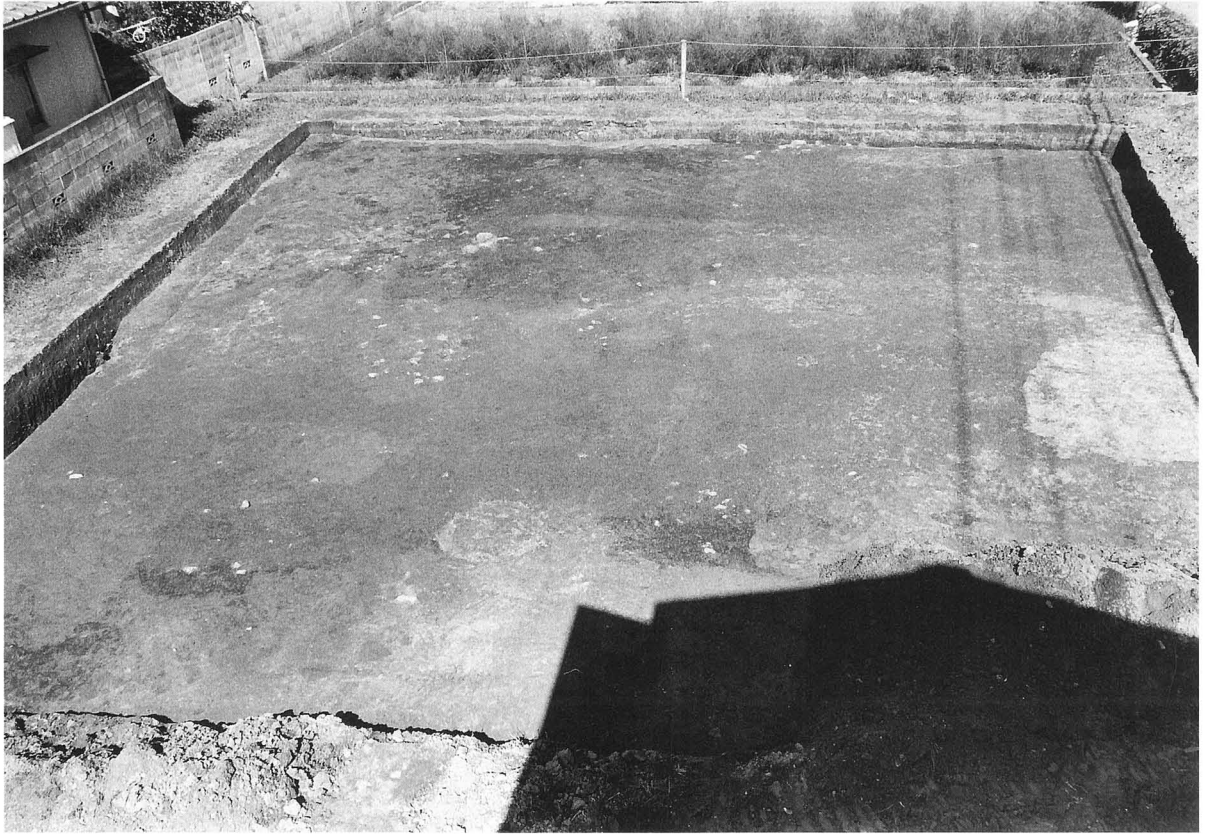
41



1. 調査前の状況（南より）



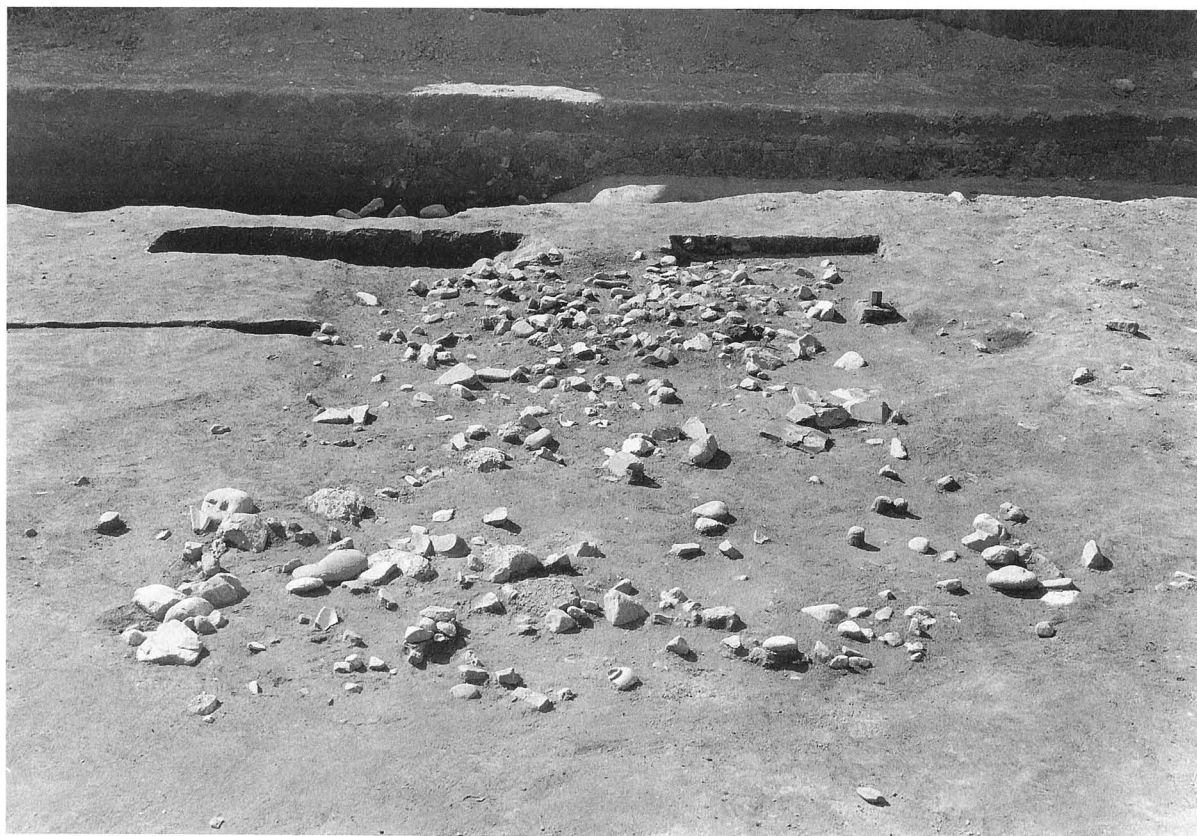
2. 重機による表土剥ぎ取り状況（北西より）



1. 近世の遺構検出状況（南より）



2. 近世の遺構完掘状況（南より）



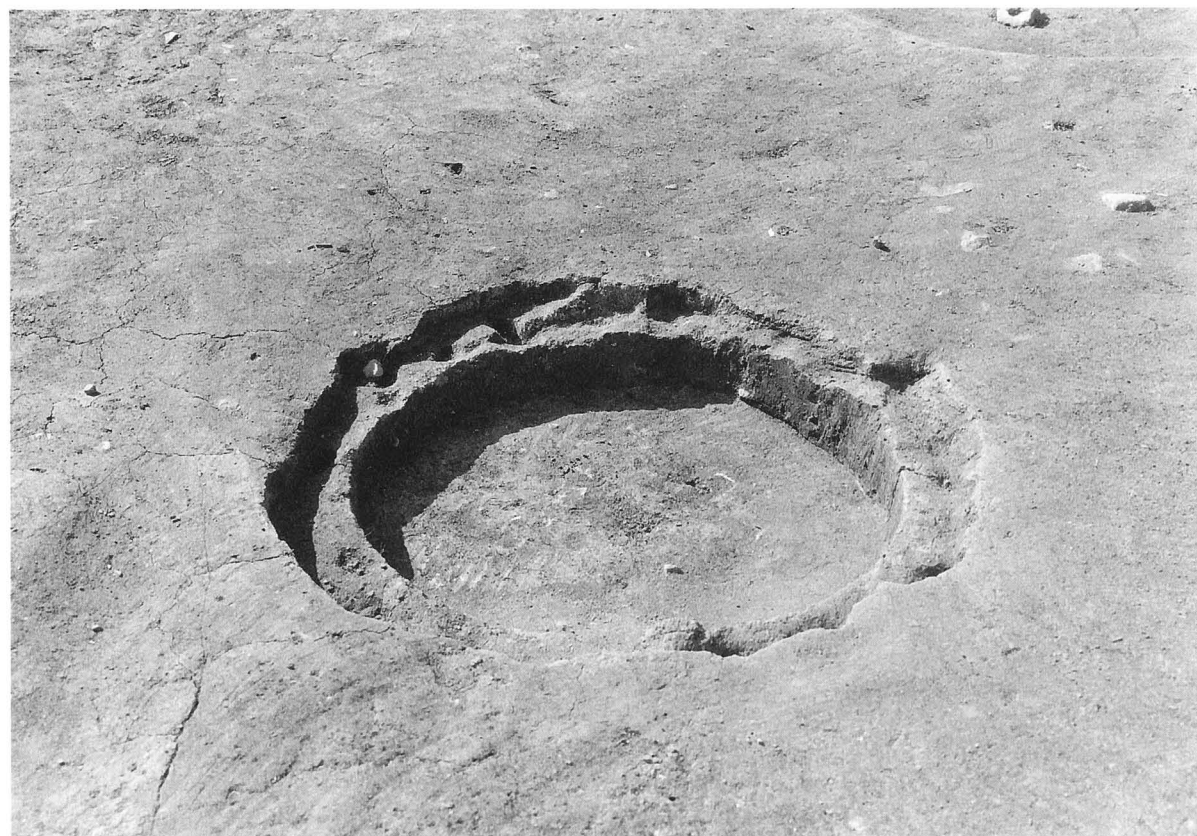
1. S X 01 礫出土状況 (東より)



2. S X 01 緡銭出土状況 (西より)



1. SA01 (東より)



2. SE01 (北東より)



1. SR1・2 礫出土状況（南より）



2. SR1 礫出土状況（北東より）